

ファンタジーなヒーロー

UFOキャッチャー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の部屋で寝ていたのに起きたら真つ暗な空間にいた。そして目の前には転生設定とイものが！これは転生した先で自分のやりたいことを色々タダバタとやる主人公の物語である。

※本作は作者なりの台本形式ですので台本形式がお嫌いな方はお控えになるようにしてください。

目次

主人公設定 (改)	1
他人物設定	4
第1話 転生	7
第2話 俺！起動!!	10
第3話 遭遇！	13
第4話 遭遇！その後！	29
第5話 発見緑君！そして授与！	36
第6話 デート？そしてライバルと大切な人!!	58
第7話 出たなヘドロ野郎！&君ヒーローになれるって!!	83
第8話 治療とちよつと修行…そして入試！おや3人目？…	109
第9話 体力テストだ！…ついに拳藤が!?	144
第10話 やつたな拳藤!!そして戦闘訓練だ！	174
第11話 A対D！ ちゃんと前を見ようね!!	187
第12話 B対I 油断は禁物だよ轟くん!!	211
第13話 C対E 峰田ほどほどにしとけよ！	221
第14話 F対J 漢らしいのはいいよね!!	233
第15話 G対H 適材適所は大事！	241
第16話 やつと出番だよ！	256
第17話 委員長のイメージはやっぱりメガネ？	274
第18話 レスキューだ！USJだ！…なに!?!敵だと!?	292
第19話 体育祭だ!!①	314
第20話 体育祭だ!!②	323
第21話 体育祭だ!!③	340
第22話 体育祭だ!!④	356

第23話 体育祭だ!! ⑤

第24話 体育祭だ!! ⑥

第25話 体育祭だ!! ⑦

体育祭だ!! (終)



366



375



383



388

主人公設定（改）

名前 前 【機神クラフト】

フリガナ 【ハタガミ クラフト】

性別 【男】

身体 【身長】 181cm

【年齢】 14歳↓15歳（7話から）

外見 【モデル：レッド○ード】 【異形型】

目の色は基本白色か薄い水色、感情の起伏によって変化あり。

口は閉じているとよく見ないと分からない。体の色は黒に近い紺色。

好きな事やもの

・ 漫画／アニメ／ゲーム等

・ お菓子

・ 絵を描くこと

・ 新しいことを知ること

好きな料理

・ 基本的になんでも好き。その時の気分による

嫌いな事やもの

・ 自己中な奴ら（マナーやルールを守らないマスコミ等）

・ 特定の虫（害虫）一応対処は出来る

・ 辛すぎる食べ物

【個性：空想】

頭の中で空想した力や事象を具現化または使うことが出来る。

体に定着させることも可。他人にも可

例：鑑定能力を定着↓個性：空想／鑑定

【所持個性】

・空想

(自分で空想した力・能力・事象を具現化し使う事ができる)

・鑑定

(人・物を鑑定し詳細を知ることができる)

・悪魔の実

(某海賊漫画の能力。任意で選んで発動できる)

・LBX

(ダ○ボール戦機の機体を召喚又は機体に変身できる。必殺技も使える)

・治癒

(傷を治すことができる。すでに失った部位も可)

(怪我などによる後遺症も可)(病気は不可、あくまで外傷によるもの)

(補足：怪我による後遺症は怪我によって生じたものなので可にします)

・天才

(頭がめちゃくちゃ良い)

・デメリット削除

(個性使用で生じる体へのデメリットをなしにできる。常時発動)

(補足：このデメリットは体力の消費、疲労などは含みません)

(例：青山のネビルレーザー使用に起きる腹痛、お茶子の酔いなどを無しに出来る)

(LBXに変身して運動して体力を消費するのは適用外。ですがLBXに変身してる時点で体が機械の状態なので余り体力の消費はありませんが…)

・アイテムボックス

(別の空間にものを収納できる。人は不可。)

・肉体強化改造

(自身の肉体を強化改造できる。骨の密度を最大化、筋肉の量を増量)(筋肉をピンク筋に変化、視力を強化など肉体をある程度自由に強化できる)

(骨を金属にしたりは不可あくまで最大限強化したり多少変化させる

まで) (第6話で追加)

・個性防壁

(自身に干渉する個性から身を守る。)

(例・物間のコピー、相澤の抹消、AFOの個性など) (第21話で追加)

肉体強化改造の個性については今後追加する個性です。

主人公はチート個性を持っていますが今ある個性で十分満足ですので、肉体強化改造の個性を追加したらそれ以上は増やすということは今のところありません。【時間を止める個性】【個性無効化個性】【未知予知個性】【無敵になる個性】などそういった個性を出したりはしません。ぶっちゃけますとこういう個性は考えてはいなかったですね。《チートすぎてこいつだけがいいのでは?》なく《チートだけどみんなと協力していく》といった感じで話を作っていきます。チートを前面に押し出さない感じですね。出すときには出しますがいつもではないです。

あと身長ですが最初高すぎるかなと思いましたが、障子や砂藤は雄英入学時の時からでかいので問題ないと思いますこの身長にしました。

後々たまりに変更点があったりするかもしれませんがご了承ください。さい。

2020年11月12日

個性防壁を加えて書き直しました。

他人物設定

名 前【緑谷出久】

フリガナ【ミドリヤ イズク】

性 別【男】

身 体【身長】 166 cm

【年齢】 14歳→15歳（7話から）

【個性：One For All】

何人もの力が蓄積され継承され続けた個性。瞬間的にものすごい力を出せたり、体全体

をパワーアップ出来るぞ！まだ100%の力を出せない。

【個性：メラメラの実際の能力】

クラフトから授与された個性。体そのものが火であるため物理攻撃は効かない。某海賊

漫画だとカナツチになるが普通に泳げる。だが火であるため水の個性などには若干不利である。

【技】

《火足かそく》

足の裏から火を噴出し空を飛ぶ技。しかし足から噴射させているだけなのでそこまでスピードはそこまで出ない。そのかわり旋回能力等の小回りは利く。クラフトとの個性練習で編み出した技であり、本人が疲れない限りは飛び続けることは出来る。

《火足墳式かそくふんしき》

火足の機動力を高めたもの。火の噴出をジェット機のように噴射する部分を絞り込み高い

速度を確保したのが火足墳式かそくふんしきである。ただし、速度が速いかわりに小回り

りなどの旋回能力は落ちている。

名 前【耳郎響香】

フリガナ【ジロウ キョウカ】

性別【女】

身体【身長】 154 cm

【年齢】 14歳↓15歳（7話から）

【個性・イヤホンジャック】

耳たぶが長いコードの様になっており先端がプラグの様になっている。左右ともに6 m

まで伸びる。プラグの先端を相手に刺すことで自身の心音を相手に爆音で衝撃波のよう

に放つことができる。また壁、地面に刺すことで索敵することができる。室内の様子を

探ったり災害救助などでは重宝されるだろう。

【技】

Coming Soon

名 前【爆豪勝己】

フリガナ【バクゴウ カツキ】

性別【男】

身体【身長】 172 cm

【年齢】 14歳↓15歳（7話から）

【個性・爆破】

掌の汗腺からニトロのようなものを出し爆破できる。高い攻撃力を誇り爆破を利用し空

中移動も可能。ただし街中だと周りへの被害を考慮するとあまり大規模な攻撃はおすすめ

めできない。

【技】

Coming Soon

名 前【飯田天哉】

フリガナ【イイダ テンヤ】

性別【男】

身 体【身長】 179 cm

【年齢】 14歳↓15歳（7話から）

【個性・エンジン】

足のふくらはぎにエンジンのような器官がある。個性を使うと足が速くなりその速度を

生かした足技がある。最初から速度Maxではなく1速2速3速というように段階を上げて

速くなる。燃料はオレレンジューズであり、炭酸系はエンストしてしまう。

【技】

C o m i n g S o o n

第1話 転生

事の始まりは中国軽慶市発光する赤子が生まれるというニュースであった

それを皮切りに世界各地で『超常』が発見される。なにが原因なのかも判然としないまま時は流れ、

——『超常』は『日常』に——

——『架空』は『現実』に——

世界総人口の八割が何らかの『特異体質』である超人社会となった現在

混乱渦巻くこの世の中で、かつて誰もが空想し憧れた一つの職業が脚光を浴びていた

.....

???".....つ.....んつ?.....(こっどい)?"

目が覚めると真っ暗な空間にいた。そして目の前にはSF映画やアニメに出てくる空中ディスプレイのようなものがある。

???"「なんだこれ?.....てゆるか俺は確か部屋で寝てたはずなんだけ

ど：なんでこんな真つ暗な場所にいるんだ？」
辺りを見渡すがどこを見ても真つ暗である。

??? 「真つ暗でなんも見えねえ…いや見えないというより何も無いっ
て感じだな…」

辺りを見渡しても仕方がないので俺は目の前のディスプレイに目を
向ける。ディスプレイには「touch」の文字があった。

??? 「タッチ？触ればいいのかな？」

彼は人差し指で「touch」の文字を触る。触られたことにより
ディスプレイの画面が変わる。

??? 「おっ変わった」

画面が変わると画面中央に文字が表示される。

??? 「んゝ何々…：転生設定？」

??? (…：…：…：転生？転生ってあの転生か？これは…)

彼はもしかやこれはラノベや漫画のあれでは!?!と思った。

??? 「いや待て待て、そんな都合よく、それに夢という可能性もある
…：だが、もし本当ならば…：よし、ここは信じてやってみるか。」信
じる者は何とやらゝってね！

彼は気持ちを切り替え設定に取り掛かる。

??? 「えゝと設定項目は名前／性別／身体／外見／能力／転生先／そ
の他設定…：転生先まで決めれるのか、テンション上がるな！」
彼は手際よく設定入力をしていく。

ピッ、ピピッ、ピッピッピ…

??? 「よし！こんなもんやろ！」

—設定—

名 前 【機神クラフト】

フリガナ 【ハタガミ クラフト】

性 別 【男】

身 体 【身長】 181 cm

【年齢】 14歳

外 見 モデル【レッド○ード】【異形型】

目の色は基本白色か薄い水色、感情の起伏によって変化あり。体の色は黒に近い紺色。

能 力【個性：空想】

頭の中で空想した力や事象を具現化または使うことが出来る。

体に定着させることも可。他人にも可

例：鑑定能力を定着↓個性：空想／鑑定

転 生 先【僕のヒーローアカデミア】

そ の 他 原作開始約1年前

この設定で完了しますか？【YES／NO】

クラフト「よくし……それじゃいってみますか！」

彼は完了のボタンを押す。ピッ

押した瞬間体の周りに光の粒子がキラキラと舞う。

クラフト「ウオツ!?ん?なんだ意識が……」

そして彼の意識はそこで一度シャットアウトした。

第2話 俺！起動！！

クラフト「・・・っんあ・・・ここは？」

光の粒子が体の周りを舞った後、俺は意識を失った。そして目を覚ますとそこは元々俺が寝ていた部屋とは別の部屋だった。

クラフト「ここは・・・俺の部屋じゃねえな。それに体も以前より大きい感じがする。」

クラフトは部屋と自分の体を確認し部屋にあったテレビの電源を付ける。リモコンでテレビを付けるとそのには漫画の中しか見たことがないヒーローが映っていた。

テレ ビ「オールマイト氏速攻で事件解決！」「ベストジーニストの今日のコーデ！」

テレビを付けて改めて自分は転生したことを確認する。

クラフト「マジで転生したんだな・・・痛っ!？」

自分が転生した世界へ来たことを確認した瞬間頭に激痛が走った。

クラフト「イイデデデデ!!！」

あまりの痛さに床に倒れ悶えるが激痛は2秒ほどたったらゆっくりと引いていく。

クラフト「しっ死ぬかと思った・・・」ハアハア

激痛の正体はこの世界における自分の情報だった。転生設定のその他の設定において自分の立ち位置を決める項目において色々設定したことを思い出した。

クラフト「そういえば設定したな、だけどこんな激痛がくるとは思わなかった・・・えーと両親は事故によって死んで現在は一人暮らしだったかな。あと、家はマンションの1室（1LDK）で、場所は静岡県で雄英高校も電車で3駅ぐらいの近さだったかな？」

クラフトは自分の情報を少しずつ確認した。

クラフト（それにしてもなんか暑いな）

部屋が暑いことに気づいた俺はふと部屋にあったカレンダーが目に残った。

クラフト「今は7月だったのか・・・そうか今は夏休みだ！」

クラフトは自分の頭の中に入ってきた設定以外の情報を思い出す。設定以外の情報とはなにか？それは自分が設定した情報以外の情報である。自分の情報を全て、正確には詳細に設定することは中々骨の折れる作業である。ではその骨の折れる作業はどうしたのかということなんとも便利なものがあつた。それは設定画面のなかにあつた【ご都合主義自動設定】というボタンがあつた。これは自分が設定した以外の情報を自動設定してくれるという何ともありがたいシステムである。まあ設定してくれるのは、自分の身分に関するものとかだけだね。生年月日やこれまでの学歴云々現在の自分の家の情報、人間関係とかね。

クラフトは一通り自分の周辺の事を確認した。

クラフト「さて夏休みか、一応原作開始約1年前つてしたけど色々行動するにはちようどいいな。今は中学2年生で、緑谷たちも同じかな？とにかく準備しないとイケないな。個性も確認しないと。」
そこから彼は色々準備を始めた。まずは自身の個性についてだ。これは問題なく使えた。彼の個性は【空想】自分で空想した力・能力・事象を具現化し使う事ができる。また、一々空想して力や能力を使うのは面倒なので便利な能力は新たな個性として体に定着させた。

【個性】

・空想（自分で空想した力・能力・事象を具現化し使う事ができる。使いこなすには練習が必要）

・鑑定（人・物を鑑定し詳細を知ることができる）

・悪魔の実（某海賊漫画の能力。任意で選んで発動できる）

・LBX（ダ○ボール戦機の機体を召喚又は機体に変身できる。必殺技も使える）

・治癒（傷を治すことができる。すでに失った部位も可）

・天才（頭がめちゃくちゃ良い）

・デメリット削除（個性を使う事で生じる体へのデメリットをなしにできる。常時発動）

クラフト「ふう、今のところはこんなもんでいいかな。」

あんまり多く合っても使いこなせなきや意味がねえから

な。」

俺は一息入れるとベランダに出る。ベランダに出ると心地良い風がひゅうと吹く。

クラフト「フッフッフさくせつかく転生できたんだし思う存分楽しんでやる!!」

その日世界に一人の男が舞い降りた。

第3話 遭遇!

転生した日は個性について把握&調整をし、その日を終えた。

——翌朝——

クラフト「さくして今日は何をしようかな〜」

クラフトは朝食を食べながらやりたいことと、そのための準備について軽く考える。モグモグ

クラフト「まずは：基本の『衣・食・住』は揃っている、お金も親の貯金や保険金があるので問題なし：」

親は設定で俺からしたら初めからいないけど、ご都合主義自動設定のおかげで記憶（情報）はある。そのため親の親に関するものは俺が相続やらなにやらしている。

クラフト「ということは次はゲームに例えると探索だな！街に出るついでに買い出しとかもしないと：荷物を手で持つのは面倒だな、かといって車は運転できねえし自転車だと制限が：」ん？

クラフトはふと何か大事なことを忘れている気がした。

クラフト（ん〜？なんだ？今なにか引つかかったような？大事なことを忘れてるような…）

クラフトは思考をめぐらす：自転車だと制限：荷物：探索：ゲーム：能力：ハッ！思い出した！忘れてた！そうだよ！なんで忘れてたんだ！転生物のすべての主人公が手にするわけではないけど、チート能力として出てくる：【アイテムボックス】！別の空間にものを収納できる能力。なんで忘れてたんだ：

クラフト「まあ忘れてたもんはしようがねえ：、とりあえず新たに個性として作るか」空想！アイテムボックスからの：：定着！

クラフト「よくしできた。では【アイテムボックス】も作ったし街に行ってみるか」

クラフトはパパッと準備をして街を探索しに家を出た。

クラフト（ふうけっこう大きい街だなショッピングモールやスーパーもある、色々と便利な街だな。）グウウウウ：

クラフト「腹減ったな…飯を食に行きたいがその前に銀行でお金をおろさないとな」

お昼を食べに行く前に今後の生活費等のお金をおろしに銀行に向かう。

——銀行——

ワイワイ…ガヤガヤ…ザワザワ…

クラフト（お昼だからけっこう混んでいるな…まあ気長に待つk「全員動くなあ!!」…え？）

客「「きやああああああつ!!!」「「^{ライラン}ヴィツ！敵だあ!!」「じゅじゅっ！銃持ってるぞ?!」

敵①「うるせえぞ！テメーら!!」バァン！（銃の音）

敵②「全員その場を動くな！おい店員！早くシャッターおろせ！」
銀行員（（ブルブル））

敵③「早くしねえか!!」ダァン！（机を叩く音）
銀行員「はははっはい！」

銀行員は端末を操作し出入り口のシャッターをおろす。ウイイイインガシヤァン

クラフト（マジかよ…マジのマジかよマジですか。まだ2日目だよ、2日目でライランに遭うってオイ…とりあえず大人しくしておくか…）

敵②「よし…リーダー！出入口閉まりました！」

敵①「分かったさて…テメーらは俺たちが無事逃げるまでの人質だ

！それまで大人しくしてもらおうぞ！」

客「こんなことをして…すぐにヒーローと警察がくるぞ！」「そつそ
うだ！お前らなんかすぐに」

敵①「そのための人質なんじゃねえか、バカなのか？テメエらは俺
たちが逃げるまでの盾なんだよ」

客「そつそんな……」

敵③「おい店員！はやくこの鞆にありったけ金を入れろ！はやくし
ろ！」

銀行員「はっはい！」タツタツタツタツ……

銀行員はヴィランが出した鞆を持って奥の金庫へ向かった。

敵①「金が手に入るまで少し時間が掛かる、その間にテメエらは拘
束させてもらおう おい」

敵のリーダーが部下に客を拘束するように命令する。部下はそれ
にうなずき行動する。

敵②「オラツ！テメエら後ろに手回して並びな！」

15分後：約20名の客及び銀行員が拘束され床に座らされる。も
ちろんこの俺も。

クラフト（どうしよう……こういう場合映画やドラマとかだと勇敢に
動いて犯人制圧！なんてしててるけど……普通に考えて下手に動くのは
危険だし、やっぱヒーローと警察に任せるか……だがいざという時は個
性を使って……）

人質「ううう……ママあ……」「だっ大丈夫よすぐにヒーローが」

敵③「うるせえぞ!!ガキがピーピー泣いてんじゃねえよ！」ドオ
ンツ！（銃の音）

敵の一人が天井に向け銃を発砲。

人質「「きやああああ!!」「「おいまだ子供だぞ！」

敵③「ああ？だから何だよガキだからって俺は容赦しねえぞ!!」
クラフト（うくんまだ小さい子供にとってこの状況は怖すぎるよ
なあ……なんとか落ち着かせねば……）

敵が子供に危害を加えないように子供を落ち着かせるため俺は少年
に話しかけた。

クラフト「HEY少年」

子供人質「ぐすん……なあに？」

クラフト「大丈夫かい？」

敵③「おいお前、なに勝手にしゃべってんだ？」

クラフト「まあまあ少しぐらいいいじゃないですか、それにこれ以上子供が怖がって泣かれたらあ

なたも困るのでは？」

敵③「……まあいいその子供を落ち着かせるまでだ……」

クラフト「ありがとうございます」

クラフトは子供落ちつかせるために話しかける。

・

クラフト「へくじゃあ将来はヒーローになりたいのか」

子供人質「うん！そしてたくさんの人を助けるんだ！」

クラフト「おく立派じゃないか将来が「そこまでだ」

子供が十分に落ち着いてきた頃合いに先ほどのヴィランが話をさえぎった。

敵③「もう十分落ち着いたら？お話はここまでとする」

子供人質「まつまだ「ああ？」……」

クラフト「少年どうやらお話はここまでのようだ」

子供人質「……うん……」涙目

クラフト「少年……ヒーローになりたいのならまず泣き虫を治さないとな」

子供人質「！」

クラフト「そしてまず君のお母さんを安心させないとな」

子供人質「うん！」

母親人質「息子をありがとうございます……」

クラフト「いえいえ」

敵③「よかったでちゅねくこのお兄ちゃんに慰めてもらってくw
ゲラゲラ

子供をバカにするように敵が茶化サイランしていると次の瞬間

敵②「おい！外にヒーローと警察が来てるぞ！」

敵①③「ダニイ!!」

外から見えないようにおろした窓のブラインドに隙間を作りながら外を確認する敵達サイラン。

敵①「チっ！外の誰かが通報したのか！」

敵②「リツリーダーどうするんだ？」

敵①「ああ慌てるんじゃないやねえ…こういう時こそ冷静にやるんだよ。かつ金のほうは？」

クラフト（めっちゃ動揺してんじゃん…）

敵③「いま終わったぞ！」

敵①「よし、あとは逃げるだけだな！」

敵達とは逃げるだけと言った…この時人質達はこれで助かると安心する。だが敵のリーダーサイランが人質の方へ目を向け歩いてくる。そしてある一人の少女の前に立つ。

敵①「お前は俺たちと一緒に来てもらうぞ」

「…えっ？」

少女は突然のことに固まる。

敵①「だから俺たちが安全に逃げるため一緒に来てもらうんだよ！グイツ！」

「…いっいや！」

「響香!!」

敵のリーダーは少女の腕を掴み立たせるが少女は拒否し少女の母親が娘に向かって叫ぶ。

響香「かつ母さん！」

クラフト（きょうか？それにこの声…もしかして…）

クラフトは声のする方へ顔を向ける。そこには耳たぶがイヤホンのようなものになっていて髪に心電図のような模様が入った女子がいた。

クラフト（エエエー!!あれって耳郎じゃん!!まさかこんなところで原作キャラと会うとは!!うんカワイイ!じゃなくて!このまま

敵①「ふふん！」ドヤア！

クラフト(コイツら頭良いのかアホなのかようわからん(；ω；))

敵①「よしそろそろ逃げるぞ！」

敵②③「へいっ!!」「おらテメエもだ来い！」

クラフト「あつハイ」

俺は腕を引つ張られ連れていかれる。

耳郎響香(あの人大丈夫かな……)

自分の代わりに人質になった男の人を見ながら耳郎は彼の安否を心配した。

敵①「よしシャッター開けろ」

敵②「へい」ガチャガチャポチッ!

敵の1人が出入口のシャッターの端末を操作しシャッターを開ける。

ガシヤツ ウイイイイ

クラフト(うーんどうしよう……)

——銀行入口付近——

??警部「中の様子はまだ分からないのか？」

警官「ハッ！内部の監視カメラにアクセスしたのですが全てノイズがかかっており中の様子は確認する事ができません！」

??警部「ふーむ…立て籠っている敵の個性かな？」

警官「おそらくその可能性が…」

??警部「敵からの要求とかは？」

警官「いえ現在とところありません！」

??警部「我々が来たことよって下手に動けなくなったのかな？…」

野次馬「なんで警察とヒーロー止まってんの？」「中の様子がわかんないんじゃない？」

ヒーロー「くっ下手に突っ込めば人質となっている人がかえって危険になってしまう…」

ヒーロー「どうすれば…」

警察とヒーローが状況をどのように打開するか悩んでいると…

???? 「ハッ——ハッハッハ——!!」

野次馬「この声は!」「あそこだ!」

????? 「わあーたあーしあーがあー来たあつ!」ドスン!!

野次馬「!!!オールマイイトだ!」「!!!」ワアアアアア!!!

No.1ヒーローの登場に沸き立つ野次馬。

??警部「オールマイイト」

(オ) マイト「やあ塚内君!事件はどういう状況だい?」

塚内警部「中の様子もわからず、ヴィランからの要求とかもないと
いった所だね」

(オ) マイト「ウウム…それは中々に困った状況だね」

塚内警部「それに我々が到着したあと店内で発砲音が2回あった」

(オ) マイト「なっ!人質は無事なのかい!?!」

塚内警部「落ち着いてオールマイイト、中の様子がわからなければ確
認の仕様がな!」

(オ) マイト「…:…:すまない塚内君…:クツ!一刻も早く助けなければ
!」

塚内警部「気持ちは一緒さオールマイイト」

警官「警部!銀行のシャッターが開きます!!」

塚内警部・オールマイイト「!!」

事件の状況が動こうとする。

(オ) マイト「塚内君…」

塚内警部「ああ…:どうやら動き出したね…:頼むよヒーロー」

(オ) マイト「もちろんだとも!」

事件を速やかに解決しようと息巻くオールマイイト。

——銀行入口——

敵①「よおおしいくぞお前ら!」

敵②③「おうーリーダー!!」

クラフト(どうやって倒すか…:うくん…)

敵①「おらあ！ヒーロー共近付くんじやねえ！」ドオンドオン（銃の音）

敵③「近づいたらこの人質の命はねえと思え!!」カチャヤ…

敵のリーダーは空に向け銃を発砲もう一人は俺の頭の横に銃を突きつける。

敵②「人質を解放してほしければ燃料満タンの車を用意しろ！」

敵達は逃げるために警察とヒーロー達に逃走用の車を要求する。だが帰ってきた答えは別の言葉だった。

警官「君たちは完全に包囲されている、人質達を開放し大人しく投降しなさい」

クラフト（すげーテンプレ通りの言葉だ…）

この言葉は逆に敵達を怒らせた。

敵①「あゝあ!?!そんな答え求めてねえんだよ!!車を用意しろってんだよ!!」

敵③「おらっテメエも人質の演技しろや」ボソボソ…

敵の1人が小声で言ってきた。

クラフト「えっ?えーと…ウワータスケテーヒーロオー」クツソ棒読み

敵②③「……なんでそんなクソ棒読みなんだよ（怒）」ボソボソ…
クラフト「やべえちよっとおもろい」ウワータスケテーコワイヨー
ヒーロー」

更にふざけるクラフト。

塚内警部（人質の少年…肝が据わってるのか言っている言葉が完全に棒読みだよ…）

（オ）マイト「くっ!少年もう少し辛抱だ!もう少し耐えてくれ!」

塚内警部「えっ?」

ヒーロー・警官「「えっ?」「」」

野次馬「「「「えっ?」「」」」

（オ）マイト「…えっ?なんだい?何かおかしなこと言ったかな私…」
どう見ても棒読みなのにそれを真に受けとるオールマイト。

敵①「…ハッ!オラアッ!早く車を用意するんだよお!」

ヒーローも警察も手が出せない状況が続くかと思われたその時…

「そっ…そのお兄ちゃんをはなせえ!!」

敵①②③ 「?!?!」

クラフト 「?!?!」

(オ) マイト 「?!」

塚内警部 「?!」

ヒーロー・警官 「?!?!」

野次馬 「?!?!?!?!」

全員声のする方へ顔を向ける。そこには1人のまだ幼い少年が震えながら立っていた。

—— 少しさかのぼること銀行内部 ——

人質「あつあの少年は大丈夫だろうか?」「だつ大丈夫さヒーローが何とかしてくれるさ」

人質「それよりこの拘束解けないか?」「だれか刃物系の個性の人いるか?」

人質「俺刃物系の個性だぞ」「おおっよしバレないようにこっそりと…」

人質「よしこれで全員」「やったあ!」「今のうちに裏口から逃げよう」

人質「案内しますこちらです」「皆様ゆつくり静かに」

人質「なっていた客たちは自力で脱出を始める。」

耳郎響香 (あの人大丈夫かな…)

耳郎母親 「響香どうしたの?」

耳郎響香 「え! っいやあの人大丈夫かなって…」

自分の代わりに人質となった男子の事が心配になる耳郎。

耳郎母親「…事件が無事に解決したらあとでお礼言いましょうね…」

耳郎響香「うん…」

子供人質「……」

母親人質「どうしたのリユウト？」

耳郎響香「？」

リユウト「…」ダツ！

母親人質「ちよつりユウト!!」

リユウト少年は突如出入口の方へ走った。

耳郎響香「ちよつ！」ダツ！

耳郎母親「あつ！響香！」

耳郎は数秒遅れて少年のあとを追いかける。

耳郎響香（何やってんだウチ!?体が勝手に!?!）

先に走り出したリユウト少年は出入口にいる敵達サイランのところについた。そして…

リユウト（ぼつ僕はなるんだ！みんなを助ける…ヒーローに！）

リユウト「そつ…そのお兄ちゃんをはなせえ!!」

耳郎響香「!!」

少年は叫んだ

——銀行出入口——

リユウト「そつ…そのお兄ちゃんをはなせえ!!」

クラフト「少年!?!」

声が出た方に顔を向けると先ほど話をした少年が震えながら立っていた。

敵③「…お兄ちゃんをはなせえ？ギャハハハハハハwおいクソガキおめえマジで言ってるのか？テメエみてえなクソガキになにができるんだ？w」

敵②「大人しくしときやあ助かったのかもしれないのよw」

警官「警部！サイラン敵達の後方に子供が!!」

(オ) マイト「まったくまずい!!」

オールマイトが行動を起こそうとする。だが…

敵①「おっと動くなヒーローコイツがどうなってもいいのか」カ
チャ…

^{ウイラン}敵のリーダーが俺の頭に銃を突きつける。

(オ) マイト「くっ…(くそどうすれば…)」

クラフト(まずいマズイ不味い非常にまずい状況だ…少年を守りに
行きたいが動けない!)

敵①「おい見せしめにあのガキ殺れ」

敵③「わかりやした」ボツ!

^{ウイラン}敵の1人が少年の方に手をむける、すると火の玉が出てくる。

敵③個性【ファイヤーボール】

手のひらから火の球を撃ち出せる!威力は体力を消費することで
上がるぞ!

大きい威力を出そうとするとその分体力は大きく消費される!

リュウト「ひっ!」ガクガク…

敵③「出しやばったことをあの世で後悔するんだなあ!!」

クラフト(ヤバイ!!)

少年に火の球が撃ちだされそうになった瞬間1人の少女が少年を庇
うために飛び出る。

クラフト(あれは!)

^{ウイラン}飛び出した少女は耳郎であった。耳郎を確認した瞬間俺は後頭部を
敵のリーダーの顔面にぶつける。

敵①「ガッ…こっの…」ふらっ…

敵②「なっコイツ!」

顔をぶつけられたため敵のリーダーはよろけ拘束が緩み俺は2人
の元へ走った。突然のことによりもう1人の敵は反応が遅れた。

クラフト(なんとかなるだろうと楽観視していた…こんなことにな
るなら最初から個性使つとけばよかつたな…後悔しても仕方ないか

今は2人を！いくぜ！トランスフオオオム！LBX アキレス！
個性を使った瞬間小さい正方形の薄水色の光の粒子が体の周りに現れる。

敵③ 「なんだあれは!?」

敵② 「かまわねえ3人とも殺つちまえ!!」

塚内警部 「オールマイト!」

(オ) マイト 「!!…私としたことが!!」

敵③ 「死ねえ!!」ボシユウツ!!

!!!!ボオオオオオオオオオオオン!!!!

オールマイトが反応した時には遅かった。ワイラン 敵の火の球が3人に当たり爆発を起こした。

母親人質 「いやああああ！リュウトオオオ!!」

耳郎母親 「響香あああ!!!」

敵① 「ハハハハハハハハハ!!人質のくせに出しやばるからこうなるんだ!!哀れだなあNo.1ヒーローオールマイト!!さっさと俺たちに車を用意しとけば死人が出ずにすんだのによお!!」

(オ) マイト 「くっ貴様あ…」

敵③ 「おやあくどうしたオールマイトオ?いつもの笑顔はどうしたあw?」ゲラゲラ

(オ) マイト 「君たちこれは罪が重いぞ…」

オールマイトは3人の敵を捕まえようと動き出す。ワイラン しかし…

敵① 「おっとオールマイトまだ人質はいるんだぞ!」

(オ) マイト 「なに!」

敵① 「おい近くに親がいたはずだ連れてこい」

敵③ 「へい」

オールマイト(まずいこれ以上は「あのー勝手に人を殺さないでほしいですね」!!?)

敵①②③ 「!!?!?!」

塚内警部 「!?!?!」

警官・ヒーロー 「!!?!?!」

先ほど火の球が撃たれ煙が舞っている所から声が発せられた。そし

て煙が徐々に晴れるとそこには2人を庇うように赤いマントを羽織った機械の騎士がいた。

敵①「なっ！なんだてめえは!？」

クラフト「俺？俺は…いや…我は名はアキレス!」ビシッ！
俺はカツコよくポーズを決める。

リュウト「おっ…お兄ちゃん?」

クラフト「んっ?少年ケガはないか?そちらの君も」

リュウト「うっうん!」

耳郎響香「だっ大丈夫!」

クラフト「ならよかった」

敵③「アキレスだあ〜?はっ!たかが姿が変わっただけで調子こいてんじやねえ!もう一度くらいなあっ!」ボシユウウツ!!!

敵はもう一度火の球を撃ちだす。クラフトはシールドを取り出しかまえる。

ボオオオオオオオン!!!!

敵③「ハアツハアツ…はっ!他愛ねえ!!」

(オ) マイト「少年!」

クラフト(すごいな…衝撃は多少あるがなんともねえ…)

煙が晴れると傷一つないアキレスが姿をあらわす。

敵③「なっ!無傷だど!?!ありえねえ!?!」

敵①②「「ならこいつはどうだ!」ガチャツ!!」

残りの2人の敵が銃をサイランかまえてきた。即座に盾をかまえなおす。

!!!バンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバン!!!

!!カキンツキンツキンツカキユンツキンツカキンツキンツキンツキンツキ
ンツ!!

カチツカチツカチツ…

敵①②「クソ弾切れだ」「こっちもだ」

クラフト「終わりか?ならば今度はこちらの番だ!」

敵①②③「「?!?!」

敵②「させるがあ!」メキメキツ!!

敵の1人が上半身を大きくさせこちらに向かってくる。

塚内警部 「オールマイト！」

(オ) マイト 「わかつている！」

オールマイトが駆けだそうとする。しかし

クラフト 「これ以上はやらせん！いくぞ必殺フアンクション!!」

(オ) マイト 「!?」

塚内警部 「!?」

クラフトはランスを取り出しかまえる

!!!!
アタックフアンクション
!!!!
☒トライデント☒

ギュシュイイイン!!

ランスを片手で回転させランスの先端にエネルギーが集める。

そしてランスの先端を相手に向けたまま後ろに引き勢いよく前に突く。

ズキユウウ!!

勢いよく放たれたエネルギーの槍は3方向に分かれる。

敵① 「なっ！なんなんだこれはああああああ!!!」

敵②③ 「うおおおおああああああああ!!!」

ドゴオオオオオオオン!!!!

3方向に分かれたエネルギーの槍は敵 全員に当たり爆発、吹っ飛ばされた敵はそのまま銀行前の道路に落ちた。

敵①②③ 「……………」 「ドサツ……」

敵を倒した数秒後…野次馬の歓声が沸いた。

野次馬 「「うっ……うおおおおお!!!」 「すげーなにあの子!?」 「なんか光の矢みたいなのでしたよ!?」 「一発で3人も!?」

マスコミ 「ちよ！あの子にカメラ回して！」 「写真写真！」 「こちら現場！……」

同時に周りにいたマスコミも騒ぎ出した。

塚内警部 「敵^{サイラン}を確保！並びに人質を保護！あと周りの警備を！」

警官 「二二ハッ！！二二」

警察が行動しようとしたそのとき…

敵② 「うっ…ウオオオッ！俺はまだやられてねえ!!!」

やられたはずの敵の1人^{サイラン}が起き上がる。

警官 「うわっ！まだ意識あるぞ！」 「おいヒーロー頼む！」

敵② 「くそっ！あのガキぜってえ許さねえ！殺さねえと「テキ

サアアス！スマツシュ！」ごはっ！」

再び起き上がったヴィランはオールマイトの一撃で倒れた。

警官 「オールマイトありがとうございます」

(オ) マイト 「うむ…ではあとよろしく頼むよ！」

警官 「ハッ！」

塚内警部 「オールマイト助かったよ」

オールマイト 「…いや今回私は何もできなかった…あの少年のお

かげで敵^{サイラン}を逮捕できた」

塚内警部 「…そうだねまあ今は後悔するより事件が解決できたこと

を喜ぼう」

オールマイト 「うむそうだね…」

こうして転生2日目にして巻き込まれた事件は幕を閉じた。

クラフト (お腹すいた…)

第4話 遭遇！その後！

転生2日目にして敵サイランによる銀行強盗にまきこまれるが結果的に俺サイランが敵を倒して解決す

るといふ形で幕を閉じた。その後人質は無事にヒーローと警察に保護され、各々事情聴

取や救急隊による診察や 治療を受けていた。ちなみに俺がぶっ飛ばした敵サイラン達は警察

に拘束され早々と連行された。そして俺は現在ヒーローと警察に保護され事情聴取で

いいのかな？まあお話をいろいろとしている。あつそれと俺が守った2人はちゃんと今

は親と一緒にいる。

子供母親「リュウト！ああよかった無事で！本当に良かった!!」ハグッ！

少年の母親は包み込むように抱く。

リュウト「ママ……」

少年は目を涙目にしながら母親にゆっくりを抱きつく。

耳郎母親「響香！よかったわ無事で！突然走り出して行っちゃうもの……」

耳郎響香「うん…その…ゴメンナサイ……」

2人の母親は自分の子供が無事なことを確認し安堵する。

耳郎母親「今回はケガもなく無事ですすんだけど、もし彼がいなかったらあなた死んぢやったかもし

れないのよ……」

耳郎響香「ほんと…ゴメンナサイ…」カチカチ

響香は左右のイヤホンジャックの先端を合わせながら母親に謝る。響香の母親はそれを

見て少し苦笑いしながら響香に抱き着く。

耳郎母親「でもあなたが無事で本当によかったわ…あとで彼にちゃんとお礼をいいますよね？」

耳郎響香「!…うん！」

そしてクラフトはなにをしているかというところとヒーローと警察の人とお話をしている。

塚内警部「なるほど、君はお金をおろしに銀行へ来てその時まきこまれて今に至ると…よし、あり

がとう色々と話してくれて」

クラフト「あのー刑事さん俺個性使ったんすけどそれについてなんかあるんですか？」

個性の使用には《許可証》又は《免許》が必要で無断で使うことは法律で禁止されている。

そうすることにより社会は一応秩序を保っている。ただ全く使つてはいけないとい

うわけではない。例えば『物を操る』個性の人が自分の鍵を落としたとき、個性を使つ

て拾うことは問題にならない。法律に照らし合わせれば違反行為であるが一々言つてい

てはキリがないので黙認されている。また常時発動型の個性もちゃんと手続きをすれば

問題はない。

塚内警部「本来ならば注意とかお説教とかがあるんだけど…今回は事が事だけにお咎めはないよ。

といより君のおかげで犠牲者も出ずに事件が解決できた。むしろこちらが助かった、

一警察官として礼を言う…ありがとう」

塚内警部はそういうと頭を下げた。

クラフト「えくと…その自分もあの時は必死だったので…だけど刑事さん自分が行動できたのもあ

の子のおかげですよ」

クラフトが少年のほうに顔を向けるとこちらに気づき小走りで自分のもとに来た。

リュウト「おっお兄ちゃん…あの…助けてくれてありがとう！」

クラフト「少年大したケガもなくてよかった…だが俺もあまり偉そうには言えないが…あの時の少

年の行動は無謀に等しかった…」

リュウト「!?……………」しゅん…

塚内警部「……………」

クラフトはあの時の行動について語り少年は突然言われたことに落ち込む。

クラフト「だが同時にあの状況を動かしたのも事実…そして何よりヴィランに立ち向かう姿は…」

「かつこいいヒーローだったぜ！」ニカッ

！

リュウト「!?」…………ウルツ

クラフトは少年に向けて親指を立てて笑い少年はヒーローだったと言われ目が潤む。

そこに少年の母親が来る。

子供母親「息子を助けていただきありがとうございます……………よかったねリュウト…」

リュウト「づっづん…」ぽろぽろ…

子供母親「では主人も心配していると思いますので私たちはこれです…さあリュウト行こっか？」

母親がお礼を言い息子の頭をなでると少年は涙腺が崩壊し大粒の涙を流す。そして母親

と共にこの場を後にしようとしたとき少年がこちら振り返って再び戻ってくる。

子供母親「あつリュウト！」

タツタツタ…

リュウト「お兄ちゃん！」

クラフト「どっどうした少年？」

リュウト「なっなまえ…おしえて！」

少年はこちらに戻ってきたと思ったら名前を聞いてきた。

クラフト「(そういえば言っただけだったな...)俺の名前は機神クラフト...クラフトでいいぞ」

リュウト「はたがみ...くらふと...おれリュウト!」

クラフト「リュウトか...いい名前じゃないか!」

リュウト「!...ありがとう!」

クラフト「さっお母さんが待ってるぞ」

リュウト「うん!ありがとうクラフトお兄ちゃん!」タツタツタツ
タツ.....

リュウトは母親のもとにたどり着くところらに振り返り腕をふったきた。(^^)ノシ

クラフトは流石に腕は恥ずかしいので手を軽く振る。そしてリュウトと母親はこの場を

後にした。

クラフト「お兄ちゃんか...改めて思うとちよつと恥ずかし「カッコいいじゃないか少年!」う

おっ!オールマイト! (やべえ画風すげえ)「

オールマイト「遠くから見させてもらったよ君とあの少年のやり取りを!」

塚内警部「オールマイトのぞき見はいけませんよ(笑)」

オールマイト「ハツハツハ!すまない少し気になっちゃってね!」

クラフト「あのオールマイト何かご用ですか?」

オールマイト「いや〜特に用はないんだけど、あのやり取り見たから思わず声かけちゃったよ!」

「ただこれだけは言おう...少年!君もあの子にとつてのヒーローだったぜ!」

クラフト「ヒーローに...なれてましたでしょうか...」

オールマイト「ハツハツハツハ!謙遜するなよ!自身の身を挺してヴィランの攻撃から守る姿

は間違いないヒーローだった!だから胸を張っていいんだぞ!!」

オールマイトにそう言ってもらい嬉しく思うクラフト。

クラフト「!…ありがとうございます!」

オールマイト「うむ!では塚内君あとは任せていいかい?」

塚内警部「ああ、事後処理とかはもうほとんど終わっている、あとはこちらで済ませておくよ」

オールマイト「分かった!では後はよろしく頼んだよ!では!」
シュバツ!

マスコミ「あつオールマイト!何か一言!」「一言お願いしますオールマイト!」

マスコミがオールマイトにコメントをもらおうとしたが時すでに遅し、オールマイトは

もう見えない場所まで移動していた。

クラフト「さて塚内さんもう帰っても大丈夫ですか?」

塚内警部「ええ、もう帰っても大丈夫…あれ?名前言ったっけ?」

クラフト「さっきオールマイトが言っていましたので(笑)」

塚内警部「ああ、そういえばそうだね、あつもう帰っても問題ないよ1人で大丈夫かい?」

クラフト「1人で大丈夫ですよ」

塚内警部「分かった気を付けて帰るんだよ」

クラフト「ありがとうございます、では失礼します」

クラフトは塚内さんにお礼を言いその場を後にした。ちなみにマスコミとかは塚内さん

達警察が抑えてくれていた為問題ない。そして帰ろうとしたとき俺は自分の用事を思い出す。

クラフト(あつそうだお金おろしに来たんだつた、でも銀行は…仕方ない手数料かかるけどコンビ

ニでおろすか)

コンビニによってお金を降ろすことに決めるとき後ろから声をかけられた。

????「あつあの!」

クラフト「んっ？」

声がした方にふりかえるとそこには耳郎響香がいた。

クラフト「おっ君は…（おっとーすっかり忘れていたぞく）」

耳郎響香「あの、お礼言いたくて…」

クラフト「お礼？なんの？」

耳郎響香「えっ？いや2回助けてくれたじゃん…」

クラフト「もしかして人質の代わりと敵の攻撃サイランのとき？」

耳郎響香「そう！2回も助けられちゃったしさちちゃんとお礼言いたくてさ！ホントありがとう！」

クラフト「えっあくうん！まあ無事でよかったよ／＼」照れ…

俺は耳郎に言われたせい少し照れた。

耳郎響香「／＼／！！」ドキッ！

クラフト「うん？どうしたなんか顔赤いぞ？」

耳郎響香「なっなんでもない！そっそうだよかったら連絡先交換しない？／＼／」

クラフト「連絡先？いいぞ」

クラフトと耳郎はお互いの連絡先を交換した。

耳郎響香「そういえばまだ名前言ってなかったねウチ耳郎響香よろしく／＼！」

クラフト「俺は機神クラフト、よろしく…／＼」

耳郎響香「……」

クラフト「……」

耳郎響香「じゃっじゃあなんか用があつたときとか連絡するね／＼」

クラフト「おっおう／＼」

耳郎響香「じゃあまたね／＼」タツタツタツ…

クラフト「おう…（やべえ最後おうってしか言っただけ…）」

コミュニケーション能力を上げるべきかと思うクラフトであった…

耳郎響香（照れた顔…思わずドキってしちゃった…でも守ってくれているときの背中…かっこよか

つたな／＼

耳郎母親「あらあらどうしたの響香ちゃん？なんだかうれしそうな顔しちゃって！」

耳郎響香「ふえ!? なななんもないよっ／＼!!」

耳郎母親「えゝ気になるなゝあっ!もしかしてさっきの彼のことかしら!?!連絡先も交換したんで

しょ!」

耳郎響香「なっなんもないってば／＼!!」カアア...

耳郎母親「きやくお母さん!いろいろ楽しみだわ!」

耳郎響香「／／／／」ぷしゅゝゝ

響香は母親におちよくられ顔を真っ赤にしながら帰路についた。

クラフト「ぶわつくしよん!」

クラフトは耳郎と別れた後コンビニで金をおろし必要なものを買って帰宅した。

——クラフト宅——

クラフト「2日目にしていろいろ疲れた...だけど嬉しいこともあったからいいか...」グウウゝ

クラフト「そういえば昼飯食えなかつたな事件のせい...もう夕方だけおふあああゝ」

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z...

クラフトは緊張の糸が切れたのかでかいあくびをした。そして同時に眠気がきて俺はそ

のまま座っていたリビングのソファで眠ってしまいその日を終えた...

第5話 発見緑君！そして授与！

銀行強盗事件から数日…あれから俺はこの世界について色々調べ物をしたり、個性の

練習&調整&体を鍛えたりなどしていた。そして夏休みも8月に入り俺はあることをす

るために折寺中学校とその周辺の地図をパソコンで確認していた。

カチツ…カチカチ…ツイー…（マウス操作音）

クラフト「たしか漫画もアニメも団地のマンションだったはず…中学校から近い団地はここか？…

…といえは最初のシーンで公園の背景に団地があったな…ということとはたぶんこの辺り

かな？緑谷出久…デクが住んでいる場所は…」

なぜ緑谷のいる場所を確認しているかというところは…緑谷に個性を授けようと思っ

てね！このまま来年まで何もせずに原作通りに進めばオールマイトからワンフォーオ

ール（OFA）を譲渡されるけど、どうせなら緑谷がちがう個性を使うのを見たいしね！

クラフト（さて…緑谷に個性を授けるとしてどんな個性が良いかな…：緑谷の親の個性は母親が

【物を引きつける個性】で、父親は【火を吹く個性】だったかな…周りにあまり違和

感を持たないようにするならこの2つのどちらかか、この2つが混ざった複合型の個性

にするべきだな。複合型となると、【火を操作する個性】とかになるのかな？）

緑谷に授ける個性を考えるがどうせなら強い個性にした…と思いたい。

クラフト「操作系の個性と火の個性か…うくん…火を生み出して

操る…この2つの個性からだ

これが答えかな？」ギイ…

自分の部屋の座っている椅子の背もたれにもたれながら自分の部屋の天井を見上げる。

火の個性について考えていたせいにかふと某海賊漫画の能力を思い出す。

クラフト「…火を操るか…火を操る能力だとすぐに思いつくのはメラメラの実とかだな…いつ

そのことメラメラの能力に…OFAとメラメラって超強くね？あの火の力とパワー…それ

に物理攻撃無効って超強いな…」

クラフトは少し悩むが…

クラフト「でもまあ…小さい時から個性が無いせいで、周りからイジメられてきたわけだし…しか

も今まで無個性と思っていた奴が強個性でしたーっていうのもおもしろいな…よし緑谷

に授ける個性はメラメラの実の能力に決定く♪」

おもしろそうという理由で決めてしまったがこれで緑谷に授ける個性は決まった。

あとは緑谷に会ってそれとなく理由やらそういう雰囲気にもっていつて授けるだけになった。

った。

クラフト「まあ強個性だからって無敵ってわけじゃないし大丈夫でしょう。さてと探すのは明日か

らにするか…ちよつとドキドキするな、まあすぐ会えるか分からんけど（笑）」

・
・
・
・
・

くく翌日くく

クラフト「いたわ…」

探し物というのを探しているときに見つからずそうではないときに見つかるものである…

次の日、クラフトは緑谷に会うため彼が住んでいるであろう該当地域を探索した。最初

からそう簡単に見つかるはずもなく、午後12時をまわったとき昼食を兼ねて一旦休憩

をする。昼食を食べ終わったあとクラフトは再び探索を再開した。

・
・
・
く約2時間後く

クラフト（やっぱそう簡単には見つからねえよな）

クラフトはそう思いながら土手を歩いていった。すると土手と繋がっている橋の高架下に

複数の人影が目に入る。クラフトは立ち止まって何をしているのかと人影がいる方を凝

視する。すると小さい爆発のようなものが見えた。クラフトはまさか！と思い個性を

使って詳しく見ることにした。

クラフト（個性悪魔の実、ギロギロの実の能力！）

俺はギロギロの実の能力を使い高架下にいる人物を確認すると…

クラフト「いたわ…」

そして今に至る。

クラフト「まさか探索初日で見つかるとは…てか今気づいたけど、

最初からギロギロの能力使えば

よかつたじゃ…いやギロギロの能力の1つ、千里眼は視線は飛ばせるけど特定ができません

るわけじゃないからそんなに変わらんか…まあ今はそれよりあつちをなんとかしないと

な…ではここは1つ助けに行くか！」

クラフトは緑谷を助けに高架下に向かう。

——高架下——

ポオン！

爆豪 「おらデクウ!!避けてんじゃねえ!!」

爆豪は緑谷に向かって爆破の攻撃をする。

緑谷 「ひっ！やっやめてよかつちゃん！」

爆豪 「ああ？現実を見れていないお前に教育してやってんだ

ろ？むしろ感謝してもらいたい

もんだ！」

友達① 「おいおい爆豪その辺にしておけよw」

友達② 「まあでも爆豪の言ってることは一理あるけどなくこれ読んだところでヒーローになれる

わけでもないし」ヒョイ

爆豪の周りにいた取り巻きの1人が地面に落ちている雑誌を手取る。

友達② 「月刊ヒーロー、今月の特集は《ヒーローになるためには!?!》オールマイト氏に直接取

材!!》ねえ…いくらこれ読んだからって無個性じゃ厳しいんじゃないね？」

取り巻きが手に取った雑誌は緑谷がコンビニで購入したヒーロー関連の雑誌であった。

緑谷 「いいいいじゃないか無個性でヒーロー目指したって！それにやってみないと《ポオ

ン！》ひっ！」

爆豪 「無個性のデクが何言ってるんだ!?個性がねえテメエに何が
できるんだあ?あ☒あ!」

緑谷 「……………」

緑谷は爆豪に言い詰められ黙ってしまふ。

爆豪 「だが俺はちげえ、この個性で必ずオールマイトをも超え
るヒーローなって「フッフッフ

w」あ?」

緑谷 「?」

友達①② 「?」

クラフト「オールマイトをも超えるといってる奴が人をイジメ
ちやあいけねえなあ」

爆豪 「なんだてめえは?」

俺は某海賊漫画に出てくるピンク色の上着を着た七武海
の男の口調を真似て喋る。

クラフト「フッフッフwなあにただの通りすがりの中学生さ」

友達① 「なんだコイツ?てか俺らとタメかよ」

爆豪 「その通りすがりが何の用だ?用がねえならとつと失せ
ろモブ野郎!」

クラフト「いやあ歩いてたら爆発のようなものが見えたんだ、そし
て何をしているか気になったも

んだから来てみたら…まさかイジメの現場だったとは
なあ」

爆豪 「ああ?イジメじゃねえよ!コイツが現実見えてねえから
教育してやってたんだよ!」

クラフト「教育ねえ…それにしても随分暴力的じゃないか?オール
マイトをも超えるヒーロー目指

してるやつが人に暴力をふるつちやあいけねえなあ?」
イラッ:

爆豪は自分がしたことについて指摘されたことが癢に障
る。

爆豪 「あ☒あ?なんだテメエ喧嘩売ってるのか!?痛い目にあい

てえのか!? ああオイ!」

友達② 「おい爆豪ケンカはまず「黙ってるお!」…」

爆豪は取り巻きに忠告されるが途中で遮ってしまう。

クラフト「フフフフフ自分が気に入らない事があると癩癩を起こす、ヒーローというよりはガキ

じゃあねえか…それに人に個性を使って暴力をふるう時点で敵ライランと同じだなw」

ブチツ!!

爆豪 「俺がガキライランで敵だとおお…テメエ覚悟はできてんだろうなあ…? おい黒肌

野郎! 今すぐ土下座して謝ったら許してやる! やらねえと…どうなるか分かつ

てんだろうな?」 イライラツ…ゴゴゴゴ…

爆豪はブチ切れクラフトに謝罪を要求する。

友達① 「おっおいこれマズくねえか?」

友達② 「あつああ爆豪のやつブチ切れだ」

緑谷 (まっまずい! 僕を助けに来てくれたのかは分からないけどこのままじゃあの人危ない)

い!)

緑谷と取り巻き2人は危険な未来を察知する。

友達② 「おいあんた! さっさと謝れ! じゃないと本当に大怪我するぞ! おい緑谷もあの人説得しろ!

ろ!」

友達① 「爆豪! これ以上はダメだ! もしバレたら後々面倒だぞ!」

緑谷 「あつあの! 本当に早く謝った方がいいです! あなたが怪我を「フフフフフフフフ

w」!!」

クラフト「誰が誰に謝るって? 悪いことをしたのはそいつだろ! 悪いことをした奴になんで謝らな

きやいけない?」

緑谷と取り巻きの1人が俺に謝るように言うがクラフトはそれを拒否。すると爆豪が…

爆豪 「そうか…だったら…ぶつ殺すまでだなあ!!」ボオン!

友達① 「おい爆豪!」

爆豪は自身の爆破を推進力にしてクラフトに突っ込む。取り巻きの1人が呼び止めるが

もう遅い。

爆豪 「死ねええええ!!!」

!!!ボオオオオオン!!!

爆豪は容赦なく爆破攻撃をし爆破をうけた場所は煙が立ち込める。

友達② 「おっおい…大丈夫かこれ…」

友達① 「さすがに手加減はしてる…はず…」

緑谷 (あわわわわわ!ああああの人大丈夫かな!)

爆豪以外の3人はこの状況を見守ることしかできない。

爆豪 「はっ!俺に歯向かうからこうな!あつぶないねえ!」なっ!!!」

立ち込める煙の中から声が発せられる。そして平然とした顔で姿を現す。

クラフト 「俺じゃなきやケガしてたよお!」

爆豪 「なっ!なんで無傷なんだてめえ!?!確かに手ごたえはあったはずだ!?!」

爆豪は一応手加減をしていたとは言え相手に確実なダメージを与えたと確信していなかった。だが相手はダメージどころかカスリ傷一つ負っていなかった。

クラフト 「なんでだろうねえ、おつやあくどうしたんだい?鳩が豆鉄砲を食ったような顔をし

て?」

クラフトが無傷なのはもちろん個性を使ったからだ。そしてクラフトは自分が攻撃した

はずの相手が無傷だったことに驚愕している爆豪に挑発をする。また黄色の海軍大将の

喋り方が爆豪を更に苛立たせる。

イラアツ！…

爆豪 「!?…あ×あ!!てめえ調子に乗ってんじやねえぞ!!攻撃が当たってねえんならテメエに当たるまで攻撃すりやいいだけだ!!」ポオン!

爆豪は再び突っ込んでくるのに対しクラフトは迎撃する。

クラフト (個性悪魔の実、ピカピカの実の能力…) シュン!

爆豪 「消えっ!?なっ!?」

相手が消えたと思いきや次の瞬間自分の目の前に現れた。

爆豪 「けっ!だが手間が「光の速さで蹴られたことはあるかあ
い?」…!?!」

ドゴオツ!!!

クラフトは爆豪の腹に重い蹴りをいれる。蹴りを入れられた爆豪は1mほど飛ばされた。

そのまま地面に叩きつけられ地面を転がる。

ドシャツ!ゴロゴロゴロ…

爆豪 「!?…ゴっ!ほオ…ぐうっ…がはっごほっ!…おえ…」

クラフト (みぞおちに入ったか?)

爆豪は片手を腹に当てもう片方の手と両膝を地面に付けている状態で伏せている。

緑谷 (あつあのかっちゃん…膝をついている…)

友達①② 「爆豪!!」タツタツタツ…

取り巻き2人が蹴飛ばされた爆豪の元へ駆けつける。

友達① 「爆豪大丈夫か!」

友達② 「腹にもろに入ったけど大丈夫…夫?」

緑谷 (かっちゃんを一撃で…一体どんな個性なんだ?…そういう
えば蹴る前に光が何とかって…)

まさか光に関する個性なのか!?もしそうならいくらかっ
ちゃんの個性でも…)

緑谷は自分をイジメていた幼馴染が蹴飛ばされたことに驚愕する。そしてそんな幼馴染

染を蹴飛ばした相手の個性について考察を始める。

爆豪 「くっクソ！こっ…この俺が!?ありえねえ!!こんな奴に!?!」

クラフト「そのこんな奴に君は吹っ飛ばされたんだよおくまあだ分らないのお?これで大人しく

引いてくれるとありがたいんだけどねえ〜」

クラフトは爆豪にこのまま帰ってくれないかと促す。

爆豪 「あ☒あ!?ふざけんな!テメーをぶっ飛ばすまでこのまま引き下がるか!!」

友達① 「おっおい爆豪もう帰ろうぜ!こんなこと言いたくはないけどあいつお前より強えーっ

て!!」

友達② 「そっそうだぜ!それにアイツも「あ☒あ!!んなおめおめと引けるか!!」…」

爆豪は取り巻きの2人の言葉を拒絶する。

クラフト「ん〜?あんまりこういう手は使いたくないんだけどねえ〜」スツ…

クラフトはズボンのポケットからスマホを取り出し爆豪たちに向ける。

爆豪 「あ☒?なんだよそれ?」

クラフト「これに写っているのは君が彼に暴力を振るっているシーンだよお」

爆豪 「!!…:…てめえ…」ギリリ…

クラフト「これが世間に出たら君はどうなってしまいうんだろかねえ〜?まあ君がこのまま大人しく

引いてくれたら何もしんだけどねえ〜」

クラフトは脅しと言われてもおかしくない行為で爆豪にこのまま帰るように促す。

爆豪 「てめえ!!脅しのつもりか!!そんなもん「爆豪もうやめと

け！もう帰ろう！」あ☒あ俺に指

図すんじや…！」ガシツ！

取り巻きの1人が爆豪の腕をつかみ制止させる。

友達① 「おいあんたーこのまま帰ればいんだな!」

クラフト 「ああこのまま身を引いてくれればこちらは何もしないよお〜」

友達① 「本当だな？その写真もバラさないだろうな？」

クラフト 「約束は守る…こちらもこういう行為はしたくないからねえ〜」

友達① 「分かった…爆豪行こロ」あ☒あ!?なんで俺がこのまま…」
爆豪！」

爆豪は反発するが取り巻きが大声で名前を呼び制止させる。

友達① 「このまま写真をばらされてみる、タダじゃすまない上に進路にまでに影響するぞー!」

爆豪 「くくくつ…ちっ!!クソ!!てめえ覚えとけよ!!いくぞお前ら!!」

友達② 「おっおう…」

友達① 「…おおう…」

爆豪はようやく大人しくなりそのまま取り巻き2人を連れてこの場から離れていった。

クラフト 「やつと行ったか…さてと次は…」大丈夫か？あとこれほい」スツ…

クラフトは爆豪が離れたのを確認すると緑谷のもとに歩み寄り落ちていた雑誌を緑谷に

渡す。

緑谷 「うっうん…あつありがとう…あと助けてくれて…」

クラフト 「いや〜どうってことないよ〜君が怪我をする前に止められてよかったよ〜」

緑谷 「あつあの口調さつきとかつ…変わってませんか？」

緑谷は自分を助けてくれた人の口調が変わっていること

を指摘する。

クラフト「ん？ああさつきまでの口調は演技みたいなもんだよ！こつちがいつも通りだよ！」

緑谷 「そ…そうなんですか「それよりなんであんなことに？」そつ…それは…」

クラフトは原作を知っているためなんで緑谷があんな目にあっているか知っているが、

この世界に来てから初めて会うわけだからそれっぽく聞いてみる。

緑谷 「……」

クラフト「…とりあえず場所変えようか？」

クラフトと緑谷は場所を変えるため近くの公園に移動し近くの自販機で飲み物を買いべ

ンチに座っている緑谷に渡し隣に座る。

クラフト「ほいお茶」ヒョイ

緑谷 「あつありがとう…：そういえばまだ名前言ってなかったね、僕は緑谷出久、中学2年だ

よ」

クラフト「俺は機神^{はたがみ}クラフト、緑谷と同じ中学2年だ」

緑谷 「ええ!?機神くん同い年だったの!?あつごめんね驚いちやつて…背高いからてつきり年上

かと…」

2人は自己紹介をし緑谷はクラフトと同い年ということに驚く。

クラフト「ああ別に気にするな(笑)それで?…なんであんなことに？」

緑谷 「うっうん実はね……」

緑谷は自身の過去と一緒に話し始める。

緑谷 「……というわけなんだ」

クラフト 「なるほどな…(やっぱ聞いてみると重い…)」

一応ある程度は知っていたが改めて聞くとなかなか重
いと感じるクラフト。

緑谷 「やっぱ無個性が夢を見るのはおこがましいのかな…」

クラフト 「まあ…確かに周りが言うことも一理ある」

緑谷 「はは…やっぱりそう思う」 「だが…」

緑谷はクラフトの意見に肯定しようとするがそれをクラ
フトが遮る。

クラフト 「だからってヒーローになれないとも言えないよね！」

緑谷 「えっ?」

クラフト 「無個性だからヒーローになれない?じゃあ逆に個性があ
れば誰でもヒーローになれる?

そんなわけないよね?それって他に例えると、銃が扱えな
いと軍隊に入れないって言っ

てるようなもんじゃない?銃が扱えるからって軍隊に入
れるとは限らない。ヒーローも

同じだと俺は思う、個性があるからヒーローになれるとは
言えない。まあ無個性で目指

すのはかなり厳しい道だけだな…」

クラフトは自分の持論を緑谷に話すと…

緑谷 「うっ…くう…ううう…」 涙ポロポロ

クラフト 「ちよおー!どうした緑谷!!なんで泣いてる!」

突然涙を流す緑谷に驚くクラフト。

緑谷 「ごっごめん!でも今までそんなこと言われたことなくて

…それで…うう…」

クラフト 「わっ分かったからとりあえず落ち着け」

くく数分後くく

クラフト「落ち着いたか？」

緑谷 「機神くん……」つごめんね……いつ今までこんなこと言われたことなかったからつい……」

クラフト「まあ気持ちは理解できるよ」

「ここでクラフトは前日決めたことを含めて緑谷に聞いてみる。」

クラフト「……なあ緑谷、もし個性が持てると言われたらどうする？」

緑谷 「えっ……個性を？どっとういうこと？」

緑谷は唐突に聞かれたことに動揺する。

クラフト「無個性のお前を個性持ちにできると言われたらどうする？」

緑谷 「えっ……そっそりやあそんなこと出来るなら……でもそんな都合のいいこと……」

クラフト「緑谷……俺の個性を使えばお前に個性を持たせることができる」

緑谷 「……ええ!?こっ個性を僕に!?そんなこと……いやその前に機神くんの個性って光に閃

する個性じゃないの!？」

緑谷は突然言われたことに驚く。それもそうだ、個性を持てるようにできると言われた

ら大抵の人は誰でも驚く。

クラフト「俺の個性を分析していたのか？だがそれは違うぞ、お前の幼馴染と闘ったときに見せた

のは一部の力に過ぎない」

緑谷 「……機神くんの個性って一体どういう個性なの?……」

緑谷は一体どういう個性なのかクラフトに質問するが……

クラフト「悪いな緑谷、俺の個性はあまり詳しく話せない。あと語弊があったな個性を持たせると

は言ったが、正確には個性を目覚めさせると言ったほうが正しいかな?（俺が個性作っ

て緑谷に授けるんだけど、まあこっちの方が違和感はない

かな)」

クラフトは自身の個性に関して詳しく話せないと誤魔化し個性を持たせることをあまり

違和感がない方へ訂正する。

緑谷 「あついや僕の方こそごめんね！いきなり聞いちゃってあんまり他人に話せないこともあ

るはずなのに…あと個性を目覚めさせるって？…」

クラフト「俺の個性を使えばお前の中に眠っているかもしれない個性を目覚めさせることができる

る。個性つてのは未だに詳しい事は分かってない、世の中には個性を持っていたとし

ても何が発動のきっかけになるか分からない人もいる。中には一生使わずに終わると

いうパターンもある、もしかしたらお前もそういうパターンかと思つてな、まあある

いは本当に無個性なのかもしれないが…どうする緑谷？俺の提案を受けるのはお前次

第だ、それに本当に無個性だったら傷つくのはお前だ…」
緑谷 「もし本当に僕に個性があるのなら…でも…」

緑谷は迷った。もし自分に個性があるなら欲しいと、だが逆に本当に何も無い無個性

だったらと、しかし…

緑谷 「(だとしてもやってみないと分からない！それにこんなチャンスは滅多にない！) お願い

…できるかな！」

緑谷は了承の返事を返し俺は口角を上げる。

クラフト「わかった…後悔はするなよ！あつそれと今携帯持つてる？持つてたら連絡先交換しよう

ぜ」

緑谷 「うっうん持つてるよ！」

クラフトと緑谷は連絡先を交換する。

クラフト「じゃあ緑谷明日予定空いてるか？」

緑谷「えっうん特に予定はないから空いてるよ」

クラフト「じゃあ明日この海浜公園に来てくれるか？そうだな13時頃でいいか？個性については明日

日することにする。いいか？」

緑谷「うっうんわかったよ！」

クラフト「よし今日はこれで解散とするか、じゃあ緑谷明日この海浜公園でまた会おうぜ」

緑谷「うんまた明日機神くん！」

俺と緑谷は翌日海浜公園でまた会うことを約束し別れた。

クラフト（おっつしやあああ〜何とかなったあ〜あとは明日緑谷に個性を授けて一応アドバイス

やら色々言えばいいかな〜）

クラフトは無事緑谷に個性を授ける段取りがうまくいったことに安心し帰路についた。

〜〜翌日〜〜

——多古場海浜公園——

クラフト「さて緑谷は来てるかな…それにしてもやつぱクツソ汚ねえな」

緑谷「あっ！機神くんおはよう！」

クラフトが海浜公園に到着し砂浜にあるゴミ山を見ていると緑谷がこちらを見つけ合流

する。

クラフト「おはよう緑谷、つってもお昼だけだな（笑）」

緑谷「ははっ確かにそうだね（笑）」

お互い他愛ない会話をし挨拶をする。

クラフト「よし緑谷、さっそくだが昨日言った通りお前の個性を目覚めさせる。言っておくがこれ

は絶対じゃねえことは分かっているよな？あくまできつかけを与えるだけだ、何もなかつ

たらそれまでだ。後悔はないな?」

緑谷 「うん!後悔はないよ!それに僅かに希望があるなら僕はそれに賭けたい!」

クラフト「オーケーオーケー、覚悟はできているようだな。あと個性が出た場合この事は秘密にし

てもらいたい。理由は目立ってしまうからだ、そんなことになったらクソ面倒くさいこ

と極まらない」

クラフトは個性が出た場合秘密にするよう緑谷にお願いする。

緑谷 「うん分かったよ機神くん!確かにそうだね!」

クラフト「よしそんじやあいくぞ」ガシツ

緑谷の了承を確認するとクラフトは緑谷の頭を鷲掴みする。

緑谷 「へっ?はっ機神くんなんだかとっても恐ろしいんだけど(汗)」

クラフト「大丈夫だ全然痛くはない、これは俺の感覚の問題だから気にするな」

緑谷 「そっそうなんだ分かったよ…」ゴクリ

クラフトに頭を鷲掴みにされ少し動揺し緊張する。

クラフト「いくぞ緑谷」

緑谷 「うん…お願いします…」

クラフト「よし…空想、悪魔の実メラメラの実の能力、メラメラの
実の能力を緑谷出久に定着…」

鑑定…:定着完了…: 終わったぞ緑谷…:」

緑谷 「えっ!?!もう!?!」

緑谷は自分が予想していたよりも早く終わったため驚く。
クラフト「なんだもつと長いと思ってたか?案外こういうもんは
あつけないもんだよ、それよりも

早く確認したらどうだ?」

緑谷 「うっうん!でも今まで個性なかったからいまいち感覚が

…」

クラフト「あーそうだよな、緑谷まずは意識を集中させる、それを体の内側や手足に向けるんだ。」

個性が目覚めてるなら何かしらの変化があるはずだ」

緑谷 「意識を…うんわかったやつてみる！」すううう…はあぁあ…

クラフトは緑谷に軽くアドバイスをし緑谷は意識を体や手足を集中させる。

すると…ボウツ!!

緑谷 「うわあつ火が!?熱っ!あつ…熱くない?」

パチッパチッパチッパチッパチッ!

クラフト「おめでとう緑谷出久!!君は個性を手に入れた!!見たところ火・炎系の個性だね!」

緑谷 「これが僕の…個性…」ボウツ…涙ウルウル

緑谷は自分が個性を持てたことに涙を流す。

クラフト「H E Y H E Y 緑谷!まだゴールじゃないぜ!これからその個性をものにしなくちゃいけない

ぜ!」

緑谷 「うっうんそうだけど…今まで無個性だった僕に個性がつて思うと…ううう」涙ポロポロ

クラフト「うんうん気持ちは理解できるぜ!だけどこれから色々やんなくちゃいけないぞ!」

緑谷 「うっうんそうだね!!」ゴシゴシ

俺は緑谷に泣いている暇はないという趣旨を伝える。そして緑谷はそのことに頷き涙を拭う。

クラフト「でだ緑谷、俺からお前にできる事はまあ個性とかのアドバイスとかだけどその前に…」

「まず体鍛えろ」

緑谷 「…へ？」

クラフト「ん？いや個性の制御とか調整も大事なんだけどさ、緑谷見た感じ全然鍛えてないよね？

だからまずは体鍛えたほうがいいかなーって」

クラフトは緑谷にまずは体を鍛えろと提案する。

緑谷 「えっああうんそうだね、確かに個性も大事だけどその個性を使う体が弱かったら意味ないもんね！」

クラフト「個性に関する事はレイン（通話アプリ）とか電話で聞いてくれ、体鍛えるのは緑谷に任せ

るわ。なんか色々考えるの得意そうだし」

クラフトは個性に関する事はアドバイスするが体を鍛えることは緑谷に丸投げした。

緑谷 「ううん！むしろここまでしてくれたんだ、ここからは僕が頑張る番だよ!!」

クラフト「おーその意気だけ緑谷！まあ体鍛えろとは言ったが個性の制御も大事だからな、今日は

夕方くらいまで緑谷の個性の練習に付き合っただけでやるぜ！

この海浜公園はそれにうってつ

けだからな！」

緑谷 「本当!!ありがとう!!そうかそれでこの海浜公園を待ち合わせの場所にしたのか」

緑谷はクラフトが個性の練習に付き合ってくれることに感謝し、なぜこの海浜公園に

集まったのか疑問に思っていた事に納得した。そして夕方まで緑谷の個性練習をした。

クラフト「よーしこの辺にしておくか、おつかれさま緑谷！」

緑谷 「はあはあ…うんありがとう機神くん、個性練習に付き合ってくれて…」

ちょうど夕方ごろになり2人は個性の練習を終わらせる。

クラフト「じゃあ緑谷明日からは体も鍛えるんだぞ！ああ後、親に個性のことちゃんと話しておく

んだぞ、もちろん俺の事は秘密にしてな。役所とかにも個性の変更届提出しないといけないしな」

緑谷 「うん何から何までありがとう機神くん！そうか役所に届け出さないといけないのか。それにお母さんにも……お母さんたぶん驚いて泣いちゃう

だろうなハハ……」

クラフト「緑谷……一応言っておくがその個性はお前の力だ、胸張って自信を持って！ヒーロー目指す

んだろ！」

また下向きな気持ちになっている緑谷にクラフトは激励を送る。

緑谷 「うっうんそうだね！ありがとう機神くん！」

クラフト「じゃ緑谷俺は先に帰るぜ！何か用があれば連絡してくれ！じゃあな！」タツタツタツ……

緑谷 「うん分かったよ機神くん！いろいろありがとうじゃあね！」タツタツタツ……

クラフトと緑谷は別れ帰路についた。その後緑谷は母親に個性が出たことを話し

床が浸水するのではないかとくらい泣かれるのであった。

……
……
……
——クラフト宅——

クラフト「おっしやああああ無事緑谷に個性を授けられたあああゝ」ポフンツ

クラフトはリビングのソファーに横たわる。

クラフト「緑谷に個性を授けるのは終わったから次はオールマイト

の傷を治すことだな。だが問題

はどうやって接触するかだな、あなたの傷を治してあげますって直接行くのは違和感あ

りまくりだし、そもそも何で知っているということになるし…まあこれは後々考えるか

…ん？」ブウー…ブウー…ブウー…

オールマイトの傷をどうやって治すか考えているとスマホにレイン（通話アプリ）の着信

が入り確認すると着信相手は耳郎からだった。

クラフト「誰からだ？おつ耳郎からだ」ピッ

耳郎 『やつほー機神！急にぐめんね元気にしてる？、実は聞きたいことがって連絡したんだ。

8月×日って予定空いてる？空いてたら一緒に遊びに出かけない（・ω・）？』

着信内容は耳郎からの遊びの誘いだった。クラフトは一瞬固まる…まさか耳郎から

遊びの誘いがあるとは思いもしなかったからだ。クラフトは少し戸惑いながら返信

をする。

クラフト『その日は空いてるぞ、いいよ一緒に遊ぼうぜ！場所とかはもう決めているのか？』

クラフトは返信内容はこれでいいのかと思いつながら耳郎に返信した。数分経つと

返信が返ってくる。

耳郎 『わかったありがとう！うん場所とかは近くのショッピングモールとかにしようかなと

思ってるんだ。もし他に行きたい場所とかあったら聞くよ♪』

遊びに行くのは近くのショッピングモールらしい。クラフトは他にいききたい場所がある

かと聞かれ特に思いつかないので大丈夫という趣旨の内

容を返信する。

耳郎 『了解♪じゃあ◆◆駅前10時集合でいいかな?』

クラフト 『おうわかった!◆◆駅前10時集合な! (へー)』

耳郎 『うん♪じゃおやすみ!』

こうして耳郎との会話は終わった。会話を終えた後クラフトはこう思う。

クラフト(これってもしやデートでは…いやいやいや早まるな俺、ただ遊ぼうと誘いがあった

だけだ…だがしかし…ぬうおおおわからんもう寝よう!!)

クラフトは少し悶悶としながらベットに入ったのであった。

——耳郎宅——

耳郎 『うん♪じゃおやすみ!』……

耳郎 「…さっ誘っちゃった…ぬあああ／＼」ポフンツ…

耳郎は自分の部屋のベッドにうつ伏せで横たわる。あの事件で知り合いになったのでお

礼を兼ねて遊びに誘った耳郎。

耳郎 「てかこれってデツ…デートになるんじゃ…いやいや違うただ一緒に遊ぶだけだし／＼

だけど2人だから周りからみたら…／＼」プシユ／＼

耳郎は自分で想像して頭から湯気が出る勢いで赤面しそ

の様子を部屋のドアの隙間から

見ている者がいた。

耳郎母親 「あらあら／＼」

耳郎の母親であった。耳郎は声がした方へ向く。

耳郎母親 「!?ちよっなにみてんの／＼」

耳郎母親 「あら／＼いいじゃない響香あ／＼お母さんは応援してるわよ／＼」

耳郎

「そつそんなんじゃないからー!!／＼／＼」
母親にまたいじられる耳郎であった。

第6話 デート?そしてライバルと大切な人!?

〃〃8月×日〃〃

◇◆駅前◇

クラフト「一応10分前に来たがまだ耳郎は来てないか…」

今日は前に耳郎と一緒に遊ばないかと誘われた日である。
俺は少し緊張しながら耳郎が

来るのを待つ。そこに…

耳郎 「機神!」 タツタツタツ…

クラフト「おー耳ろu(…我が人生に一片の悔いなし)」

クラフトは声のしたほうへ向くとそこには耳郎が小走り
でこちらへ走ってくる。

笑いながらこちらへ向かってくる姿は可愛かった。

耳郎 「機神来るのはやいね?待った?」

クラフト「……………」

耳郎 「…機神?」

耳郎がクラフトに問いかけるが黙ったままなので耳郎は
少し困惑する。

クラフト「かわいい…(いや俺もさつき来たばっかだ)」

耳郎 「へっ!?!/ /」 カアッ

クラフト「ん?…あついや!俺もさつき来たばっかだ/ /」

クラフトは頭で思っていたことが口に出てしまい耳郎は
突然かわいいと言われ顔が赤く
なる。

クラフト「あーそのすまん…気分を害したなら謝る…」

耳郎 「いっいや大丈夫!その…急に言われたから…それに嬉し
いしゴニョゴニョ…」

クラフト「まあ耳郎が大丈夫なら…ん?すまん最後のほうよく聞き
取れなかったもう一度頼む」

耳郎 「なっなんでもないなんでもない!あっほら早く行こー!」
グイッ

クラフト「えっ？おつおうそうだな…おつとと」あたふた

耳郎は自分が言ったことを聞き返され慌ててそれを誤魔化すためクラフトの手を

引っ張り急に手を引っ張られ少し足がもたつくクラフト。

・
・
・
——シヨツピングモール——

耳郎 「ここだよ！」

クラフト「おー！結構とかかなり大きいモールだな！」

耳郎 「そっ！最近できたばっからしくてちよつと来てみたかったんだ！」

クラフトと耳郎2人は耳郎が遊びに行こうと言っていたシヨツピングモールに到着す

る。初めてきたがかなり大きいシヨツピングモールである、服飾・雑貨・本・飲食・

ゲームセンターe t c . かなりの数の店がある。これは来てみたいのもわかる。

クラフト「どこから回るか迷ってしまうな！」ワクワク！

耳郎 「そっそうだね！（ヤバッ！ワクワクしてるのかわいい／＼）」

クラフト「？…どうした耳郎？」

耳郎 「えっ!?!ううんなんでもないよ／＼」
テンションが上がっているクラフトを見てかわいいと思

ってしまった耳郎。

耳郎 「(あつ危なかった…もしかしてかわいいと思ったことが「とこころで耳郎」ひゃい！」

クラフト「……………」

耳郎 「…………／／／／カア／／」

頭の中で色々考えていたらクラフトから声をかけられ裏返った声で返事をしてしまう。

クラフト「耳郎…その…大丈夫か？」

耳郎「(はつ恥ずかしい／＼)うっうん大丈夫…それより何か聞こうとしてたけど……」

クラフト「ん？ああその…いつまで手は握っているんだ？耳郎がいなら別にこのままでいい

が？…」

耳郎「えっ？…」チラッ

耳郎はクラフトに手をいつまで握っているのか？といわれ自分の右手に目を向ける。

そこにはクラフトの左手を握ったままの自分の右手があった。

耳郎「!?／＼／＼／＼／＼／」カアアアア…ボンツ！プツシユク クラッ……

クラフト「うおっ耳郎!」ガシッ

耳郎は自分が言われるまで手を握っていることに気づかず恥ずかしさが一気にこみ上が

り赤面する。そして恥ずかしさのあまり頭がのぼせてしまい少し立ちくらんでしまいク

ラフトは肩を掴み支える。

クラフト「じっ耳郎!?大丈夫か？つて顔アカッ!」

耳郎「うっうん／＼だっだいいじよ…「うん大丈夫じゃないね!」／＼／」

クラフト「とりあえずどつかで休憩しよう」キョロキョロ…!

耳郎を休ませるために近くにあるオープンカフェに耳郎の肩を支えて向かう。

クラフト「耳郎大丈夫か？ほらゆっくり座って…」

耳郎「うっうん…／＼あつありがとう／＼ごめんね…」

クラフト「なくにどうってことないよ、それより大丈夫？」

耳郎「うん…さっきより少し落ち着いた／＼」

席についたことにより少し落ち着きをもどす耳郎、そこへ席についたことにより店員が

やってくる。

コツコツコツ…

店員 「いらつしやいませー!ご注文をお伺いいたします!」

クラフト 「あっ俺メロンソーダお願いします、耳郎は何にする?」

耳郎 「ウチはカフェオレで…」

クラフト 「オツケー、メロンソーダとカフェオレお願いします」

店員 「メロンソーダとカフェオレですね!ご注文承りました!」コツコツコツ…

注文した飲み物がくるまで少しあるので耳郎にさっきの事をやんわりと聞いてみる。

クラフト 「…手を繋いでいるのを確認したのと同時に、顔赤くなつてふらついたけど…もしかして

手を繋いでいたのが原因だったりする?」

耳郎 「…:うっうん:／／／男子と…その…手つてほとんど繋いだこと…なかったから／／／」

クラフト 「なるほど…なら俺はそのほとんど繋いだことがない、男子の1人になれたのか(笑)」

耳郎 「うえっ!?うっうん／／／:そう…なるのかな／／／／／カアアアア

クラフトに言われことでまた赤面してしまう耳郎。その様子をクラフトは少し楽しんで

いると注文した飲み物がくる。

クラフト 「(実際見てみるとかなり乙女だなくまあそこがかわ)お待たせいたしました。」!おっ

きた」

店員 「ご注文のメロンソーダとカフェオレでございます!」

クラフト 「どーもありがとー:ほら耳郎カフェオレきたよ」

耳郎 「うんありがと:／／／」

店員 「それではまたご注文等がありましたらお呼びください!」コツコツコツ…

店員は飲み物をテーブルに置くとお店に戻っていく。

クラフト「まあとりあえずその飲んで心を落ち着かせなよ」
チューゴクゴク

耳郎 「うん…／＼ありがと／＼」カチャ…コクリ
カップを手にとりカフェオレを飲む。そしてカフェオレ
を飲んだことにより心身ともに

落ち着く耳郎。

クラフト「落ち着いたか耳郎?」

耳郎 「ふう…うん／＼だいぶ落ち着いたよ」

クラフト「いやそれはよかった、にしてもあれだな耳郎って…」

耳郎 「?…なに?ウチがどうかした?」

クラフト「今日の服装とか見るとこう…ロククな感じってするけど、中身はかわいい乙女だなーって思った」

耳郎 「かわっ!?乙女!?／＼／＼」カアア…

クラフト「あら?もしかしてあんまりこういうのって…」ヒュウン
……ブスッ!

クラフト「ノオオオオオオオオ!!?!??」

耳郎 「あっ!?!ごっごめん機神!?(恥ずかしさのあまりやっ
ちやっただ!)」ガタッ!

クラフト「おっおう…のーぷろぶれむ(☒ω☒)(とっさとはいえ
結構ダメージあるな…体の防御力を

上げておいた方がいいな…体を強くする…肉体強化と少
し体を改造できる個性を作って

おくか…)」

クラフトは耳郎のイヤホンジャックの攻撃をもらってしま
う。その攻撃を受けて俺は体

の防御力を上げておいた方がいいと思いい肉体強化系の個
性を作っておくことにした。

クラフト(空想…肉体強化改造…個性として定着…定着完了…よし)

耳郎 「機神ゴメン!!体大丈夫?」

耳郎は恥ずかしさ故にやってしまったとはいえ、自身の個性で攻撃してしまったクラフト

トに声をかけ安否の確認をする。

クラフト「ああ大丈夫だよ…この通り！」グルングルン

耳郎「よかった…ゴメン恥ずかしくなつてつい…ほんとゴメン！」

クラフトは腕を軽く回して大丈夫だということを耳郎に言う。耳郎は合唱のポーズを

作つて謝ってくる。

クラフト「いやほんとに大丈夫だって、俺もデリカシーがなかったよ」

耳郎「いやでも…」

クラフト「あく気にしない気にしない（笑）やってしまったもんはしかたない。それより折角遊びに

来たんだし色々回ろうぜ！」ニツ！

耳郎「……………うん！／／／／」

気持ち下が下向きになっている耳郎を励ましモール内を回ろうと誘う。その後会計をして

クラフトと耳郎はモール内にあるお店を数件巡り、昼食を食べ終わったあとゲームセン

ターに行こうと決めゲームセンターのほうへ足を進めた。だがその直後…

!!!ドオオオオオオオオオオオオオオ!!!

シヨツピングモール内に爆発音が響き渡る…

客「きゃああああ!!」「なつなんだ!」「おいあそこだ!」「まさか敵か!?!」

突然の爆発音にシヨツピングモール内の人々は混乱する。クラフトと耳郎も爆発

音を聴き何事かと辺りを見回す。

クラフト「おっ!?なんだ?」

耳郎「あつあそこ見て!」

耳郎が爆発が起きているほうへ指を指す、指しているほうへ目を向けるとそこには1人の男が暴れていた。

「あ×あはははははははははははははははは!!」

男の高らかな笑い声が響き渡る。

「?????」「これはいい力だ!この力があれば俺様を見下してきた奴らに報復できる!」

客「ヴィツ:敵だあー!?」「えっ!? 敵!?」「うわあああ!!」

「早くヒーローを!」「だっ:だれか助け:」「い:痛えよお

…」

敵の出現によりモール内は大混乱となってしまう、さらに敵が起こした爆発に巻き込まれた通路に倒れる人々。

ヴィラン「まずは手始めにここにいる奴らをぶつ殺してやる!どいつもこいつも満ち足りた顔しや

がって!!ムカつくんだよお!!」グアツ!

!!ドゴオオオオン!!

敵の男は右腕を振り上げ地面に向かってパンチをする。

たったそれだけで凄まじ

い衝撃が起こり周りに被害をもたらす。

耳郎「うわっやば:機神はやく避難しよう!」

クラフト「んっ:ああそうだな:だけどここ2階だからすぐには出れないぞ、それにしてもすげー

パワーだな、増強型か?」

耳郎は避難しようと機神に言いクラフトはそれに軽く頷きつつ敵の個性を分析をす

る。

客「キヤアアアア!!」「早く逃げろお!」「おい!押すなっつて!」「お×母ざああん!!」

「早くヒーローを!」「うわああ!!」「助けてええ!」「皆さん慌てず行動を!」

モール内の人々は敵から早く逃げようとするが人の数が多いため思うように避難が進

まない。そこに連絡を受け近くにいた2人のヒーローが通常より少し早く到着する。

HERO① 「皆さんもう大丈夫です!、私たちが来ましたのでもう大丈夫です!」

HERO② 「落ち着いて避難を!すいません警備員ですか?避難誘導をお願いします、自分らは敵

に対処しますので!」

警備員 「はっはいわかりました!」「皆様こちらです慌てずに!」

客 「ヒーローだ!」「助かった!」「いけえヒーロー!」ワアアアアア!!

モール内の人々はヒーローが来たことにより安心する。

そしてヒーローは騒ぎの元凶の

敵の元に駆けつける。

HERO① 「大人しくしろ敵!!」

HERO② 「これ以上は好きにはさせんぞ!!」

敵 「はっ!!テメエらみたいなクソ雑魚ヒーローに俺様が捕まるかよ!!」

ヒーローと敵が対敵する、俺と耳郎はその様子を2階の通路から確認する。

耳郎 「よかった…ヒーローが来てくれたからもう大丈夫だね」

クラフト 「ああそうだな、俺らも早く避難をしよう」

耳郎 「うんそうだね」

ヒーローが来たからもう大丈夫と思い耳郎と避難しようとしたその時…

!!ガシャアアアアアアン!!

HERO①② 「ガハツ…」 「グツ…なに…が…」 ガクツ…

大きな音がしたと思っただけこの場に駆けつけた2人の

ヒーローが吹っ飛ばされていた。

避難をしていたモール内の人は目を疑った。大きな音がしたと振り返れば駆けつけた

2人のヒーローが倒れているではないかと。

客 「なっ…なにが起きたんだ?」「なんでヒーロー倒れているんだ…」

「敵を捕まえようとしたら…」「はっ?嘘だろ?」

ヒーローが吹っ飛ばされたことに驚きを隠せない人々…そこにヒーローを吹っ飛ばした

張本人が口をひらく。

敵 「はっはっはっはっはっ!!ヒーローが聞いてあきれるぜ!! たった一発でやられちゃうとは

情けねえもんだ。さくで邪魔なヒーローが《カラン…》

…:あ?」

敵が上機嫌に喋っていると缶が倒れたような音が響く…

敵が音のした方へ顔を向ける

とそこには1人の女子がいた。

??女子「やばっ…」

敵 「まあだ人がいたとわなあゝしかも結構かわいい女じゃねえか」ジュルリ…

??女子「ひっ…」ゾワワ…

クラフト「マズイ! (ピカピカ!)」ガシャ…:シユン…

耳郎 「えっ 機神?!」

爆発に巻き込まれなかった逃げ遅れた女子が2階の通路を支える柱に隠れていたのがバ

レてしまい敵に捕まりそうになる。クラフトは即座にピ

カピカの能力を使い助けに行

く。耳郎はいきなり2階の柵を乗り超えようとした途端

機神が消えたことに驚く。

敵 「へっへっへっやっと俺にもツキが回ってきたもんだw」

??女子「くっ来るな!」ズムツ ブオンブオン!

女子は掌を大きくする個性で掌を大きくし振り回しながら後ろに下がる。しかし敵ヴァイラン

は近づいてくる。そしてこれ以上下がれなくなってしまうその時、敵ヴァイランの後頭部の後

ろに人影が現れる

??女子「しまっ…」

敵ヴァイラン「どうしたもう下がらないのか？なら大人しく俺様に「女の子に乱暴は良くないよねえ

〜!?!」

??女子「!?!」

クラフト「光の速さで蹴られたことはあるかあい？」ヒュツ…ドゴオツ!!

ヴァイラン「グオツ!?!」ゴツツシヤアアアアン

ピカピカヴァイランの能力で敵の後頭部にかかと落としを食らわせそのまま顔面から落ちる形で

地面に激突させる。

??女子「……」

クラフト「大丈夫？（あれ？この人もしかして…）」

??女子「えっ？うっうん大丈夫……」

クラフト「よかった、んじや話してる暇ないんで…失礼！」ヒョイ

??女子「えっ…きゃっ！ちよっ／＼」

クラフト「ごめん恥ずかしいと思うけど我慢して、じやっ移動するよ（人を抱えたまま光の速さで

移動はたぶんダメだからフワフワでいいか…フワフワの能力!）」フワツ…

??女子「ちよ／＼うわっ!!」

突然現れヒーローすら敵ヴァイランわなかった敵を一発の蹴りで無力化したことに驚く女子。

そして自分の安否を確認するとお姫様抱っこをしゆっくりと飛び2階の通路まで移動する。

クラフト「着地しまあす！よつ…とと」トツ…

耳郎 「機神！いきなり消えたからビックリしたじゃ…ん」

クラフト「えっ？ああすまんすまん（笑）言う時間なくて、あつお嬢さんごめんねいつまでもこの状態は恥ずかしいよね」

??女子「…うっうんそのありがと…う／＼」

いきなり消えたと思ったらなぜか女子をお姫様抱っこした状態で現れた機神を見て漫画

のような固まってしまふ耳郎。助けられた女子は少し顔を赤らめながらお礼を言う。

クラフト「さてと…通路に倒れている人とヒーローを助けてヴィランを何とかしないと…」

??女子「えっあんた1人で!？」

耳郎 「…ハッ…機神あんたまさかあのヴィランに挑む気!？」

クラフト「誰かが相手しないと一般の人に危害が及んでしまう」

耳郎 「ヒーローを一撃で倒すヴィランだよ！下手したらあんたタダじゃすまないよ!!」

クラフト「ヒーローが倒されたからといって俺もそうとは限らん、まあまずは倒れている人を…

（オペオペの能力） ROOM!!」 ブウウン！

耳郎 「!？」

??女子「!？」

ヴィラン 敵を何とかしようとして口にする耳郎と女子は驚き耳郎はクラフトに警告する。クラフ

トは耳郎の警告を受け流しつつ倒れている人とヒーローを助けるため個性（オペオペの

能力）を使い助ける。

クラフト「ジャンブルズ！」 シュン…ドサッ

耳郎 「えっ!?!人?えっ!?!」

??女子「この人達もしかして倒れていた人達!?!」

客 「なんだ爆発に巻き込まれた人とヒーローが!?」「おい！それより早く手当てしないと」

「おい大丈夫か!?」

オペオペの能力で倒れている人達を救助すると2階の通路にいた人達は急に倒れていた

人達が現れたことに驚く。

クラフト「さて…耳郎俺は敵を拘束してくるからここにいろ」

耳郎 「はあっ!?機神あんたマジで行くの!?!」

クラフト「本気も何も、敵に一発入れたとはいえまだ無力化してないし、他のヒーローも来

てないし…それに誰かがやらなきゃいけないでしょ」

耳郎 「でも…もしあんたに何かあつたら…えっ?」ぽん…

クラフト「大丈夫だってー！死ぬ気なんてねーし、それにせっかく耳郎と知り合えたんだし（笑）」

耳郎 「!!／／…頭は…ズルい」ボソボソ…

クラフト「さてと…それじゃいくか!!（ピカピカ!）」シユン…

耳郎 「あつ機神!……」

??女子「あっちよつと…!」

頭を撫でられたことにより耳郎は少し俯いて赤面する。

もう1人いた女子が何か言おう

としたがクラフトはもうその場にはいなかった。

クラフト「ん?なにか言われたような…まあ今は目の前の敵に集中!」

目の前の敵に集中するために気を引き締めると同時に気絶していた敵が目覚めます。

敵 「うっ…いってえ…声が後ろからしたと思つたら…いきなり

頭に衝撃が…」ガラツ…

クラフト「あっ起きた」

敵 「あっ?…なんだてめえは…いやその声…まさか俺様の頭を蹴ったやつか!?!」

クラフト「いや〜思いのほか綺麗に入ったから気持ちよかつたで

す」
ワイラン

敵

「てんめええ…どうなるか覚悟できてんだろうな!!」ゴゴゴゴ

ゴ…

客

「おい…誰かいるぞ!」「おい君そこから早く逃げるんだ!!」「殺されてしまうぞ!!」

ワイラン

自身の頭を蹴ったことに激しく激昂する敵と叫ぶ避難客。

ワイラン

敵

「おくその通りだぜクソガキく殺されたくなければ謝ることをおすすめるぜえくwまあ

謝ったところで許す気はないけどなあくww」

クラフト「いやく全然そんな気はないっすね…てか謝らなくちやいけないのはあんただろ、こんな

ことしてんだから」

ワイラン

敵

「!!…ほおくクソガキいい度胸じゃねえか…なら…:…死んどけやああ!!」グアツ!!

客

「うわっ!逃げろ君!!」「きやああああ!!」

シユン…:…クンツ…

ワイラン

敵

「!?:…なっなんだ体が…:動か…:」グググツ…

客

ワイラン

「えっ…なにが? 敵の動きが…:」「止まってる?」
敵の動きがなぜ止まったのか不思議に思う避難客。

クラフト「イトイトの能力…動きを止めるにはうってつけだな…:だがこういう増強型とかに対し

てのみかな、不定形の個性とかだと他に考えないといけな

いな」

ワイラン

敵

「てめえ何言ってるやがる!?!俺様に何したアア!!」

クラフト「えっ言うわけないじゃん、あとこのままヒーローが来るまで拘束させてもらう」クイツ

ワイラン

敵

「く…:そがああ!!つんなものおおお!!」グググググツ!!

イトイトの能力の拘束から逃げようとするがビクともしない。

クラフト「おい暴れんな（個性は見た感じ増強型かな? 一応鑑定使っておくか…鑑定…:…なるほど）」

あんた個性をブーストさせる薬使ってんな」

敵 ワイラン 「!?…なっなんでそれを!？」

クラフト「まあでも使っているのは粗悪品っぽいな…それにさつきよりパワーが下がってない

か?まあいいやとりあえず正座してろ」クイツ

敵 ワイラン 「ぐっ体が勝手に!!くそお今すぐにでも…ヌグググググッ!!」

敵 ワイラン 「敵を無理やり正座をさせ少し待っていると応援に駆け付けたヒーローと警察が到着する。」

客 「あっオイ見る他のヒーローが来たぞ!」「やっとかよ!」「でもこれで助かった!!」

クラフト「どうやらヒーローが来たみたいだな」

敵 ワイラン 「くっクソツッ!てめええええ!!こんのおおおはなせえええ!!」グググググ!!

客 「あのコスチュームはもしかして…」「18禁ヒーローミツドナイト!!」「えろっ!」

警察 「現在の状況を確認!」「モール内にいる人たちを避難誘導!」「警備員に状況を聞いてこ

い!」「ヒーローは誰がきている!?!」「ミッドナイトが先ほど!」

(ミ) ナイト「すいません状況は!？」

客 「ヒーロー早く敵を!」ワイラン「学生と思われる子供が敵を止めてる!」

警察 「なんだと!」「早く現場に!」

(ミ) ナイト「なんですって!?!」
他HERO 「「なんだと!?!」」

ショッピングモールに警察とヒーローが到着し避難誘導と状況確認をしていると避難

をしている人から子供が足止めしていると知らされ驚愕するヒーローと警察。そして

敵 ワイラン と子供がいる現場に急行する。

ダダダダダッ!!!

(ミ) ナイト「いたっ! あそこよ!」

警察 「そこの君早く下がっ…て?」「これは…どうなってるんだ?」

他HERO 「あのでかいのがヴィランでいいんだよな?」「どうなってるんだ?」

(ミ) ナイト「敵が正座している?」

クラフト「おっ…やっとな来た…つてもしかしてミッドナイト!? コスチュームすげえ…」

(ミ) ナイト「えっと…これは君がやったの?」

クラフト「ええまあ…まだ拘束中なので早く無力化をお願いできませんか?」

敵 「くそおおお! てめえええ放せやあああ!!」ググググッ!!

(ミ) ナイト「!?…ええっわかったわ!!」ビリッ…フアア…

敵 「ぐおおおおっ!? つ…なん…だっ」ガクッ
敵を正座させていることに驚くがミッドナイトは素早く個性を使い敵を無力化する。

あとコスチュームやべえ…

18禁ヒーローミッドナイト【個性：眠り香^{ねむりが}】

自身の体から眠らせる香りを発生させ対象を眠らせる。香りを吸ってしまった者は必ず

眠ってしまう。単純にして強力、女性より男性のほうが効きやすい。

クラフト「あっ寝た、やつぱすげー個性だな…さてと俺はこのまま「待ちなさい 《ガシッ》」です

よね…え…何でしょうミッドナイト」

(ミ) ナイト「あなたには色々聞きたいことがあるの、そのまま帰すわけにはいかないわ」

クラフト「えっえーと…友達が待っているので…」

(ミ) ナイト「あら? ならその友達は待ってもらいましょうか、とにかくあなたには色々聞かなく

「ちやいけないの♡」

クラフト「(やべえ捕食されそう…) イツイエツサー…」ゾワツ…
その後眠らされたヴィランは拘束され移動牢メイデンに入れられて連行された。

クラフトはこつそりその場を後にしようとしたがミッドナイトに肩を掴まれ事情聴取さ

れることになり、一応耳郎も関係者なのでスマホで連絡しこの場に来てもらう。

耳郎 「機神あんた大丈夫!?!」

クラフト「ああこの通りなんともないよ」

耳郎 「……そう」ポフツ…

クラフト「…耳郎?」

耳郎 「心配したんだから…」ぎゅ…

クラフトの胸に額を軽く乗せ左手でシャツを握る耳郎。

クラフト「………スマン」

(ミ)ナイト「ふふっ♡なかなか青臭いじゃない、でも女を泣かせるのはあんまりよくないわよ」

クラフト「ミッドナイトさん、こういう時はそつとしておくんじゃないんすか?」

(ミ)ナイト「そうしたいけどまだ事後処理があるし君にも事情聴取しなくちやいけないの♡」

クラフト「まあ…そうなら仕方ないっすね、ほら耳郎…言いたいことあるかもしれないけどそれは

一旦後にしてくれるか?それに周りからチラホラ見られてるよ」

耳郎 「うんわかっ…えっ?」キョロキョロ…

周りから見られていると言われ恥ずかしさが込み上がる

耳郎。

耳郎 「~~~~!!!／／／カアアア…／／

クラフト「耳郎大丈夫か…?」

耳郎 「うっうんだいじょう…ぶ／／／それより事情聴取あるん

じゃないの／＼?」

クラフト「今朝よりは大丈夫っぽね…おっとそうだったミッドナイト、事情聴取はどちらで?」

(ミ) ナイト「聴取はあちらの刑事さんの所でお願い」

クラフト「刑事?…あの人はもしかして塚内さん?」チラッ

恥ずかしさが込み上がったがなんとか耐えた耳郎。そして刑事さんがいる方を見たら以

前お世話になった塚内警部がそこにはいた。

コッコッココ…

クラフト「塚内さん」

塚内警部「おや君はこの間の…たしか機神くんだったかな?」

クラフト「はい機神です、少しお久しぶりですねまさかまたお会いするとは」

塚内警部「ははつまさか敵サイランに立ち向かった子供が君だったとは驚いた」

クラフト「いやーははは…すいません…あつ事情聴取あるんですね?」

塚内警部「うん事件の詳しい内容を話してくれるかな?」

クラフト「分かりました」

俺は塚内警部に軽く挨拶する、すると敵サイランに立ち向かったのが俺とわかると軽く驚

かれる。そして今回の事件の内容を塚内警部に詳しく話す。

耳郎 「……………」

(ミ) ナイト「ねえねえ!」ボンッ!

耳郎 「うわ!…なんですかミッドナイト? (コスチュームすご…とゆるか胸でか…)」

(ミ) ナイト「あなた彼の彼女かなにか?」(ソワソワ)

耳郎 「かつ／＼いっ…いえ友達でしゅ／＼」

(ミ) ナイト「あらそうなの…でもその割には…フッフ♡」

耳郎 「なっなんですか／＼?」ドキドキッ…

(ミ) ナイト「彼のこと…好きなんでしょ?♡」

耳郎 「ぶふっ!? なつなな何を!?! / / いった!? / / 」アタフタ!!

(ミ) ナイト「あら、その反応を見る限り嘘でもなさそうね♡」

耳郎 「くくく / / / / 」カアアアア / / / / 」

(ミ) ナイト「気持ちというのはなるべく早く伝えた方がいいわよ♡」

耳郎 「いやだから / / / / そんなんじゃ… / / / / 」

ミッドナイトに振り回されるが最後にアドバイスを言われる耳郎。あと顔はずつと赤面したままであった。

耳郎 (…好きとか / / ……しかも彼女とか / / / / / / ……でも…)

クラフト「(なに話してんだ?…):…ということですよ塚内さん」

塚内警部「なるほど…ヴィランが逃げ遅れた女子に手を出そうとしたから君は動いたわけか、助け

たのはいいけどそのあと敵を拘束しに、再び敵の前に出たのはあまり褒められた行為ではないかな…」

クラフト「うっ…否定できません…(苦笑)」

塚内警部「まあしかし君が敵を止めてくれたおかげで、被害も最小限に抑えられたありがとう。」

でもヒーローからの注意は一応あるよ」

クラフト「まあそうつすよね」

(ミ) ナイト「そうよ、敵を止めていたとは言え資格未取得者が個性を使う事はいけないことよ」

クラフト「あつ、ミッドナイト」

(ミ) ナイト「とはいえ本来、敵を何とかしなくちゃいけないヒーローが、何もできなかった

から私たちヒーローもあまり強くは言えないわ」

クラフト「ヒーローも万能というわけではないし…それに違反なのは事実なので…(笑)」

(ミ) ナイト「ふふ、ありがとっ♡…ねえ君名前と学年は？」

クラフト「えっ名前っすか？機神クラフトっていいいます、今中学2年です…」

(ミ) ナイト「機神くんね…うんありがとう」

クラフト「いえ…あのどうして名前を？」

(ミ) ナイト「えっ？ああ気にしないでなんとなくよ」

クラフト「はあ…そうですか(そーいやミッドナイト、耳郎となに話してたんだろ、あとで耳郎に

聞いてみるか…)」

塚内警部とミッドナイトに少しだけ軽いお叱りを受け、ミッドナイトから名前を聞かれ

たことを不思議に思うクラフト。

クラフト「まあいつか…塚内さん聴取はまだありますか？」

塚内警部「いや、詳しい内容は分かったからもう聴取は終わりだよ、ああそういうえば君が助けた女

子が探していたよ」

クラフト「俺をですか？」

塚内警部「うんたぶんお礼とか言いたいんじゃないのかな？あっちの方にさつきはいたよ」

クラフト「分かりましたありがとうございます…では失礼します」
コッコッコ…

聴取が終わると助けた女子が俺を探していると言われ俺はお礼を言い女子がいたほうへ

足をむける。

クラフト「こっちにいるって言ってたけど…移動したの「あっ！ねえあんた!!」おん？」

??女子「いたいた、やつと見つけた」

クラフト「あー俺が助けた女子でいいのかな？」

??女子「そうそう！あんたに助けてもらった…あつままだ名前言っとなかったね私拳藤一佳よろし

く！」

クラフト「(やっぱ拳藤であつてたか)俺は機神クラフトよろしく拳藤」

拳藤 「よろしく機神!あとあの時助けてくれてありがとう!」
クラフト「どういたしまして…あと助けるとはいえ急に抱っこしてスマンな」

拳藤 「いっいや…その／＼あれは仕方ないよ…うん気にしないで／＼」カアツ

クラフト「そういつてもらえるとありがたい…どうしたなんか顔赤いぞ?」

拳藤 「なっなんでもないから／＼」

クラフト「そっそうか…ならいんだだけ「機神ー!」ん?」タツタツ
タツ:

拳藤というろいろ話をしてしていると耳郎が名前を呼びながらこちらへ来た。

耳郎 「機神ここにいたんだ!移動したんなら声かけてよね」

クラフト「あーごめんごめん、拳藤が俺のこと探してたっぽいから…」

耳郎 「拳藤?」

クラフト「ああすまん、紹介するよ俺があの時助けた人、拳藤一佳だ」

拳藤 「初めまして私は拳藤一佳よろしく!」

耳郎 「あっ初めましてウチは耳郎響香よろしく…」

拳藤 「ねえ機神!よかったら連絡先交換しない?今親戚の家に来てんだけど実家は千葉な
んだよね」

クラフト「連絡先?いいよ」

拳藤 「本当!?ありがとう／＼」

耳郎 「……………」

クラフトと拳藤が連絡先を交換する様子を見て耳郎はモヤモヤした。

拳藤 「…そういえばさ2人は今日一緒にショッピングモールに

きていたの？」

クラフト「ん？ああそうだよ、今日は一緒に遊んでたんだ」

拳藤「へえく……」チラツ……

耳郎「……………」バチツ……

拳藤「!!……………」バチバチツ……

2人の目が合うと間に見えない火花が散る。

クラフト「2人で一緒に遊んでて今に至るって感じだけど……それがどうかしたか？」

拳藤「いやなんとなく聞いてみただけ、気にしないで！」

耳郎「……………」

拳藤「じゃあ私あつちに迎えてるから……じゃあね機神、耳郎」

クラフト「ああまたどつかで会えたらいいな」

耳郎「……………」うんまたね」

その時拳藤が耳郎に近寄る。

拳藤「……………」スツ……

耳郎「？」

拳藤「負けないから……」コソツ

耳郎「!?それってどういう……」

拳藤「じゃあね!!」タツタツタツタツ……

突然「負けないから」と言われたことに驚く耳郎。

クラフト「……さて、どうする耳郎?ゲーセンと他にどつか行くか?

それとももう帰るか?……耳郎?」

耳郎「……えっ!?あつうんそうだねどうしよつか」アタフタツ

クラフト「……………」ちよつと歩くか耳郎?」

耳郎「……………」うん、そうする……………」

耳郎がなにやら心ここにあらずといった感じだったので

2人で近くの川沿いを歩く

ことにした。

クラフト「耳郎さつきから静かだがどうかしたか？」

耳郎「……ねえ機神はさ……」

クラフト「…うん？」

耳郎「今気になる人とか…いるの？」

クラフト「…えっ…となんだその、また急だな」

耳郎「どうなの？」

クラフト「そうだな…もし告白されたらOKしちゃうなって人はいるかな……」

耳郎「！……そっそうなんだ……」

クラフト「どうした急にこんなこと聞いてきて？」

耳郎「……もし2人の女の子から告白されたら機神はどうする？」

クラフト「おい耳郎？」

耳郎「答えて……」

クラフト「……そうだな、出来る事なら2人ともOKしたいな」

耳郎「……」

クラフト「まあでも実際その時の俺の気持ち次第によるかな」

耳郎「へえ……」

クラフト「なあ耳郎どうした？急にこんなこと聞いてきて……」

耳郎「ウチが……」

クラフト「うん？」

耳郎「ウチがあんたのこと好きって言ったらどうする？／／／／／
……ぎゅっ……」

耳郎は立ち止まり少し下を向いたまま顔を赤らめながら俺の袖を握りながら聞いてくる。

クラフト「俺のことを……」

耳郎「……／／／……ごめっ今のやっぱ忘れ「逆に……」えっ？」

クラフト「逆に俺でいいのか？」ジッ……

真剣な表情で耳郎の顔を見つけるクラフト。

耳郎 「くくく／＼／＼／＼／…」

クラフト 「なあ耳郎…今言ったことはどっちだ？」ズイツ

耳郎 「くく／＼／＼／…どっ…どっ…どっちって？／＼／」

顔を近づけ耳郎に聞く。

クラフト 「今のはただの質問なのか…それとも耳郎の本心か？つてことだ」

耳郎 「そっそれは／＼／…ほっ本心って…いったらどうな…の？／＼／」

クラフト 「答えはさつき言ってるんだけどな／＼」

耳郎はさつきまでしていた会話を思い返す。

耳郎 「えっ？…（もし告白されたらOKしちゃう…）…くく／＼／＼／／＼／カアアア

クラフト 「耳郎もう一回聞くけど…俺でいいのか？」

耳郎 「機神も…ウチなんかでいいのか？／＼／もっとその…ウチよ…り…」

クラフト 「俺は耳郎がいいんだけどな」

耳郎 「くくく／＼／／…うう…そのよろしく…／＼／」

クラフト 「おう！よろしく！」ニパッ！

耳郎は顔を真っ赤にしながら返事をし俺も返事を返す。
そうして俺と耳郎は恋仲になった。

その日の夕方

——雄英高校・校長室——

コンコンコン…

「どうぞ」

????????
「失礼します根津校長」ガチャ…

根津校長 「やぁミッドナイト！お昼の事件はご苦労様なのさー！」

(ミ) ナイト「ありがとうございます、その事件のことでお話が…」
根津校長「ん？お話？」

(ミ) ナイト「ええ、実は先に現着したプロを倒したヴィランを1人の中学生が抑えていたんです」

根津校長「へえそれはすごい！…なるほど君が言いたいのはあの制度の事だね」

(ミ) ナイト「お話が早くて助かります校長」

根津校長「詳しく話してくれるかいその少年のこと」

(ミ) ナイト「わかりました」……

(ミ) ナイト「…ということですよ校長」

根津校長「なるほど…なかなか興味深い話だね」

(ミ) ナイト「塚内警部の話では最初見たときはロボットの騎士？、に変身していたみたいなんです」

すが、私が見たときは違っていたので…」

根津校長「分かったこちらも調べてみて問題なかったら彼に話を持ち掛けるでしょう。時期的には

来年でも問題ないだろうし丁度よさそうだしね」

(ミ) ナイト「わかりました、まあ見た感じ問題はなさそうでしたけど♡」

根津校長「ハハッ！期待してるよ、この話は相澤くんにも話しておくよ」

(ミ) ナイト「彼にですか？いいと思いますよ、まあどういう反応するか分からないですけど」

根津校長「彼の判断力はいいものだからね」

(ミ) ナイト「なるほどわかりました」

ミッドナイトと根津校長はクラフトについて話をし彼に何か持ちかけると決める。

はたしてクラフトは何を持ちかけられるのか？

第7話 出たなへドロ野郎! & 君ヒーローになれるって!!

耳郎と恋人同士になって数カ月が経ち俺は中学3年になった。耳郎と恋人同士になった

あと俺は彼女に我儘を1つお願いした。

クラフト「耳郎、実は1つ俺の我儘を聞いてくれるか?」

耳郎 「我儘?どんなこと?」

クラフト「まあそうないとは思うけど…もし仮に他の女子が好意を伝えてきたらそれを受け入れて

いいか?」

耳郎 「えっ…それってウチ以外にも彼女ができるってこと…だよね?」

クラフト「ああその通りだ…」

耳郎 「…ウチじゃその…物足りない「違う」えっ…?」

クラフト「耳郎だけじゃ物足りないとかそんなんじゃない、そのせつかく俺に好意を向けてく

れたんだし、それにあんまり悲しい顔をさせるのは…ああ言つとくが全員を受け入れる

わけじゃないからな、俺にも好みや相性や色々考えはあるから先に言っておくぞ」

耳郎 「…ふーんなんか機神らしいね…わかったいいよ♪」

クラフト「…本当にいいのか耳郎?俺はてつきり拒否されるかと…」

耳郎 「まあ普通はね、でもなんかあんたならいいかなーって…それにちゃんと平等に接してく

れるんでしょ♪?」

クラフト「うおー!ありがとう耳郎!!」がばっ!ぎゅっ!

耳郎 「ちよ!?!／機神!?!／カアア

急に抱きつかれた耳郎は顔を赤くする。

クラフト「耳郎ありがとー！こんな我儘を聞いてくれて」ぎゅ／＼
耳郎「うっうん／＼その機神…ウチもーっ我儘を言っている？
／＼（やばい！恥ずかしさと嬉しさ）

が／＼」

クラフト「おっいいぞ、どんなこと？」

耳郎「その…下の名前で呼んでくれる？／＼／」

クラフト「下の名前？そんなことでいいのか？」

耳郎「うっうんお願い／＼／」

クラフト「…響香♪」

耳郎「くくく／＼／つ…クツ…クラフト／」

クラフト「やべえ目の前にかわいさの塊が…」

耳郎「かっかわい／＼／うううそんなぽんぽん可愛い言うな／
／！！」ビシッ！

クラフト「あいたっ！」

顔を赤くしながら可愛いと言われ慣れていない耳郎は少し怒ってイヤホンの先端をおでこに当てる。

その後は耳郎の家にお邪魔して両親に挨拶をしたりした。母親には歓迎されたが父親は

「娘はやらんぞお!!」と言ってきたが言った直後、響香に爆音をプレゼントされる。

その後の夏休みが終わっても週末に会って一緒に遊んだりした。比較的住んでいる場所

は近いが通っている学校が違うため平日とかは会えない。そんな風に過ごしているとあ

つという間に3年生である。そして3年になったため進路を決めなければいけない。

まあもう決まってはいるが…

——市立^{あまてら}手羅中学校——

担任 「えー君らも3年になったからいよいよ進路を決めなく

ちやならない、だからよく考えて

決めるようにね」

クラフト（進路か…まあ雄英だな…）

クラス 「二二はーい!!!」

担任 「はい良い返事です、あーあと機神、あとで職員室に来てくれ話がある」

クラフト 「?…はいわかりました…」

〃〃〃放課後（お昼）〃〃

——職員室——

コンコンコン…ガラッ

クラフト 「失礼します機神ですが…」

担任 「おー機神きたかこっちに来てくれ」

クラフト 「はい…」

職員室のドアをノックし開けると担任が自分のほうへ手

招きしそこへ行く

担任 「機神お前進路はどこかもう決めているのか？」

クラフト 「進路ですか？一応雄英高校ですけど…」

呼ばれた内容は進路に関することだった。

担任 「雄英か、それなら話が早い、実はお前に雄英からある話があるよ」

クラフト 「雄英から俺にですか？一体どんな？」

担任 「それは雄英の人に聞いた方が早い、実はいま来てい

だ案内するよ」

クラフト 「えっ?!今来ているんすか？」

担任 「ああほら早くしろ」

クラフト 「はっ…はあ」

今来ていることに驚きつつも担任の後を追いかける。

担任 「今この応接室に待ってもらっている」

クラフト「あつこちらに…」

担任 「話が終わったら悪いが職員室に知らせに来てくれるか？」

クラフト「はいわかりました」

担任 「じゃあんまり失礼のない様にな」コッコッコツコツコツ…

クラフト「じゃあ入るか…」コンコンコン…

担任の注意に返事をしドアをノックする。

???? 「どうぞなのさ！」

クラフト「失礼します(今の声聞いたことあるような…)」ガチャツ

????? 「やあ！君が機神くんかい？」

クラフト「はい自分が機神ですが…えーと雄英高校の人で…？」

????? 「イエス！ネズミなのか犬なのか熊なのか、かくしてその正体は校長さ!!」

相澤 「俺は雄英で教師をしている相澤だ、まあとにかく座つてくれ」

クラフト「はい失礼します」

応接室にはネズミっぽい人と首周りに包帯のようなものを巻いた人が座っていた。

根津校長「改めて初めまして、僕は雄英高校の校長をしている根津、よろしくなのさ！」

相澤 「そして俺はさつきも言ったが雄英で教師をしている相澤だ、よろしく…」

クラフト「機神クラフトです初めまして、俺に話があると聞きました(まさかこんな形で会うとは…)」

互いに自己紹介をするのと同時にこんなところで会うことに心の中で驚くクラフト。

根津校長「うん！君に我が校のある制度の話をしにきたのさ！」

クラフト「ある制度？」

相澤 「そうだ、その制度は【雄英特殊選抜制度】…簡単にいえば雄英が新しく入る入学者を他

の試験とは別に入学させる制度だ…通称【特選】、まあ要はスカウトだよ」

クラフト「スカウトですか？…推薦や一般入試ではなく雄英が事前を選んで入学させるって認識でいいですか？」

根津校長「その通りさ！あと特選に選ばれたら学費が免除されたり雄英にある学食の食券が毎月半

月分支給されたりするのさ！」

クラフト「至れり尽くせりですね」

相澤 「それだけ特別な制度なのさ、それにここ数年は特選による入学はない」

クラフト「その制度にもしかして俺が選ばれたとか？」

根津校長「その通りなのさ！」

2人が来た理由は雄英にある制度、通称【特選】と呼ばれるものに俺が選ばれたからと

言う。しかし今度はなぜ俺がと疑問が浮かぶ。

クラフト「なんで俺が選ばれたんですか？」

根津校長「それは君の活躍と個性が関係してるのさ！」

クラフト「俺の活躍と…個性？」

相澤 「そうだお前は2回サイラン敵の事件に巻き込まれている、が1件目はヴィランを倒し2件目

はヒーローが来るまで拘束し続けた。しかも詳細を見ると2件とも個性が違うとある、まあそこは今はいい、重要なのはお前の強さだ」

クラフト「俺の強さですか？」

根津校長「さうさ！中学生でありながら敵を2回も逮捕サイランに導いた、普通はなかなか出来ないことさ！

それに個性も強いとみた」

クラフト「特選には個性の強さも入るんですか？」

相澤 「まあそうだな…個性の強さで判断するのかわれそうだが、特選の基準に個性の強さ

は必要事項になる。あまり言いたくはないが、個性の強さというの1つの判断基準に

なる。お前の個性はかなりの強個性と判断し特選に選ばれた。まあその他諸々あるが説

明が長くなるんでここは省くぞ」

俺が特選に選ばれた理由、それは俺がヴィランを逮捕に導いたことと個性の強さで選ば

れたらしい。その他の理由にも納得し領く。

クラフト「なるほど…」

根津校長「どうだい？我々としてもぜひ受けてほしいんだが…」

クラフト「…試験はどうなるんですか？」

相澤 「一応推薦と一般とは別に実技試験がある、筆記の方は免除だ、まあ今のお前の成績見さ

せてもらったが問題はないだろう」

クラフト「……特選のお話受けさせてもらいます」

少し考えクラフトは特選の話を受けることにした。

根津校長「おおっそれはありが「1つだけお願いいいですか？」ん？なんだい？」

クラフト「実技試験を一般で受けることはできますか？」

相澤 「実技を一般で受けたい？なんでそうしたい？」

クラフト「その方がお互いにとっていいかと思ひまして…確か一般の実技試験は仮想敵カセウライランに見立て

たロボットとの実技戦闘試験ですよね？」

根津校長「よく知っているね！…なるほど一般入試は多くの受験生がいるため機神くんの実力を測

定できると…そういう事かい？」

こちらの考えをすぐに読み取る根津校長。

クラフト「さすがですね校長先生」

相澤 「なるほど…色々合理的だ…しかし自ら一般試験を受けたいとはお前おもしろいな」ニヤ

白い歯を見せながら口角を上げニヤける相澤。その顔は

あまりヒーローっぽくないと思

うクラフト。

クラフト「そうすかね…まあその方が自分にもいいかと思いまし
て」

根津校長「分かったのさ！試験の部分を一般試験して他はそのまま
に特選の内容にするのさ！」

クラフト「ありがとうございます」

根津校長「じゃあ実技試験はそうにして、特選を受けるでいい
かい？」

クラフト「はいそれをお願いします」

その後話は終わり根津校長と相澤先生は雄英に戻った。

根津校長「相澤くん彼をどう思った？」

相澤「そうですね…まだ明確な判断はできませんね、でもあ
いづが試験でどういう結果を出す
のか楽しみですね」

根津校長「そうだね、それにまだ個性もどのようなものか分からな
いしね、でも強個性なのは間違

いないね。個性については彼が合格してからでも遅くな

い…」

相澤「まあ試験を待つとしましょう」

時間は少し遡り

——市立折寺中学校——

担任「えー君たちも三年となったことだ！本格的に将来を考え
なきゃいけない時期だ!!今から進

路の用紙を配るが皆だいたいヒーロー科志望だよね」バ
ラッ！

クラス 「二三」はーい!!」二三」

担任 「うんうんみんないい個性だ! だけど校内での個性発動は原則禁止だからな!!」

生徒の個性発動に対し軽く注意するだけの担任教師。

????? 「せんせえー!」 「皆」とか一緒にすんなよ!! 俺はこんな没個性共と仲良く底辺になんか行か

ねえ」

クラス 「そりゃあないだろ爆豪!!」 「ぶーぶー!」

クラスからのブーイングを受ける爆豪。

爆豪 「モブがぎゃーぎゃーうるせえー!!」

担任 「あーそういえば爆豪は雄英志望だったな…」 「ざわっぎ

わっ…

クラス 「国立の!?!」 「今年確か偏差値79じゃなかったか!?!」 「倍率も毎回やばいんだろ!!」

雄英志望という言葉にクラスが騒がしくなる。

爆豪 「その動揺がモブたる証拠だ! 俺は模試じゃあA判定! この学校唯一の雄英圏内だ!!」 そして

俺はあのオールマイトをも超えてトップヒーローと成り! 必ずや高額納税者ランキング

に名を刻むんだ!!」 「ぐあっ!

担任 「あっそういえば緑谷も雄英志望だったな…」

緑谷 「……」 びくっ

クラス 「二三」…」 「二三」 バツ!

クラス 「二三」ぶふっ…」 「二三」

クラス 「はああ!? 無理でしょ緑谷!!」 「勉強と体鍛えるだけじゃヒーロー科は入れねえだろ!!」

担任がこぼした言葉で緑谷に対し嘲笑の笑いが起きる。そんなクラスに対して緑谷は否

定の言葉を発するが…

緑谷 「そっそんなことないよ!、前例がないだけで…」

爆豪 「おいデク!!」 ボオンツ!!

爆豪が怒りの形相で緑谷の机を爆破してくる。

緑谷 「うわっ！」

爆豪 「なんで無個性のお前があなあんて俺と同じ立場なんだあ
くく!!？」

緑谷 「待つて違うよかつちちゃん!!別に同じ立場とかそういうん
じゃ:ただ小さい頃からの夢

なんだそれにやってみないと分からないし:」

爆豪 「なあにがやってみないとだ!!記念受験か!!!てめえが何を
やれるんだ!？」クスクス

緑谷 「……………」

緑谷の個性はクラフトによって個性有なのだが、爆豪どこ
ろかクラスには言っではないな

かった。言っただ所でまた面倒なことになるだろうと思っ
たからである。

くく放課後（お昼）くく

クラス 「モックいかねえ?」「カラオケどうよ?」「あく終わったあ
く:」

緑谷 （今朝の事件ネットニューストッピになったる!早く家に
帰ってノートにまとめなきや）

爆豪 「話はまだ終わってねえぞデク」ヒョイ

緑谷が鞆にしまおうとしたノートを取り上げる爆豪。

緑谷 「あっ！」

友達（他）「爆豪なにそれ?」「将来の為のヒーロー分析?はくマジ
か緑谷くく!!」

緑谷 「いいだろ別に!返してよ！」

爆豪 「:」ボンッ!!

緑谷が返すように言うが爆豪は何も言わずにそのまま
ノートを小さく爆破する。

緑谷 「ああー……!!?!?」ひどい……

爆豪 「ふん:」ぽいつ:!!

爆豪はノートを教室の窓から投げ捨てる。

爆豪 「世間に名が轟いているトップヒーローは学生時から逸話を残している、俺はこの平凡な

市立中学から唯一の雄英進学者つー経歴をまず残すんだ、ようするに完璧主義なわけ」

友達① (みみっちい…)

一見大層な事を言っているように見えるが言っていることはみみっちい内容だった。

爆豪 「つーわけで雄英受けるなよナードくん」ぽん

緑谷 「……………」ビクッ

友達① 「いやいや流石に何か言い返せよ…」

爆豪 「言ってやんな、あーかわいそうに彼はまだ現実が見えていないのです。おいデク…そんなにヒーローになりてえんなら効率いい方法あるぜ！来

世は個性が宿ると信じて屋上か

らのワンチャンダイブ!!」

緑谷 「!?」バツ!

爆豪 「何だよ?」ボボツボンツ!

緑谷 「……………」

緑谷 「(バカヤロー本当に僕が飛び降りたら自殺教唆だぞ! 考えてもの言え!) エサじやないよ……………」

緑谷は投げ捨てられ鯉がいる大きな水槽に浮かんでいるノートを拾いながら爆豪が言ったことに怒りながら文句を垂れる。

——機神／帰り道——

クラフト「(特選なんてものの原作にはなかったな…俺が転生したことでこの世界は原作とは別の世

界になったのかな…まあ別にいつかそれはそれで面白い) さて…入試までなにしようか

な…緑谷と一緒に入試のために色々鍛えようかな?…」

特選という制度は原作になかったことを面白いからいと片付け、入試まで何をするか

考える。

クラフト「緑谷と一緒に特訓するか聞いてみるか…そういえばヘドロ事件も時期的に今ぐらい

か? だけどいつかなのか分かんねえ…とりあえず緑谷に連絡してみよ」

ふとヘドロ事件のことを思い出す、だがそれがいつなのかわからないクラフトはとりあ

えず緑谷に連絡をする。

——緑谷／帰り道——

緑谷 「はあ…(機神くんのおかげで個性を持てるようになったけどまだ自信は持てないな…そ

れに僕が周りに言っていないせいで…けど言ったら言ったで…) ええい! くよくよするな

前見て僕は進むんだ!」ズルル

ヘドロ 敵ヴァイラン 「Mサイズの…隠れミノ…」

緑谷 「!?…うわあっ!?」ズチャアッ!!

ヴァイラン 敵が現れ捕まりそうになつて
前向きに自分を鼓舞しているとマンホールからヘドロの

しまうが…

ヘドロ 敵^{ヴァイラン} 「ん？なんだ？…うおっ!？」 ボオオツ！

緑谷 「はあつはあつ…危なかった…」

ヘドロ 敵^{ヴァイラン} 「ほおく火の個性か…ますます良い隠れミノだ…」

緑谷 （とっさに炎の出力上げて逃げ出すことができた…だけどこれからどうする、相手は液体

の個性だから火は相性的に不利だ…どうすれ…)

ヘドロ 敵^{ヴァイラン} 「さっさと俺に体に乗っ取らせろお！」 グアツ！

緑谷 「しまっ「もう大丈夫だ少年!!」!？」 ガコン！

もう1つのマンホールから突如オールマイトが現れる。

ヘドロ 敵^{ヴァイラン} 「!？」

(オ) マイト 「私が来た！…TEXAS…SMASH!!」 ブオオツ！

ヘドロ 「これ…は…うおおああああ!!…:…」

緑谷 「うわああ!？」 ドタツ！

オールマイトのパンチの風圧によって吹き飛んでしまう

緑谷とヘドロ 敵^{ヴァイラン}

(オ) マイト 「おっと！少年大丈夫かね!？」 タツタツタツ…

緑谷 「いてて…あつ助けてくれてありがとうとおお!!…オオオツ

オールマイトオ!？」

目の前にN O 1ヒーローがいることに驚愕する緑谷。

(オ) マイト 「ハツハツハツ大丈夫そうだね！いやくすまない！ヴィラン退治に巻き込んでしまっ

て!!普段はこんなミスはしないんだがオフだったのと

慣れない土地であつたためか

敵^{ヴァイラン} を取り逃がしてしまつてね!!」

緑谷 「すつすつごい本物のオールマイトだ！生で見ると画風が全

然違う！そつそうだサインください

い！僕ずつとあなたのファンで!!」 あたふた

(オ) マイト 「ハツハツハツありがとう少年！だがその前に、敵^{ヴァイラン}をこ

のペットボトルに詰めるの手

伝つてくれる?」

緑谷 「はっはい！わかりました!」

緑谷はオールマイトと一緒に周りに散ってしまったヘッド
口敵を回収する。
サイラン

(オ) マイト「いや〜ありがとう少年！君のおかげで無事敵を捕える
ことができた!!」
サイラン

緑谷 「いいえ僕のほうこそオールマイトの手伝いを出来て…
それにサインもありがとうござ

います!!」

感激のあまりテンションが爆上がりの緑谷。

(オ) マイト「ハーハツハツハツ！ありがとう少年！そう言ってもらえ
るとありがたい！では私はコイ

ツを警察に届けないといけないので失礼するよ!!」

緑谷 「えっもう?…そんな…(僕まだ…あなたに聞きたいこ
とが…)」

(オ) マイト「こう見えて色々と忙しくてね…それじゃあ今後も…」
ググツ…

「応援よろしくうううー！！！！」ドヒュ

ウウウウ

オールマイトは敵を警察に届けるため跳んで行つてしま
うのだが…
サイラン

(オ) マイト「ってコラカラー!!少年！ファンであつても限度がある
ぞ!!放しなさい！」ジタバタツ!!

オールマイトのズボンに掴まっている緑谷。

緑谷 「いいいま放したら…死んじゃ…死んじゃいます…」

(オ) マイト「むむっ確かに!!」

緑谷 「ぼぼぼっ僕!あああつあなたに!ききつ聞きたいこと
が!」

(オ) マイト「オーケーオーケー分かったから目と口を閉じなさい!
…ふむ…ゴホゴホツ

(shitt!)「タラリ…

——某ビル屋上——

ヒユウウウウウ…ドオン!

オールマイトは近くのビルの屋上に着地する。

緑谷 「………怖かった……」(ガクガクガク)

(オ)マイト「まったく!ビルの人に言えば降ろしてくれるだろう、では私は時間がないから

これで失礼するよ!!」

緑谷 「あっ待って!!」

(オ)マイト「NO!!待てない!!」

緑谷 「個性のおかげで目覚めた個性でも、あなたのようなヒーローになれますか!」

(オ)マイト「……個性のおかげで…《ドクン!》(しまった…時間が…ホーリーシット!……)」

緑谷の言った言葉が何か引っかけり立ち止まるオールマイトだが…

緑谷 「僕はもともとは無個性だったんですが…去年知り合った友達のおかげで個性が出たんで

す…だけど今まで無個性だったので自信とかあまり持たなくて、それに僕みたいなビビ

りがヒーローを目指してもいいのかなと、その友達の為にも頑張らないといけないのに

…こんな僕でもあなたのような…」

シユウウウウウウ…

緑谷が自身の事を話していると何なら蒸発するような音が聞こえてくる。

緑谷 「ん?えっ?……えええああおおっ!!?えっ…なんで!?細く…ニセモノ!」

(オ)マイト「……私はオールマイトだ」ごふっ…

緑谷が顔を上げるとそこにはガリガリに痩せこけた男がいた。

緑谷 「どわああああっ!?!」

(オ) マイト「…少年、見られてしまったついでだ、間違えてもネットには書き込むなよ」ひら…

緑谷 「ひっ?!」(ゾッ)

オールマイトがシャツをめくるとそこには生々しい傷跡があった。緑谷は思わず両手で

顔を隠す。

(オ) マイト「5年前…^{サイラン}敵との戦闘で負った傷だ、呼吸器官半壊、胃袋全摘出…何度もの手

術と後遺症で体は弱ってしまったね、今の私のヒーローとしての活動時間は1日約

3時間になってしまった」

緑谷 「5年前というと毒毒チエーンソー?」

(オ) マイト「詳しいね…でもあんな奴にはやられないさ…これは世間には公表されていない、

いや公表しないでくれと私が頼んだ、……人々を笑顔で救う平和の象徴は決し

て悪には屈してはいけないためにも」

緑谷 「……………」

(オ) マイト「そういえば君さつき個性で…」

ボオンツ!

緑谷 「…………えっ!?!」

(オ) マイト「煙に爆発!?!…まさか…!」スカツ…

オールマイトは自身の体の傷について話していると近くで爆発音と煙が空高く舞う。そ

してオールマイトのズボンにはヘドロ^{サイラン} 敵を詰めたはずのペットボトルがなかった。

(オ) マイト「(ない!落としたのか!?!いつ…)あの時か!?!」

緑谷 「煙が…もしかして敵?^{サイラン}…オールマイトどうかしました

「？」

(オ) マイト「少年…先ほど捕らえた敵を詰めていたペットボトルがな
い…もしかすると今起き

ている爆発と煙は…」

緑谷 「まさか…さっきの敵が!?!…」ダダダダツ…ガチャ…カン
カンカン…

(オ) マイト「待ちなさい少年!まさかっ…ゴホゴホッ!」

緑谷は駆け出しドアを開けビルの階段を駆け下りていく。
オールマイトは止めようとす
るができなかった。

——田等院商店街——

ドオオオオン!!! バリイーン!! ドオンツ!!…ガ
ンシャアン!!

通行人 「うわああああ?!」「きやああああ?!」「敵だあ!!」

多くの人によって賑わっているはずの商店街が敵に
よって燃えていた。そこに通報

を受けたヒーローが到着する

タツタツタツ…

ヘドロ 敵 「ぬ☒うゝはははあゝ…」

他ヒーロー「子供が人質になって…!?!」

デステゴロ「くっ!…なんて卑劣なああっ!!!」ダダダツ!!…ド
ゴオツ!!…

ヒーローのデステゴロは人質の子供を助けようとヘドロ
敵に突撃し持ち前のパワーを

使ってパンチを繰り出す。しかし…

デステゴロ「ふんん!! 《ズルル…》…なっなんだこれは!?! 掴めねえ
!?!」

ヘドロ 敵の体は流動体であるため掴めない。

ヘドロ 敵^{サイラン} 「でやああつ!!」バシイッ!

デステゴロ 「うおっ!!」ズザザッ!ドゴンッ!

吹き飛ばされシャッターに背中から激突するデステゴロ。

他ヒーロー 「デステゴロ!!」「うおっ!!」バゴオオン!!

他のヒーローがデステゴロを呼びかけるがその瞬間また攻撃が繰り出される。

ヘドロ 敵^{サイラン} 「へっ、ヒーローがざまあねえな!」

???? 「んんんっ!んんんああああああ!!こんなドブ野郎に!俺が吞まれるかああ!!」

ボツボンッ!ボオオオンッ!!

掴まっている人質が顔のヘドロを自力で剥がし逃れようと個性を発動させる。

デステゴロ 「ぬお!」

ヘドロ 敵^{サイラン} (なんて力だ!こりやあ大当たりだ!!この個性があれば奴に報復できる!!)

野次馬 「すげー何アイツ?ひよつとして大物 敵^{サイラン}?」「がんばれくヒーロー!!」

デステゴロ 「くそっ!体が液体のせいで掴めねえし、人質の個性が強力な上に抵抗してもがいてい

るから近づけない!」

下手に手が出せず立ち往生するヒーロー。そこに息を切らしながら走ってきた緑谷が到

着する。

タツタツタツタツタツ:

緑谷 「はあっはあっはあっ……(ここだ……敵は……!……あの敵は!じゃあやつぱりあの時落とし

て……僕のせいで……)……ん?」ブウーブウー……

緑谷のスマホに一件の着信が入る。

緑谷 「(誰だろう?……機神くん!?)《ブウーブウー……ピッ》もしもし機神くん!?!」

クラフト 『おー緑谷!元気?』

緑谷 「うっうん僕は元気だよ、それより急にどうしたの?」
クラフト 『いやー受験のことについてちよつと色々話そうかなと思ってるね』

緑谷 「受験について…ごめん機神くん今ちよつとそれどころじゃ…」ボオン!

クラフト 『…なんか爆発音みたいなの聞こえたけど?もしかして近くに敵でもいるの?』

緑谷 「うっうん、実はそうなんだ…あと『緑谷…』んっ?なに?」
クラフト 『お前のいる場所の位置情報を送れ今すぐに』

緑谷 「えっなんでそんな『早くしろ』うっうん分かったよ!」

理由を聞こうとしたがクラフトにせかされ急いで位置情報を緑谷は送る。

緑谷 「これでよし…それにしてもなんで位置情報なんか…
《ボオオン!》!!」

デステゴロ 「くそっ!!」

野次馬 「あつ!新人ヒーローのMt.レディ!ズシン!ズシン!
Mt.レディ「うええ!?私2車線以上じゃないと無理く!!」

シンリンカムイ「爆炎系は私の苦手とするところ今回は他に譲ってやろう」

バックドラフト「そりやサンキュー今は消火で手いっぱいだよ!それより状況どーなってんの!?消防

車まだ!」

???? 「うええ!!」ヒュツ…ドオンツ!!
他ヒーロー「うおつとおっ!!」

デステゴロ 「くそだめだっ!これを解決出来るのは今この場にいねえぞ!!」

他ヒーロー「だれか有利な個性のやつを待つしかない!!」
バックドラフト「それまで被害を抑えるんだ!何、すぐに誰か来るさ!」

他ヒーロー「あの子には悪いがもう少し耐えてもらうしかない!!」
デステゴロ(くっそおお…奴を吹き飛ばせる程のパワーがあれば!

…)

タツ…タツ…タツ…タツ…

(オ) マイト「はあっはあっ…ぜえっ… (やはりあの時…)」

ヒーロー達は有利な個性のヒーローを待つことにし人質に耐えてもらうという選択

をする。この時緑谷に遅れてトウルーホーム姿のオールマイトが到着する。オールマ

イトは商店街の中を確認するとあの時落としたのかと確信する。

くく数分前くく

クラフト「(緑谷に連絡したらまさか今日がヘドロ事件の日だったとは…さて位置情報は) おっ…き

た…案外近いな、緑谷に話するため近くまで来といえてよ
かった… (さてフワフワの能

力でいくか、よし!)」 ふわっ…ヒュウウー

クラフトは緑谷からの位置情報を確認するとフワフワの能力で飛び商店街に向かう。

くくそして現在くく

——田等院商店街——

(オ) マイト(やはりあの時落としていたのか…活動時間に気を取られてしまった…情けない…

ファンである少年に偉そうなことを言っておいてこのザマか…情けない) ぎゅ…

オールマイトは自身の情けなさを悔やむ。

緑谷 「(機種くんもしかしてここに来るのかな?)」 「緑谷!」 えっ? うわっ!?!」 スタツ…

クラフト「よっ! 緑谷! 少し久しぶりだな!」

緑谷 「機神くん!?なんでここに!?それに来るの早すぎない!」

クラフト「緑谷に話しあって近くまで来てたんだよ、まあちよつと空飛んできたけど(笑)」

緑谷 「そうだったんだ…それにしても空って…」

予想を超えたやり方で来たことに驚く緑谷であった。

クラフト「できこれ今どんな状況なの?」

緑谷 「えっああ今敵が暴れてて、それに人質もいるから何もできないう状況で……」

クラフト「なるほど…(知ってはいたが緑谷がいつ飛び出すかはわからないな…)」

緑谷 「僕のせいで…ごめんなさい僕のせいで…」

野次馬 「ヒーローなんで何もしないの?」「中学生が捕まってるだつて」「てかあの敵さつき

オールマイトが追ってなかった?」「オールマイト!?来てるの!?」「少し前見たよ」

「マジで!」

緑谷 「(中学生!?僕と同じ!?あんな苦しそうなものに耐えているのか!?ごめんなさい、しかもア

イツの体は掴めない、有利な個性のヒーローを待つしかない…ごめんなさい、もう少し

耐えて、すぐに誰かが救けに…)

自分のせいだと思いい心の中で謝り続ける緑谷であったがその時人質と目と目が合う。

???? 「う×う…う」

緑谷 「((!!…))」ダツ!!

クラフト「ん?緑y、あれ?どこに…」

ダダダツ!!

クラフト「!? (いつの間に!)」

オールマイト「!?」

他ヒーロー「!?」

デステゴロ「バカヤロー!!止まれえ!!止まれええええええええええ!!」

ヒーローが飛び出した緑谷に気づき呼び止めるが止まらない。

緑谷 (なんで出た!?…なんで!?体が勝手に!?)

ヘドロ 敵ヴァイラン 「あのガキは…」

?????
(デク!?!?)

ヘドロ 敵ヴァイラン 「まあいい…爆死だ!」グアツ!

緑谷 「ひっ…(どうしようどうすれば…こういうときは…25

ページ!) ブンツ!

ヘドロ 敵ヴァイラン 「ぬおっ!」バササツ

緑谷はとっさに相手の顔にめがけて背負っていた鞆を投げ視界を一時的に奪う。

緑谷 「かつちゃん!!」

爆豪 「ぶはっ…なんででめえが!!」

緑谷 「体がっ足が勝手に!!どうしてかわかんないけど…だけど

…」バチャバチャ

「君が…助けを求める顔してた!!」ニカツ

(オ) マイト「!?!」ザワツ!

クラフト(!!)…トランスフォーム!LBXナイトメア!) シュイン

シュイン (変身音)

爆豪 「やめ…ろ…」

ヘドロ 敵ヴァイラン 「もう少しなんだ!邪魔すんじゃないやねえ!!」グワツ!

他ヒーロー「無駄死にだ!自殺志願かよ!」

ヒーローが緑谷を助け出そうと動き出したとき頭上を通り
過し前方を駆け抜けるロボット
が現れる。

シユバツ…ガシヤシヤシヤシヤシヤシヤシヤシヤシヤ

シヤツ!! (走行音)

デステゴロ「!!…なんだ!?ロボット…ト!」

他ヒーロー「なんだあのロボットみたいなのは!」

ヘドロ 敵ヴァイラン 「ぬおおらあっ!!」ブオツ!

緑谷 「!!(死…)」

ボオンツ!!

ヘドロ 敵^{サイラン} 「はははあ!俺に齒向かうから…:…ん?」

ヘドロ 敵^{サイラン} は何かに気づく。

クラフト 「緑谷…さっきのお前の行動はヒーローそのものだけ」

緑谷 「…えっ!?!その声もしかして機神くん!!?!でもその格好は…:…」

他ヒーロー 「さっきのロボット!?まさか今の攻撃を防いだのか!?

(オ) マイト (情けない!…) グググツ…:シユウウウ

ヘドロ 敵^{サイラン} 「なんだてめえは!!」

クラフト 「お前みたいなヘドロ野郎に名乗る必要はないね」

ヘドロ 敵^{サイラン} 「なんだとおっ!!」

クラフト 「さて…後は頼みましたよオールマイト!」 シユバツ

クラフトは後ろに跳んで下がる。

ヘドロ 敵^{サイラン} 「!?!」

緑谷 「!?!」

爆豪 「!?!」

(オ) マイト 「ああつ…:まったく情けない…:君にあれだけのことを言うておきながら!!」 ガシツ

「プロはいつだって命懸け!!!」

「DETROIT SMASH!!!」

オールマイトは緑谷と爆豪の腕を掴みスマッシュをヘド

ロ 敵^{サイラン} に向けて打ち放つ。

!!ブオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

ヘドロ 敵^{サイラン} 「ぬおああああああ!!」

クラフト (バリバリの能力!…:すっげえパワー…)

クラフトはバリバリの能力でバリアを張って凄まじい風圧を防ぐ。

ヒーロー 「うおっ!…:ん?」

野次馬 「うおおお!…:あれ?」「きやあ…:あら何も…:」

ヒーロー 「ん?なんだこれは…:壁?」「あのロボットの個性か?」

ぽっ……ぽっ……サアアア……

野次馬 「えっ……雨?」「おいおいおいおい……」「まさか今の風圧で上昇気流が!」

「マジかよー!」「パンチ一発で天気変わっちゃった!」「すごいこれがおールマイルト!」

「!!わああああああああああああああああ!!」

たったパンチ一発で天候を変えたことに周りにいた人々はそれに驚愕し歓声を上げる。

その後、吹き飛んだヘドロはヒーロー達によつて回収され無事、警察に引き渡され事件

は解決した。

くく事件後くく

他ヒーロー「すごいタフネスだそれにその個性!プロになったらぜひうちの事務所に来てほしい」

爆豪 「……………」

デステゴロ 「まったく!君が危険を冒す必要はなかったんだ!!」

緑谷 「すつすみません……」

称賛される爆豪とお叱りを受ける緑谷。

他ヒーロー「そして君もだ!いくら強い個性とは言え資格未取得者が個性を使うことは法律で禁止

されている!」

クラフト「……………」

他ヒーロー「どうした黙り込んで?」

クラフト「いや……なんで何もできなかったあんたらヒーローにそこまで言われなきゃならないん

だ?」

緑谷 「機神くん!」

他ヒーロー「なっなんだと!」

納得がいかないクラフトはヒーローに反論する。

クラフト「確かに個性の無断使用は違法だけだ……じゃあ俺はそれを守って見守つてりゃよかったの

か？俺が間に合っていないなかったら緑谷は大怪我または最悪死んでいたかもしれない。人

質になっていた奴も持ち前のタフさで耐えていたが、あのままいつまでも耐えられるわけでもなかったわけだろ？」

他ヒーロー「そつそれは有利な個性の者がいなかったわけで……」
クラフト「確かに個性の相性はあるでしょう。でも他に方法はあったでしょ？小麦粉や片栗粉とか

の粉をかけて掴めるようにするとか、それに有利な個性持ちがいないから、有利な個性

持ちが来るまで人質に耐えてもらおう……もし人質に何かあったらどう責任取るんだ？」

他ヒーロー「なつなにを！」「おい君口が過ぎるぞ！」「我々はプロだ、何もしていなかったわけ

じゃない」

クラフト「実際何もできていなかったじゃねえか、あんたらがそう言えるのは結果的に全員救かつ

たからだ」

緑谷 「はっ機神くん……さすがに言いすぎじゃ……」

他ヒーロー「なつ……」「なんだと！」

デステゴロ「……………」

(シ) カムイ「……………」

この時デステゴロやシンリンカムイは黙ったままクラフトの言い分を聞いていた。

クラフト「(これ以上は平行線だな……) 緑谷帰ろうぜ」

緑谷 「えっ？……うっうん」

(オ) マイト「……………」

オールマイトはインタビュを受けながらその様子を見ていた。そしてクラフトはは緑

谷に声をかけその場を後にする。

くく帰り道くく

緑谷 (オールマイトに謝りたかったな…それに機神くんなんの話だったんだろ)

《緑谷、今日はいろいろあったから話はまた今度にするわ、じゃまた今度な!》

緑谷 「帰ったらホームページからオールマイトにメッセしてみよう:「おいデクツ!!」

かつちゃん!

爆豪 「俺は…てめえに助けを求めてなんかねえぞ…!助けられなくてもねえ!あ×!?!俺は1人でやれたん

だ!!無個性のクソナードでびびりが見下すんじゃないやねえ!!俺に恩を売ろうってか!?!俺に!?!:クソ

ナードが!!」ギョルンツ!

言い訳のような文句を緑谷に言うときレツキレのターンをしその場を後にする爆豪。

緑谷 (タフネス…でもかつちゃんの言うことも…僕は機神くんのおかげで個性が持てたけどま

だ自信とかも…それにビビりだし…)

(オ) マイト 「私が来たー!!!」

緑谷 「うわっ!オールマイト!!えっなんでここに先ほどまで取材陣に…」

突所曲がり角から現れるオールマイト。

(オ) マイト 「ハッハッハッ!あのくらい抜けるわけないさ!なぜなら私はオールマゲ

ホオツ!!」ボシユウ

緑谷 「わあー!?!」

(オ) マイト 「少年…礼と訂正、そして提案をしにきた。君の話聞いていなければ口先だけの

ヒーローになっていた…ありがとう」

緑谷 「いえ…僕はなにも…：自信もなくてビビりなのに仕事の邪魔をしてしまったって…」

(オ) マイト 「そう!!」

緑谷 「えっ?」

(オ) マイト 「あの場で誰よりも小心者であり!誰よりもヒーローを指そうとしている君だから

こそ私は動かされた!!」

緑谷 「(!!)」

(オ) マイト 「トップヒーローは学生時から逸話を多く残している。そして彼らの多くがこう言っ

ている『考えるより先に体が動いていた』と!!」

オールマイトの言葉で感情と心臓の鼓動が段々と高ぶる

緑谷。

緑谷 「!!…」ドクン…

(オ) マイト 「君も…：そうだったんだろう!」

緑谷 「…(はい)…」ドクン

(オ) マイト 「君はヒーローになれる」

緑谷 「ううう…うあああああああ…!!」

ずっと言われたかったことを憧れのヒーローから言ってもらえた緑谷は膝から崩れ胸を

抑えながら大粒の涙を流す。

第8話 治療とちよつと修行…そして入試！おや3
人目？…

オールマイトにずっと言われたかったことを憧れの人から言ってもらえた緑谷。オール

マイトは泣いている緑谷を見ながら言葉を続ける。

(オ) マイト「君なら私の力を受け継ぐに値する!!」

緑谷 「……………えっ?」

(オ) マイト「ハツハツハ！なんて顔をしているんだ!?提案だよ！本番はここからさ、いいかい少

年…私の力を受け取ってみないかという話さ!!」

緑谷 「ちからを……………?オールマイトなにを…」

頭の理解が追いつかない緑谷。

(オ) マイト「私の個性の話をしよう少年…ネットや週刊誌には私の個性は【怪力】など【ブース

ト】だの書かれ、インタビューなどでは常に爆笑ジョークでお茶を濁してきた…

《平和の象徴》オールマイトはナチュラルボーンヒーロー

でなければならぬから

ね、私の個性は聖火の如く引き継がれてきたものなんだ
!」

緑谷 「引きつがれ…て…きたもの!?!……………」

(オ) マイト「そう…そして次は君の番ということさ」

ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
ブツブツブツブツブツブツ

ツ えっ?ちよつと待ってください…確かにオールマイト

の個性は世界七不思議として喧々囂々けんけんせうせうブ

緑谷 ブ と論議されてきました、それこそネットじゃ見ない日はないくらいに…でも…あの個性を ツ

ツ 引き継ぐってそれはちよつと意味が分からないという

か…そんな推測は今まで聞いたこと　ブ

ブ　がないし、議論のなかからも出てこなかったし有史以来
確認されていないわけで…　ツ

ツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブ

緑谷はブツブツ言いながらオールマイトの個性について
話すが…

(オ) マイト 「君はとりあえず否定から入るんだね…ナンセンス!!」

緑谷 「ナン…!」

(オ) マイト 「私は隠し事は多いけど嘘はつかない!!私の個性は個性を
譲渡する個性…冠された名

は…」

／／／「ワン・フォー・オール」／

／／

緑谷 「ワン…フォー・オール…」

(オ) マイト 「この個性は1人が力を培つちかいまた1人へと譲渡し…また1
人へと培い救いの声に答える

ために繋いできた力の結晶!」

緑谷 「なんで…そんなすごい力を僕に…?」

(オ) マイト 「もともと後継者は探していてね、そして君になら渡して
も良いと思ったのさ!!他の

ヒーローが躊躇しているあの場で飛び出した君は誰よ
りもヒーローだった!!」

緑谷 「…」じわ…

(オ) マイト 「まあしかし君次第だが…どうする?」

緑谷 「…(憧れの人にここまで言ってもらえて断る理由なんて
あるか!?…ないだろ!?) 《ゴシゴ

シ》…お願い…します!!」

(オ) マイト 「即答…そう言ってくれると思ったぜ!…ああそうだ少
年、君に聞きたいことがある

んだ」

オールマイトの秘密を知り提案を受ける緑谷。そんな自身の提案を受けてくれた緑谷

にオールマイトは気になっていたことを聞き出す。

緑谷 「?…:なんですかオールマイト?」

(オ)マイト「屋上で君が言った言葉:『個性のおかげで目覚めた個性』…:あれはどういう意味だ

い?」

緑谷 「あつ!あれはですね…:えつと(はつ!)…:」

ここで緑谷はクラフトの言葉を思い出す。

《個性が出た場合この事は秘密にしてもらいたい。理由は目立ってしまふからだ、そんな

ことになったらクソ面倒くさいこと極まりない》

緑谷 「…:…:オールマイトこれから話すことは誰にも話さないでもらえますか?」

(オ)マイト「えつ?あつああ分かった…:(まさかオールフォーワンが関わっているんじゃない?)」

緑谷 「実は…:…:」

緑谷は自身の個性の秘密をオールマイトに話した。

緑谷 「…:…:ということです」

(オ)マイト「なるほど、そういうことか…:(聞いた限りじゃオールフォーワンではない…:一度

会ってみたいな…:)」

緑谷 「…:どうしましたオールマイト?」

(オ)マイト「ん?ああ少年そういえば名前はなんていうんだい?」

緑谷 「ぼつ僕は緑谷出久といいます」

(オ)マイト「ふむ、緑谷少年…:もしその彼がよかったら一度私に会わせてくれないか?」

緑谷 「機神くんをですか?」

(オ)マイト「うむ、少しその機神少年と話をしたくてね」

緑谷 「分かりました、連絡をしておきます」

(オ) マイト「頼んだよ！(もしかしたら彼の個性なら私の傷も…)」
秘密を聞いたオールマイトはオールフォーワンではない
ことに安堵し、クラフトの事が

気になったため緑谷に会わせてもらえるようお願いす
る。その後2人は後日また会う

ための予定を決め別れた。

クラフト宅――

クラフト「あゝあゝ疲れたー、何もできなかったヒーローがなんで
あそこまで偉そうに言えるんだ？

あんな風にはなりたくねえな〜」

自宅のソファでくつろぎながらヘッドロ事件のヒーローに
ついて愚痴るクラフト。そこに

一件の通知が入る。

クラフト「さーて軽く飯でも『ブウーブウー』ん…なんだ？」ピツ

緑谷 『機神くんお昼は助けてくれてありがとう！あと君に話が
あるんだ…実は…』

クラフト「緑谷からか、えーと何々…:…:はいはいなるほど:
了解っと、まさかあっちから会

おうとは…世の中どうなるか分からんもんだな(笑)」

緑谷からのメッセージに返信しその内容にテンションを
上げるクラフトであった。

〃〃4月某日／朝6時〃〃

――多古場海浜公園――

クラフトは朝早くから待ち合わせをしていた。

クラフト「うゝ4月と言つても朝はまだちよつと寒いな」ブルル

緑谷 「あつ機神くん！おはよう!!」 タツタツタツ…

クラフト「おゝう緑谷くおはよう」

緑谷 「機神くんごめんねこんな朝早くに！」

クラフト「いやーいってことよそれよりオールマイトは？」

緑谷 「ああオールマイトもすぐに「ハーハツハツハツ！」あつ来た！」

(オ) マイト「私が普通に走りながら…来たつ!!」

緑谷 「オールマイト！」

クラフト「朝からすごい元気ですね…」

(オ) マイト「ハツハツハツ！おはよう緑谷少年！そして君が機神少年だね？…ん？もしかしてどこか

であつたことある？」

クラフト「去年の夏に起きた銀行強盗…と言えば分かりますか？」

(オ) マイト「！…思い出したよ、そうか…あの時の少年か！」

緑谷 「えつと…お二人は面識があるんですか？」

(オ) マイト「ああ、去年の夏に起きた銀行強盗事件の時にちよつとね！」

緑谷 「去年の夏…もしかして中学生が敵を倒したという…それって機神くんだったの!？」

クラフト「ああ、そうだぞ」

緑谷 「ええええええ!?!?!すごいね機神くん！」

サイラン 敵を倒した中学生が俺と知ると声を上げて驚く緑谷。

クラフト「緑谷、驚くのもいいが今はやることがあるぞ」

緑谷 「あつそうだったね機神くん！ごめんなさいオールマイト！」

(オ) マイト「ハツハツハツ！なくに緑谷少年が驚いてしまうのも仕方ないさー！」

クラフト「それでオールマイト…俺をここに呼んだ理由は聞いてますが、先に緑谷の方からやりま

しよう。俺の事は後でも問題ないでしょう?」

早朝の海浜公園で緑谷とオールマイトと合流し軽い自己紹介?とかなをして3人は話を進める。

(オ)マイト「うむ、そうだね!早速だが緑谷少年、服を脱いで体を見せてくれるかい?ああ上だけ

でいいからね」

緑谷 「はっはい分かりました」ゴソゴソ

(オ)マイト「ふむ…(まだまだあれだが思っていたより鍛えられている)」

緑谷 「あのオールマイト…どうしました?」

(オ)マイト「ん?ああいや君に力を継承するとは言ったが生半可な体では四肢が爆散してしま

うからね!」

緑谷 「四肢が!!」

オールマイトの爆散カミングアウトに驚愕する緑谷。

クラフト「あーということは緑谷の体を入試までに鍛えるわけですか?」

(オ)マイト「そういうことだ機神少年!…って待って待って違和感なく話してたけどもしかして

私の事情知ってる!?!」

クラフト「はい…てか今気づいたんですか?」

(オ)マイト「緑谷少年どういうことだい(; ^ _ ^)!?!」ぐわっ!
クラフトが秘密を知っていることに慌てながら驚くオールマイト。そして即座に緑谷を

問い詰める。

緑谷 「えっとこれはその…」あたふたっ

クラフト「俺が無理やり喋らせました、だってオールマイト俺と緑谷の秘密知ってるんでしょ?」

そっちだけ知って俺だけ知らないのはちよつと不公平じゃありません?」

(オ)マイト「うつつうむ…確かにそうだが…機神少年くれぐれも私の秘密は洩らさないように

ね！」

クラフト「分かっています」

(オ)マイト「うんマジでよろしくね…さて私の事を知っているなら話は早い、先ほど機神少年

が言ったように緑谷少年の体を私の力を譲渡できるように体を鍛えるんだ、入試ま

でにね！そしてその方法はこの浜辺のゴミを片付けることだ!!」

緑谷 「このゴミを…」

クラフト「なるほどー(知っていたけどすげえ量…)」

オールマイトはクラフトに秘密に関することに釘をさしながら緑谷を鍛える方法を話す。

(オ)マイト「緑谷少年と機神少年は英雄志望であっているかな？」

クラフト「あつてますよ」

緑谷 「はい！英雄はオールマイトの出身校なので…いくなら絶対英雄と！」

(オ)マイト「くーこの行動派オタクめ!!」

(オ)マイト「ネットで少し調べただけどこの海浜公園、一部の沿岸はもう何年もこのままのよ

うだね？」トン…メコッ！

緑谷 「ええ、何か海流が関係しているせいか漂着物が多くて、それに付け込んで不法投棄も

あつて…」

クラフト(軽く叩くだけでへこむって…すげえ力(笑))

緑谷 「もしかして体を鍛えるためにゴミ掃除を？」

(オ)マイト「YES!!だがそれだけじゃない…最近の若いヒーローってのは派手さばかり求め

るけど本来ヒーローってのは奉仕活動！地味だなんだ

と言われてもそこはブレては

いかんのさ!!そしてこの区画一帯の水平線を蘇らせる!!それが君のヒーローへの第

一歩だ!!」メコメコ…バゴンツ!!

緑谷の問いにアムズアップしながら答え、大型冷蔵庫を片手一本でペシヤンコにして

ヒーローの本質を語るオールマイト。

緑谷 「このゴミを…全部!？」

(オ)マイト「そう!先ほども聞いたけど緑谷少年は雄英志望、だが雄英はヒーロー科最難関…生

半可な鍛え方じゃいけない。そこでこれ!!私が考えた

《目指せ合格アメリカンド

リームプラン!!》、ゴミ掃除を達成するためのトレーニングプラン!入試までの生活

をこれに従ってもらおうよ!!」

緑谷 「寝る時間まで…」

クラフト「うはーこれはなかなか…」

(オ)マイト「ぶっちゃけねこれ超ベリーハードだから大丈夫?」ヒソ
緑谷 「そりゃあもう僕は他の人の何倍も頑張らないといけませんから!」

(オ)マイト「その意気だ緑谷少年!!」

オールマイトと緑谷の話が終わったようだ。俺と会って話をしたいと言っ

たらしいがなんだろうな。そんなことを考えていると

オールマイトがこちらに

話しかけてきた。

(オ)マイト「さて待たせたね!機神少年!」

クラフト「そんなに待ってませんよオールマイト」

(オ)マイト「ハツハツハツありがとう機神少年!、さて緑谷少年にお願

いしてまで君に来てもらったのはちよつと聞きたいことがあってね」

緑谷 (オールマイト…機神くんになにを?)

クラフト「何でしょうオールマイト? (俺に聞きたいこと? なんだ…?)」

(オ) マイト「君に聞きたいことは…君の個性のことだ…」

クラフト「俺の個性についてですか?… (はあくなるほど…)」

クラフトに聞きたいこと…それは個性に関することだった。

緑谷 (機神くんの個性…そういういえばどういう個性なのか全然知らないな…)

(オ) マイト「君の個性は一体どういうものなんだい?」

緑谷 「……………」ドキドキ

クラフト「これから話すことは秘密にしてもらえたら話してもいいですよ」

(オ) マイト「!!…それほどかね?」

クラフト「自分で言うのはあれですけど、俺の個性は強力ですからね」

(オ) マイト「なるほど…わかった約束しよう! 緑谷少年もそのように!」

緑谷 「はっはい!」

クラフト「わかりました…では俺の個性について話しますね…」

クラフトは自身の個性についてオールマイトと緑谷に話す。2人はクラフトの個性の

事を聞くと驚愕の顔をしていた。ちなみに緑谷に個性を授けたことは秘密にしている。

(オ) マイト「…まさかそれほどの個性とは…君が敵^{ライアン}じゃなくてよかったよ! ハーハツハツ

ハッ!」

緑谷 「すごい個性だ…まさかそんな個性が世の中にあるとは、だけどその分使い分けとかが…」

ブツブツブツブツ…」

クラフト「おーい緑谷く? 戻ってこーい」

緑谷 「えっ!?! ああごめん機神くん!」

クラフト「分析はいいけど、あんまり他で出さないようにな…それでオールマイト、俺の個性の事

を聞きに来た理由はそのお腹の傷ですか?」

(オ)マイト「!?!: ああその通りだよ、君の個性ならもしかするとって考えてね」

クラフト「なるほど…結論から言うとなあなたの傷を治すことはできません。加えてすでに失った臓器

もね」

(オ)マイト「おおっ!! それはなんと!! ではさっそく「だけど今すぐにはやらない」!!: それはどう

してだい?」

緑谷 「機神くんどうして?!」

驚く緑谷とオールマイトだが…

クラフト「ああすいません言葉が足りませんでした。いやオールマイトあなたの負った傷はちゃん

と治します。ですが今この場で治したら色々混乱とかあるでしょう? あなたの秘密を

知っている関係者や主治医とかが…」

(オ)マイト「あつ…」

緑谷 「…確かにそうだね (苦笑)」

オールマイトはなんかどこか1つ抜けているのでは? と感じながら傷を治す約束をする

クラフトであった。

(オ)マイト「うっうん! 確かに機神少年の言う通りだ! では関係者とかに事情を話して予定とか調

整をして、こちらから連絡してもいいかな?」

クラフト「俺はそれでいいですよ、でも話す人は出来る限り少ないようにお願いしますね」

(オ)マイト「うむ! わかっているさ! 君の個性は超強いからね!」

緑谷 「よかったですね! オールマイト!!」

(オ) マイト「ハッハッハッ！ありがとう緑谷少年！！でも君はこれから頑張らないといけないぞ!!」

緑谷 「はいっ!!」

クラフト「オールマイト…傷を治したい気持ちが強すぎて関係者のこと忘れてたでしょう? (笑)」

(オ) マイト「そそそっそんなことないぞ!!ちゃんと考えていたさ!!」

クラフト「緑谷どう思う?めっちゃ動揺してるぞ (笑)」

緑谷 「すみませんオールマイト、これはフォローできません(苦笑)」

(オ) マイト「そんなっ!!」ガーン!!

最後はオールマイトをイジリながら終わりクラフトはオールマイトからの連絡を待つ

った。そしてあれから約1カ月たった5月上旬…オールマイトからの連絡がくる。

くく5月某日くく

クラフト「オールマイトから…えーつと日は△日で場所は…東京? ああオールマイトの事務所か…」

んで当日に送迎の為の車を向かわせるか…」

クラフトは日程を確認する。そしてオールマイトの傷を治療する日を迎える。

くく5月△日くく

クラフト「車の迎えが来るって書いてあったけど…お?」

ブウウウウ…キイイ…

自宅のマンションの前で待っていると1台の黒い乗用車タイプの高級車が止まる。

クラフト「これ…か?」

????? 「お待たせしたね…あれ君は…」

クラフト「あれ…あなたは確か塚内警部」

塚内警部 「まさか聞いた話の少年が君だったとはね!」

クラフト「こつちもまさか迎えに来る人があなたとは思ひもしませんでした」

塚内警部「ははっ、とりあえず車に乗ってくれたまえ、簡単な話は移動中にするよ」

クラフト「分かりました今日はお願いします、にしても中々の高級車ですね…」

塚内警部「ああオールマイトが用意したんだお礼なら彼に言ってくれたまえ」

クラフト「なるほど…流石NO1といったところか（笑）」

その後、車に乗ってオールマイトの事務所がある東京に移動する。

あと俺は座席の座り心地が良いため途中から寝てしまう。

塚内警部「機神くん、機神くん、事務所に着いたよ起きて（笑）」ゆさゆさ

クラフト「んあ…お…ふあああああ！…あつすいません塚内さん、座り心地が良くてつい…」

塚内警部「ははっ（笑）気持ちはわかるよ、さあ早く降りて案内するよ」

クラフト「はい！」

車から降りてオールマイトの事務所に入る。まず思ったのはデカイ…事務所っていうか

ビルじゃん！あつ…ビル全部が事務所じゃなくて一部のオフィスが事務所なのかな…

そんなことを考えていたらオールマイトが待っている部屋に到着する。

塚内警部「着いたよ機神くん」

クラフト「あつこの部屋に…」

塚内警部「オールマイト、彼を連れてきたよ」

（オ）マイト「おおっ入ってくれたまえ！」

クラフトと塚内警部はオールマイトがいる部屋に入室する。

（オ）マイト「おおっ機神少年よく来てくれた！塚内くんも迎えありがとう！」

塚内警部「事が事だからね、これくらいどうってことないよ」

クラフト「オールマイト、だいたい1カ月ぶりですね」

(オ)マイト「ありがとう塚内くん、すまない機神少年！日程の調整に手間取ってしまったね」

????「あんたが機神って子かい？」

オールマイトに軽く挨拶していると後ろから声をかけられ、振り返るとそこには注射器

の杖をもった初老の女性がいた。他にも以前お会いした根津校長もいた。

クラフト「あなたは…リカバリーガールですね」

(リ)ガール「おや私を知ってるのかい？」

クラフト「あなたの個性は数少ない治癒系の個性ですからね、それに自分は雄英受けるんで」

(リ)ガール「ああなるほどそれなら私を知っていてもおかしくないね」

リカバリーガールと話しているとそこに以前お話したことがあ人物が来る。

根津校長「やあ少し久しぶりだね機神くん！」

クラフト「あのお話以来ですな校長先生」

(リ)ガール「おや根津、あんた知り合いかい？」

根津校長「ああ、彼はここ数年いなかった特選に選ばれた子だよ、先月、彼が通っている中学校に

話をしに行ったのさ」

(リ)ガール「ほおーこの子があの特選の…それなら納得だね」

クラフト「?…それは一体どういう…」

リカバリーガールの言葉にクラフトは質問する。

(リ)ガール「ん？ああ、私は今回の話はある限り信じていなかったのさ。まあ今も半信半疑だが

ね」

クラフト「まあ普通はそうですよ」

根津校長「君の個性に関しては入試が終わった後にも聞こうと

思っていたが、オールマイトから

話を聞いたときは驚いたよ」

クラフト「校長先生ご存じかと思いますがこのことは一応秘密の方
でお願いします」

根津校長「分かっているのさ！君の個性は強力だからね。だけど雄英
に入ったらメディアとかに映る

ことも多々ある。それはどうするんだい？」

クラフト「その時は上手く誤魔化したりしますよ。メディアにあま
り出ないヒーローもいますし。

それにオールマイトも出来ているでしょう？」

(オ)マイト「ハーハツハツハツ！機神少年も言ってくれるじゃないか
!!大丈夫！君なら何とかでき

るさ!!」

(リ)ガール「さて…そろそろ本題に入ろうかね？」

リカバリーガールがオールマイトの治療の話に切り替え
る。

クラフト「ああすみませんリカバリーガール、えーと治療はどこで
？」

(リ)ガール「治療はこの部屋と繋がっている別室でやるよ、こっちな
よ」

オールマイト「よろしく頼むよ、機神少年！」

クラフト「期待に応えられるよう頑張ります」

治療を行うため別室に移動しオールマイトの傷の治療を
始める。

塚内警部「治りますかね？…」

根津校長「今は彼の力を信じるしかないさ」

——別室——

ピツ…ピツ…ピツ…ピツ…(心電音)

(リ)ガール「さて治療を始めようかね…といっても今回私は治療中の
体のバイタルを注意したりす

るだけだがね」

クラフト「よろしくお願いします」

(リ)ガール「はいよろしくさね、じゃああなたのタイミングで始めておくれ」

クラフト「分かりました、オールマイト体はマッスルフォームのままでお願いしますね」

オールマイト「ああ、了解した」

クラフト「今回の治療ですが、すでに失っている臓器も復活させるので時間をかけてゆっくり治療

します。時間をかけずにやることもできますが体への負担を考慮してゆっくりと治療

ます」

(リ)ガール「わかった」

(オ)マイト「よろしく頼む、機神少年」

クラフト「スウー…ハアア…では始めます!」

クラフトは仰向けに寝転がっているオールマイトの左脇腹に両手を当てる。そして目を

閉じて集中し治療を開始する。

・
・
・

くく約2時間後くく

塚内警部「もう2時間になるな…」

根津校長「傷を治すだけならそんなに時間は掛からないだろう…しかし既に失っている臓器を新た

に再生させるとなると違ってくるのだろう…私たちがいま出来るのは彼を信じて待つ

ことさ!」

2人がそう話していると別室のドアが《噂をすればなんとやら》と言うようにタイミン

グよく開いた。

ガチャ：

塚内警部「!!」

根津校長「!!」

(オ) マイト「……」

(リ) ガール「……」

塚内警部「オールマイト…治療はどうなったんだい?…あと彼は?」

(リ) ガール「あの子なら今寝てるよ、これだけのことをしたんだ無理はないさね」

根津校長「ということは治療は無事、成功したんだね?」

(オ) マイト「ええ…機神少年には一生かけても返せないと言ってもいい程の恩が出来ました」

(リ) ガール「あの子の力はすごいもんだね、今まであんな個性は見たことはないよ」

根津校長「僕もそうさ…まあ今はそれよりもオールマイトの傷が治ったことを喜ぼうじゃないか。

彼へのお礼は目覚めた後でも遅くないさ!今はゆっくり休ませてあげよう」

(オ) マイト「ええ、彼が起きたら力いっぱい抱きしめてあげます!」
塚内警部「君が力いっぱいやったら彼の骨が折れてしまうよ(笑)」

根津校長「確かにそれはやめた方がいいかもね!」

(オ) マイト「そっそんな!!」

(リ) ガール「バカなこと言っていないで!、ほらオールマイトあの子が寝ている間に体の検査しとく

よ!」バシツ!

(オ) マイト「あいたつ!」

オールマイトの傷の治療が無事終わったあとクラフトは疲れて約3時間ほど寝てしま
う。

くく約3時間後くく

クラフト「……《ぱち……》っ……んん……つ……ここは……ああそうか確か
オールマイトの治療にきて……」

ガチャ…

(リ) ガール 「おや起きたかい?」

クラフト「……リカバリーガール、自分どのくらい寝てました?」ゴキキツボキツ (骨を鳴らす音)

(リ) ガール 「だいたい3時間ほどだね、よく寝てたよ」

クラフト「けっこう寝てましたね…オールマイトは?」

(リ) ガール 「外で待ってるよ、あとあんたが寝ている間に検査をしたが体に異常はなし、再生した

臓器も正常に機能してる。後遺症のほうもきれいに治っているよ」

クラフト「そうっすか…まあ上手くいってよかったっす…」ふう

(リ) ガール 「そうかい…あちよつとごめんよ」

リカバリーガールは俺の体を軽く診察する。

(リ) ガール 「…うん、なんともないね、若いから回復も早いね」

クラフト「ありがとうございます」

(リ) ガール 「立てるかい?外でオールマイト達が待ってるよ」

クラフト「はい、大丈夫です」

クラフトはゆっくりと立ち別室を出る。

(オ) マイト 「おおっ!機神少年目覚めたかい!!」

クラフト「オールマイト、調子よさそうですね?」

(オ) マイト「ハハハッハッハッ!わかるかい?君のおかげで全盛期までとはいかないが、体に力が

みなぎっているのだよ!!」

クラフト「これでメシが食えますね (笑)」

(オ) マイト「おっそこに気づくかね!そうなんだよ今まで流動食だったからね!それに!これで時

間を気にせずヒーロー活動が出来る!!」

クラフト「……オールマイト、これは素人の考えなんです…」

クラフトはこの機会に自身の考えをオールマイトに話してみることにする。

(オ) マイト「ん?なんだい機神少年?」

クラフト「今の社会はあなたにの存在が大きくていてる。だがあなたも人だ、いつかは引退がく

る。そうなった時、次のN o 1はエンデヴァーになるでしょう。あくまで予想ですが。」

(オ) マイト「……………」

クラフト「現在活躍しているヒーローにあまりこういう事は言いたくはないですが、あなたとエン

デヴァーとは差がありすぎる。実力とかではなくいわゆるカリスマ性。あなたが今ま

で抑えていたものが溢れてしまい世の中に混乱がくるでしょう。ヒーローをするのは

いいですが…その後の事をそろそろ考えておいた方がいいと思います」

(オ) マイト「機神少年…」

(リ) ガール「……………」

オールマイトに自分の考えを話しているとそこに塚内警部と根津校長が部屋に入ってきた。

た。

ガチャ…

塚内警部 「彼が目を覚ましたって?…」

根津校長 「?…どうしたんだい?」

クラフト「いえ…まあオールマイト今話したのは素人の考えですが

一応参考程度に(笑)」

(オ) マイト「ああ…」

クラフト「塚内さん帰りはまたあの車ですか?」

塚内警部 「そうだよ、もういいのかい?」

クラフト「ええ、お願いします」

塚内警部 「分かったよ、じゃあ彼を送ってくるよオールマイト」

(オ) マイト「ああよろしく頼むよー!」

オールマイト達に帰りの挨拶をし塚内警部に送ってもらい帰路についた。

ちなみに帰りの車の中で塚内警部が今回の治療に対する報酬が自分の口座に振り込まれ

ると伝えられた。後日いくらなのか確認したら通帳に8桁の額が振り込まれており驚愕

した。一応お金には困ってはいなかったがさらに余裕ができた。やったね!!

くくクラフトが帰ったその後くく

根津校長「なるほど：彼がそんなことを」

(リ) ガール「だけどあの子が言ったことは間違っちゃあないね」

(オ) マイト「まさかあのような事を言われるとは」

根津校長「まあ彼の言うことは考える価値はある。少しずつ考えていこうではないか」

オールマイト「そうですね：我々は今できることをやりましょう！」

クラフトが言った考えに静かに驚きながら気持ちを新たにするヒーロー達であった。

オールマイトの傷を治してから約5カ月が経過した。その間も緑谷の入試修業は順調に

進む。入試まであと4か月。

それからあつという間に4か月!!(修行シーン?カットします!ごめんなさい)

雄英高校入試試験2日前。

くく朝6時くく

——多古場海浜公園——

(オ) マイト「ふう…」 バタン…

オールマイトは乗ってきたトラックから降り緑谷が掃除をしている浜辺に向かおうと

すると声が聞こえてくる。ちなみに体はもちろんマツスルフオーム。

緑谷 「うおおおあああああああああああああああああ
あああっ!!!」

オールマイトが駆け寄るとそこには綺麗さっぱりになった浜辺があった。

(オ) マイト「おいおいおい…指定した区画以外まで綺麗さっぱりじゃあないか! マジかよ!…:しか

も2日も早く予想以上に! 仕上げちゃったよ!!…:」

「オーマイ…オーマイ…グツネス!!」

オールマイトが緑谷が予想以上に仕上げたことに感動する。すると積み上げたごみの山

の上立っていた緑谷が落下する…:がオールマイトは持ち前のスピードで落ち切る前に

受け止める。

(オ) マイト「おつかれ!!」

緑谷 「オールマイト…僕…やれました…:できました」

(オ) マイト「ああっ! 驚かされた十代って素晴らしい!! 素晴らしすぎるよ!!、ほら見なよこれ」

緑谷 「えっこれは?…:」

(オ) マイト「掃除とっくんを始める前の君さ、この時よりさらに君は成長した!! よく頑張ったよ本っ当

に!!」

緑谷 「なんか…ズルだな僕は…:機神くんのおかげで個性を持って…:オールマイトにここまでし

てもらえるなんて恵まれすぎてる…:」 うるうる…:

(オ) マイト (何を今更…君の頑張りだろーに)

オールマイトがそう思っていると突然声が聞こえる。

????? 「おーすげえめっちゃ綺麗になってるー!」

(オ) マイト 「むっ!」この声はもしかや…やはり機神少年か!!」

クラフト 「おはようございませすオールマイト、おはよう緑谷」

緑谷 「機神くん…おはよう…あとなんでここに?」

クラフト 「いや入試まであと2日だから一応様子を見に来たんだわ。だけど見た感じ終わったみたいだね」

いだね」

緑谷 「ははっ…なんとかかね…」

(オ) マイト 「さて!授与式だ緑谷出久!!」

緑谷 「はい!」

(オ) マイト 「これは受け売りなんだが、最初から授かっているものと、認められ譲渡されたもの

ではその本質は違ってくる!肝に銘じておくんだ!この力は君が勝ち取ったんだ

と!!」プツン

緑谷 「…はい!!」

(オ) マイト 「よし…では…」

「食 え」

オールマイトはちぎった自分の髪の毛を差し出す。クラフトは何の説明もなしに言う

オールマイトを見て顔を上に向け天を仰ぐ。

緑谷 「へあ…」

クラフト 「オールマイト…いきなり食えって言われても混乱するだけです…」

(オ) マイト 「すつすまない!…ウオツホン!私の個性を受け継ぐにはDNAを取り込む必要があるん

だ!さあっグイっと!」

緑谷 「思ってたのと違いすぎる!…」

思っていたのと違いすぎたが緑谷は髪の毛を水で流し込

み飲んだ。そして次の日オール

マイトがOFAの扱いを指南するが感覚で説明するためクラフトが代わる。ちなみにオー

ルマイトは説明が下手なことに落ち込んでいた。そして

：

くく入試当日くく

クラフト「：緊張するなあ〜」

耳郎「そんな風には見えないけどね」

クラフト「えーそうかな？そういう響香は？」

耳郎「ちよつと…ね」

クラフト「ほんとは？」

耳郎「めっちゃしてる…」

クラフト「手でもつなぐ？（笑）」

耳郎「くく／／…こんなところで何言ってるの／／」バシバシッ

耳郎が恥ずかしさのあまりクラフトの背中を叩く。その光景を他の受験生は嫉妬の混

じった目で見ていた。主に男子が。その時1人の女子が声をかける。

????「あつもしかして機神ー？」タツタツタツ…

クラフト「ん？おー拳藤か？久しぶりだな！」

拳藤「あんたも雄英受けるんだね！」

クラフト「ああ、今日はお互い頑張ろう」

拳藤「そうだね!!…耳郎も久しぶり…」

耳郎「うん、久しぶりだね拳藤…」ぎゅ…

互いに挨拶をすると耳郎は俺の腕に自信の腕を巻き付ける。その行動に拳藤はあまり顔

に出さないようにしながら驚く。

クラフト「ん？急にどうした響香？」

拳藤「きよつ…機神と耳郎はその…そういう仲…なの？」

クラフト「えっ…ああ拳藤と知り合ったその後だね」

拳藤 「へっへえく…そうなんだ…」 チラッ

耳郎 「……………」 ドヤッ

拳藤 「!!…(やられた!)」 ギリリ…

耳郎 (ウチが何もやらないと思ったら大間違いだよ!拳藤!)

クラフトの知らないところで女同士の見えない戦いが繰り広げられる。その戦いに一時

的に停戦させるかのようにクラフトが声を出す。

クラフト 「まあ話は試験が終わってからでも出来るし早く行こうぜ」

耳郎 「そうだね!」

拳藤 「うん!」

バチバチバチ…

見えない黒い火花を散らしながら試験会場に向かう2人であった。ちなみに緑谷は倒れ

そうになったところを指に肉球つぽいものがある女子に助けられていた。

——実技試験説明会場——

(プ)マイク『今日は俺のライブによるこそー!!エヴィバディセイヘイ!!

(Yョーoコsソー!…)』シーン…

ボイスヒーロープレゼントマイクが挨拶をするが誰も返事を返さない。その後自分で自

分の挨拶を返したあと実技試験の説明が始まる。試験内容は10分間の《模擬市街地演

習》であり、演習場にはそれぞれポイントが違う3種類の仮想敵カモライランを行動不能にしポイント

トを稼ぐことが目的と説明される。もちろん他人への攻撃、アンチヒーローな行為は禁

止である。そこまで説明されると1人の受験生が拳手を

する。
「質問よろしいでしょうか!?プリントには4種の敵ライランが記載されて

います！この4種目は誤載

でありましょうか!?もしそうであるならば最高峰である
雄英において恥ずべき痴態!!説

明をお願いします。それからその縮れ毛の君!」

緑谷 「!?」ビクッ

???? 「先ほどからボソボソと気が散る!物見雄山のつもりなら即刻こ
の場から去りた

まえ!」ギロツ

緑谷 「すみま「お前にそこまで言う権利はないだろ」!」

???? 「なっなに!」

緑谷 (この声…機神くん!?)

爆豪 (あいつは!?)

クラフトの声だと緑谷と爆豪が気づく。

クラフト「そこまで言う権利はないと言ったんだ、確かに気は散る
かもしれないが我慢くらいでき

るだろ?その程度で気が散っていたらプロになんかなれ
ないね。それにそんなに強く注

意したら彼が委縮してしまうじゃないか?まあ彼も少し
周りのことを考える必要はあつ

たけどね」

???? 「確かに…すまない!!試験だったので気がたつてしまっていた
!!」

緑谷 「ぼつ僕の方こそごめんなさい!」

(プ)マイク『オーケーオーケーもう大丈夫かな?あとナイスなお便り
サンキューな受験番号7111

君!4種目の敵はOPサイランそいつはいわゆるお邪魔虫よ!

レトロゲームのマリオブラザーズつ

てやったことある?それに出てくるドッスンさ!各試
験会場に1体ずつ配置されている

いわばギミックよ!リスナーたちには避けることをお
すすめするぜ!』

他受験生「なりほど避ける障害物みたいなもんか?」「まんまゲームみてえだな」

???? 「ありがとうございます!失礼いたしました!」

ひと悶着あったがプレゼントマイクが4種目について説明し終わると最後に受験生に向

けてある言葉を贈る。

(プ)マイク『俺からは以上だ!!最後にリスナーへ我が校の校訓をプレゼントしよう!!かの英雄ナポ

レオン!!ボナパルトは言った!!【真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者】だ

と!!』

『更に向こうへ!! Plus Ultrara!!』

(プ)マイク『されでは皆、良い受難を!』

クラフト(やばっ鳥肌たった)ざわわ

耳郎 「クラフトあんた会場どこ?」

クラフト「俺はCだな、響香は?」

耳郎 「うちはD、会場違うけど頑張ろうね!」

クラフト「おう!」

その後バスに乗って各々の試験会場に向かう。

——試験会場C——

他受験生「街じゃん…」「さすが雄英だな…」

クラフト「でか…きて(変身しとくか…LBX、ジャンヌD!)」
インシュイン(変身音)

他受験生「なんだ変身した!」「ロボットの個性?」「ちよつと女性っぽいな」

他の受験生がクラフトの個性を見て驚いていると…

(プ)マイク『はいスタートオ!!』

唐突に試験開始の合図がされるが、ほとんどの受験生たちはいきなりの開始に動けない

でいた。

ガシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャ!!…(走行音)

クラフト(わかってても動くっていうのは遅れるもんだな…さてロボットは…)

(プ)マイク『どうしたあー!? 実戦にカウントなんてないんだよ!! 賽は投

げられてんぞ!! すでに何人かは走ってるぞお!!』

プレゼントマイクに言われて他の受験生たちもようやく走り出す。

ダダダダダダダダダダッ!!…

他受験生「くそまじかよ!」「あいつももうあんなところに!」「出遅れたあ!!」

クラフト「さてロボットはどこに…《ドゴオンッ!》うおっ!!」

仮想敵^{かそウイラン}「ターゲット補足!」
「ブツ殺ス!」
「ヤッチマエ!!」

ロボットを探そうとした矢先向こうから登場してきた。物騒な言葉を言いながらこち

らに突撃してくる。しかも10体まとめて…

クラフト「全部1Pか…まあいい…いくぜ必殺フアンクション!!」
「アタックフアンクション!!」

「サイドワインダー^{エイト}8」

クラフトは腕を胸の前で交差させたあと、回転しながら上に跳び上がり上空で体の

回転を止め、両腕に装備してある合計8本のミサイルを仮想敵^{かそウイラン}に向け一気に発射する。

8本のミサイルは勢いよく10体の仮想敵^{かそウイラン}に向かっていきバラバラに破壊する。

ドシュドシュドシュドシュッ!!…シユワアアアアア
…ドオオオオオン!!

他受験生「なっ一気にあんなに!!」「なんだあいつ!!」「強すぎだろ

!!

クラフト「ふう…さてこの調子でどんどん狩りましようかね!!」ガ
シャシャシャ…

その後も順調にポイントを稼ぎつつ乱戦になってきたの
で機体を変えて仮想敵カソウライランを探

しては倒した。ちなみに機体はジャツジである。
バゴンツ!!

クラフト「ふう…これで何体目かな?結構倒したけど途中から数え
てないせいで分からん…」

(プ) マイク『あと5分だぜえー!!』

残り時間があと5分となったところで試験をカメラ越し
に見ている雄英教師陣がいる

モニター室では…

——試験モニター室——

雄英教師「この入試は仮想敵カソウライランの配置も数も伝えられていない」

雄英教師「限られた時間と広大な敷地、そこからあぶりだされるの
さ」

雄英教師「情報力・機動力・判断力・そして戦闘力…市井の平和を
守る為の基礎能力がP数という

形でね」

雄英教師「あの特選の子すごいな、圧倒的じゃないか?」

雄英教師「ロボットの個性かと思ったが明らかに別の個性と思われ
る場面もあつたぞ?」

(オ) マイト(機神少年…きみ凄すぎ(汗)…緑谷少年は…なかなか頑
張ってるね2つの個性を上手く

使っている!それも機神少年のおかげだな)

雄英教師「今年はなかなか豊作じゃないか?」

雄英教師「いやーまだわからん、真価が問われるのはこれからさ」ポ
チツ

教師の1人が【Y A R U K I S W I T C H】と書かれた
ボタンを押す。すると各試験会場に爆

発が起きると同時にギミックが現れる。

!!ボオオオオオオオオオオオオオオ!!

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

他受験生「もしかしてあれギミック!!?」「はあっ嘘だろ!?」「あんなに逃げるしかねえじゃん!!」

クラフト「うはーでっけえー(笑)……よろしあのデカ物にどこまで通じるか試してみるか!!」

他の受験生が逃げ出している中1人巨大かそうヴァイラン仮想敵に挑むクラフト。巨大仮想敵に攻撃を

与えるため近くまでくると、1人の女子が足を引きずりながら逃げていた。

クラフト「あら?おいあんた大丈夫か(ん?ピンク色の肌に髪?)」
ガシヤツガシヤツガシヤツ……

「えっ?なにロボット!?!」
クラフト「ノンノン!ちゃんと人間だし!同じ受験生だよ!それより足引きずってるけど?もしかして

怪我してる?」

「そうなの、さっきの爆発で落ちてきた瓦礫に当たっちゃって……たはは……」

クラフト「自力で逃げるのは無理そうだな(治してる暇もないな……仕方ない、変身アキレスデー)

ド!」シユインシユイン(変身音)

「えっなにになに!?!」

クラフト「よしじゃあ「うはーなにになに!?!別のに変身したあ!!」うん驚くのは後でね……では恥ずか

しいと思うけど失礼」ひよい

「えっ?……うわっ!ちよっ／＼／＼」

クラフトは足を怪我している女子をお姫様抱っこし安全な場所まで空を飛んで運ぶ。

「えーすごい!?!空飛んでる!」

!!!
「!!!」

(プ) マイク『終つゝ了つゝ!!』

巨大仮想敵かそうヴァイランを真つ二つに切ったあと試験終了の合図が響き渡る。

クラフト「終わったー!…あゝ疲れた」

他受験生「あいつ規格外すぎるだろ:」「ちつ運よく強個性なだけだろ…:」「あれを切るつてすげえな」

巨大仮想敵かそうヴァイランを切ったクラフトに驚愕する受験生もいれば嫉妬の声を出す受験生もい

た。そんな声を気にせずクラフトは先ほど助けた女子の元へ向かった。

クラフト「へい先ほどぶり」

「……………」

クラフト「?…おーい」

「えっ!? ああごめん! さっきのすごいね! 私びっくりしちやったよ!!」

クラフト「あーまあ俺もあそこまで出来るとは思わなかったわ」

「えーそれ嫌味にしか聞こえないよ(笑)」

クラフト「んーホントの事なんだけどな…まあいいやそれより足大丈夫?」

「ああ足ならもう…っ!…あははやっぱだめみたい」

クラフト「あーじゃあ足だして、治すから」

「えっ? 治すつて君の個性つてロボットの個性じゃないの?」

クラフト「あーなんて言ったらいいのかな、まあいいや裾めくるぞ」

「あつちよ／＼……………」

負傷している足のズボンの裾をめくると足首の辺りが腫れておりクラフトは個性を使つて腫れを治す。

て腫れを治す。

クラフト「これでよし…:どうだ痛みとかまだあるか?」

「うっうんもう大丈夫／＼ありがと…:／／」

クラフト「ならよかつたんじゃ俺はこれで」

???? 「あつねえねえ!」

クラフト 「なに?」

芦戸 「名前聞いていい?わたし芦戸三奈!よろしく!」

クラフト 「俺は機神クラフトよろしく」

芦戸 「ねえねえよかったら連絡先交換しない?」

クラフト 「まあいいけどとりあえず戻ろうぜ」

芦戸 「あつそれもそうだねー(笑)」

試験が終わったためあとは帰るだけなので2人は更衣室に戻る。

クラフト 「ふー…さて響香はどこかな?」

芦戸 「あつ機神ー!」 タツタツタツ…

クラフト 「おー芦戸」

芦戸 「もー連絡先交換しようって言ったじゃん!」

クラフト 「はははくすまんすまん、試験終わったからボーっとしてしまつて(笑)」

芦戸 「もーほら携帯出せー(笑)」

芦戸と楽しく話しているとそこに耳郎がやってくる。

耳郎 「あついた…おーいクラフ…ト…」

クラフト 「ん?…おー響香!試験お疲れさま、どうだった?…:…響香?」

耳郎 「クラフト…その子はだれ?」

クラフト 「えっ?あーすまん紹介するよ、試験会場が一緒にまあ色々あつて知り合つたんだ」

芦戸 「初めまして、わたし芦戸三奈!よろしくね!」

クラフト 「芦戸紹介するよ、彼女は俺の恋人の耳郎響香だ」

耳郎 「初めましてウチは耳郎響香よろしく…(ここここつ恋人つて言った／＼／＼)」

芦戸 「!…へえー機神つて彼女いたんだ」

クラフト「まあな、てか芦戸は彼氏とかいないのか？可愛いんだし普通にいそうなんだけど？」

芦戸「かっかわっ／＼…へへっありがと！でもまだいないんだよね！」

3人で話をしているとそこに拳藤がこちらを見つけてやってくる。

拳藤「おっ機神ー！」

クラフト「おー拳藤、試験おつかれ〜」

拳藤「機神も試験お疲れ！…えっとそちの人はどちら様？」

クラフト「ああ彼女は「わたしは芦戸三奈！よろしくね！機神とは同じ会場だったんだ！（また別の女

子が！機神つてモテるのかな？）というわけだ」

拳藤「へー…私拳藤一佳よろしく！（まさかこの子、機神に気があるんじゃない）」

耳郎（やばい…なんか増えてる気が…クラフトの我儘は受け入れるけど今は独り占め

したいな…）

耳郎は恋敵が増えるのではないかと不安になる。その後、駅まで4人で一緒に行き芦戸

と拳藤を見送る。

芦戸「じゃあ次会うときは合格したら雄英だね！」

クラフト「おう、全員合格してるといいな！」

拳藤「…またね機神、それに耳郎…」コツコツコツ…

耳郎「またね芦戸に拳藤…」

芦戸「うんまたねー機神に耳郎！じゃあね！」タツタツタツ…

クラフト「んじゃ俺らも帰るか…響香？」

響香「…ぎゅっ…」

帰ろうとすると耳郎が腕の裾を掴む。

クラフト「…何か食べていく？」

耳郎「〇×カフェの限定パフェで許す…」

クラフト「近くにある美味しいって評判のカフェだね、いいよ行

こっか」スツ…

耳郎 「うん／＼…」

猫が拗ねたような耳郎の手を握りカフェに向かう。

——○×カフェ——

店員 「お待たせしました季節限定パフェとメロンソーダでござ
います！」カチャ、カタ…

クラフト 「ありがとうございます」

耳郎 「どうも…」

店員 「それではごゆっくりどうぞ、失礼します！」コツコツコツ

…

クラフト 「さっ響香、食べなよ」

耳郎 「うん…いただきます…」カチャ…ぱく…モグモグ…

クラフト 「おいしい？」

耳郎 「うん…」

クラフト 「おーそれはよかった♪」

そうしていると耳郎があることを聞いてくる。

耳郎 「…ねえウチってさ…」

クラフト 「ん？」

耳郎 「その…面倒くさい女…かな？」

クラフト 「……なんで？」

耳郎 「いやクラフトがさ…他の女子と一緒にいるのを見てさこ
んな…」

クラフト 「ん…別に普通なんじゃない？」

耳郎 「えっ？…」

クラフト 「要するにさ…俺が他の女子といたことに響香がヤキモチ
とかを抱いたってことで

しよ…」

耳郎 「うっ…うん／＼」カアア

クラフト 「それって裏を返せば俺の事をすごく想ってくれているっ
てことになるよね（笑）まあ流石

に他の女性とまったく関わるなって言われたら俺も困る

けど(笑)

耳郎 「想って!?…」カアアアアア

クラフト「それに俺も我儘言ってるし響香のヤキモチは可愛いもんだと思うよ」

耳郎 「かつ可愛い…」

クラフト「それにさ…」

耳郎 「それに?」

クラフト「今は2人だけじゃん、いろんな意味で(笑)」

耳郎 「!!?」それはズルい」ゴニョ

ゴニョ

クラフト「まあヤキモチをやいていた響香も猫みたいで可愛かったけど(笑)」

耳郎 「んなつ!猫みたいって」クラフトのバカー!」ヒュンヒュンツ!

クラフト「わっごめんて!(笑)」

ヤキモチをやいた耳郎であつたがクラフトと一緒にいる時間を楽しみ心を満たすので

あつた。

・
・
・
・
・

——拳藤宅——

拳藤 「やられた…耳郎を甘くみていた…」ボフィン…

ベッドに倒れこみながら己の甘さを呪う拳藤。

拳藤 「いやまだだ…別に彼女が2人いちゃいけないなんて決まりはない!まずは機神に私の想い

を伝えなきゃ…伝えてOKだったら私は機神の…」

うおおあああ想像したら恥ずかし

さが!」ジタバタッ!

—— 芦戸宅 ——

芦戸 「ふへえ、疲れたあ……」 すりすり……

試験で怪我を負ってクラフトが治してくれたところをなんとなく撫でる芦戸。

芦戸 「助けてくれる優しい男子かと思ったら戦闘狂っぽい一面もあつて……容赦なく裾まくつ

て……ぬあああ！なんか扉が！開いちやう！つてかよくよく思い出したら私お姫様抱っこ

されてんじやん……！！……《カアアア》しかも可愛いって言われたし……ふお

あああああ……！！」 ジタバタツ！

1人の女子は自分の想いを伝えようと決心するが勝手に自爆もし、もう1人はまだ好意

かどうか微妙だがモヤモヤし、なにかの扉が開きかけるのであつた。

第9話 体力テストだ!…ついに拳藤が!?

—— 雄英高校 会議室 ——

雄英教師 「入試実技総合成績でました」

雄英教師 「救助ポイント0で3位とはなあ…」

雄英教師 「後半になるとほとんどの受験生が鈍っていく中で派手な個性で引き寄せ迎撃し続けた、

タフネスの賜物だ」

雄英教師 「逆に敵ヴァイランポイントは25ポイントとこの中では一番低い
が、救助ポイントのおかげで2

位…火の個性かと思ったがああの巨大ロボットを一撃でぶっ飛すパワーも持っている…複数

合型か?」

雄英教師 「だけどその衝撃で腕がボロボロになっていたわ…まだ力に体が追いついてないのかし

ら?」

雄英教師 「まあだけどやっぱりすごいのは彼だね」

雄英教師 「過去にアレに立ち向かったのは何人かはいたけど、真つ二つに切ったのはいなかった

な!」

雄英教師 「思わずYEAHって言っちゃったぜ!」

雄英教師 「敵ヴァイランポイント85ポイント、救助レスキュー40ポイントで合計125ポイント。過去の成績と比べても

トップクラスだね」

雄英教師 「彼は特選だけど実技の試験を一般で受けたいと申し出たらしいね、最初はどんな自信家

かと思ったが文句なしだね。いくら特選といっても実技がダメだったら不合格だし…」

雄英教師 「しかし一体どういう個性だ?ロボットの個性かと思ったがビームみたいなものを出した

り、煙のようにもなってたぞ?」

雄英教師「細けえことはいいんだよ！俺はあいつ気に入ったぜ！！」
雄英教師「YEAHっていつちやたしなー」

雄英教師（つたくわいわいと…しかし映像見ただけでもアイツの個性はすごいな…本人に話す気が

あるなら聞いてみないと…）

雄英教師「さあ話もいいけどこれから成績や各々の性格等を考慮して色々決めないと！」

合格者に通知を送るため奔走する雄英教師達であった。

．．．．．
くく入試試験終わりから約一週間後くく

——クラフト宅——

クラフト「そろそろ合否の通知がくるかな」

クラフトはポストに通知が来ているか確認しに行く…

パカッ…

クラフト「おっ？これは…雄英からの通知じゃん」

通知が来ているのを確認しさっそく自室で封筒の中に入っていた丸い装置の付け方をい

じっている…

クラフト「さて中身は原作だと機械だったけど…《ビリリ…》えーとどうやってつけ

るんだ？」カチャカチャ

ポチッ…ブウン！

クラフト「うおつまぶしっ！目がっ目があ！」ガタタッ！

装置のスイッチを押したことにより映像が投影されるが
投影されるレンズの部分を

ちようど目で見ていたため眩しさをやられてしまう。

(オ) マイト『私が投影された!』

クラフト「今それ所じやないよオールマイト…」

机に伏せながら目を回復させるクラフト。

(オ) マイト『なぜ私が映し出されたかというところの度雄英に教師として勤めることになってね!』

クラフト「知ってる…やっと目が回復してきた…」

(オ) マイト『さて機神少年! まずは合否だが…文句なしの合格だ!!
敵ポイント85ポイント、

さらに我々が見ていたもう1つの審査項目救助ポイントレスキュート! しかも審査制!!

機神クラフト救助ポイント40ポイントで合計125

ポイント。あと君は特選だが試

験は一般で受けたため成績トップとして扱うよ!』

クラフト「なるほど…」

(オ) マイト『来いよ機神少年! ここが君のヒーローアカデミアだ!!』

クラフト「いよいよか…」ドツ…ドツ…ドツ…

いよいよ雄英でヒーローを目指すことに気分が高揚し心臓の鼓動が大きくなる。その

後、耳郎や緑谷達から合格したと聞き互いに喜んだ。

雄英に合格したその数日後、耳郎が俺の家に遊びに来た。

——クラフト宅——

ピンポーン…

クラフト「はいはい…」ガチャ…

耳郎 「きたよ」

クラフト「おーいらっしやい! さあ入って入って」

耳郎 「おっ邪魔します…／＼(きつ緊張してきた)」

クラフト「それにしても急に俺ん家行っていい? なんてどしたの

？」

耳郎 「えっ!?!／＼あついやそのクラフトの部屋どんな感じかな
くって気になってね!」

クラフト 「あくなるほど…: つつても特にそこまでこだわりはないか
ら普通だと思っぞ? ああ適当に

座っててくれ飲み物出してくるから」

耳郎 「うん分かった…: ん? ねえクラフトあの部屋もしかしてあ
んたの自室?」

クラフト 「うん? ああそうだけど?」

耳郎 「見ていい?」 ワクワク

クラフト 「ああ別にいいぞ、棚とかの物にはあんまり触れないでほ
しい」

耳郎 「わかったよ… (では)」 ガチャ…

クラフトの自室に少しワクワクしながら入る耳郎。

耳郎 (: : 漫画やフィギュア? : : あとゲームもある : : いわゆるオ
タク趣味っていうやつかな?)

あーでも漫画以外の本も結構あるなあ、個性関連にここら
辺はミリタリー関連かな? い

ろいろあるな : : あと意外と部屋きれい : :)

クラフトの部屋に感心しているとその部屋の持ち主から
声がかけられる。

クラフト 「おーい響香、飲み物用意したよ」

耳郎 「あっうんありがと!」

クラフト 「俺の部屋どうだった? そんなに面白くなかったろ?」

耳郎 「えーそうでもないよクラフトの趣味とか分かったし割と
面白かったよ!」

クラフト 「でも俺の趣味とかって女性からするとあんまり受けはよ
くないでしょ?」

耳郎 「んーウチの部屋も趣味の塊だからどうなのかな (笑)」

クラフト 「ははっ (笑) まあ座りなよ」

2人はリビングのソファに座りくつろぐ。

クラフト「で…響香は今日はなにをしにきたの？2人きりでこうするの俺は嬉しいからいいけ

ど…何か目的があつて来たんじゃないのかな…つて俺は思つたんだけど？…」

耳郎 「!?《ギクツ!》…いついや2人でこうしたいなくつて…／(なんか今日のクラフト鋭い…)」

クラフト「ふくん…まあいいけど(笑)」

そのまま2人はテレビを見ながらくつろぎ続ける。

耳郎 (あつつぶなー…ウチが今日クラフトに会いに来た目的がファーストキスすることつて

バレるところだった…)

耳郎はクラフトに2人目や3人目の彼女が出来ることは受け入れるがやはりなにかと

リードしておきたいという気持ちからこのような行動に出たのであつた。

耳郎 「(とは言つてもいきなりキスつていうのもあれだし…何かきつかけがとりあえず…) あつ

ねえクラフトうちコスチュームのやつまだ考えてるんだけど一緒に考えてくんない？」

クラフト「おついいよ俺でよければ!」

耳郎 「ありがと! (よし…ここからなんとかそういう雰囲気…)」

クラフト「ブーツに指向性スピーカーを付けるのはいいね、あとブーツの先端を安全靴みたいに金

属いれて丈夫にしておいたほうがいい。防護性能は高い方がいい」

耳郎 「そっかそれもそうだね!ありがと! (やつぱそう簡単にはいかないか…)…ふう…」

クラフト「疲れた？」

耳郎「ちよつとね…」

クラフト「……（あつそうだ）…響香、響香」ぼんぼん

あぐらをしてしている自分の足を軽く叩きながら耳郎を呼ぶ。

耳郎「んっなに？」

クラフト「ここ座って（わ、わ）」

耳郎「えっそこって…（ククククラフトの足のなか／＼！）」

クラフト「1回やってみたかったんだ！」キラツキラツ

耳郎「うっうん／＼（なんか目キラキラしてる）」トツ…トツ

…

ゆっくりとクラフトの足の中に座る耳郎

ぼすん…

クラフト「おー／＼…誘っておいてなんだけどちよつと照れるな／＼

耳郎「／＼／＼／＼（うう／＼ウチはもつと恥ずいわ／＼／＼）」

カアアア

クラフト「…よつと」のし…ぎゅ

耳郎「ちよつクラフト／＼／＼」ドキッ！

クラフトは耳郎に軽くのしかかる様に抱きつく。

クラフト「なに？」

耳郎「いや／＼／＼いきなり…／＼（あれ…これはある意味チャ

ンスなんじゃ…よーし…）」

クラフト「響香？」

耳郎「…うりやつ！」グイッ

クラフト「おっ？」「ぐらっ…」

耳郎は体をクラフトの方へ向け、両手で肩を押し床へ押し

倒す。わかりやすく言えば床

ドンに近い体制である。

ばたんっ…

クラフト「えーと響香？」

耳郎「いつもウチがやられてばっかだからね…／＼」

クラフト「俺何かしたっけ？」

耳郎「いつも可愛いとかを言いすぎなの！」

クラフト「えー事実じゃん(笑)」

耳郎「!?／／／／そういうところ!!」バシバシッ!

クラフトの胸を叩く耳郎。そして真剣な顔つきになる。

クラフト「いたいたい(笑)」

耳郎「……ねえクラフト……あなたの我儘を受け入れるって言ったけど……あなたを独り占めって

いうのかな? まあそういう気持ちはウチにも全然あるんだよ……」

クラフト「……………」

耳郎「なんかあなた少し鈍そうだから教えてあげる……あなたに好意を持つてる女子って意外に

いるんだよ」

クラフト「!!……………」

耳郎「その顔はマジでって顔だね？」

クラフト「よくお分かりで(笑)」

耳郎「……やっぱさ……初めてって大事だと思うんだよね……／／」

クラフト「?……………響香?」

耳郎はそういうとクラフトの頬に両手を添え顔を近づける。そして顔が鼻先が触れる距離。

離まで近づくと2人の唇がついに重なる。上手いも下手もない唇をつけただけのキスだ

がこれが2人のファーストキスになった。

クラフト「……………(えっいま……キスした?)……………／／／／カアアア……」

耳郎「／／／／／／／／／／(キキツキスッしししししちゃった!!／／／)カアアア……ちらっ……」

クラフト「……………これは……耐えられねえよ……／／／／／」

耳郎「(あれ?クラフトがここまで照れるの初めてかも／／／)

…クラフトく？」

クラフト「…なに／＼？」

クラフトは自分の顔を両手で覆っていた。耳郎はそれを上から覗き込む。

耳郎 「…しちゃったね…キス／＼」

クラフト「これは予想外だよ／＼…まさか響香からくるとは思ってもいなかった…／＼」

耳郎 「いつも恥ずかしいのに可愛いって言うてくるお返しだよ／＼」

クラフト「…ふうー…なあ響香…」

耳郎 「ん？なにクラフト？」

クラフト「お互い初めてキスしたわけじゃん？でもまだ初めてだから練習って必要じゃない？」

耳郎 「えっそれってどういう…」

クラフト「よっ…と」グイッ…

クラフトは起き上がり耳郎の腰に左腕を回し体を引き寄せ密着させる。

耳郎は今クラフトの腰の後ろに足が回っている。いわゆる抱っこに近い体制である。

耳郎 「ちよっ！クラフト／＼」

クラフト「なに？」ススツ…クイ

耳郎 「(あっヤバいかも…／＼)その…恥ずかしいというか…／＼」

空いている右手で耳郎のあご下をウィンググラスを持つように添え、首にしているチョー

カーに指を一本掛けて簡単に逃げられないようにする。

クラフト「じゃあ慣れておかないと」

耳郎 「くく／＼／＼その…お手柔らかにし…ん…／＼」クイ…

その後、約5分もの間キスの練習という名目で仕返しをする。

耳郎 「……んっ…はあ…やっど終わり？／＼（ヤバい…頭クラクラする／＼）」

クラフト「……自分で言うのもなんだけど俺って舌めっちゃ長いんだよね…爬虫類みたいに…」

耳郎 「へっ？……まってまってまさか…／＼／」

クラフト「そのまさかです」

耳郎 「ちよまつt…んん!!…／／／／／／」

その後また約5分間、別のキスを蹂躪するかのよう練習（仕返し）をした。

クラフト「（やっべえやりすぎたかも…）響香…大丈夫…夫？」

耳郎 「だっ…だいじょ…う…ぶに…見える？」（プルプル）

クラフト「あ…そのゴメン」

耳郎 「まさかキスしてる時に耳もいじってくるなんて…変態」

クラフト「ゴメンで、それより立てる？」

耳郎 「無理…足に力はいらぬい…体もあんまり…」

クラフト「そっか、んじゃ…よつと！」ヒョイ…ボフィン！

耳郎 「ひゃっ／」

クラフトはキスをした時の体制のまま耳郎を抱えてソファに座りなおす。

クラフト「…ひゃっ？」

耳郎 「／／／／／…忘れろ今のは!!／／てか急に持ち上げるな!!」

クラフト「ほいほい、まあ体が楽になるまでしばらくこのままでもいいや」

耳郎 「このままって！／／うう…今度またなにか奢ってよね…」

クラフト「お安いごようで……くああああ……なんか眠くなってきたな……響香ごめんけどこのまま

転がって少し寝るね」

耳郎 「えっまってそれじゃウチも……わっ！／＼」ゴロン

クラフトはそのまま寝転がり、耳郎もその横に一緒に寝転んでしまう。

クラフト「えーと毛布は……あった……」ばさっ

耳郎 「ちょクラフト！／＼（これって……添い寝じゃん！／＼）」

クラフト「ごめん響香……眠気には……zzz……zzz……（☒☒）スヤア」

耳郎 「はやっ！……／＼／＼（……勝手なんだから／＼……）……zzz……zzz……」

文句を言いつつ思わぬ形で添い寝が出来たことに若干嬉しくも思いつつ、そのまま一緒

に昼寝をする2人であった。そんなこんながありつつ、日は過ぎていきついに雄英に入

学する日がやってきた。

・
・
・
・
・

—— 雄英高等学校・通称【雄英高校】 ——

くく入学初日くく

クラフト「改めてみると校舎アカいよなー、そういえばクラスどうなるんだろ？」

耳郎 「クラスか……一緒だといいいね」

耳郎と一緒に登校し雄英に着くと玄関近くの掲示板に貼ってあるクラス表を確認する。

クラフト「えくと……あった俺はA組だ！」

耳郎 「ウチは……ウチもA組！やった一緒だねクラフト！」ニ

コッ!

クラフト「おっおう! (笑顔ヤベえ…)

互いのクラスが一緒のことを喜んだあとA組の教室に移
動する。

クラフト「マジでデケえ…」

耳郎「体が大きい人とかの為かな?」

クラフト「あーバリアフリーってやつか? まあ入るか」

耳郎「うん、どんな人がいるんだろーね (笑)」

ドアが大きいことに驚きながら教室に入る。

ガララ:

ドアを開けると視線がこちらに向けられる。そこにメガ
ネをかけた男子が来る。

クラフト (まだそこまで来てないな)

????? 「おはよう!」 カツカツカツ

クラフト「ん?」

????? 「俺は市立聡明中学出身の…おや君はもしや試験の時の!」

クラフト「おはよう…とりあえず自己紹介するよ俺は機神クラフト
よろしく」

耳郎「ウチは耳郎響香、よろしく」

飯田「俺は飯田天哉だよろしく! 席は教卓の上にあるプリント
に書いてあるぞ!」

クラフト「おっサンキュー飯田」

席を確認すると俺の席は廊下側とは逆の一番左側の前か
ら3番目だった。

教卓

葉隠 障子 尾白 青山

爆豪 耳郎 上鳴 芦戸

機神 瀬呂 切島 蛙吹

緑谷 常闇 口田 飯田

峰田 轟 砂藤 麗日

八百万

クラフト「この席か…」ガタッ

耳郎「席近くていいね♪」

クラフト「おうそうだな(笑)」

席が近いことに喜ぶ耳郎。すると前の席の透明な女子とガタイが良い男子が話しかけてくる。

障子「俺は障子目蔵だ、よろしく」

葉隠「私は葉隠透、よろしくね!」

クラフト「俺は機神クラフト、よろしく」

耳郎「ウチは耳郎響香、よろしくね」

葉隠「ねーねー機神くんって試験に出てきたあのデカイロボット真つ二つに切った人だよ

ね!？」

クラフト「えっ?ああそうだよ、もしかして葉隠って一緒の会場だった?」

葉隠「そうだよー!あれビックリしちゃったよ!!」

耳郎「えっクラフトあれ倒したの!？」

障子「なに!?!アレをか!?!」

クラフトが巨大ロボットの倒したことに驚く耳郎と障子。

そこにこの話が聞こえたのか

何人かがこちらによって来た。

飯田「機神くん!君もあれを倒したのか!？」

切島「おめーあれ倒したのか!?!あつ俺は切島鋭児郎よろしくだ

ぜ!!」

尾白「アレを倒すってすごいな!あつ俺は尾白猿夫!よろしくな!!」

クラフト「俺は機神クラフトよろしくな。ところで飯田、君もつてことは誰か俺以外に倒したの

か?。(おそらく緑谷だろうな…)」

飯田「ああ俺が試験が説明されているとき注意した彼がロボットの吹っ飛ばしたんだ!だがそ

の反動なのか腕がボロボロになっていたが…」

クラフト「あーなるほど（100%出しちやったのか（汗））」

みんなと楽しく話していると爆豪が教室にやってくる。

ガララ…

クラフト（おつ爆豪だ）

爆豪 「……………てめえは!!なんでここにいやがる!!」

クラフト「いや〜お久しぶり（笑）なんているて合格したからだよ

〜」

爆豪 「ああ!?!なんだと!!」

飯田 「機神くん知り合いかね?」

クラフト「だいぶ前にちよつとね、あー爆豪お前の席俺の前だぞ」

爆豪 「あ×あ!!なんでてめえが後ろなんだよ!!」

クラフト「俺に言われてもそう決まっているんだし」

爆豪 「ヂイツ!!」コツコツコツ…ガタツドガツ!!

爆豪は不満たらたらに席に着き足を机に乗せる。

飯田 「君!!机に足をかけるな!雄英の諸先輩方や机の製作者方に失礼とは思わないのか!？」

爆豪 「あ×あなんだてめえはいきなり!!思わねえよ!!どこ中だよ端役が!!」

飯田 「ぼつ…俺は市立聡明中学出身、飯田天哉だ!」

爆豪 「聡明く〜!?!クソエリートじゃねえか!ぶつ殺し甲斐があるな!!」

飯田 「ぶつ殺!?!君酷いな本当にヒーロー志望なのか!？」

クラフト「顔はもろ敵サイランだけどなく（笑）」

爆豪 「あ×あ×あ×!?!なんだとテメエもういつぺん言ってみろ!!」ボボツボソツ!!

飯田 「機神くん人をあまりおちよつてはいけない!それから爆豪くん校内での個性使用は原

則禁止である!」

このように騒いでいると緑谷が教室の入口に来ていた。

飯田 「おや彼は…」コツコツコツ…

クラフト（あつ緑谷だ）

爆豪（デク…）

飯田 「おはよう！俺は市立聡明中学の…」

緑谷 「聞いてたよ！僕は緑谷出久…よろしくね飯田くん」あたふた

飯田 「緑谷くん…君はあの試験の構造に気づいていたのか？…俺は気づけなかった！君を見誤っ

ていたよ悔しいが君の方が一枚上手だったようだ…」ギリッ

緑谷 （いや気づいていなかったよ…）

緑谷と飯田が入口で話していると…

????? 「あーそのもさもさ頭は!!地味目の！」

緑谷 （いい人だ!!制服姿やっべええー!!）

????? 「プレゼントマイクの言ってた通り受かっていたんだね！そりやそうだパンチ凄かったも

ん!!」粉碎！粉碎！

緑谷 「いやっあの…あなたの直談判のおかげで…／／／」

????? 「えっなんで知ってるん？」

緑谷 「いやその…」

爆豪は緑谷を見て合格した後のことを思い出す。

《うちの学校から2人も英雄進学者がでるとはねえ！》

《無個性のテメエがどんな手え使いやがった!!》

《おかげで俺の将来設計がズタボロだよ…他行けっってい

たろーが!》

《言ってもらえたんだ君はヒーローになれるって！君は

勝ち取ったんだって!》

《だから僕は行くんだ!!》

爆豪 「……………（デクのくせに反抗なんかしやがって…ぜってー

何か裏があるはずだ…）」

????? 「今日って入学式とかガイダンスだけかな？先生ってどんな人だろうね？」

????? 「お友達ごっこがしたいなら他へ行け……ここはヒーロー科だぞ」
ぢゅっ!

寝袋に入った男が急に現れ栄養補給のゼリーを一気に吸い上げる。

クラス 「……(なんかいる!!)」「……」

相澤 「はいみんなが静かになるまで7秒掛かりました、時間は有限……君たちは合理性に欠く

ね……担任の相澤消太だよろしくね」

クラス 「……(先生で担任だった!!)」「……」

緑谷 「てことはこの人もヒーロー……(でも見たことないぞこんなにくたびれている人)」

相澤 「さっそくだけでも体操こ服れ着てグラウンドに出ろ」

相澤が体操風を寝袋から取り出しグラウンドに出るように指示をするがそこに隣

のB組の担任がやってくる。

????? 「そうはさせんぞイレイザー!」

相澤 「ちっ……」

(ブ)キング「失礼したA組の諸君!俺はB組の担任のブラドキングだ!イレイザー!お前また生徒を入学

式に出さずに体力テストするつもりだったろ!」

相澤 「そうだが何が悪い?後でB組にも言うつもりだ」

(ブ)キング「それは入学式の後でも出来るだろ?今年から座学以外は大体合同で授業をやること

になったんだ!足並みをそろえなければいけない……それに校長からも言われてあるし

な!!」

相澤 「余計なことを……」

(ブ)キング「さっA組の諸君もこの後入学式があるから移動したまえ!」

ブラドキングのおかげでA組は入学式を欠席することはなくなり無事に入学式をするこ

とができた。そして入学式が終わった後、A組B組の個性把握テストが始まる。

——グラウンド——

A組B組 「二二「個性把握テストオ!?!」「二二」

相澤 「君らも中学のときやってるだろ? 個性禁止の体力テストを。国は未だに画一的な記録を

取って平均を作り出している実に合理的じゃない。まあ文部科学省の怠慢だよ」

(ブ)キング「諸君にこれからやってもらうのは個性有りの体力テストである」

相澤 「んじゃ入試の実技トップは…機神だったな、お前中学のときのソフトボール投げ何m

だった?」

クラフト「えくと確か70mです」

相澤 「じゃ個性使ってこれ投げろ、円から出なければ何してもいいから」ポイツ

そう言うのと機械でできているボールを渡してくる。あとクラフトが実技トップと言われ

た瞬間何人かは鋭い目でこちらを見てきた。爆豪は驚愕の顔から殺気を放つかのように

睨んでくる。

爆豪 「(はっ?…俺じゃなくてあんな奴が俺より上だと!?!…)ク

ソが…」

クラフト「分かりました(う〜んどうやって飛ばそうかな…能力系で何かいいやつ…あっブキブキ

の能力ちようどいいな!よしブキブキの能力!)」

クラフトはブキブキの能力で片方の足をバズーカ砲にし、球をセットすると上段蹴りの

ようにバズーカを空に向けて構える。

A組B組 「なにあれ? 大砲?」「武器の個性か?」「なかなか強力な個性だね!」

クラフト「じゃついきまーす…発射!!」

ドオンツ!!…ヒユウウウウウウウウウ…ポトン

勢いよく発射されたボールは空の彼方へ飛んでいき肉眼では確認出来ない距離まで飛ぶ。

で飛ぶ。

ピピッ!

相澤 「まずは己の最大限を知る…それがヒーローの素地を形成する合理的手段」 スツ…

相澤が手に持っていた端末を見せるとそこには1173mと画面に出ていた。

A組B組 「はあーキロとマジかよ!」「個性使えるんだ!面白そう」「すげー流石ヒーロー科!!」

相澤 「面白そうか…ヒーローになる為の3年間そんな腹づもりで過ごす気か?」

(ブ) キング 「はあ…(またか…)」

相澤 「よし…トータル成績最下位の奴は見込みなしと判断し除籍処分しよう」

A組B組 「二二はああああああ!!」「二二」

A組B組 「成績最下位除籍って!?!まだ入学初日ですよ!」「いや初日じゃなくても理不尽すぎ

る…」

(ブ) キング 「イレイザーお前はまた…」

相澤 「生徒の如何は教師の自由…それに自然災害、大事故、身勝手な敵 サイラン e t c. …いつどこから

やってくるか分からない厄災…日本は理不尽だらけだ。そういうピンチを覆していくの

がヒーローだ…放課後おしやれなカフェで談笑したいなら諦めろ、雄英はこれから3年

間君たちに全力で苦難を与える。 Plus Ultra

さ…全力で乗り越えてこい」

飯田 (洗礼と言うには重すぎる…これが最高峰というやつか

…)

相澤 「さてデモンストレーションは終わりだ、ここからが本番だ」

いきなりの除籍宣告に動揺するA組B組の面々、だがそれでも最下位は除籍という体力

テストは始まる。

——第1種目50m走——

測定ロボ☒位置ニツイテ…ヨーイ…☒パアーンツ!

飯田 「ふうふうんんん!!!」シユイイイイイイン!

測定ロボ☒3秒04!☒

飯田 (50mだと3速までか…)

飯田天哉…個性【エンジン】

その名の通り足のふくらはぎにエンジンがあるぞ!足が

速い!

燃料はオレンジジュース!

相澤 (まっ水を得た魚、他がどうするか見物だな…次はあいつか…)

クラフト 「さてと…おっ隣は爆豪か!」

爆豪 「てめえか…ぶっ殺す!」

クラフト 「はははーやってみろ(笑)」

爆豪 「《イラ☒ア》てめえ…」

測定ロボ☒位置ニツイテ…ヨーイ…☒パアーンツ!

爆豪 「爆速!!」ボンツボンツボンツ

クラフト (ピカピカ!) シュツ…

測定ロボ☒1秒23!☒…☒4秒13!☒

A組B組 「はあー1秒って!?!」「武器の個性じゃないのか?!」「瞬間移動!?!」

1秒というタイムに驚愕するクラス一同。

爆豪 「……」ギリリツ…

相澤 「ほう…(武器のような個性かと思いきや今度は瞬間的に移動する個性…マジでどういう

個性だ?」

緑谷 「機神くんすごいね!」

クラフト 「サンキュー緑谷!てか次は緑谷だろ?」

緑谷 「うんそうなんだけどちよつと聞きたいことがあって…実は…」

クラフト 「あーなるほど確かに…だったら…を…:…こうしたらどうだ?」

緑谷 「そうかなるほど!ありがとう機神くん!」

クラフト 「お安いごようよ!」

クラフトからのアドバイスのおかげで緑谷は意気揚々と測定に挑む。

飯田 「おや?緑谷君は靴を脱いでるぞ?」

???? 「ほんとだなんだろう?」

切島 「おーほんとだ、だけど男らしいぜ!」

爆豪 「はっ!どうせ何もできやしねえよ!あいつは無個性だぞ!」

飯田 「無個性?彼が入試で何をしたのか知らないのか!」

爆豪 「ああ!」

クラフト 「走るぞ」

測定ロボ☒位置ニツイテ:☒

緑谷 「絞るように…一点に集中:ブツブツブツ」

測定ロボ☒ヨイ:☒パアンツ!

緑谷 「火足墳式!」かそくふんしき ボツ!シューウウツン!!
【火足墳式】

緑谷出久の技の1つ火足の機動力を高めたもの。火足はもともと足の裏から火を噴射さ

せ空を飛ぶ技であったが、噴射させているだけなのでそこまでスピードが出ない。それ

をジェット機のように噴射する部分を絞り込み高い速度を確保したのが火足墳式かそくふんしきである

る。ただし速度が速いかわりに小回りなどの旋回能力は

落ちているぞ！

測定ロボ☒2秒85!☒

A組B組 「おおすげえ!」「ジェットみてえ!」

飯田 「試験の時にみた個性とはまた違うな? 複合型だろうか?」

???? 「すごいね! めっちゃ早かったよ!」

爆豪 「!!…… (ありえねえ!? なんでデクに個性が!? 個性の発現は4歳までのはずだ!?)」

緑谷の記録うんぬんより個性があることに驚きが隠せない

爆豪。

緑谷 「ふう……」

クラフト 「緑谷— なかなかよかったじゃん!」

緑谷 「ありがとう機神くん! うまく行ってよかったよ」

爆豪 「どーいうことだデク!! なんでテメエが!!」 ボオン!

相澤 (ちっ……!)

爆豪が緑谷に突っかかって行くのを止めようと相澤が動こうとするが途中でやめる。

緑谷 「ひっ!」

クラフト 「イトイト! …… はあまったく…… お前は気に入らないことがあつたら何でもかんでもそう

うするののか?」 シュバツ!

爆豪 「《ガクン!》ん なっ! 体が! …… これはあん時の!」

相澤 (動きを止めた…… だがなにも見えない…… 見えない何かで止めているのか?)

クラフト 「それは今は別にいい、なんで突っかかってきた?」

爆豪 「あ☒あ!?! なんでデクに個性があるんだよ!?! そいつは無個性だったはずだ! 個性が出るのは

4歳までのはずだ!!」

クラフト 「なんで個性があるってそりゃ発現したからだろ? それに4歳までにしか発現しないのは間

違いだ。それはあくまで目安みたいなもんだ」

????? 「その通りデース、アメエリカでも無個性ダツタ人が実ハ個性をモツテいたという話は意

外によくアリマース！」

クラフト「…えーとあなたは？」

角取 「Oh！モウシワケございません！ワタアシはB組の角取ポニーとイイマス！ヨロシクデ

ス！」

クラフト「A組の機神クラフトだ、よろしくな」

相澤 「まあそういう事だ…爆豪…暴れるなら成績関係なく除籍処分にするぞ」

爆豪 「!?…ヂツ！」

相澤 「機神もういいぞ、時間がもつたいない」

クラフト「あつはい…緑谷大丈夫か？」

緑谷 「うっうんありがと機神くん（；；；）」

爆豪 （……ついこの間まで道端の石ところだったろうが…石ところだったろうが!!）

相澤が爆豪に暴れたら除籍という釘を刺したことにより事態は収束し測定は続く。

——第2種目握力測定——

A組B組 「すげえ540キロってあんたゴリラ!?いやタコか!!」
「タコってエロいよね…」

クラフト「LBX…ハカイオー絶斗」《シユインシユイン》（変身音）
…ふっ！

記録：980キロ

A組B組 「変身した!」「またすげえ記録だな」

——第3種目立ち幅跳び——

クラフト「(バネバネ!)うらっ!」タタタタタツ…バヨオ〜ン(バネの音)

記録：22m

A組B組 「今度は足がバネみたいになったぞ」「もはや何でもありなんじゃね?」

——第4種目反復横跳び——

???? 「ひゅうううううう」ぽよぽよぽよぽよ

頭が葡萄みたいな頭の男子がものすごい速さで動く。これは特に思いつかなかつたので

普通にした。

A組B組 「普通だ」「うん普通だね」

クラフト（俺をなんだと思ってるんだ…（；ω；）

記録50回

——第5種目ソフトボール投げ——

???? 「せいっ！」ふわくくく…

指に肉球らしきものがある女子が投げるとボールは遙か彼方へ飛んでいくというより浮

いていった…

ピピッ…

相澤 「…」スツ…

相澤が端末を見せるとそこには∞の文字が。むげん

A組B組 「すげえ無限でたぞ!」「マジかよ!!」

その後、順調にクラス全員が全種目をやり終え成績が発表される。

相澤 「んじゃパパつと結果発表するぞ」

A組B組 「…」（最下位が除籍処分…）…

相澤 「ちなみに除籍は嘘な」ピッ…ブウン…

A組B組 「…」えっ…

相澤 「君たちの最大限を引き出すための合理的虚偽!」ニカツ

A組B組 「…」はああああああああああああああああ

ああっ!!!

???? 「おんなの嘘に決まってるじゃない、ちよつと考えればわかりますわ」

(ブ) キング 「はあ…」

相澤 「そーゆーこと、これにて体力テストは終わり。教室にカリキュラムの書類等あるから

目え通しとけよ」

クラフト「いやーなかなかハラハラドキドキだったなー（笑）」

耳郎「あんたはなんで笑ってられるのよ…」

クラフト「おう響香おつかれさまー」

耳郎「おつかれ、アンター位だったね」

クラフト「いやー頑張ったかいがあった…おつ障子おつかれ」

障子「機神か、おつかれ。お前の個性凄いな一体どんな個性なんだ？」

A組B組「！！！！」ざわっ…

障子がクラフトの個性について質問するとA組B組の全員が目する。

クラフト「あーすまん障子、個性の事に関してはあんまり話したくはないんだ。ごめんな」

障子「むっそうなのか、いや話したくないのならそれでいいぞ」

クラフト「すまんね」

A組B組「！！（めっちゃ気になる）！！」

耳郎「……………」

ハラハラドキドキの体力テストを無事に終え、クラフトの個性がめちやくちやきになる

A組B組であった。

——体育館脇の通路——

(オ) マイト「相澤君の嘘つきー」

相澤「オールマイトさん見ていたんですか？暇なんですか？」

(オ) マイト「合理的虚偽って！エイプリルフールは1週間前に終わってるぜ！それに君は去年の1

年生1クラスを全員除籍処分している。見込みゼロと判断すれば容赦なく切り捨てる…そんな君がどういう風の吹き回しだい？」

相澤「別に…ただゼロではなかっただけです。見込みがなければ容赦なく切り捨てます。半端

に夢はおわせません」コツコツコツ…

(オ) マイト「……(君なりの優しさってやつかい)……でも……やっぱ合
わないんだよね」

くく下校時間くく

耳郎 「クラフトー帰ろー」

クラフト 「おーう……まだ昼だしどっかよるか?」

耳郎 「そうだねお昼をどこかで食べる?」

クラフト 「あーそれいいな!俺はガッツリ食いたいけど響香は?」

耳郎 「ウチも動いたから少しだけガッツリ系かな」

クラフト 「そうだなー……モック(ファーストフードチェーン)にでも
行くか?安いし」

耳郎 「いいねそうしよっか、クラフトなにか奢ってくれる(笑)
?」

2人でモックに行くこうと話していると葉隠が話しかけて
きた。

葉隠 「ねえねえ今モックに行くって言った?」

クラフト 「ん?そうだけど……もしかして行きたい?」

葉隠 「いいの!?!私いまお腹めっちゃ減ってるんだよね!」

クラフト 「俺はいいけど響香は?」

耳郎 「ウチもいいよ、いろいろ話したいし」

葉隠 「わあーありがとー♪そうだ尾白くんもいかない?」

尾白 「えっ俺?いいの?」

クラフト 「尾白もどうだ?飯は大勢で食べた方がうまいって言うし
な」

尾白 「じゃあお言葉に甘えて(笑)」

こうして4人でモックに行くことになり玄関を出て校門
にさしかかった所にこちらに

向かって走ってくる女子がいた。

拳藤 「機神ー!」 ダダダダッ!

クラフト「?…おー拳藤か」クルツ

耳郎 (拳藤!?)

拳藤 「教室行つたのにいなかったからさー慌てて探したよー!」

クラフト「俺に何か用があつたのか?」

拳藤 「いや一緒に帰ろうかなーって思つてさ!…でもその様子だどどっか行くの?」

クラフト「ああこれからモックに行こうと思つてな、ああ葉隠に尾白、紹介するよ。B組の拳藤

だ」

拳藤 「初めましてB組の拳藤一佳です!よろしくね!」

葉隠 「わたし葉隠透!よろしくー!」

尾白 「俺は尾白猿尾、よろしく」

クラフト「拳藤も一緒にモック行くか?」

拳藤 「いいの!?(機神と一緒に:~/)」

クラフト「ああいいぞ、みんなもいいか?」

耳郎 「うんいいよ」

葉隠 「いーよいーよB組のこと気になる!」

尾白 「俺もいいよ」

拳藤 「ありがとー!」

その後拳藤を含めた5人でモックでお昼を食べに行つた。

——モック店内——

店員 「いらつしやいませご注文をどうぞ!」

葉隠 「えくと:キロボーガー1つにキャラメルシェイクのMサ

イズを1つで!」

尾白 「メガ照り焼きチキンバーガー1つにコーラのMサイズ1

つを」

耳郎 「キロチーズバーガー1つにストロベリーシェイクのMサ

イズ1つ」

拳藤 「キロダブルフィッシュバーガー1つにコーヒーMサイズ1

つで!」

クラフト「ギガ合い挽きチーズバーガー1つにメガポテト1つにメロンソーダLサイズ1つを」

店員 「かしこまりました！商品が出来るまで少々お待ちくださいー！」

注文したものを受け取ると席に座り、楽しく話しながら昼食をはじめめる。

尾白 「機神ポテトも頼んだけど結構食べる方なのか？」

クラフト「ああ普段もよく食うけどこれはみんなで一緒に食おうと思っつてな」

葉隠 「えっいいの？わーいありがとー♪」

耳郎 「んじゃウチも」

拳藤 「ゴチになるよ(笑)」

尾白 「それじゃいただくよ」

ワイワイモグモグ

みんなで楽しく食べていると…

葉隠 「ねーねーそういうえば気になっていたんだけど…」

尾白 「どうしたの葉隠さん？」

拳藤 「？」

クラフト 「ん？」

耳郎 「なに？」

葉隠 「機神くんと耳郎ちゃんってお互い名前で呼んでるけどもしかして…付き合ってるの!？」

耳郎 「ぶふっ!？」ゴホゴホッ!

拳藤 「ごふっ!？」げほげほっ!

クラフト 「ド直球できたね」

尾白 「葉隠さんそういうのは聞くとしてもやんわりと…(…」

葉隠 「えーそうかなー？まあそれはともかくどうなの？」ワクワク!

ワクワク!

耳郎 「そそっそれはその／＼えっと「答えはYESだ」ちょー／＼／!!」

葉隠 「わあー♪やっぱりー／＼！」

拳藤 「ぐふつ（?、?）」心に9999のダメージ

尾白 「だっ大丈夫…拳藤さん？」

拳藤 「うっうん何でもない…大丈夫」

葉隠 「ねえねえ！どっちが先に告ったの!?!」ウキウキ！

耳郎 「うええ！そこもいうの!?!恥ずいよ!／＼／＼」

クラフト「あーそれは何て言えば「だあー言わなくていい!／＼／＼」
だそうだ葉隠」

葉隠 「えーめっちゃ気になるよー！」

クラフト「っとスマンちよつとトイレに行ってくるわ」

尾白 「あつ俺も行くよ」

クラフトと耳郎の恋愛について盛り上がって?いる途中、
クラフトと尾白はトイレに行

くため席を一旦離れる。

葉隠 「ねえねえ耳郎ちゃん機神くんのどこが好きになったの
?」

耳郎 「ちよつまだ続けるの／＼!?!」

葉隠 「やっぱ気になっちゃうよ♪」

耳郎 「ええ恥ずかしいよ／＼／＼」

葉隠 「それに拳藤ちゃんも！」

拳藤 「えっわたし!?!」

葉隠 「さっきから様子見てたんだけどもしかして…／＼」

拳藤 「なななななっ何を言っ／＼／＼!!」ガタタツ!

葉隠 「(すごい慌てる)ふくん／＼2人とも頑張つてね!」ニ

ヨニコ

拳藤 「なっなにを!／＼」おまたせ」ほああつ!／＼」

クラフト「?…なんかあったの?」

拳藤 「なっなんでもない／＼!」

耳郎 「うんなんでもない!／＼」

尾白 「?…」

葉隠に振り回される2人であったが楽しくモックで昼食を食べ終え、そしてそのまま最

寄りの駅まで一緒に行くことに。

尾白 「授業ってどんな感じなんだろうね」

クラフト 「そうだなー意外に座学は普通なんじゃね?」

耳郎 「ウチはヒーロー基礎学がきになるよ」

葉隠 「あー私も!」

拳藤 「今年から合同でやるって言ってたけどどういう事だろうね?」

耳郎 「確かにそんなこと《ブーブーブー》ん?誰だろ…」
そ…ピツ…

話しながら駅に向かっていると耳郎にメールの着信が入る。

耳郎 「…:ごめんみんなウチ先に行くね!」

葉隠 「どうしたの耳郎ちゃん?」

耳郎 「親からなんかやりたいらしいから早く帰ってきてだつて、じゃあお先に!また明日ばい

ばい!」
タツタツタツタツタツタツ…

葉隠 「なにだろうねやりたいことって?」

クラフト 「案外入学祝いだったりしてな(笑)」

尾白 「あーありえそうだね(笑)」

耳郎の用事の内容を予想しながら歩いていると駅に到着する。

——最寄り駅——

尾白 「じゃあまた明日な!」

葉隠 「ばいばい!拳藤ちゃんがんばって!!」

拳藤 「んなつ!もー葉隠!」

クラフト 「おうまた明日な」

ちようど乗る電車がすぐ来るため先に改札を通った尾白と葉隠と別れ俺と拳藤も帰る

うとすると…

クラフト 「じゃあ拳藤また明日からよろしくな!」

拳藤 「うん…（折角2人になれたのに何もせずに…：いられるわけないでしょ!）」ガシッ!

クラフト「!……：《クルツ……》拳藤?」

拳藤 「あつ……のさ……今からさ……機神のうつ家うちに……お邪魔してもいいかな／＼?」

クラフト「俺ん家に?別にいいけど……また急だね?」

拳藤 「うん……別に大した理由はないんだけどね……行きたいなーって／＼」

クラフト「まあ特に用事ないしいいよ、なら早く行こつか?電車がちょうどくるし」

拳藤 「うんわかった／＼」

急すぎて断られるかと思つたがクラフトの家に無事行くことに成功する拳藤であつた。

ガタンゴトン……ガタンゴトン……

——クラフト宅——

ガチャガチャン……キィ……

クラフト「ただいま〜そしていらつしやい、まあ適当に座つてくれお茶入れるから」

拳藤 「うんお邪魔します／＼（ここが機神の部屋……）」

初めてクラフトの部屋に気分が高揚する拳藤。

クラフト「えくと……飲み物ながあつたかな……」ガチャ……ガサ……

拳藤 「……」トツ……トツ……トツ……トツ……がば……ぎゆう……

クラフト「!?……えつ……と……急にどうした拳藤……?」

お茶の準備をしていると、拳藤が後ろからクラフトのお腹に腕を巻くように抱きついてきた。

きた。

拳藤 「私さ……機神にずっと言いたいことあつたんだよね……／＼」ドツ……ドツ……ドツ……（心音）

クラフト「俺に?……（これってまさか……前に響香が言っていた……《あんたに好意持つてる女子って

意外にいるんだよ……》……いや焦ってはダメだ……まずは聞か

ないと…」ドキドキッ…

抱きついて抱きつかれて心臓の鼓動が大きくなる2人：
そして何かを察するクラフト、

はたして拳藤は自分の想いを伝えることが出来るのだろ

うか…

第10話 やったな拳藤!!そして戦闘訓練だ!

——クラフト宅——

拳藤 「……………」ドツ…ドツ…ドツ…(心音) …ぎゆう…

クラフト「えっ…と…俺に言いたいことって…なに?」ドツ…ドツ…ドツ…(心音)

拳藤 「…その前に…機神はさ…その…女の恋人が2人できることは…どう思う…//?」

クラフト「…個人的には別に複数の女の人と付き合うのはいいと思う…ちゃんと平等に接したり

愛したりすればだけど…その逆もな。それに最近は何が少子化対策で一夫多妻制度の

法案も検討しはじめた…まあ制限や審査とかあるだろうけど。逆に1人の異性に複数の

異性が付き合っているっていうのは普通になったりするかもな(笑)」

拳藤 「……………」そっか…なんか機神っぽいね…私さ好きな人いるんだよね。私が敵に襲われそ

うになったとき救ってくれた人。でもその人にはもう可愛い彼女がいてね…諦めようか

なって思ったけどやっぱ無理だった。」

クラフト「……………」

拳藤 「さつき機神言ったよね?ちゃんと平等に接したり愛したりすれば複数の女の人と付き合

ってもいいって?」

クラフト「おう…」

拳藤 「それって機神も?」

クラフト「……………」なあ拳藤…俺に彼女がいることは知ってるよな?」

拳藤 「…うっうん…(やっぱり…………)」

クラフト「俺さその彼女に1つだけ我儘を聞いてもらったんだよ」

拳藤 「わがまま…?」

クラフトは耳郎に言った我儘を話しそれを聞いた拳藤は静かに驚く。

拳藤 「それっ…て…」

クラフト 「…そういえばまだ拳藤の気持ち聞いてないな（棒読み）」

拳藤 「くく／＼／＼ここまでくればわかるでしょ!!／＼／＼」ぎゅうううう!!

拳藤は腕に力を込めてお腹を締め付ける。

クラフト 「いだだだだ！意外に強い！」

拳藤 「《ぎゅううう…》…すき…」

クラフト 「…これからよろしくな拳藤…いや一佳のほうがいいか？」クルツ

体を拳藤のほうへ向け正面から向かい合い名前をどう呼ぶか聞く。正確にはクラフトの

背が高いため拳藤が少し見上げた状態であるが。

拳藤 「くく／＼／＼しばらくは…拳藤でおねがい／／」カ

アアア…

クラフト 「了解（笑）」

拳藤 「…ねえ機神…」

クラフト 「ん？なに？」

拳藤 「…耳郎とはどこまでしたの？」

クラフト 「えっ!?そっそれはどういう…（…「」）？」ドキッ

拳藤 「ちよつとこつちきて…」グイッ…ドフンッ

拳藤はそう言うと言手を引っ張りソファにクラフトを押し倒す。そしてクラフトの上の

しかかる。

クラフト 「けっ拳藤…？」汗ダラダラ

拳藤 「耳郎とはどこまでしたの？もしかしてもう一線超えたの？」ギラギラ

クラフト 「きゅっ急にどうした拳藤？なんか目ヤバいぞ（なんか目の光も消えてない!）」

拳藤 「…どうなの？」

クラフト 「一応言っておくが一線は超えてないからな…」

拳藤 「じゃあどこまで？」

クラフト 「一応その…口付けまで」「キスだね？」…はいそうです」

拳藤 「そう…」

クラフト 「なあ拳藤なんでこんなこと聞く」「じゃあ今度は私の番だね♡《ジュルツ…ハアハア》…うん？」

舌なめずりをしながら興奮する拳藤、その姿に動揺を隠せないクラフト。

クラフト 「けっ拳藤しゃん（；ω；）？」

拳藤 「耳郎とはそこまでしたんでしょ？だったら今度は私も同じとこまでしてよ。平等にして

くれるんでしょ？」ハアハア

クラフト 「（あつああくなるほどそういうことね…突然すぎてわからなかった）…言いたいことは分

かったけど…最初がこんな感じでいいのか？」

拳藤 「う…どういうこと？」

クラフト 「ほら…雰囲気とか大事じゃん…？」

拳藤 「…確かにそれも大事かもね…でも今はそんなことどうでもいい。てかもう限界なんだよ

ね」ハアハア♡

クラフト 「げっ限界…？」汗ダラダラ

拳藤 「あんたのこと思うとき体が熱くなつてさ…その度に自分で慰めたけどそれももう限界寸

前なんだよね」ハアハア

クラフト 「……………」

拳藤 「だから…ね？…こんな感じでも「拳藤…」…なに？」

クラフト 「一線はまだ超えないからな？」グイッ…スツ

拳藤 「くく／＼／…うん／／」

クラフトは体を起こし右手を拳藤の頬に添える。そして

2人の唇が重なりとその瞬間…

拳藤の中にある何かが崩れる。

拳藤 「……………ん／＼……………もつと…」

クラフト 「…拳藤？」

拳藤 「もつと…／＼／＼」 ハア

クラフト 「もしかして何かしらスイッチ入っちゃった？」

拳藤 「わかんないけど…たぶんそう／＼／＼…ねえ耳郎とはどんなキスしたの？」

クラフト 「えっ…教えなきやダメか？」

拳藤 「…」 コクリ…

クラフト 「えーつとだな…さっきした普通？のやつと映画とかであるやつ…」

拳藤 「じゃあ…今からするキスはすべて映画のやつね／＼」
ハア

クラフト 「えっ…？」

その後、拳藤が満足するまで濃厚なキスを10分間もした。キスをしたあとの拳藤はツ

ヤツヤしていた。まあ俺も気持ちよかったけど…でも胸やお尻を触ってほしいって言う

てきた時はびっくりした…もつもちろん触ってないよ！キスをしたことにより抑えてい

たものが溢れだしてしまったのだろうか？…

クラフト 「満足したか？」

拳藤 「うっうん／＼…ありがと／＼…あのゴメンね私…その暴走しちやつて／＼／＼」 カアアア…ツヤツヤ

クラフト 「あー…まあ気にすんなよ…それにしてる時の拳藤の顔すげえ可愛かったぞ。なんていう

か…こう溶けているような表情で、特に目が！」

拳藤 「かわっ！とけてっ！！／＼…くく／＼／＼ううく恥ずかしい／＼／＼」 ボフンツッ！

ソファアのクッションに恥ずかしさのあまり暑くなった

顔を埋める。

クラフト「それより拳藤、まだ昼だけどそろそろ家に帰った方がいいんじゃないか？」

拳藤「?…あつそうだねそろそろ帰らないと！」

クラフト「じゃあ駅まで送るよ」

拳藤「ありがとう！」

いろいろ暴走した拳藤を駅まで送り見送ったあと、自宅に帰る前にコンビニに寄ろうと

したとき後ろから声をかけられる。

耳郎「クラフト」

クラフト「?…あれ響香なんでここに？」

耳郎「親の用事が終わったからちよつと用があつて来たんだ」

クラフト「そういや用事って何だったんだ？」

耳郎「入学祝いをやろうって話だったよ…まあ夜にやることにしたけど(笑)」

クラフト「おー予想は合っていたな(笑)」

耳郎「…ねえさつき駅で拳藤と一緒にいたの見たけど…もしかしてあの我儘だったりする？」

クラフト「…あああの我儘だ…」

耳郎「やっぱそうだったんだ…まあ今回は知ってたけどね」

クラフト「知ってたって…もしかして分かっていたりした？」

耳郎「まあね…実はウチらが付き合うときから知ってたんだ。あとちよつと張り合っていた

というかなんというか…」

クラフト「もしかして響香が言っていたのって拳藤のことなのか？」

耳郎「そうだよやっぱクラフトって少し鈍いね(笑)」

クラフト「あーあんまり好意とかそういうのは分かんねえかな」

耳郎「ふふっクラフトらしいね♪」

クラフト「そーいや響香、用があるって言ってたけど何なんだ？」
耳郎「あつそうだった！入学祝いを一緒にしないか誘いに来た

んだ！」

クラフト「俺も？」

耳郎「うん、母さんがアンタもどうかって…ほらクラフトっていま一人暮らしじゃん…」

クラフト「あーなるほど…けどいいのか俺も一緒で？」

耳郎「大丈夫大丈夫！おっさんの方は気にしなくていいから（笑）」

クラフト「そこまで言うならお邪魔させてもらうよ」

耳郎「OK！なら母さんに連絡しておくよ」

その後、耳郎の家で入学祝いをしてもらい楽しい時間を過ごした。また、耳郎の父親に

『娘とはどこまで進んだ！』と聞かれそうになったがその瞬間、爆音をプレゼントされて

いた。

．．．
．．．
．．．
次の日

——雄英高校——

午前は必修科目の国語や数学、英語などの普通の授業である。

(プ)マイク『えーじゃあ次の英文のうち間違っているのは？…おらエヴィバデイヘンズアップ盛り

上がれー!!』

A組 ((普通だ…))

クラフト「HEY！マイクティーチャー!!関係詞の場所が違うから答えは4番では!？」

(プ)マイク『正解だぜ機神！あと乗ってくれてサンキューだぜえ!!』

そしてお昼はクックヒーローランチラッシュも作る食堂で一流の料理を安価で頂ける

ことができる。そしていよいよ午後の授業、ヒーロー基礎

学。

——A・B組ヒーロー基礎学合同教室——

「わーたーしーがー!!」

緑谷 「来っ!!」

(オ) マイト「普通にドアから来たあ!!」ガラッ!

A B組 「すげえ!ほんとにオールマイトだ!」「マジで先生やってんだな!」「あれ銀時代シルバレイジのコス

チュームデース!」「画風違いすぎて鳥肌が!」

(オ) マイト「さてヒーロー基礎学!それはヒーローの素地をつくる為に様々な訓練を行う授業だ!!」

単位数も一番多いぞ!!」

オールマイトが基礎学について話すと飯田が挙手する。

飯田 「先生!」ビシッ

(オ) マイト「むっ!なんだね飯田少年!」

飯田 「今年から座学以外はA組B組で合同授業になると聞いているのですがそれは一体どうい

うことでしょうか?」

A組B組 「確かにそんなこと言っていたな」「今年からってことは去年まではなかったってこ

と?」

(オ) マイト「なるほど!あまり詳しくは言えないが簡単に言えば授業方針が少し変わりこいう

形になったんだ!今まではA組B組で別々にしていたんだが、ちよつとある指摘を受

けて検討した結果がこれさ!」チラッ:

オールマイトがクラフトのほうを少しチラ見する。

クラフト(…:もしかして俺の言ったことか?)

飯田 「なるほどありがとうございます!」

(オ) マイト「うむ!さて本日の授業内容はさつそくだがこれだ!戦闘訓練!」バツ!

オールマイトがBATTLEと書かれたカードを皆に見せる。

爆豪 「戦闘！」

緑谷 「訓練！」

(オ) マイト 「そしてそいつに伴ってこちら!!」ピ…

A組B組 「「「!?」」」

オールマイトがスイッチを押すと教室の側面の壁が動き、中に番号が振ってあるケース

が収納されている棚が出てくる。

ガゴツ!!…ゴゴゴゴゴゴ…

(オ) マイト 「入学前に送ってもらった個性届と要望にそってあつらえた戦闘服!!」
コスチューム

A組B組 「「「おおおっ!!」」」

(オ) マイト 「着替えたら順次グラウンドβに集合だ！」

A組B組 「「「はい!!」」」

——男子更衣室——

クラフト (おー要望どおりだ…すげえ) ばさっ!

クラフトのコスチュームは太ももの部分が少しダボつとした、黒色でタクティカルパン

ツを参考にしたミリタリー系のズボン。靴は通気性や伸縮性など機能性を高めたコン

バットブーツで、色は少し暗めのワインレッド。上はダークグリーン色の耐火・防刃性

など丈夫さを高めた7分丈のシャツ。あとはコートと帽子に腕に装着する籠手やベル

ト型で足や腰に装着できるポーチ等である。コートと帽子は某海賊漫画の海軍のやつを

参考にし…というかぶつちやけそのまんまである。コートの背面には《正義》の文字、

帽子にはMARINEではなくHEROの文字が入っている。ちなみにコートの袖と帽子

に入っているラインの色は緑色である。これはクラフトの好きな色で特に意味はない。

——グラウンドβ——

(オ)マイト「恰好から入るのも大事なんだぜ少年少女達！自覚するんだ今日から自分はヒーロー」

なんだと!!」

コスチュームに着替えたA組B組の生徒が徐々に集まる。
コツコツコツコツ…

クラフト「着心地も良い感じだな」

耳郎 「あっクラフト…(やばっ！コスチューム姿カッコいい／＼)」

クラフト「おー響香そのコスチューム似合ってるじゃん。ロックつて感じでいいね」

耳郎 「あっありがと／＼(似合ってる…／＼)」

クラフト「他の皆のコスチュームも…ん？」クイクイ…くるっ

拳藤 「その…どうかなコスチューム／＼」

クラフト「おっ拳藤…コスチュームはチャイナ服をベースに？」

拳藤 「うん、動きやすさや格闘っぽさをね／＼」

クラフト「可愛さもあってよく似合ってるぞ」

拳藤 「可愛っ！／＼へっありがと／＼」

耳郎 「よく似合ってるよ拳藤」

拳藤 「そういう耳郎こそ」

3人で話しているとそこに葉隠が話しかけてきた。ちなみに耳郎と拳藤はちゃんとクラ

フトとの関係を把握し、お互いのことも認めている。とうかむしろ仲が良くなっている。

葉隠 「わー！機神くんのコスチュームカッコいいね！」

クラフト「おう葉がく…えっと葉隠…コスチュームはもしかしてそれだけか？」

葉隠 「そうだよ！私の個性は【透明】だからね。手袋と靴だけだ

よ！」

耳郎 「えっ…じゃあもしかして今の状態って…」

クラフト 「全裸？」ド直球！

葉隠 「もー機神くん！そういうのは思っても言わないもんだよ！／＼」

拳藤 「葉隠…寒くないの？」

葉隠 「ちよつと寒いけど大丈夫！」

4人で話しているとオールマイトが口を開く。なおクラフトが3人の女子と話している

様子を頭に紫色のボールのようなものが生えている男子がものすごい形相で見つめていた。

(オ)マイト「カッコいいじゃないか皆!!さあ始めようか有精卵共!!!戦闘訓練の時間だ!!」

飯田 「先生…ここは入試の時の演習場ですがまた市街地演習を行うのでしょうか？」

(オ)マイト「いいやもう二歩先に進む!!屋内での対人戦闘訓練さ!!^{ヴァイラン}敵退治は主に屋外で見られる

と思うが、全体的な統計では屋内の方が凶悪^{ヴァイラン}敵発生率
は高いんだ!。監禁・誘拐・

裏商売など…このヒーロー飽和社会、本当に厄介な敵と
いうのは我々の見えない

所に潜むものだ。諸君にはこれから《ヒーロー》と《敵^{ヴァイラン}》
に分かれてもらい4対4
の屋内戦闘をやってもらおう!!」

???? 「基礎訓練もなしに？」

(オ)マイト「その基礎を知るためさ!ただし今度はただ壊せばいいだけじゃないぞ!!」

A組B組 「勝敗のシステムはどうなります?」「ぶっ飛ばしていいんすか」「また相澤先生みたい

に除籍処分とかあるんですか?」「分かれるとはどのよう

に分かれるのですか？」

「このマントヤバくない？」

(オ) マイト「んんんんくく聖徳太子いっく!!」

その後オールマイトがカンペを見ながら状況設定とヒーローと敵の勝利条件を説明

しクジによるチーム決めが始まろうとしたとき…

八百万 「先生、このクラスはA組B組合わせて41名ですが、どこかのチームは5人チームになるの

でしようか？」

(オ) マイト「おつといけない忘れるところだった！ありがとう八百万少女！」

八百万 「いえ、それよりチームはどうなるのでしょうか？」

(オ) マイト「うむ！そのまま決めると誰か1人余ってしまうのだが：今回は最後の訓練に1対4また

は1対3の訓練をしてもらうことにした。そしてその

1人役は君だ機神少年!!」

クラフト「えっ俺すか？」

突然の指名にA組B組の生徒がざわつく。

緑谷 「えっ機神くん!？」

耳郎 「クラフトが!？」

A組B組 「1人で複数人で大丈夫なのか？」「ルールとか変えるのかな？」

飯田 「先生！なぜ機神くんが1人役なんですか？」

(オ) マイト「いい質問だ飯田少年！理由としてはまあぶっちゃけて言うとうと強いからね機神少年は！

それに敵の中には1人なのにめっちゃ強い奴もいるか

らね！あとルールは少し変え

てやるし、1対多数の戦闘経験も大事だよ!!」

オールマイトの《強いからね機神少年は!》の言葉を聞いてクラスの何人がクラフト

に鋭い視線を送る。

(オ) マイト「どうかな機神少年？やってくれるかい？」

クラフト「まあそういう事でしたらいいですよ…それに面白そうですし(笑)」

拳藤 「機神あんた大丈夫なの？」

クラフト「まあ気持ちは負けるつもりはないし、勝つても負けてもいい経験になるし」

切島 「うおお！機神おまえ漢らしいぜ!!」

(オ) マイト「ありがとう機神少年!!では早くチームを決めるよ!!」

《屋内対人戦闘訓練ルール》

・ 状況設定・

ヴァイラン 敵が自分たちの拠点に核兵器を所持し隠しているため、

ヒーローは核兵器を処理しよ

うとしている。

・ 勝利条件・

ヒーロー側：制限時間内に核兵器を回収または敵を捕ま

える。

ヴァイラン 敵 側：制限時間内まで核兵器を守るまたはヒー

ローを捕まえる。

チーム編成

Aチーム：緑谷・麗日・鎌切・回原

Bチーム：轟・障子・柳・凡戸

Cチーム：八百万・峰田・小大・角取

Dチーム：爆豪・飯田・物間・円場

Eチーム：青山・芦戸・吹出・塩崎

Fチーム：口田・砂藤・鉄哲・泡瀬

Gチーム：耳郎・上鳴・骨抜・拳藤

Hチーム：蛙吹・常闇・黒色・小森

Iチーム：尾白・葉隠・取蔭・麟

Jチーム：切島・瀬呂・宍田・庄田

Kチーム：機神クラフト

チーム決めが終わり早速訓練に入ろうとする。

(オ)マイト「よし！では最初の対戦相手はくこいつらだ!! Aコンビがヒーロー！Dコンビが敵だ！」

緑谷 「！」

爆豪 「！」

(オ)マイト「敵チームは先にビルに入って準備を！5分後にヒーローチーム潜入で訓練スタート」

だ。飯田少年、爆豪少年、物間少年、円場少年は敵の思考をよく学ぶように！これ

はほぼ実戦ケガを恐れず思いつきりね！だけど度が過ぎたら中断するからね！他の皆

はモニター室で観察するぞ！」

A組B組 「「はーい!!」「」」

緑谷 「……」

爆豪 「……」

いよいよ対人戦闘訓練が始まろうとする。そして最初は緑谷と爆豪のチーム：爆豪に対

して緑谷は上手く立ち回れるのか？あとクラフトは一人で大丈夫なのだろうか？

第11話 A対D! ちゃんと前を見ようね!!

——グラウンドβ——

——ビル5階——

飯田 「これを守ればいいのか?《ゴンゴン…》張りぼてか…訓練
とは言え敵になるのは心苦しサイラン

いな。さてまずは自己紹介をしよう、俺はA組の飯田天哉
だよろしく頼む!個性はエンジンで足が速くなる!」

円場 「俺はB組の円場硬成だよろしく。個性は空気凝固で空
中に空気を固めたバリア的なものを出すこと出来る」

物間 「僕は物間寧人、よろしくA組。個性はコピーで触れた相
手の個性を5分間コピーすることが出来る」

爆豪 「……」

飯田 「爆豪くん!君も自己紹介をしまえ!これから一緒に訓
練をするのだからお互いの意思疎通は円滑にしなければならぬ!!」

爆豪 「ああつ!?うっせえなくそメガネ!!んなもんテメエらで勝
手にしとけや!!」

飯田 「爆豪くんそのような態度はやめたまえ!それに俺はクソ
メガネではなく飯田天哉だ!すまない円場くん!物間くん気分を害したなら謝罪する!」

飯田はそう言いながら頭を下げて謝る。

円場 「おっおう…まああんまり気にするなよ飯田」

物間 「まったく仮にもヒーロー志望だろ?あまりそのような態
度は頂けないね?」

爆豪 「あ×あ!?なんだとこのモノマネ野郎!」

物間 「なんだい?事実を言ったまでだろう?」

爆豪 「あ×あ!てめえもう一回言ってみろ!ぶっ殺してやる

!!

飯田 「やめないか爆豪くん!!」

泡瀬 「やめろ爆豪!物間も煽るな!」

一触即発寸前になりながらもなんとか事態を収める。

爆豪 「ヂイツ!!おいメガネ、デクには個性があるんだな?」

飯田 「飯田天哉だ!体力テストの時に見ただろう?なかなかの強個性だ、それにテストの結果も

上位に入っていた。ただ入試の時に腕を大怪我していたのをみると、何かしらのリミッ

ターがあるのかもしれない。まあそれを除いても十分強

いが:」

爆豪 「(この俺を騙してたのか?!):クソナードが!!」

——ビル屋外——

緑谷 「えっとじゃあまずはお互い挨拶をしようか?僕は緑谷出久よろしくね!個性は火と超パ

ワーの複合型だよ」

麗日 「麗日お茶子です!個性はセログラビティ!触れた物ものを浮かすことができます!」

鎌切 「鎌切尖だ:よろしくだぜえ!個性は刃鋭だ、体のいたるところから刃物を出すことができ

きるぜえ」

回原 「回原旋だよろしく、個性は旋回だ。体のいろんな部分をドリルのように高速回転でき

る」

緑谷 「みんなよろしくね、それじゃどう動くか決める?」

鎌切 「いいぜ、だが核がどこにあるか分からないから、探しながら動くしかないぜ」

緑谷 「そうだね、その場の状況に合わせて動くって感じでいいかな?」

回原 「そうだな:訓練自体が初めてなんだ、最初はそんな感じ

でいいと思う」

麗日 「建物の見取り図とかも覚えておかないといけないね。でも安心したよー相澤先生みたい

に罰とかないみたいだしー」

回原 「いや緑谷が若干震えてるぞ」

鎌切 「緑谷大丈夫か？」

緑谷 「ああっごめんね！その…相手にかつちゃんがいることに身構えちゃってね」

麗日 「爆豪くんてデクくんを馬鹿にしてくる人だよね？」

緑谷 「嫌な奴だけど凄いなだ僕なんかより…」

回原 「でも緑谷体力テスト3位じゃなかったか？」

緑谷 「うん…でも…それは僕の個性と相性が良かったから…かつちゃんは昔から何でも出来

て僕なんかよりも何倍も凄いなだ…でもだからこそ今は負けたくないな…って」

麗日 「男のインネンってやつだね！」

鎌切 「いいぜえそういうの…」

緑谷 「ああっごめんね！3人には関係ないのに！」

回原 「関係あるかは分らんが今はチームだ頑張ろうぜ」

緑谷 「!!——」

両方のチームの準備が終わるとオールマイトが無線越しに訓練開始の合図を入れる。

(オ)マイト『両チームとも時間だ！これより屋内対人戦闘訓練を開始する!!』

いよいよ戦闘訓練の火蓋が切られる。

——地下モニター室——

(オ)マイト「さあつ！君たちもよく考えながら見るんだぞ！（緑谷少年…ここではあくまで一生徒…」

成績はひいき目なしで厳しくいくぞー！」

クラフト（緑谷くがんばれよー）

——ビル1階——

緑谷 「侵入成功：死角が多いから気を付けて」

麗日 「うんわかった」

緑谷 「鎌切くん、回原くん聞こえる？」

鎌切 『おうバツチリだ』

回原 『聞こえるぞ、緑谷、俺らはこのまま外階段を使って3階から探すぞ?』

緑谷 「うん僕らもこのまま1階と2階を探して後で合流するか
ら」

鎌切 『わかったまた後でな』

緑谷達は訓練が始まる直前に2手に分かれる事を思いつき実行したのであった。

緑谷 (OFAはいまはだいたい上限8%くらいだ：上手くすればかつちゃんにも通じるかもしれ

ない。火の力はまだ調整が微妙だから発動させて防御に使おう。物理的な攻撃は無効に

できるからありがたい。フルで考えろ：狭い場所での戦いの記録を…)

——ビル2階——

1階を探し終わると2階に上がり通路を進んでいると曲がり角から爆豪が強襲する。間

一髪のところ緑谷は麗日を庇いながら避けることに成功する。

フツ…バツ!!

緑谷 「!!」バツ!

麗日 「うわっ!」

ポオオン!!

緑谷 「かすった!…大丈夫麗日さん!?!」

麗日 「うんありがと…さっそく来たね…」

爆豪 「おいデクウ…避けてんじやねえよ…」

緑谷 「かつちゃんが敵ならまず僕を殴りに来ると…思ったよ…」

爆豪 「はっ…想定済みってかあ!？」

——地下モニター室——

峰田 「いきなり奇襲!」

切島 「爆豪ずっけえ!!奇襲なんて漢らしくねえ!!」

芦戸 「緑くんよく避けれたなあ!!」

(オ) マイト「奇襲も戦略の1つ!彼らはいま実戦の最中なんだぜ!!」

——ビル2階——

爆豪 「まあいい…てめえを中断されない程度にぶっ飛ばしたら

あああ!!」グアツ!

爆豪はそう言うのと右手を大きく振りかぶって攻撃するが、その右腕を振り下ろしきる前に緑谷が受け止める。

ガシイッ!!

麗日 「おおっすごい!達人みたい!!」

爆豪 (なんだコイツ!?急に動きが!?読まれた!?)

緑谷 「ううっ!!…ああっ!!」グイイッ!

爆豪の右手の大振りを受け止めた緑谷はそのまま腕を掴み、柔道の背負い投げの様に爆

豪を床に叩きつける。

ダアンツ!!

爆豪 「がっ…は…!!」

緑谷 「はあ…はあ…かつちゃんは大抵最初は右の大振りなんだ…どれだけ見てきたと思ってる

んだ…凄いと思ったヒーローは分析して全部ノートにまとめているんだ!君が爆破して

捨てたノートにも…いつまでも雑魚で出来損ないのデクじゃないぞかつちゃん…僕は」

／／／「《頑張れ!!》って感じのデクだあ!!」／／／

麗日 「!——」

麗日は緑谷の言った言葉に自分の言った言葉を思い出す。
《でもデクってなんか…頑張れって感じでなんか好きだ私

！

爆豪 「ビビりながらよお…そういうところが…」

／＼／＼「ムカツクなあ!!!」／＼／

その時お互いの声が廊下に響き渡ると両方の無線に通信が入る。

回原 『《ザザツ…》おい緑谷！大丈夫か!?なんか爆発音したけど!!』

飯田 『《ザ…ザツ…》おい爆豪くん！そちらの状況はどうなっているんだ!?教えたまえ!!』

緑谷 「回原くん!?こっちは大丈夫だよ！麗日さん！このまま行って回原くん達と合流して敵の場

所を探して!!ここは僕が止めるから！」

爆豪 「黙って守備してろ…俺あ今ムカついてんだ…」

飯田 『気分を聞いているんじゃない!!お…《ブツンツ…》』

——ビル5階——

飯田 「なっ切れてしまった!?何なんだ彼は!!」

円場 「まあ行ってしまったもんは仕方ない、俺らはここで守りに徹しよう」

物間 「まあそれが現時点で一番かな…」

——地下モニター室——

切島 「アイツらなに話してんだ？定点カメラだから分かんねえな」

(オ)マイト「小型無線で味方と話してるのさ。両チームの持ち物は建物の地図とこの確保テ…」

プーこれを巻かれた者は捕らえられた証明になる！」

芦戸 「制限時間は15分で核の場所はヒーロー側は知らないんですよ?」

(オ)マイト「YES！」

芦戸 「ヒーロー側が圧倒的に不利ですねこれ…」

(オ)マイト「ヒーローというのはいつも不利なものさ…だがそれを覆すのがヒーローだ！相澤く」

んにも言われたでしょ？あれだよ…せーの！」

A組B組 「[[「Plus Ultra!!」]]」

青山 「ムツシュ！爆豪が！」

(オ) マイト「！」

雄英の校訓を皆で言った瞬間状況が動く。

——ビル2階——

ポオンツ！

緑谷 「麗日さん行って!!」

麗日 「うっうん!!」 ダツ！

爆豪 「余所見とは余裕だな!!」 ドガツ！

爆豪は爆破で空中に飛び、左足で緑谷の頭の右側面に蹴りを入れる。緑谷はそれを防御

し確保テープを爆豪の足に巻きつけようとする。その間に麗日は回原と鎌切に合流する

ため3階へ移動する。

緑谷 「ぐっ！」 シュルツ！

爆豪 「!? (確実証明の!!)」

緑谷 (相澤先生の技を生で見れてよかった！次はなんだ!? かつちゃんならまた焦ってまた…右の

大振り!) バツ！

自分の知識をフルに使い爆豪の攻撃を回避する。

ポオオンツ!!

爆豪 「なっ!? また…」

——地下モニター室——

砂藤 「すげえなアイツ！」

瀬呂 「個性使わずに渡り合ってるぞ!!」

クラフト (うおーがんばれ緑谷〜！)

(オ) マイト (元々とつきの判断には優れてはいた…そして少年が何年にも渡って書き留め頭にし

みこませたオタク知識が…背中を押されたことによつて今！報われているんだ！)

上鳴 「なんか爆豪すっげーいらついてない?」「こわっ
(オ)マイト(爆豪少年は緑谷少年から聞いた感じだと自尊心の塊だろ
うか?…肥大化しすぎてる

ぞ…ムムム!!)

——ビル2階——

緑谷 (当たり前!けど流石に一筋縄じゃいけないよね…体勢を直
さなきや)ダツ!

爆豪 「あつ!待てやオイコラデクウ!!なあデクウ!俺を騙して
たのかあ!?!楽しかったかあ!?!あ☒あ!?!随分

派手な個性じゃねえかよ!!使って来いよ!!俺の方が上だ
からよお!!」ボボツボオン!

一旦その場所から離れる緑谷と激昂する爆豪。

——ビル3階——

麗日 「あつ!鎌切くん!回原くん!」タツタツタツ…

鎌切 「!…麗日か!緑谷はどうした?」

麗日 「2階で爆豪くんと戦ってる!2人と合流して敵の場所を
探してって!」

回原 「マジか!けどそれが最善か…相手もたぶんだけど3人で
守っているはずだ」

鎌切 「このフロアはもう探し終わっている。ということは相手
は4階から5階に陣取っているな」

麗日 「よし!爆豪くんはデクくんに任せて私たちは核を探そう
!」

回原 「そうだな!」

鎌切 「おう!」

緑谷を信じ3人は進む。

——ビル2階——

緑谷 「はあ…はあ…(僕だけを狙いに…ということは作戦とか
じゃなくてこれはかつちゃんの

暴走か。これでいい近接戦闘向きの個性の回原くと鎌
切くんがいれば勝機はある!僕

も何とかしてかつちゃんを倒していけば勝率は上がる…
時間切れには気を付けない

と…)」

カツン…カツン…カツン…カツン…カツン…

爆豪

「……………（石つころが！）」ゴオオオオオオオオオ…

爆豪勝己は幼少の頃から何でも出来た子供だった。周りから褒められ続けられた彼は自分が

がすごいのだと思うようになる。そして個性が発現してからさらにそれが加速する。

だがそんな彼を周りとは違い緑谷は普通に接する。爆豪はその行動が気に入らず緑谷に

対し、嫌悪や憎悪の感情を持つのと同時に焦躁感も持つようになつた。

爆豪（俺の方が上だ!!）

——ビル5階——

麗日 「ここやね」 コソコソ

回原 「ああ…中に3人いるな」 コソコソ

鎌切 「なら早く核を回収しちまおうぜえ」 コソコソ

回原 「焦るな鎌切、そういうのが失敗の元だぞ」 コソコソ

麗日 「?…何か話してるね」 コソコソ

鎌切 「なに話してんだ?」 コソコソ

5階フロアにある核がおかれている部屋の入口の前で様子进行を伺う3人。

飯田 「爆豪くんには悪いが今回の訓練において彼の行動や言動は一応沿ったものだ」

円場 「まあ敵^{ヴァイラン}っぽいな」

物間 「てゆーかまんま敵^{ヴァイラン}だけどね何も知らずに見たら」

飯田 「なら俺たちも敵^{ヴァイラン}に徹しなければいけないのではないか

?」

円場 「?…どんな風に?」

物間 「卑怯な戦法でも取るかい?」

飯田 「そうだな…まずは言葉遣いを変えてみるのはどうだろうか？」

物間 「じゃあお手本みせてよ？」

飯田 「よし！……俺はあ…至極悪いぞおお」

麗日 「(真面目や!!) ブフウツ!!」

飯田の敵サイラン? の真似に思わず笑ってしまい気づかれてしま
う。

回原 「ちよっ！」

鎌切 「麗日！」

飯田 「!?…来たか麗日くん…それにB組の2人！」

円場 「回原に鎌切だ！こつちと同じ人数かよ！」

物間 「ようやくかい？待ちくたびれたよ(笑)」

飯田 「回原くんに鎌切くんの個性はまだよくわからないが麗日
くん、君の個性は触れた対象を

浮かせる個性だ。…なので君たちが来る前にこのフロア
は綺麗に片付けさせてもらった

よ!!これで小細工は出来まいヒーロー!?ぬかったな!!フ
ハハハハハハハ!!」

麗日 「様になってる…」

鎌切 「けっ！それがどうした！核にさえ触れればこつちの勝ち
だ！」

回原 「よし！俺と鎌切が3人を引き付ける！その間に麗日は核
を頼む！」

麗日 「りよーかい！」

物間 「…それはどうかな？」ボソツ…

小さく言いながら不敵に笑う物間。

——ビル2階——

緑谷 (さっきの蹴りは読まれることを避ける為の攻撃だ…警戒
されたんだもう簡単には間合い

には入れないぞ…どうする…)

爆豪に対する策を考える緑谷、そこにチームからの通信が

入る。

麗日 『《ザザツ…》デクくん!』

緑谷 「麗日さん!?今どこに!？」

麗日 『5階の真ん中の部屋!今2人が相手の引き付けて私が核を回収しようとしている最中だよ!だ

けど苦戦中!』

緑谷 「(ほぼ真上か!)そろそろ時間もヤバイ!タイムアップは相手の勝利だ(ここだけは負けたく

ない!)」

爆豪 「…溜まった…」 シュウン…ガコン…

緑谷 「!？」

爆豪 「なんで個性使ってこねえ?舐めてんのかデク?」

緑谷 「かつちゃん…もう君を恐がるもんか」

爆豪 「!…:てめえの事だから知ってんだろうがよお…:俺の爆破は掌の汗腺からニトロのような

もんを出して爆発させている…」

緑谷 「?…:…」

爆豪 「要望通りの設計なら…:この籠手はそいつを内部に溜めて

…:」 ガコ

(オ) マイト 『(まさかそれって!?)ストップだ爆豪少年!!殺す気か!!』

爆豪 「当たんなきや死なねえよ!!」 グツ…:キンツ!

オールマイトが止めるが時すでに遅し。爆豪は手榴弾型の籠手に内蔵してある遠距離で

爆破攻撃できる装置を起爆させ、緑谷に大規模な爆破攻撃を喰らわせる。

緑谷 「!!?」

ドツツボオオゴオオオオオオオオオオン!!!!

——地下モニター室——

A組B組 「うわっ!」「きゃあっ!!」

切島 「授業だぞこれ!？」

(オ) マイト 「少年!!緑谷少年!!無事か!!？」

オールマイトが無線で緑谷の安否を確認する。

——ビル5階——

ビリリリ……グラグラグラ……

爆豪の大規模攻撃によってビルの窓ガラスは割れたり震えたりなど、建物自体をも揺らす。

飯田 「なっなんだ!？」

麗日 「うわっ!!」

鎌切 「地震か!？」

物間 「まさかあいつの仕業じゃないだろうね?」

麗日 (チャンス!!) ダダッ!

飯田 「行かせんぞ!」 ダッ!

麗日 「うりゃ!」 ダダッ:ピヨーン

飯田 「何!?自身も浮かせられるのか!?だが!」

鎌切 「おっとそうはさせないぜえ!」 シュバッ!

飯田 「くっ!……」

麗日 「負担の大きい超必です!」

回原 「よしそのままタッチすれば俺らの勝ちだ!!物間も俺が抑

えている!円場がいるが如何に張

りぼてと言つてもすぐには移動できない!

物間 「それはどうか?……円場!!」

ビルが揺れている隙に自身を浮かして核を回収しようと

する麗日。だが現実はその問

屋が卸さない。

円場 「おうよ!!……すうう……ふうううう!!」

麗日 「えっなに!?うぎゃ!」 ガンッ!!……ドタッ!

円場 「へへっ!空気のバリアだ……この隙に核を移動つと……」 グ

イツ:タツタツタツ:

麗日が核に触れるのを阻止するべく円場が麗日の目の前

に、空気のバリアを張り麗日の

動きを阻害する。

飯田 「ナイスだ円場くん！」

鎌切 「チツ！大丈夫か麗日！」

麗日 「あいたた…うっうん平気だよ！」

物間 「はっはっは！惜しかったね！このまま時間切れまで逃げさせてもらうよ」

回原 「くそっ！」

5階で接戦が繰り広げられているなか爆発が起きた2階

では…

——ビル2階——

パラ…パラ……ガタン…ゴシヤアン…

爆豪 「ははっ！すげえ！なあデクどうしたあ!?まだ戦えんだろ

!!」

緑谷 「はあ…はあ…はあ…はあ…危ないじゃないか…かつちやん…下手をすれば死人が出ちや

うじゃないか(噴出する爆破…遠距離に対応できるようにしたのか)」

爆豪 「ああ？何言って…!!」

緑谷 「僕じゃなかったら死んでいたよ」ボツ…ボボツ…

煙幕が晴れるとビルの壁に大きな穴が開いており、通路や壁の表面ががえぐれていたり

亀裂が入っていた。そして緑谷が腕を交差させ防御の姿勢を取りながら立っているよう

だが、煙幕が晴れるとその姿は少し違った。

——地下モニター室——

A組B組 「えっ?…」「まって…あれ緑谷?」「体が…ない?」

クラフト (上手く使ってるな緑谷…)

(オ) マイト 「緑谷少年！まずい早く彼を…」

クラフト 「オールマイト…大丈夫ですよ」

(オ) マイト 「!?…機神少年それはいったいどういう…!?」

峰田 「何が大丈夫だよ機神！あの状態が大丈夫に見えるのかよ!?」

爆豪 「ああ!？」

(オ) マイト『屋内戦闘において大規模攻撃は守るべき牙城の損壊を招く。その行為はヒーローと

してはもちろん敵^{サイラン}としても愚策だ! 大幅減点だからな

!(教師としては

ここは止めるべきだろう…しかし…!』

爆豪 「くくく…ああ☒ーくそっ!!じゃあ殴り合いだ!!」ポオン!

緑谷 (来た! 大丈夫僕には物理的な攻撃は効かない! 落ち着いて反撃を!)

緑谷と爆豪の肉弾戦が始まる。

——ビル5階——

鎌切 「ちっ! もう少しだったんだけどな…」

回原 「そう言っても仕方ない、次の手を打つまでだ」

鎌切 「何かあるのか?」

回原 「……………ない…」ぼそっ

麗日 「いや! ないんかい!!」

飯田 「ふははははは! どうしたヒーロー! 手も足も出まい?」

物間 「はっはっはっ! 来ないならこちらから行かせてもらうよ!
!」ドルンツ!!

物間はそう言うのと飯田の個性をコピーし麗日達の周りを素早く駆け回る。

ドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!

物間 「はっはっはっ! どうだいこの速さ追いつけまい!」

鎌切 「くそちよこまかと!」

物間 「あーはっはっはっ! 手も足も出ないとはこのことだね!
余裕すぎてジャンプをする余裕ま

であるよ!」 シュバツ!

麗日 「あっ…」

飯田 「!!…いかん物間くんそこでジャンプしては!!」

物間 「えっ? どうしてだ! 《ガアアン!!》…がっ…は…」ドサ…

物間は少し前に円場が出した麗日を阻害したバリアに頭を直撃してしまい気絶してしま
う。

円場 「……………」

飯田 「……………」

鎌切 「……………」

回原 「……………」

麗日 「……………あつ…」トットトツ…シユルルル…ぎゅっ！

(オ) マイト『物間少年確保ー！』

飯田 「はっ！しまったああああ!!」

回原 「ナイスだ麗日！」

鎌切 「これで3対2で有利になった！」

円場 「物間すまーん!!俺のせいだ！」

飯田 「円場さんのせいではない!あまり言いたくはないが…彼の前方不注意が招いた結果だ!」

あっけなく確保されてしまった物間であった。

——ビル2階——

爆豪 「くらえやあー!」グアツ…ポオン!

緑谷 「ぐっ! (やっぱ動きが早い!だけどこの隙にOFFA…8

%!)」ギユイイイン

爆豪 「ちっ! (攻撃が通じてねえ?)」

緑谷 「そこっ…だあ!」ブオンツ!

爆豪 「ぐっ!」ドガツ!

爆豪は空中に飛び緑谷に右の大振りの爆破を当てる、が緑谷にダメージはない。その隙

に緑谷はOFFAを発動させ右手でパンチを爆豪に一撃を
与える。爆豪は防御はしたものの

後ろに少し下がってしまう。

——地下モニター室——

A組B組 「!」「おおっ!!」「!」

切島 「おおっ緑谷一発入れたぞ!」

鉄哲 「やるじゃねえの!!」

(オ)マイト(機神少年のおかげで上手くOFAも使っているが…だがまだ体術など課題がたくさん)

あるぞ！)

クラフト(個性は使えてるけど戦闘センスはやっぱ爆豪の方が上か…一発当てたけど有効打になっ

てない…)

——ビル2階——

爆豪 「ならこうするまでだ！」ボオン！

緑谷 (来る！…ここで迎撃！…!?) ボンッ！…スカッ！

爆豪 「おせえ!!」 ガシッ！ボボボボッ！グイイ!!

緑谷 「うわっ！…ガハッ!!」 ダアン!!

爆豪は再び緑谷に突っ込む。緑谷は迎え撃つため前方に腕を振るが、爆豪はその前に目

の前で小さい爆破をし緑谷の後ろに回り込む。そして腕を掴み爆破の勢いを利用して緑谷を床に叩きつける。

爆豪 「てめえの個性は一見攻撃が効かねえように見えるが万能じゃねえ…あくまで直接物理的

な攻撃を無効に出来るまでだ！今みたいに床に叩きつけてダメージを間接的に与える事は例外だ。」

は例外だ。」

緑谷 「ぐっ…」

——地下モニター室——

轟 「目眩ましを兼ねた爆破で軌道変更、そして爆破の勢いを利用して叩きつける…あんま考

えるタイプには見えねえが意外に繊細だな」

八百万 「爆破の勢いを利用するには相応のコントロール力が要りますわ。強すぎても弱すぎても

バランスが崩れてしまいます。」

上鳴 「才能マンだ才能マン…やだやだ…」

——ビル2階——

爆豪 「オラ立てや！……!?」ドカツ！

緑谷 「ぐあっ！」

爆豪 「……（まさか…）」コツコツコツ…グイッ

緑谷の腹を蹴り上げる爆豪はその時ふとあることに気づく。そして緑谷の胸ぐらを掴み

体を持ち上げる。

爆豪 「その攻撃の無効化…常時発動じゃねーみてえだな？」

緑谷 「!?…」

爆豪 「どうやらその顔は凶星みてえだ…なっ!!」ニヤ…ドゴツ

！

爆豪は緑谷の弱点の1つを当てるとそのまま腹に膝蹴りを喰らわせる。

緑谷 「ぐほっ…」

爆豪 「おらどうしたあ！ほら行くぞてめえの大好きな右の大振りい!!」ブオン…ドゴツ！

緑谷 「ア×ア…」ドサツ…

——地下モニター室——

拳藤 「ちよっ！これどうなの!？」

芦戸 「リンチだよこれ！テープを巻きつければ捕らえたことになるのに!!」

常闇 「ヒーローの所業に非ず…」

上鳴 「緑谷もすげえって思ったけどよ…戦闘能力において爆豪は間違いなくセンスの塊だ

ぜ…」

クラフト 「……（事故でもなんでも一撃入れられたら…）」

芦戸 「あっ逃げてる！」

切島 「男のすることじゃねえ…まあ仕方ないか」

(オ)マイト(ここは止めるべきなんだろう…だが止めてあげたくない!!…)

葛藤するオールマイト。

——ビル2階——

緑谷 「くっ…(何とかしないと…)」ドタドタドタ…

爆豪 「個性使ってかかってこいや俺を舐めてんのか!!ガキの頃からずっとそうやって!!……」

「俺を舐めてたんか!?てめえはあ!!?」

緑谷 「違うよ…」

——ビル5階——

飯田 「はあ!!」ドガッ!

鎌切 「ぐっ!」ズザザアッ!

回原 「くそっ意外に粘りやがる!」

円場 「すまねえ飯田!」

飯田 「大丈夫だ円場くん!君はそのまま防御に専念してくれ

!

麗日 「うう…どうすれば…そいえばデクくんどうなったんやろ」

2対3になったにも関わらず敵サイランチームは意外にも粘っていた。そして麗日は思い出した

ように緑谷に無線を繋げる。

——ビル2階——

緑谷 「『ザザッ…デクくん!』麗日さん!?!……うん後はそっちに任せるよ!」

爆豪 「はっ!やっぱり舐めてんじゃねえか!」

緑谷 「違うよ…君がすごい人だから勝ちたいんじゃないか!」

——ビル5階——

麗日 「鎌切くん!回原くん!……だからこっちに!」

鎌切 「おう分かった!」

回原 「わかったが大丈夫なのかよそれ!」

飯田 「なんだ?」

円場 「一体なにを?」

麗日達は一体何をしようというのか?

——ビル2階——

緑谷 「君に勝って超えたいんじゃないかバカヤロー!!!」

爆豪 「その面やめろや!!クソナード!!!」

緑谷 「DETROIT……!!」ダダッ!

爆豪 「ああああ……!!」ダダッ!

互いの感情がぶつかり合い正面から同時に攻撃に入る緑

谷と爆豪。

——地下モニター室——

(オ) マイト (「ヒーローになる」以外で初めて見せる激情!)

A組B組 「なんか爆豪余裕なくね?」

オールマイト(きつと君の見据える未来にこれは必要な事なんだろう!)

A組B組 「てかこれヤバくない!」

切島 「先生!これヤバいつて!!」

(オ) マイト 「双方!……中s!」

オールマイトが訓練を止めようとしたその時!

——ビル2階——

緑谷 「いくぞ!3人とも!!」

爆豪 「あ☒あ☒あ☒あ☒あ☒!!」

——ビル5階——

麗日 「うん!」ピタッ

鎌切・回原 「おうっ!」ザッ!

飯田 「?」

円場 「?」

——ビル2階——

緑谷 「SMASH!!!」ボオン!……ブオオツ!!

爆豪 「なっ!!?」

緑谷は天井に向かってOFFA100%を打ち放つ。そしてそれは天井をどんどん破壊していき

き屋上まで突き抜けてしまう。

ブオオオオオ!!!バゴンツバゴツバゴゴゴツ!!!

——ビル5階——

バゴオオンツ!!!

円場 「うおおあつ!?!」

飯田 「なっなんだこれは!?!むっ!?!」

麗日 「ゴメンね飯田くん即興必殺!彗星ホームラン!!」ガキガキガキガキン!!

突然床が壊れたことに驚く飯田達。それに対し麗日は個性で浮かしたビルの柱をバット

の様に振り、壊れた床の破片を飯田達に向かって容赦なく打つ。

飯田 「ホームランではなくないかー!?!」

円場 「どわー!?!」

鎌切 「麗日乗れ!」

麗日 「うん!超必!」タツ:スト:

鎌切 「飛ばすぞお!うおりゃあ!!」ブオン!

鎌切は面積が大きい刃物を出し、その側面に麗日に乗せて力一杯核に向かって投げ飛ばす。

麗日 「うおお:りゃ!回収!!」ピョオン:ガシツ!

飯田 「あつ!ああー!?!核うー!?!」核うー!?!
核うー!?!

——ビル2階——

爆豪 「……………!!……………てめえ:ハナツから:やっぱ舐めてんじゃねえか!!」

緑谷 「ハアハア:…使うつもりはなかったんだ:全力で使うとまだ:ハア:体が耐えられ:…ないから:ハアハア:」ガクツ:

爆豪 「!?!」

緑谷は自身の個性で負傷した右腕を抱えながらその場に膝をつく。そしてオールマイト

がヒーローチームの勝利宣言をする。

(オ) マイト『ヒーローチーム:』

『WIIIIIIIIIIIN!!!』

爆豪 「(右：デクは読んでいた：読んだ上で訓練に勝つ算段を…しかも物理的攻撃効かねえの

に：俺は直接：そりやつまり：ガチでやり合っても俺は…デクに：!?) はっ！…はあっ！…

はあっ！」

息が荒れる爆豪。そこにビル内部にやってきたオールマイトが声をかける。

(オ) マイト「戻るぞ爆豪少年、戻って講評をするよ。結果はどうであれ振り返ってこそ経験は活

きるんだぜ。緑谷少年！意識はあるかい？」

緑谷 「は…はい」

(オ) マイト「よし！と言ってもその腕じや授業を受けるのは無理だから、搬送ロボに乗ってリカ

バリーガールの治療をうけよう！」

緑谷 「分かりました…っ痛っ…」

緑谷が搬送ロボでリカバリーガールの元へ送られた後、講評の時間が始まる。ちなみに

物間は床が壊れた衝撃で目を覚ましている。

——地下モニタールーム——

(オ) マイト「まあとは言っても今戦のベストは鎌切少年、回原少年と飯田少年、円場少年だけど

ね！」

飯田 「なな！」

円場 「なんで俺らが？」

蛙吹 「勝ったお茶子ちゃん達じゃなくて？」

(オ) マイト「なんでだろうなく？わかる人!!」

オールマイトが自身の腕を上げながらA組B組の皆に聞くと…

八百万 「はい！オールマイト先生！それはその4人が一番状況設定に順応していたからです。爆豪

さんの行動は戦闘を見るからに私怨丸出しの独断行動、そして先ほど先生が仰って屋内

での大規模攻撃は愚策。緑谷さんも同様の理由ですわ。物間さんは訓練中なのに調子に

のって自爆、味方が不利になるという状況を作りだしてしまいました。麗日さんは中盤

からの気の緩み、最後の攻撃が乱暴すぎることを。張りぼてを核として扱っていたらあん

な危険な行為できませんわ。相手への対策をこなし且つ核の争奪をきちんと想定してい

たからこそ、飯田さんと円場さんは最後の対応に遅れた。鎌切さんと回原さんも設定に

順応していましたが、最後の勝ち方は訓練という甘えから生じた反則のようなものです

わ!」ぺらぺらぺら
シ~~~~ン…

(オ)マイト「思ってたより言われた!!」まあその通りだ!正解だよ!!くう!!」

八百万 「常に下学上達!一意専心に励まねばトップヒーローになどなれませんので!!」

爆豪 「……………」

オールマイト「そっそうだ!機神少年!君は何かあるかい?」

クラフト「えっ俺すか!?!」

オールマイトは急にクラフトを指名する。

クラフト「えくでもまあ大体は八百万の言った通りだと思います。

まあフオローするなら即興で技

を作ったのはよかつたんじゃないすか?プロになったら状況に素早く対応しなきゃいけ

ないと思うんで!」

(オ)マイト「なるほど!ありがとう機神少年!とまああまり落ち込まずに今回の経験を次に生かす

ようにね!!じゃあ場所を変えて第2戦目をやろう!!」

A組B組 「「「はいっ!!」「」」

1戦目からなかなかの訓練だった為、みんなの士気も上が
りながら第2戦目に移ろうと
する。

第12話 B対I 油断は禁物だよ轟くん!!

1戦目が終わり訓練によって損傷したビルを変えて第2戦目が行われる。第2戦目はヒー

ローチームがBチーム、ライラン敵チームがIチームになった。

——グラウンドβ——

——ビル1階——

障子 「:4階の北側の部屋にまとまっているな」ギョルツ:ピクピク:

障子は複製腕の先端を耳に複製しビル内部の状況を把握しチームに伝える。

凡戸 「なるほどー」

轟 「危ないから外出てる、向こうは防衛線のつもりらしいが:」ヒュオオ:
パキパキツパキインツ!!!

轟はチームの3人に外に出ろというと瞬時にビル全体を凍らせる。ビルを凍らせたことに轟以外の全員が驚く。

障子 「なっ:」

凡戸 「わあーすごいー」

柳 「やばっ:」

——地下モニター室——

(オ)マイト「仲間も巻き込まず且つ核兵器にもダメージを与えずさらに敵も弱体化!」(ぶるぶる)

切島 「最強じゃねえか!!」(ガクガク)

A組B組 「すげえけど寒い!!」「冷えるー!」

氷の冷気によって寒くなるモニター室。

蛙吹 「けろお:」うつらうつら:

クラフト 「ん?:大丈夫か蛙吹?」

蛙吹 「けろっ:梅雨ちゃんと呼んで、私個性の関係で寒さに弱い:」

クラフト「そうなのか…梅雨ちゃんこれ着とけよ」ばさっ

クラフトは自身のコートを差し出す。

蛙吹 「ケロツそれだと機神ちゃんが寒いわよ?」(ぶるぶる)

クラフト「俺は大丈夫だ(ネツネツの能力)」シユウウウ

クラフトは個性を発動させ自身の体温を上げる。それと同時に周囲の温度も上がり暖かくなる。

蛙吹 「すごいわね…ありがとうとても暖かいわ」にこっ

クラフト「それはよかった(笑)」

耳郎 (クラフトのコート!羨ましい／＼!!)

瀬呂 「おほーあったけえく機神マジサンキューだぜ!」

クラフトの周囲が暖かくなったためその周りに段々集まり、特に女子は寒さに弱いため

か全員集まる。その光景を見て峰田がクラフトに迫る。

峰田 「機神…てめえなに羨ましいことしてんだよ(怒)」

クラフト「いやそう言われてもな…」

峰田 「ああ!?てめえどうせ女子に囲まれて興奮してn《ベチンツ!!》」

蛙吹 「うるさいわよ峰田ちゃん」

蛙吹の舌による制裁をくらう峰田であった。その頃敵ライランチームはというと…

——ビル4階——

尾白 「なっこれは!」

葉隠 「氷!?靴脱いでなくてよかつた」ほっ…

取蔭 「なっ?履いといてよかつたろ?」

鱗 「3人とも動くな俺のウロコで壊すから!」ドシユドシユツ!

葉隠は最初から靴を脱ごうとしていたが、取蔭が助言しておいたおかげで素足のまま凍

らずにすむ。そして鱗が個性で自身と3人の足の氷を割っていく。

鱗 飛竜【個性：鱗】

自身の体に竜の様な黄緑色の鱗を鎧のように生やすことができる。飛ばすのはサポート

アイテムを使って撃ちだしている。防御にも使え、逆向きに生やして当たった相手を削

るようなことも出来るぞ！

葉隠 「わぁーありがとう鱗くん!!」

尾白 「助かった！」

取蔭 「いや〜鱗がいて助かったよ〜」

鱗 「全身凍ってたらどうしようもなかったけどな（笑）」

取蔭 「さて相手はたぶんこっちが動けないと思ってるだろうから驚かせてやろうぜ！」

葉隠 「そうだね！私本気出すよ！うおー！」ぬぎぬぎ

鱗 「……………（アイヤー…………）」

尾白 「……………（葉隠さん透明人間としては正解だけど…女の子的

にはモロOUTだな…………）」

敵 チームが相手を待ち構えているときヒーローチームは

すぐ近くまで来ていた。

——ビル4階——

轟 （あとは核を回収するだけ…）

このとき轟は相手はどうせ動けない状態であろうと決めつけており油断していた。そして

て轟が核のある部屋に入る。

轟 「さて…なっ?!」ギィィ…

取蔭 「おやおやくどうしたのかな驚いた顔して?（笑）」ケラケ

ラw

鱗 「なんで俺らがどうして動けるのかだろ?」

轟 「ふん…ならまた動けなくするまでだ…!」パキパキパ

キツ!

尾白 「おっと!」バツ!

鱗 「余裕ぶっこいて4人も相手できるのかよ!」ドシユシユ

シユシユツ!

轟が再び凍らせて動きを封じようとするが避けられてしまふ。そして鱗がウロコを飛ば

して攻撃するが、氷の壁を作り出し防御する。

轟 「っ!?…《キインツ! ドガガガガツ!》(んだこれ…ウロコ!? そうかこれで氷を割ったのか!!)」

取蔭 「あっはは! お仲間呼んだ方がいいんじゃないの(笑)? そうそう轟…後ろには気を付けな

よ?」

轟 「あっ? 何を言ってるやが…!!」バツ!

取蔭に言われたことに疑問を持つがその直後、背後に気配を感じて横に素早く回避する。

葉隠 「とりゃー!!」ぐわっ!

轟 「つぶねえな!」スザザツ!

葉隠 「ぬあー避けられた!」

尾白 「葉隠さん捕まえる時は静かに捕まえないと…」

葉隠が確保テープを後ろから巻きつけようとするがあと一步のところで避けられてしま

う。そのとき外で待っていたヒーローチームの3人が、流石に遅いと気づき轟の無線に

連絡しようとしていた。

——ビル屋外——

障子 「いくなんでも遅くないか?」

凡戸 「そうだねー」

柳 「無線に連絡してみたら?」

障子 「そうだな…」

障子が轟の小型無線に呼びかける。

——ビル4階——

轟 「(流石に4人はキツイな…)…《ザザツ…轟、核は回収できたのか?》障子か…いや核は回収でき

てねえ…それどころか交戦中だ！」

障子 『なにつ!?よし分かった俺らもすぐに向かう!場所はどこだ?』

轟 「4階の北側の部屋だ！」

障子 『分かった、俺らが行くまでもう少し耐えてくれ!』

——ビル屋外——

障子 「どうやら相手と交戦中らしい」

凡戸 「ええーマジでー?」

柳 「じゃ早く行かないと」

障子 「よし行こう!」

タツタツタツタツタツ…

——ビル4階——

取蔭 「お仲間との話はすんだかい?」

轟 「ああ…でもその前に済ませたいな!」パキパキパキツ!

葉隠 「うわわつと!」

取蔭 「しまっ!」

轟 「油断したな…」

取蔭 「につひつひく(笑)そう思うじゃん」フワツ

轟 「なにつ!」

取蔭の足が凍らせたと思ったら足を残して体が浮く。正

確には切り離したというべきだ

ろうか?

取蔭 とかげ 切奈 せつな 【個性：トカゲのしつぽ切り】

体を分割して自在に操作できる。空中に浮くことも出来るぞ!本体から離れた部位は—

定時間で動かなくなり、その後本体で再生する。

轟 「ちっ…厄介な個性だな…」

鱗 「早く他の3人が来る前に確保しよう!」

尾白 「とは言っても下手に近づいたら凍らされちまうぞ?」

鱗 「俺と尾白が牽制するから葉隠か取蔭が隙についてテープを巻いてくれ!」

葉隠 「わかったよ！」

取蔭 「りよーかい！」

轟 「くっ…（ウロコを飛ばしてくる奴がなにげに厄介だな。尾白はそこまで脅威じゃねえ問

題は女子2人だ…透明に体を切り離せる個性、常に周りに気を張っておかねえとテープを巻かれちまう）」

——地下モニター室——

A組B組 「轟の個性で圧勝かと思ったな」「それでも脅威だけどなー」

上鳴 「うへーマジやべえじゃん轟の個性」

八百万 「今回は鱗さんがいたおかげで何とかりましたが、いなかっただらそのまま負けていまし

たわ」

クラフト 「なにか破壊できる個性じゃないとあの氷は厄介だね」

飯田 「うむ回原くんの個性とかなら対抗できるな！」

回原 「でも壊す速度より速くされたら無理かな」

上鳴 「何にせよ強いことには変わりないぜ」

モニター室では様々な感想がでる。そして轟が奮戦しているとそこにチームの3人がようやく到着する。

障子 「轟！」

轟 「障子か!？」

凡戸 「大丈夫?—」

柳 「まだ生きてる?」

鱗 「アイヤー…来ちゃったよ」

尾白 「あれ?そっういえば葉隠さんはどこに?さつきまで近くに?」

ヒーローチームが到着するがその直後、確保のアナウンスが流れる。

(オ) マイト『凡戸少年!確保ー!!』

凡戸 「えっ?」

轟 「はっ?」

障子 「なんだと!？」

柳 「凡戸! 足みて!」

凡戸 「わあーほんとだー! 巻かれてるー!」

葉隠 「へっへっへっ 隙ありだよ!」

取蔭 「葉隠ナイス!!」

ヒーローチームが到着したあとすぐに入口付近にコツソリ移動していた葉隠。そして隙

をついて相手の1人に確保テープを巻いたのであった。

障子 「そこにいるのか!…っ! 移動したか!…」ブオンツ…ス

カツ

葉隠 「いつまでも同じ場所にはいないよ障子くん!」

柳 「まじウラメシじゃん」

障子が凡戸の横にいるであろう葉隠を捕まえようとする
が失敗に終わる。

鱗 「こつちがガラ空きだぞ!」ドシユシユシユシユ!

柳 「しまっ!」

障子 「柳!」ガバツ

鱗が柳に向けてウロコを撃ちだし虚をつかれた柳は対応
に遅れる。がそこを障子が持ち

前の巨軀で柳の前に出て庇う。

柳 「障子!？」

障子 「ぐっ! 大丈夫だ…大したダメージはない。それよりケガ
はないか?」

柳 「うっうん／＼大丈夫…大丈夫…／＼／」

障子 「ならよかった」

轟 「ちっ!」パキパキパキ!

鱗 「おっと!」シュバツ

轟 「障子大丈夫か!？」

障子 「問題ない」

轟 「そうか…なら早いところ核回収しねえとな時間がきちまう」

障子 「そうしたいがいささかこちらが不利な状況だ」

柳 「なにかいい方法が…(ん?…これは)…ねえ2人ともちよつといい?」

障子 「なんだ柳?」

轟 「どうした?」

柳 「私がコレを使って気を引くから2人はその間に…」

障子 「それは…分かったやつてみよう」

轟 「しかたねえか…」

障子 「俺が先に行こう、轟は俺の後ろで柳はサポートを頼む」

轟 「おう」

柳 「分かった」

ヒーローチームは部屋に落ちていたあるものを使って行動を起こす。

取蔭 「何やら企んでるね(笑)」

鱗 「油断するなよ!」

葉隠 「大丈夫!私がまた捕まえて見せるから!」ウオー!

尾白 「さつき見たいに上手くいけばいいけど…」

鱗 「来るぞ!…って正面突破かよ!!」

障子を先頭にその後ろを轟が後に続き、柳は動かずに個性を使って2人のサポートをす
る。

取蔭 「ちよつと舐めすぎじゃない!鱗!」ヒュウンヒュン!

鱗 「分かってる!」ドシユシユシユシユ!

取蔭は自身の体を分割させて障子にぶつけ、鱗もウロコを飛ばして動きを止めようとす

るが…

障子 「ぐっ!」ドカドカドカツ!!

取蔭 「ちつまるで戦車みた…ん?なんd…いたたたた!?」バ

シバシバシツ!!

葉隠 「取蔭ちゃんいたたたたた!!」バシバシバシツ!!

轟 「そこか」パキイン!

葉隠 「ぬわー!!」

ウロコが当たっていることにより場所がバレてしまい動きを封じられる葉隠。

鱗 「取蔭!?葉隠!?あれは…俺のウロコ!」

柳 「そうあんたのウロコだよ…床に一杯落ちていたから使わせてもたつたよ」

柳 レイ子【個性：ポルターガイスト】

身近にあるものを操ることができる。ただしヒト一人分程の重量まで。人も動かすことも可能。

鱗 「アイヤー!マジか!」

障子 「余所見は危ないぞ」ガシツ

鱗 「うおっ!はっ離せ!」ジタバタツ!

障子 「悪いな」シユル…ギユ…

目を離れたすきに障子に捕まってしまい確保テープを巻かれてしまう。

(オ) マイト 『鱗少年確保ー!!そして取蔭少女も確保ー!!』

尾白 「えっマジかよ!」

柳は確保テープも一緒に飛ばしてウロコに気を取られている間に取蔭の体にテープを巻いたのであった。

轟 「後はお前だけだぞ」

尾白 「くっ………わかった降参(苦笑)」

(オ) マイト 『尾白少年、今回の訓練には降伏宣言は入っていない。理由を聞いていいかい?』

尾白 「はい、理由はこのまま戦っても俺に勝ち目がないこと、それに早くしないと葉隠さんが

凍傷とかになるんじゃないよ…」

——地下モニター室——

A組B組 「「「あっ……」」」」

(オ)マイト「あっ……うっうん！なるほど分かった！尾白少年の降伏宣言を認め、ヒーローチーム

のWIIIIIN!!」

こうして第2戦目のBチーム対Iチームの対戦はIチームが最後に降伏するという形で終

わった。その後、モニター室で講評し次の対戦に移る。

第13話 C対E 峰田ほどほどにしとけよ!

——グラウンドβ——

——地下モニター室——

(オ)マイト「よしでは次の組を発表するぞ!次はの組はあくこいつらだ!!Cチームが敵サイラン!Eチームが

ヒーローだ!!」バツ!

——ビル5階——

峰田 (うっひよおおお!!マジかよおいらのチーム、おいら以外全員女子じゃねーかよ!!最

高じゃねか…へへへ、これで心置きなく女子の体を訓練という名目で見れるぜ!)

八百万 「峰田さん!ちゃんと聞いておられますの!?!」

峰田 「えっ!?!おっおう!聞いてるぜ!」

八百万 「まったく何を考えていますの?もしかして何かいかがわしい事でも考えているのでは?」

小大 「ん」

峰田 「いやいやいや!おいらはそんなこと全然!」

角取 「怪しいデース…」

峰田 「ほっほら早く作戦考えないといけないんじゃないのか!?!」

八百万 「…そうですわね、今は訓練に集中しませんと」

小大 「ん!」

角取 「Oh!その通りデース!どんな風にシマシヨウ!」

八百万 「では……………」

峰田 (あぶねえあぶねえ…危うくおいらの企みがバレちまうとこだったぜ)

女子の体が訓練よりも気になる峰田であった。そして峰田がそんなことを考えているうちに訓練が始まる。

——ビル1階——

芦戸 「よーし！ちやちやつと核を見つけて勝っちゃおう!!」

吹出 「そうだね！こう：ズババーツて見つけて相手も捕まえよう！」

青山 「僕がいるから大丈夫！」

塩崎 「ああ…このチームは大丈夫なのでしょう？これも神がお与えになった試練なのでしょう

うか？」

芦戸 「もー塩崎ちゃんは心配しすぎだよー（笑）」

自分のチームに不安を抱いてしまう塩崎。

芦戸 「まあそれよりこれからどうするの？核は上にあるんでしょ？みんなだいたいそうしてる

し？」

吹出 「いやいや芦戸、これ一応訓練だからね？」

塩崎 「そうですこれは訓練であり、屋内での立ち回りや戦闘の際の立ち回りなど知るための訓

練。遊び感覚でやっていいものではないのですよ？」

芦戸 「あははー（笑）そうだったごめんごめん（笑）」

塩崎 「死角や罠に気を付けながら各フロアを探すしかありませんね。私のツルを使って索敵に

近いこともできますが、相手に見つかってしまいますので地道に行くことを提案しま

す」

吹出 「まあそれしかないかな？」

芦戸 「よーし！それじゃあさっそく行ってみよう！」

芦戸が自分の個性【酸】を使い滑りながら通路を進む。その際にジャンプしたことに

より、酸が飛び散ってしまい青山のマントの一部に穴が開いてしまう。

一方その頃敵^{サイラン}チームは八百万が個性【創造】で核を置いてある部屋の防御を固めた

り、部屋近くの通路に罠を仕掛け相手が来るのを待ってい

た。ちなみに八百万や他の女

子がバリケードを組み立てているとき峰田は、その3人のお尻を観察しておりそれに気

づいた八百万から睨まれてしまった。そしてヒーローチームは核があるフロアまで特に

何もなく、目的のフロアに到着する。

芦戸 三奈【個性：酸】

身体中から溶解液（酸）を出すことができる。いろいろな物を溶かせるぞ！溶解度に加え

粘度も調節可能。溶解度を調整することによって様々な使いかたもできなかなか高い汎用性がある。

塩崎 茨【個性：ツル】

頭の髪がツルになっている。ツルの髪は伸縮自在で切り離すことも可能。切り離しても

コントロール出来る。水と日光をしつかり摂っていればすぐに生えてくる。つまりハゲ

ない。

——ビル5階——

芦戸 「4階まで何もなかったね」

吹出 「ということはこのフロアに核があるってことだね」

青山 「僕が輝く時間がついにくる！」

塩崎 「ここから先はより一層気を付けていかねばなりません」

芦戸 「分かった！じゃさっそく行こう！」ダダダッ

塩崎 「ああっ焦ってはいけません！」

芦戸 「大丈夫大丈夫《グッ…ピンツ！》…うん？」

バァンツ!!

芦戸が何も警戒せずに通路を進むとピアノ線のようなものを足で引っ掛けてしまう。そ

の瞬間、芦戸に大量のBB弾が襲う。

芦戸 「イタタタタッ!!」《ビシビシビシッ!!》

吹出 「芦戸！」

塩崎 「大丈夫ですか!？」

青山 「ナニツ!？」

3人が芦戸の元へ駆け寄る。そして芦戸のすぐ近くには少し湾曲した弁当箱のようなものが転がっていた。

——モニター室——

葉隠 「なにあれー!?なんか弾けたよ!？」

切島 「なんかちっちゃい玉が転がってねえか?」

蛙吹 「敵^{ワイラン}チームが仕掛けたトラップかしら?」

取蔭 「なんかめっちゃ痛そうだったけど」

クラフト 「あれは…」

耳郎 「?…クラフトあれが何か知ってるの?」

クラフト 「あれはたぶんクレイモアだろう」

耳郎 「クレイモア?」

障子 「機神、そのクレイモアというのはどういうものなんだ?」

クラフト 「クレイモアは簡単に言うと地雷だよ」

上鳴 「地雷!？」

地雷という言葉に反応する上鳴。

クラフト「指向性対人地雷M18クレイモア…あの少し湾曲した弁当箱みたいな箱に700個のパチン

コ玉ぐらいの鉄球が入っている。使われている爆薬はプ

ラスチック爆薬、ドラマや映画

で聞いたことない?」

葉隠 「あーなんかアクション系の洋画とかで聞いたことあるかもー!」

クラフト「そーそー、軍や警察なんかでも幅広く使われているものでね、それである箱の中に爆薬

が入ってて次に約700個の鉄球の球が入ってるの。ま

あこれは訓練だし流石に本物は

使っちゃいけないから、バネ仕掛けの物を用意したんだろ

う。球もたぶんBB弾とか

じゃない？」

障子 「なるほど、芦戸はそれに引っかけたかかってしまったというわけか」

クラフト「まあこれが訓練であれが偽物でなければ芦戸は即死だったけどね…」

拳藤 「即死って…マジ？」

クラフト「マジだよ、至近距離での爆発、その爆発の威力によって700個の鉄球が自身にめがけて

向かってくる、避けるのは不可能だな」

耳郎 「そっその場で治療すれば…」

クラフト「鉄球によって体に無数の傷や穴が出来て大量の出血による出血死あるいはショック死、

奇跡的に助かったとしても後遺症とかが残るだろうな…」

クラフトの説明を聞き背筋が少し寒くなるクラスメイト達。

上鳴 「うへえ…そうはなりたくはないな…」

(オ)マイト「先ほど機神少年が言った通り、芦戸少女はこれが実戦であれば死んでいたというこ

とになる。サイラン敵の中にはあのトラップのように一撃で死

に至らしめるトラップを仕

掛けてくる奴もいる。相手がどんな奴であれ油断はし

てはいけないよ諸君!!」

A組B組 「[[[《b》はい!!!]]]]」

——ビル5階——

八百万 「先ほど私が仕掛けた罠が発動したようですね」

小大 「ん」

角取 「そのようデース、痛がっているような声が聞こえマーンタ!」

峰田 (中々3人とも発育が進んでいる…ほんとにこの前まで中学生だったのか?こりゃあますま

すこの後どう成長するのか楽しみだぜえ！」

八百万 「…峰田さん？ちゃんと聞いていますか？」 ジロツ…

峰田 「えっ…おっおう！もちろんだぜ！！敵が近くまで来てるんだろ！」

角取 「Oh…峰田さんはまたイヤラシイこと考えていましたネー！」

小大 「ん…」 こくり…

峰田 「なななっ何を言っつて!? そんなこと考えてないぜ！」

八百万 「まあそのことについての真偽は後にしましょう。今は訓練に集中しましょう！」

八百万がそう締めくくると自分たちの部屋の扉がゆっくりと開く。

吹出 「みんなたぶんここだよ！ だけどバリケードか何かで入り口は塞がれている!!」

青山 「僕のレーザーで開けてあげる！」

塩崎 「いけません青山さん！ バリケードを貫いて核に当たってしまう可能性があります。こっ」

は芦戸さんの個性をお願いします」

芦戸 「ふふーんOK!! それじゃあ…とりやああ!!」 ビシヤツ！…ジユウウウウ…

吹出 「開いた！」
ついに両チームの戦いが始まる。

芦戸 「へっへっへっ観念しろおっ！」

角取 「そうはいきませーん!!」

小大 「ん！」

八百万 「なにやら一人はとても痛そうな跡が体にありますが道中何かありましたか？」

塩崎 「もしかしてあの罫を仕掛けたのはあなたですか？」

峰田 (ほう…あの女子もなかなか…)

八百万 「ええその通りですわ、ちゃんと引つかかってくれて仕掛けた甲斐がありましたわ」

芦戸 「もおー！あれめっちゃ痛かったんだからね!!」

吹出 「ドキッ！つてビツクリしちやったよ!!」

青山 「僕も☆」

塩崎 「みなさんお喋りはこのくらいにして核を回収しまし
う」

角取 「そうさせると思いマスカ？」

小大 「ん」

芦戸 「なら先手必勝!!」スイーッ!!

芦戸が自分の酸を利用してスケートの様に滑り小大に迫
る。

小大 「ん!？」

角取 「そうはさせませーン!!」ヒュウンッ!

芦戸 「捕まえッ《ドガッ!》うぎやつ!」ドタッ!

塩崎 「芦戸さん!？」

芦戸が小大を捕まえようとした瞬間、何かが芦戸の前に現
れ突き飛ばす。

芦戸 「いててて…私なにに飛ばされて…?」

角取 「そうデース!それは私の角デース!!」

角取 ポニー【個性：角砲（ホーンホウ）】
頭にある2本の角を飛ばし操ることが出来る。飛ばして
もすぐ生えてくる。

角1本で人間1人を持ち上げるパワーがあり、自身も角の
上に乗って空中を移動するよ

うな使い方もできる。しかし個性の性質故か角質のケア
が欠かせない。

吹出 「うーん厄介な…（ん?）」

ここで吹出はあることに気づきこっそりと行動する。

塩崎 「出来ればこれは使いたくはなかったのですが勝つために
は仕方ありませんか…」

芦戸 「なに?何かあるの!？」

塩崎 「使えばこの訓練には勝てると思います…ですがその行動

は本当にいいのか迷っています

す。この訓練は協力して勝つことも大事なことだと思いますので…」

芦戸 「もー塩崎ちゃんはまじめすぎるよー！勝てると思うならチームの為に使うのがいいんじゃない？」

青山 「ぼくもそう思う☆」キラッ

塩崎 「……そうですね、芦戸さんの言う通りですね。負けてしまつては意味がありません！」

八百万 「お話はすみみましたか？」

角取 「何やら企んでいマース！」

小大 「ん」

再び戦闘が始まろうとしたときオールマイトの確保宣言の聲が無線に響く。

(オ) マイト 『峰田少年!!確保ーーー!!!』

八百万 「えっ!!」

角取 「Oh!!?!!?!!?!!?!!」

小大 「ん!!?」

突然のチームの確保宣言に驚く敵 ライオン チーム。

芦戸 「なんで私何もしないよ!!?」

塩崎 「一体だれが!!?…そういえば吹出さんは!!」

青山 「見て☆」

吹出 「へへっみんな黙って行動してごめんよ」

峰田 「ううくやつちまつた〜」

吹出の元には確保テープを巻かれた峰田が半泣きの状態で捕まっていた。

芦戸 「すごい!ねえどうやって捕まえたの!?!」

吹出 「いやーなんかふと峰田を見たらさなんか…他の事に気を取られている感じでさ、コソコ

ソつと行って後ろからガバツて捕まえたんだ!!」

芦戸 「すごい!!」

八百万 「やっぱり峰田さん他のこと考えていましたね！」

角取 「きつとイヤラシイことデース！」

小大 「ん」

塩崎 「そのことは後でご本人に聞いてください。そろそろ時間もないので決着を付けさせてい

ただきます！」

八百万 「皆さん何か来ます！気を付けて！」

シユルルツ!!ズアアアツ!!

塩崎は部屋が埋まるくらいにツルを大量に伸ばして部屋を囲む。そしてそのまま八百

万・角取・小大を大量のツルで動けないように顔以外をツルで巻き付ける。

八百万 「くっ！この量はさすがに…」

角取 「引きハガそうにもトゲが食い込みますから痛いデース!!」

小大 「ん!!」

塩崎 「私が相手を押さえておきますのでその間に核の回収をお願いします！」

芦戸 「オツケー!!」タツタツタツ

芦戸が返事をする素早く核のところまで行きタツチすると訓練の勝敗が決まる。

(オ) マイト 『ヒーローチーム！WIIIIIIIIIN!!!』

こうしてCチーム対Eチームの戦闘訓練は終了したので講評の時間は少し荒れた。

——地下モニター室——

(オ) マイト 「それじゃあ講評の時間だ！今回は誰が良かったか分かる人！」

骨抜 「はい」

(オ) マイト 「はい！骨抜少年！」

骨抜 「まず塩崎と吹出、それに八百万と角取と小大の5人だと思えます」

(オ)マイト「うむその通り！この5人は状況に合わせた行動をよく取っていた。そして他の3人だ

がまず芦戸少女だが、八百万少女が仕掛けた罠に引っかかってしまっってしまった

いる。これは実戦ならすでに死んでしまっただけでもおかしくない！芦戸少女は今回

の経験を次に生かせるといいだろう！」

芦戸 「ううわかりました…」 チラッ

芦戸がクラフトの方を横目で見る。その目はなにかフォローしてほしいような目であった。

クラフト「(えっなんか芦戸がこっち見てるような…もしかして俺に何かしらのフォロー求めて

る!?)…えーと、はい」

(オ)マイト「はい機神少年！」

クラフト「まあ今回の芦戸は警戒も全然しておらずむしろ相手の罠にかかってしまったり減点が多

いですが、映像を見る限りはその場の雰囲気や緊張を和らげているように見えましたの

で、その辺は将来プロになって必要な場合ってあると思いますので良いと思いました」

芦戸 「…」 パアア！

フォローを入れたことで顔が明るくなる芦戸。

(オ)マイト「うむ！その場の緊張などを和らげることがは時として必要になってくる！機神少年なか

なかわいいところに気が付いたね!!(ナイスフォローだよ機神少年！ありがと！)」

心の中で感謝するオールマイトであった。

そして青山の講評をすると最後は峰田の講評なのだが…

(オ)マイト「さて最後は峰田少年だが！」

八百万 「はい！オールマイト先生！」

(オ) マイト「ん、どうしたのかね八百万少女？」

八百万 「峰田さんですが訓練中にもかかわらず心ここにあらずと
いった感じでした。それに何や

ら私たちの体を凝視しているように見えました」

角取 「ソレハ私も思ーいマシタ！」

小大 「ん！」

葉隠 「あーそれ私も思ったよ！」

耳郎 「ウチもなんか変だなって思った」

拳藤 「ねえあんた何見てたの？」

峰田 「おおおいらは何もしてねえ！」

取蔭 「その動揺は逆に怪しいね(笑)」

蛙吹 「峰田ちゃんここは正直に話した方がいいわよ」

女子からの問い詰めに動揺しまくる峰田…そしてそんな
峰田と目が合ってしまうクラフ

ト。その目は(別の意味で)助けを求めるものだった。し
かしクラフトはその場で静かに

両手を合わせて合掌する。

クラフト 「南無阿弥陀仏……(☒ ☉ 人)」

峰田 「てめええええええ!!!」

上鳴 「峰田……骨は拾ってやるから安心しろ…たぶん」

峰田 「いまたぶんって言ったよな!」

切島 「峰田! 漢なら正直に言った方がいいぜ!」

鉄哲 「おうその通りだ峰田!」

瀬呂 「安心しろ俺も合掌してやる(☒ ☉ 人)」

峰田 「そういうことじゃねえええ!!!」

飯田 「峰田くん! やましいことをしたのならちゃんと謝罪した

まえ!!」

八百万 「さあ! どうなんですか!」

峰田 「ぐっ…べっ…弁護士をよべえー!!」

耳郎 「あんたにそんなものはないんだよ!」

葉隠 「さあ吐け! 峰田くん」

ワーワー!!ぎやぎやー!!

女子と峰田が騒いでいるところに治療を終えた緑谷が戻ってくる。

緑谷 「ただいま戻りましたオールマ…イト…なにこれ…」

戻ってきたらよく分からない状況であるため困惑する緑谷であった。

第14話 F対J 漢らしいのはいいよね!!

——グラウンドβ——

——地下モニター室——

(オ)マイト「さて! 峰田少年の事も一応解決し、緑谷少年も戻ってきたので次の組を発表しよう!」

峰田は女子からの問い詰めに最後まで抵抗したが、女子の多数決によつて有罪になつて

しまい今は瀬呂のテープでミイラみたいに巻かれ天井に吊られている。

(オ)マイト「さうして次の対戦は……こいつらだ! Fチームがヒーロー! Jチームが敵だ!!」

——ビル5階——

穴田 「我々は敵でありますか! 相手がどう来るのかワクワクしますな!」

瀬呂 「へっへっ案外すんなり勝つちやたりしてな!」

庄田 「油断しては足元をすくわれてしまう」

切島 「俺は正々堂々と正面からいくぜ!」

瀬呂 「まてまて、俺たちは敵側だぞ。そんな正面から行かずにここで待つていれらばいだろう?」

切島 「だが漢らしくねえ!」

穴田 「まあまあ切島氏、正々堂々したいという気持ちも理解できますがこれは戦闘訓練です

ぞ。相手がどう来るのか考えなければなりませんぞ」

切島 「ぐっ確かにそうだな! だがやっぱり俺は正々堂々と闘いてえ!」いよおく…ぽんっ!! (効果音)

庄田 「ならこうはどうだろう? 切島くん1人は下の階に降りて相手の1人か2人を相手してもら

い、僕らがその残りを相手にするというのは?」

瀬呂 「上手くいけば数的有利ができるな、俺はその案でもいいぜ!」

宍田 「ふむ…その案ならば切島氏の希望も叶えられ、なおかつ
上手くいけばこちらが有利にな

りますな！私もその案に賛成ですぞ！」

切島 「みんなすまねえ！みんなの期待に応えられるように俺全
力で頑張るぜ!!」

宍田 「期待してますぞ!!」

切島 「おうよ!!」

ヴァイラン
敵 チームの作戦が大方決まったその頃、ヒーローチーム
も同じように作戦が決まって

いた。

——ビル屋外——

鉄哲 「おつし！それじゃあ2組に分かれて別々のルートから探
すって感じでいいのか？」

砂藤 「そうだな、もし相手が降りてきて迎撃しに来たら2人で
倒せばこつちが有利になるしな」

口田 「……」コクコク!

泡瀬 「じゃあパワータイプの鉄哲と砂藤は別れた方がいいな。
その方がバランスがとれる。俺

と砂藤、鉄哲と口田で別れて行こう」

鉄哲 「わかったぜ!!よろしくな口田!!」

口田 「!!……」コクコクツ!

砂藤 「俺が前に行くから泡瀬はそのサポートを頼めるか？」

泡瀬 「わかった」

両チームの作戦が決まり訓練開始の合図が知らされる。

(オ)マイト『両チーム準備はいいかな？それでは屋内対人戦闘訓練開
始!』

——ビル5階——

宍田 「始まりましたなあ!!」

切島 「よし！俺はさっそく行ってくるぜ!!」

瀬呂 「おう！気を付けろよ！」

庄田 「危ない時は無理をしないようにね」

穴田 「戦果を期待してますぞお!!」

切島 「おっしやあ!行くぜえ!!」ダダダダダッ!!

切島は意気揚々と下の階に向かう。

——ビル3階——

2手に分かれたヒーローチームは少しづつだが着々と進んでいた。

ガチャッ!

鉄哲 「うくんねえなあ…口田そっちはどうだ?」

口田 「…(こっちもないよ)!」ブンブン

鉄哲 「というこたあ上にあるってことか…」

3階フロアを探し終えた鉄哲たちは核が上のフロアにあると結論付けたとき同チームから連絡が入る。

ら連絡が入る。

泡瀬 『ザザッ…こちら泡瀬、状況は?』

鉄哲 「おう泡瀬か!こっちはいま3階探し終えたところだが、

何もなかったぜ!」

泡瀬 『ということは上か?』

鉄哲 「たぶんそうだろうな1階はどうだったんだ?」

泡瀬 『何もなかった、今2階に上がったところだ砂藤が確認しているがおそらく何も無いだろう』

う』

鉄哲 「ということは上だな…ん?」

泡瀬 『どうした?』

鉄哲 「いやなんか音が…」ダダダダダッ!

切島 「敵はどこだあ…あっ…」

鉄哲 「あっ…」

鉄哲と切島が階段付近で出会ってしまう。

切島 「鉄哲ここであったが100年目!倒させてもらおうぜ!!」
ガキイン!

鉄哲 「へっ!その言葉そっくりそのまま返すぜ!!」ガキイン!
お互いが個性を発動し両方の拳を強く当て、甲高い音が通

路に響く。

泡瀬 『おい鉄哲！誰かいるのか!?!鉄哲!?!』

鉄哲 「ああ：切島が1人で来たぜえ俺はこれからコイツと戦うから核はそつちで頼んだぜ」

泡瀬 『分かった、早く終わらせろよ』

鉄哲 「そのつもりだ!」ガキイン!

切島 「話は終わったか?」

鉄哲 「おう待っててくれてありがとうよ」

切島 「んじゃ：行くぜえ鉄哲うう!!!」ダダツ!

鉄哲 「来いやああああ!!!」ダダツ!

切島 「オラアツ!!」ブオン!

鉄哲 「オラアツ!!」ブオン!

ガギイイイン!!!

熱き2人の漢の拳と拳が激しく衝突する。

そしてそれについていけず蚊帳の外となる口田。

——ビル4階——

素早く2階のフロアを探し終え外階段を使い4階のフロアに移動し核を探すヒーロー

チーム。

泡瀬 「どうだ砂藤!?!」

砂藤 「いやこのフロアに核はない!」

泡瀬 「ということは5階か:」

砂藤 「場合によつちやあ2人で3人を相手にしなくちゃいけない

いか:」

泡瀬 「厳しいな、口田はどうしてるんだ?」

砂藤 「上に行こうとしたが切島が奮戦しているせいか上がれない

いらしい」

泡瀬 「仕方ない俺たち2人で行くしかないか」

砂藤 「大丈夫か?」

泡瀬 「砂藤が最初穴田の相手をしてくれ、その隙に穴田の足を

俺の個性で動けなくする。そう

すれば2対2に持ち込める。」

砂藤 「それなら勝ち目ありそうだな！分かった任せてくれ！」

泡瀬 「任せませ！」

一方その頃3階では…

ガアンツ！…ガギインツ！！…ギギイン！

硬いものがぶつかり合う音が鳴り響いていた。

切島 「オラアツ！」 ドゴオツ！

鉄哲 「ぐうっ！…お返しだあ！！」 バギイ！

切島 「ぐあっ！…やるな鉄哲！」

鉄哲 「お前もな切島！」

切島 「だがそろそろ決着つけねえとな…」

鉄哲 「そうだな…たぶん次でつくだろうな…」

切島 「へっ…行くぜ鉄哲う！！ウオオオオツ！！」 ダダダツ！

鉄哲 「おうよおっ！！ダアアアアツ！！」 ダダダツ！

熱き漢の闘いに決着がっこうとする。

切島 「うおりやあつ！！」 ブオン！

鉄哲 「だりやああ！！」 ブオン！

ガアギイインツ！！

切島 「かっ……」

鉄哲 「がっ……」

バタン……

互いの右ストレートが互いのアゴに入り同時に倒れる2

人。両者ともに気絶。

口田 「……（；・ω・）《オロオロ》…！」 タツタツタツ

…シユル…ぎゅ

2人が同時に倒れたことにより少し動揺した口田だった

が、確保テープの事を思い出し

倒れている切島に巻き付ける。

（オ）マイト『切島少年確保—！！鉄哲少年は戦闘により気絶！だが意識

が回復すれば復帰可能だから

ね！！』

穴田 「なんと！切島氏が捕まってしまいましたと!?!」

瀬呂 「だが鉄哲が気絶してるから人数は同じだ」

庄田 「彼が目覚めます前に終わらせねばなくなった」

3人がそう話していると部屋の扉が開く。

砂藤 「ここに：あった！泡瀬あったぞ！」

泡瀬 「わかった！」

瀬呂 「ようやくおいでなすったか！」

穴田 「さあかかってきなさいヒーロー共！」

庄田 「簡単には攻略させないよ」

泡瀬 「いずれ口田と鉄哲がくる」

砂藤 「俺たちはその間に核を確保するか人数を減らすだけだ

！

穴田 「ふはははははっ！なら我の攻撃を防いでみよ!!」グアツ

！

砂藤 「ガリツゴリツ！…ふんっ！うおりやああ!!」ガシイッ!!

砂藤は10gの角砂糖を食べる。すると筋肉が膨張しパ

ワーアップし穴田の攻撃を受け

止める。

穴田 獣郎太【個性：ビースト】

獣化する。体格・筋力・聴力・嗅覚・視力が大幅アップす

る。テンションがハイにもな

る。

砂藤 力道【個性：シュガードープ】

糖分10gの摂取につき、3分間だけ通常時の5倍の身体

能力を発揮する。しかし糖分を

エネルギーに使ってしまうためか使いすぎると脳機能が

低下してしまい、凄まじい眠気

や倦怠感に陥ってしまう。

穴田 「なんと我の攻撃を受け止めたですと!?!」

泡瀬 「ナイスだ砂藤！少しの間そのまま穴田を抑えといてくれ

！」

泡瀬は素早く砂藤の後ろに回り砂藤の脚の間に体を入れ、
穴田の足に触ると個性を発動

する。

泡瀬 「溶接！」ピキピキピキッ！

穴田 「むっ!!これは!?!足が動きませんぞ!!?!」

瀬呂 「穴田!?!」

泡瀬 「へへっ…大人しくしといた方がいいぜ！」

泡瀬 【個性：溶接】

別々のものを分子レベルで結合できる。物質の制約はな
いが結合したいモノとモノに触

れていないと発動できない。解除も可能。

泡瀬 「ついでに確保！」シュルル…

(オ) マイト 『穴田少年確保ー!!』

穴田 「なんとおおおおお!!」

瀬呂 「ちよおくと雲行きが怪しくね? (苦笑)」

庄田 「まだ大丈夫」

瀬呂 「そうだ…なっ！」シャツッ!

瀬呂が肘からテープのようなものを射出する。

瀬呂 範太【個性：テープ】

両肘からセロハンテープのようなものを射出できる。

テープは手で引っ張らなくても

ノーモーションで射出・巻き取りが可能。見た目とは違っ

てかなりの強度があり、汎

用性が高い個性である。

砂藤 「うおっ!?!」ビタッ!

庄田 「よし…そのまま抑えてください！」ダダッ!

瀬呂が砂藤の腕にテープをくっつけ動きを制限する。そ
の隙について庄田が砂藤に攻撃

を仕掛ける。

泡瀬 「そうさせるか！」バツ!

庄田 「どいてください！」ドガッ！

泡瀬 「ぐっ！」

庄田 「ツインインパクト解放^{ファイア}」

泡瀬 「《ドゴッ！》ぐほっ!？」ドッ!…ゴロゴロ…

砂藤 「泡瀬!？」

庄田 二連撃【個性：ツインインパクト】

打撃を与えた箇所に任意のタイミングでもう一度打撃を発生させる。二度目の打撃は数

倍の威力となる。二度目の打撃はもう一度加える必要はなく、本人の意思で発動させる

ことが出来る。

庄田 「余所見は禁物ですよ？」

砂藤 「しまっ!?! 《ドッ!》…ぐっ！」

庄田 「ファイア解放」

砂藤 「《ドグッ!》…ぐうう!?!」ガクッ…

砂藤は鳩尾に撃ち込まれてしまったためその場にうずくまってしまう。

庄田 「よしこれで確保と、瀬呂君そちらは？」

瀬呂 「こっちも確保したぜ！」

その後、気絶から目覚めた鉄哲と口田が核を確保しようとするが、気絶から目覚めたば

かりの鉄哲はまともに戦えず口田も前衛タイプではないためあつさりと確保されてしま

い敵^{サイラン} チームの勝利となった。

講評が終わった後切島と鉄哲はお互いに熱く褒めたたえていた。

第15話 G対H 適材適所は大事!

——地下モニター室——

(オ) マイト「よし! それでは機神少年の戦闘訓練を除けば4対4の訓練は最後になる! 最後はGチー

ムがヒーロー! Hチームが敵だ!

——グラウンドβ——

(オ) マイト『それでは屋内対人戦闘訓練スタート!!』

——ビル5階——

常闇

ダークシャドウ
「黒影!」ズアツ!

(ダ) シャドウ『アイヨ!』

黒色 「ひひ…深淵を覗いているときが相手の隙…」

常闇 「ほほう…深き闇の中から審判を下すのか?」ソワ…

黒色 「審判…!」ソワ…

蛙吹 「盛り上がってるわね常闇ちゃん! 黒色ちゃん」

小森 「2人とも楽しそうなんだノコ!」

同じ者同士で静かに盛り上がる男2人を見守る女子2人であつた。

——ビル1階——

拳藤 「どう耳郎?」

耳郎 「5階の西側、4人一緒にいるみたい」

耳郎がイヤホンジャックを壁に差し込み索敵をし情報を

集める。

上鳴 「んじゃーパパッと5階に上がって核ゲットしようぜー

!

骨抜 「いやここは慎重に周りを警戒しながら進んだ方がいい」

上鳴 「えーなんでだよ?」

耳郎 「あんたねえ相手の個性もよくわかんないんだよ?なのに警戒もせずに進むなんて相手に

何してもいいですよーって宣言してるようなもんだよ?」

上鳴 「むう…それもそうだな! さっすが耳郎!」

耳郎 「あんたねえ…」

拳藤 「話はそのままでにして早く進もう。もたもたしてると時間切れになっちゃうよ」

耳郎 「ごめん拳藤！もう上鳴がアホなこと言うから」

上鳴 「俺のせいだよ！」

骨抜 「まあまあ」

ヒーローチームは耳郎の索敵で早い段階で核と敵の居場所を知ることができたが、それ

でも死角からの奇襲や個性による攻撃を警戒しながら5階に向かう。

——ビル3階——

拳藤 「耳郎、このフロアは誰がいる？」

耳郎 「ちよつとまって…」

耳郎はイヤホンジャックを床に刺し込んで索敵をする。

耳郎 「……いやこのフロアにもウチら以外は誰もいな……上

鳴足元!!」

上鳴 「うえっ!!」

耳郎が拳藤の方に振り返ったとき上鳴の影に何かがあることに気づく。突然のことに驚

く上鳴だが、その際に足を咄嗟に上げたことにより回避する事が出来た。

黒色 「ちっ……」トブン…

相手チームの黒色が顔を半分だとすぐに影に潜る。

骨抜 「今のは黒色か!？」

拳藤 「あいつの個性!?!まさか影に!?!」

耳郎 「もしそれだったら超厄介だよ…うちでも流星に音が拾えないよ…」

上鳴 「うええマジかよ!?!どうすんだよ!そんな相手じゃどうしようもなくね!?!」

骨抜 「まあ落ち着け上鳴、まだ相手が影に潜める個性なのか決定したわけじゃない」

拳藤 「骨抜の言う通りだ、さつきは偶然とはいえ耳郎のおかげで確保されずにすんだ。逆にこ

ちらが警戒することで相手は慎重にならざるをえなくなつた訳だ」

耳郎 「まったく男のくせにウダウダと…もつとしつかりしてよ男でしょ？」

上鳴 「なんか俺に厳しくね!？」

予想もしない奇襲を回避できたとはいえ奇襲を受けたことは事実であり、さらに周りへ

の警戒を強め進むことになつたヒーローチームであった。

——ビル5階——

黒色 「みんな…」

常闇 「黒色か」

小森 「のこー!」

蛙吹 「黒色ちゃん奇襲は上手くいったの？」

黒色 「いや…上鳴の足元にテープを巻こうとしたが…」

常闇 「気づかれてしまったか」

黒色 「ああ…あと少しだったんだが…」

蛙吹 「気にすることないわ」

小森 「そうノコ!」

常闇 「だがもう奇襲は難しいな、相手もより警戒するだろうか
らここで迎え撃つた方がいいだ
ろう」

黒色 「そうだな…次はやって見せよう」

常闇 「ふっ…頼もしいな」

敵 ヴァイラン チームは奇襲が失敗したことを鑑みて下手に奇襲せず、あとはここで核がある自分
たちがいる部屋で迎え撃つことにした。

——地下モニター室——

瀬呂 「黒色さつき影から出てきたよな?」

葉隠 「影に潜れる個性?」

クラフト「影だけじゃなく暗い所に潜れるとか?」

飯田「なるほどその可能性もあるな。俺たちが見たのは影に潜るところを見たから影に限定し

てしまい他の可能性を捨ててしまっていたな」

モニター室で黒色の個性について考察していると…

緑谷「影に潜れる個性…いや機神くんが言ったように暗い所ならどこでも潜れる個性なのかもしれない…もしそ

うなら通気口などを利用すればかなり便利な個性だ。オールマイトが敵による事件は屋内の方が多いと

言っていたから立て籠りなんかじゃ相手に気づかれずに…」ブツブツブツブツ…

ブツブツと小さく喋りながら緑谷が分析モードに入っていた。

クラフト「おーい緑谷…緑谷」トントン

緑谷の肩を軽く叩いて呼びかける。

緑谷「…ブツブツ…えっ?あっ!ごめん機神くん!僕またしてた?」

クラフト「分析はいいけどそのブツブツ言うのは直さないとな(笑)」

緑谷「ははっ…気を付けてはいるんだけどね(苦笑)」

飯田「緑谷君は分析するのが得意なのか?」

緑谷「うくん…ヒーローが好きだから個性についても色々考えるようになったっちゃって…はは

はっ…あんまり役には立たないかもね」

飯田「何を言う!相手の分析が出来るということは様々な状況に対応できるじゃないか!プロに

なれば必要になってくることだ!恥じることはない!!」

緑谷「!!…ありがとう飯田くん」

飯田に自分の事を褒められ嬉しく思う緑谷であった。黒色に奇襲されたヒーローチーム

は警戒を強めながら進むが相手は奇襲をやめたので当然

奇襲はなくヒーローチームは何事もなく5階フロアに到着する。

——ビル5階——

拳藤 「何もなかったわね…」

耳郎 「1回失敗したからやめたとか？」

骨抜 「ありえるな…奇襲はバレずに成功することに意味がある。最初でバレたら意味がないし

逆に警戒されるから相手が動いてこなかったのは説明がつくね」

上鳴 「なんだよーじゃあ相手は核の部屋で待ってるってことか？」

骨抜 「恐らくそうだろうけどただ待ってるだけじゃないだろうね」

拳藤 「ああ…確実に待ち伏せや罠を張ってるだろうね」

耳郎 「みんなこの先の廊下をまっすぐ行って左の部屋に相手がいるよ。動きは…少ないな」

拳藤 「あんまり動かずにいるって感じかね…」

上鳴 「じゃあちやちやっとな核回収しようぜー！骨抜の個性使えば一発つしよ？」

骨抜 「確かに使えば核と相手を捕まえることはできると思うけど、下手に使えばビルの安全性

に問題が生じるかもしれないから…できればあまり使わずにすめばいいんだが…」

耳郎 「ちよっとは自分で何とかしようと思わないのアンタは？」

拳藤 「そうだよなんか他人任せな感じするけど？」

上鳴 「なんか俺に厳しくね!？」

骨抜 「まあまあ」

女子にまたもやダメ出しをくらう上鳴であった。
タッタッタッタッタツツ：

耳郎 「ちよつとまって…」 スウウ…カチツ!

核がある部屋の前に着くと耳郎が壁にイヤホンジャックを刺し込み、部屋の状況を探る。

耳郎 「心音が3つ…たぶんさつき影の奴はどこかに隠れていると思う…」

骨抜 「伏兵として隠れているんだろう…」

ヒーローチームが部屋の内部を探っているのと同時に…

蛙吹 「けろっ…来たわね…」

常闇 「ああ…」

小森 「緊張するノコ!」

黒色 「ひび…はたして俺たちに勝てるかな?」

ワイラン 敵が待ち構えていると扉がゆっくりと開く。

キイイイ……

拳藤 「いたわね…大人しく核を渡してくれるかしら?」

常闇 「素直に渡すとも?」

耳郎 「まあそりやそうだよね」

骨抜 「1人いないようだけど…」

蛙吹 「さあ何の事かしら?」

上鳴 「へっへっそんなに余裕こいてていいのかな?」

小森 「のこ?どういう事ノコ?」

上鳴 「どういう事って?そりやあ俺の放電で君ら一網打尽に

…」

蛙吹 「あら?そんなことしていいのかしら?」

上鳴 「えっ?」

蛙吹 「この核は本物として扱うように言われているわ。ならそんなことしたら核がどうなるか

分かってるのかしら?」

上鳴 「あっ……」

常闇 「そういう事だ、さらにそんなことしたら仲間も傷つくぞ」

上鳴 「みんなごめん!俺使えないわ!!」

耳郎 「なに堂々と言ってたんだよ!!」

常闇 「さて来ないなら…こちらから行くぞ!!」
「ダークシャドウ
!!」ズアッ!

(ダ) シャドウ『アイヨ!!』

コントのようなやり取りをしていたら黒い影のモンス
ターが攻撃してきた。

拳藤 「ちっ!」ズムツ!ドガツ!!

常闇 「むっ受け止めたか…だがどこまで耐えられるかな?」

拳藤 「あいつは私が相手するからアンタらは今のうちに核を
!!」

耳郎 「分かった!」

骨抜 「無理はするなよ?」

上鳴 「気を付けろよ!」

拳藤 「ああ!そっちもね!!」

拳藤が常闇と戦っている間に3人は核を回収しようと思
くが相手はそうはさせてく
れない。

れない。

蛙吹 「あら?ここは通さないわよ。大人しく捕まってく
しら?」

耳郎 「分かりましたって言うと思う?」

小森 「思わないノコ!!」

蛙吹 「それより足元は注意しとくべきと思わない?」

上鳴 「へっ?まあそりゃあ…」

骨抜 「…!?!?」バツ!!

骨抜がすぐさま自身の足元を見る。

黒色 「ひひ…まずはひとr…」

骨抜 「上鳴危ない!!」どんっ!!

骨抜が上鳴の背中を勢いよく前に押す。

上鳴 「うえっ!?!?」《グラッ…ドシンッ!》ぐえっ!」バチチッ!

黒色 「えっ?」パッ…

上鳴が前に倒れた拍子で個性が少し発動し電気が少し放
電される。その放電で影が照ら

され無くなってしまう黒色の体が本人の意思に関係なく出てしまう。

黒色 支配【個性：黒（ブラック）】
名前の通り”黒”に溶け込むことができ、かなり早い速度で移動できる。ただし黒い場所

がなくなると強制的にその場に出てしまう。

蛙吹 梅雨【個性：蛙】

蛙っぽいことができる。舌は20mくらい伸びる。壁に引っ付くこともできるぞ！。

黒色 「……………あれ？」

耳郎 「えっ？」

蛙吹 「黒色ちゃん!?」ビツ！

啞然としている黒色を助けようと舌を伸ばすが…

骨抜 「はい確保」

オールマイト 『黒色少年確保——!!』

常闇 「なにつ!？」

拳藤 「やった!!」

骨抜が蛙吹の舌が届く前に確保テープを黒色に巻き付ける。

蛙吹 「ケロツ…遅かったわ…」

小森 「黒色——!ごめんのこー!」

耳郎 「今のうちに…」

蛙吹 「そうはさせないわ耳郎ちゃん!」ばっ!

耳郎 「やっぱ簡単にはいかないか」

そう耳郎が言葉を発したとき…

ぽこっ…

骨抜 「ん?……きのこ?……」

ぽこっ……ぽこっぽこ…

耳郎 「ちよっ!?!?どんだん生えてくるんだけど!!?」

骨抜と耳郎の体のあちこちから突然キノコが生えまくる。

小森 希乃子【個性：きのこ】

キノコの胞子を放出できる。湿った範囲であればその分キノコをいくらでも生やせるこ

とができ種類もいろいろある。生やしたきのこは2〜3時間で消えるためブツパ癖がついてしまっている。

小森 「のこのこのこ(笑)」

骨抜 「なるほど彼女の個性か。実に厄介だね」

耳郎 「あんたはいつまで寝てんだ!!」ドスツ!

上鳴 「ぐえっ!?!」

床に転がっている上鳴の背中を踏みつける耳郎だがあることに気づく。

耳郎 「……ってなんであんたキノコ生えてないの?」

上鳴 「えっきのこ? ってうわっ!?! 2人ともなにそれキモっ!!」

耳郎 「あ×あ×!?!」

上鳴 「あっいえー! 何でもありません!! 大変だーなんとかしない」とー

耳郎 「……まあいいや、それよりなんであんたキノコ生えてない

の?」

上鳴 「えっいやそう言われても俺にもよくわからん」

耳郎 「なんでだよ!!」

耳郎が切れのいいツツコミを入れる。その時、骨抜が推測を立てる。

骨抜 「……たぶん上鳴の個性だと思う」

耳郎 「えっ? 骨抜どういうこと?」

骨抜 「上鳴の体にある電気でたぶん胞子が焼けてしまっているんだ。だからキノコが生えてこ

ないんだと思う」

耳郎 「なるほど……じゃあ上鳴あんた2人の相手よろしくね」

上鳴 「うええっ俺1人で2人も!?! しかも相手女の子じゃん!! や

りずれえー……」

耳郎 「現状アンタしか動けないでしょーが!! ウダウダ言っ

いでやる！うちもサポートするから！」

小森 「のこく私の胞子が〜」

上鳴 「女の子相手にあんまり暴力的なのはやりたくはないけどやるしかないか…」

蛙吹 「こつちも手加減はしないわよ上鳴ちゃん」

上鳴 「俺に触ったら痛いじゃすまないぜ」 Bzzzz!!

上鳴が個性を発動させ体にそって電気が少し走り明るく周りを照らす。その頃、拳藤と

常闇はというと…

ドカツ！ ガツ！ ズドドツ！

拳藤 「くっ！…なかなか痛いわね！」

常闇 「それはこちらと同じだダークシャドウと渡り合うとはな」

拳藤 「それは誉め言葉として受け取っていいのかな？」

常闇 「誇っていいだろう…だがそろそろ終わらせてもらおうぞ！」

拳藤 「ちっ！（まずいな…このままじゃ）」

常闇が決着を付けようと動いたその時、常闇の後方が明るく光る。

常闇 「なっなんだ!?!」

(ダ) シャドウ『ヒヤッ!?!ナンダヨ!?!』

常闇の体から出ているダークシャドウがなぜか怯んでしまふ。

常闇 踏陰^{ふみかげ}【個性：ダークシャドウ】

様々な個性があるがその中でも珍しい個性。伸縮自在の鳥っぽい形の影のようなモンス

ターをその身に宿している。闇が深ければ深いほど凶暴になり強力になるが制御が困難

になる。昼間などの日光下では攻撃力が中の下となるほど弱体化するが制御しやすくな

る。日光以外にも電光や爆破による閃光などの強い光も

弱点であり、黒影の体力（蓄えられた闇）が無くなれば、無力化される。やや癖が強い個性。

拳藤 「!!（この隙に！）…隙ありだよ!!」ダダッ!

常闇 「しまっ!?…」

ダークシャドウが怯んだ隙に本体の常闇に素早く近づき自身の個性で体を拘束する。

拳藤 一佳【個性：大拳】

自身の両手を巨大化させることができる個性。最大で人間1人をすっぽり覆えるくらい

まで大きくなり、大きさに比例してパワーが上がりそのパワーはかなりのもの。

拳藤 「…私の勝ちだね」

拳藤の大拳に捕まれてしまつて動けない常闇。

常闇 「油断した…」

オールマイト 『常闇少年!!確保ーーー!!』

蛙吹 「けろっ!?常闇ちゃん!」

小森 「捕まっちゃったの!」

常闇 「すまない…」

上鳴 「これでそつちは後2人だぜ〜!降参した方がいいんじゃないの?」

上鳴が数的有利になったことで調子に乗る。しかし常闇との戦闘が激しかったせいかな拳藤が…

拳藤 「ごめん…私あんまりこの後は活躍できそうにないわ…」

耳郎 「どうかしたの拳藤…!」

キノコまみれの耳郎が拳藤のほうに振り向くとそこには掌や腕が傷だらけになっている

拳藤がいた。

耳郎 「大丈夫なの拳藤!」タタタッ!

耳郎が拳藤の元に駆け寄り傷だらけになっている掌をや

さしく持ち上げる。

拳藤 「っ!…」

耳郎 「ごっごめん!痛かった!」

拳藤 「大丈夫ちよつと痛むだけだから…」

耳郎 「…わかった拳藤は後ろで控えてて」

拳藤 「ありがたいけどいいの?」

耳郎 「人数的にもこつちが有利だし無理な時は無理しちやだめでしょ?」

拳藤 「…わかったじゃあお言葉に甘えて後ろで控えておくよ。もしつていう時は出るから」

耳郎 「分かった!」

拳藤 「…だけどそんなにキノコだらけじゃあんまり締まらないね(笑)」

耳郎 「そっそれはあんまり言わないで!」

拳藤との話が終わると再び前に出る耳郎。

蛙吹 「お話が終わったなら仕掛けさせてもらおうよ!」

耳郎 「上鳴っ!出番だよ!」

上鳴 「俺かよっ!」

骨抜 「俺と耳郎の個性じゃ周りへの被害が大きいからこの場で闘えるのはお前だけだからな。

心配するなちゃんとサポートする」

上鳴 「うへえー!俺のポジションしんどい!」

耳郎 「男なら少しは体張りな!」

上鳴 「なんか俺に厳しくない!」

骨抜 「来るぞ!」

骨抜が2人に叫ぶ。

蛙吹 「ケロオツ!!」ビョンツビョンツ!!

蛙吹が天井や壁に張り付きながら素早く移動する。

耳郎 「くっ!意外に速くて攻撃ができない!」

上鳴 「これじゃどうしようも…ぐえっ!」ベシッ!

骨抜 「上鳴!」

蛙吹の長く伸びる舌に背中を叩かれ再び前に転倒してしまおう上鳴。

ドタツ！……

その倒れた所には倒れた上鳴に確保テープを巻こうと構えていた小森がいた。

耳郎 「まずい！」

骨抜 「いや大丈夫だ耳郎」

耳郎 「えっそれはどういう……」

耳郎が骨抜に聞き返そうとしたその時

小森 「ノコオオオオオオオオ!!」 バリリリリリッ!!

蛙吹 「小森ちゃん!？」

個性を発動していた上鳴に触ってしまったため触った瞬間感電してしまう小森。

拳藤 「仲間を心配するのはいいけど動きを止めたら命とりだよ？」

蛙吹 「しまっ！……もぐごっ!!」

動きを止めた蛙吹を後ろで控えていた拳藤がその隙を見逃さず大拳を使って蛙吹を確保

する。そして敵 サイラン チームは全員テープを巻かれてしまったため訓練終了となった。

(オ) マイト 『ヒーローチーム：WIIIIIIIIIIIN!!!』

——地下モニター室——

(オ) マイト 「お疲れっ!! 8人ともよく動いていたと思う！しかし上鳴少年はもう少し相手の行動を

読んだりする力を付けた方がいいだろう!!」

上鳴 「うえー俺っすか!?! 結構頑張ったと思うんすけどー!」

(オ) マイト 「最後の辺りは前に出たりしてたけど漁夫の利で勝利した感じがあるから近接における

る体術などを今後考えてみるといい!!」

上鳴 「了解っす」

(オ) マイト 「骨抜少年は個性も使っていないからあんまり評価はよく

ないと思っっているかもしれ

ないけど、実は君の動きは結構よかったよ！」

骨抜 「マジっすか？」

葉隠 「えーなんでー？」

芦戸 「あんまり活躍できてなかったけど？」

個性を使ってもおらずあまり活躍できていなさそうな骨抜の評価が良いことに不思議に

思うクラスメイトたち。

(オ)マイト「確かにあまり活躍出てきてないと思う！訓練中の骨抜少年はサポートに徹してい

た。だけどこれって中々できる事じゃないんだぜ皆！プロになってくると現場で自

分が何が出来て出来ないか見極める必要がある！しかしこれが意外にも難しいんだ！

適材適所！これはプロになってから必ず必要になるよ！その点において今回の骨抜少

年はそれが出来ていたということさ！皆もよく覚えておくように!!」

A組B組 「二二はいっ!!」「二二」

オールマイトによる講評が終わり次はいよいよ最後の訓練である。その前にクラフトは

拳藤の元に行く。

クラフト「拳藤」

拳藤 「あっ機神!どうだった私?よくできていたでしょ?」

クラフト「ああっ初めての訓練であれだけ動けるのはすごいと思うぞ」

拳藤 「へへっ／＼…ありがと…／＼」

クラフト「あとその手…見せてみる」

拳藤 「えっ?」

クラフト「どうした?」

拳藤 「いや…傷だらけだし…その汚いし…」

クラフト「いいから」グイッ：

拳藤 「あっちよっ…痛っ！」

クラフト「結構傷があるな、1つ1つは小さくても蓄積すればダメージを負う」

拳藤 「ははっ…ちよつと無理しちやったかな？」

クラフト「拳藤の個性は手なんだから大事にしないとイケないぞ？ サポートアイテムで伸縮する手

袋とかを考えてみたらどうだ？あと女だから手は大事にしないとな（笑）」

拳藤 「うっうん／＼ありがたう／＼（ちゃんと女って見てくれてんだ）」

クラフト「じゃ…治癒」フオオオ：

治癒の個性を使って拳藤の傷を治す。

拳藤 「えっ傷が治った…？」

クラフト「あんまり周りには言うなよ？」

拳藤 「…分かったけどちゃんといつかは理由を話してよね（笑）」

クラフト「そのつもりだ（笑）」

拳藤 「最後の訓練頑張れよ！」

クラフト「おう！サンキュ！」

最後の訓練が行われるためオールマイトの元に行く。ちなみにキノコが生えてしまっ

ている耳郎と骨抜にはメラメラの能力で胞子を焼き処理した。

第16話 やつと出番だよ！

——地下モニター室——

(オ) マイト「それでは最後に機神少年対複数人の戦闘訓練を始めようと思う!! それで機神少年の相

手なんだが誰か立候補する人はいるかな？」

オールマイトがクラフトの対戦相手をクラフト以外の皆に聞く。すると…

爆豪 「俺にやらせろ！オールマイト!!」

轟 「俺もやりてえ…」

八百万 「私もよろしいでしょうか？」

取蔭 「私もやりたいなー(笑)」

4人の生徒が立候補する。

(オ) マイト「うむ！君たち4人か！他にはいないかな？」

A組B組 「………」

立候補した4人以外誰も手を上げない。

(オ) マイト「いないようだね！では機神少年の相手はこの4人とする！次にルールだが機神少年！何か

ルールに関する要望はあるかい？」

クラフト「そうっすね…じゃあ核を無しにしてもらえますか？」

(オ) マイト「…それだけ？」

オールマイトはクラフトの要望が少ないことに少し驚く。

クラフト「あと役は敵でお願いします。」

(オ) マイト「なるほど…それだけでいいのかい？」

クラフト「要望はそれだけです。なので勝利条件がヒーロー側が俺を確保すること、こっちは

相手を確保か時間切れでお願いします」

(オ) マイト「分かった！君たち4人もいいかね？」

オールマイトが立候補した4人に問いかける。

爆豪 「ねえよ！さっさとやろうぜ！俺がぶっ殺してやる!!」

轟 「ああ…」

八百万 「異論はありませんわ！」

取蔭 「ないよ！」

(オ)マイト「よし！では本日最後の訓練をはじめよう!!5人は準備をするように!!」

いよいよクラフト対複数人の訓練が始まる。

——ビル5階——

クラフト「あくドキドキするなあ〜(笑)……ではまずは各階にコイツらを配置するか…LBX召喚!デ

クー!」

シユイイイイン……ウイインウイン……グポオオン……

クラフトはまずLBXのデクーを100体ほど召喚する。

大きな赤いモノアイを怪しく光ら

せながらデクーは起動する。

クラフト「よしデクーよこのビルの至るところに配置せよ!配置したら命令があるまで待機!」

デクー ××××リョウカイ××××

ウインウインカシャンカシャン!

無数のデクーはジャンプしながら部屋を出ていく。

クラフト「さて後は状況に合わせて動けばいいかな〜」

クラフトが準備し終わると合図が入る。

(オ)マイト『両チーム準備はいいかな?…それでは屋内対人戦闘訓練開始!!』

いよいよ訓練が始まった。

——ビル1階——

爆豪 「どこだハゲ野郎!!」

走り出そうとする爆豪を八百万が止める。

八百万 「爆豪さんお待ちください!」

爆豪 「あ×あ×?なんだよポニーテール!」

八百万 「私は八百万です!それより勝手な行動は控えてください

!」

爆豪 「ああ!?なんで俺がテメエらに合わせなきゃいけないんだ

!？」

取蔭 「だってチームじゃん（笑）」

爆豪 「んなもんテメエらで勝手にやっつけ!!俺が野郎をぶっ飛ばすんだ!!」

轟 「やめろ爆豪…今はそんなこと言ってる場合じゃねえだろ」

爆豪 「黙ってる半分野郎!!」

クラフト 『なくにをしているんだ君たちは』

ヒーローチームがビルの1階で止まっているとクラフトの声が響く。

爆豪 「この声は!」

轟 「どこからだ…」

八百万 「まさかこの1階に!？」

取蔭 「……………あれ見て!」

取蔭が指す方向に手のひらに乗りそうなサイズの何かがあった。

八百万 「あれは…一体何でしょうか？」

取蔭 「なんか小さいロボットっぽいけど…」

轟 「あいつの個性か？」

爆豪 「はっ!んなことはどうでもいいんだよ!!何してこようが片っぱしからぶっ壊しゃあいいん

だよ!!」ダダダツ!!

八百万 「!!…いけません爆豪さん!」

八百万が爆豪を止めるがもう遅い。

クラフト『フハハハハハ!!来いヒーロー!返り討ちにしてくれる!!1階フロアのデクーよ!攻撃を開始

せよ!!』

デクー ☒リョウカイ! コウゲキヲ カイシシマス☒ウイイン

…ガシャ…

ウインウインウイン!…カシヤンカシヤンカシヤン!

轟 「なんだこいつら!？」

八百万 「恐らく機神さんの個性でしょう!!」

取蔭 「んなこたあ分かってるよ!けど何だこの数!どんだけいるんだよ!!」

爆豪 「はんっ!どんだけいようと俺には関係…ねえ!」ボオンッ!!

爆豪はデクーに爆破攻撃を繰り返す。

デクー ☒ウテ!ウチマクレ!!☒☒コウゲキセヨ!!☒

パパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパッ!!!!

デクーが4人に対して装備しているマシンガンで攻撃する。ちなみに銃弾はちやんとゴム弾である。

ム弾である。

取蔭 「ちよっー!!いたたたたたっ!!!」

八百万 「くっ!相手が小さいから攻撃が当たりにくい!!」ブオンブオンッ!

八百万は創造で鉄パイプを作りデクーに攻撃するが当た

らない。

轟 「ちいつ!」パキパキパキッ!

デクー ☒!?!☒☒コウゲ…キイ…イウウ…☒☒…☒☒

轟が3人が凍らないように調節しながらデクーを氷漬けにする。

取蔭 「轟ナイスウ〜」

八百万 「助かりましたわ轟さん!」

爆豪 「…ケツ!」

轟 「ああ…」

八百万 「轟さん申し訳ありませんが先頭に立って先ほどのロボットの対応をお願いします」

か?」

轟 「わかった…」

ヒーローチームが対応を考えると再びクラフトの声

が響く。

クラフト『いや〜おめでどう!なんとか対応できたみたいだね!』

八百万 「また声が！どこですの!？」

爆豪 「……そこかあ!!」 ボオンッ!

爆豪が階段の所にいたデクーを捕まえる。

クラフト 『うわー捕まっちゃった〜 (笑)』

爆豪 「覚悟してまつとけハゲ野郎!この俺がぶつ殺してやる

!!

クラフト 『ハハハハハ……やってみろヒー 《ボオン!》……』

爆豪は爆破でLBXを破壊する。

——ビル5階——

クラフト「あの程度じゃあんまり足止めにはならないか……後の事を考えて1人ぐらいは減らしと

いた方がいいな……ドアドア」ギイイ……バタン

クラフトは4人に奇襲をするためドアドアの能力で異空間に入る。

——地下モニター室——

芦戸 「あれ!?!機神消えたよ!？」

飯田 「小さいロボットのようなものを出したと思えば今度はどこかに消えたぞ!一体どういう

個性なんだ!？」

(オ)マイト「改めて機神少年の個性は規格外だ……だがそのおかげで私は時間を気にすることなく活

動できるようになった!……私にできる事は彼にヒー

ローとは何たるかを教えること!」

……機神少年の個性については彼が話したいと思った時に聞いてほしい……皆」

葉隠 「えっ!?!オールマイトは機神くんの個性知っているんです

か!？」

上鳴 「どんな個性なんすか!？」

蛙吹 「今オールマイトが話せないって言ったわ上鳴ちゃん」

上鳴 「ええー!でもすげえ気になるじゃん!!」

(オ)マイト「蛙吹少女が言ったように私の口からは言えない。機神少

年の個性については一部の関

係者しか知らない」

飯田 「それほど強いというわけですか!？」

骨抜 「なるほど…:それだけ強いなら簡単に言えない理由も納得
ですネ」

上鳴 「?…:どゆこと…:」

耳郎 「あんたねえ…:それくらい考えられないの?それだけ強い
個性ということは敵にもし知ら

れてしまったら今の生活に危険が増えるってことだよ?

ウチらはまだ学生なんだから」

上鳴 「なるほど!でも大丈夫つしよー!それだけ強いなら逆に
敵が返り討ちにされるんじや

ね(笑)?」

耳郎 「あなたの理解力に期待したウチが馬鹿だった…:」

上鳴 「うえい!？」

葉隠 「上鳴くんはまず頭を鍛えないといけないね!」

上鳴 「うええい!？」

飯田 「上鳴くん!勉強するなら付き合うぞ!」

上鳴 「なんで俺こんなに言われるの!？」

理不尽と思う上鳴であった。

——ビル3階——

各階に配置されているデクーに対処しながらヒーロー

チームは着実に足を進めていた。

ボオオンツ!!…

爆豪 「ちっ!…:どんだけいんよコイツらは!!」

轟 「攻撃は大したことねえけが確かに鬱陶しいな…:」

取蔭 「地味に痛いしね〜」

八百万 「ですが相手の動きを鈍くする・遅くするという観点では
理にかなった戦法ですわ…:」

爆豪 「んなこたあどうでもいいんだよっ!!!いくらで出てこよう
が全部ぶっ飛ばしやあいんだか

らよ!!問題はまだあのハゲ野郎が出てきてない事だ:
こつちが体力諸々消費してるのに

対しあつちは対した消費がねえ…」

八百万 「確かにここまで体力はそこまで消費していませんが精神的な面での消費が激しいですわ

ね。各階ごとの対処に集中力の消費が激しいですわ…」

取蔭 「おまけに相手が小さいせいで攻撃は当てにくいから余計に疲れるよ」

轟 「ああ確かに…!?…取蔭避けろ!!」

取蔭 「へっ?…」

4人が話し合いをしていると轟が叫ぶ。取蔭は咄嗟の事のため反応できない。

ギイイイイ…

クラフト 「こんにちはあつ!!」グワツ!

取蔭 「ぎやあああああつ!!!」

何もないところから急に現れたため驚愕する取蔭。そしてそのまま口を押えられ体を引き込まれてしまう。

八百万 「取蔭さん!?」

爆豪 「待てやつハゲ野郎つ!!!」ボオンツ!!

爆豪は爆破で加速しクラフトを捕まえようとするが…

クラフト 「ばいば〜い(笑)」

ギイイイイ…バタンツ!

ブオンツ…スカッ!

爆豪 「!?…クソツ!!あのハゲ野郎お!!!」

——ドアドア異空間内——

クラフト 「はい確保つと」

取蔭 「くっそー!後ろから急に現れるなんてズルいぞ!!」

クラフト 「いやーそう言われても今の俺は敵^{ライバル}なわけだし…まあいいやこのまま5階に移動する

ね!」ガシツ!

取蔭 「はっ？いやなんで手を握ってちよっ／＼引っ張るな！／＼自分で歩けるから!!／＼」

異空間内を移動し5階に移動する2人。

——ビル5階——

ギイイイ：

クラフト「着いたよ」

取蔭 「うっうん／＼あのさ…いつまで手握ってるわけ／＼？」

クラフト「えっ？ああごめんごめん（笑）」ぱっ！

取蔭に言われようやく手を放すクラフト。ちなみに取蔭の確保宣言はもうされている。

クラフト「えくと立ったままじゃしんどいから…（キュブキュブ！）」

クラフトはキュブキュブの能力で床の一部をキューブにして操り、キューブ同士を繋ぎ

合わせ椅子を作る。

クラフト「さっ！どうぞ座って！」

取蔭 「あっありがとう…」ぽすっ…

クラフト「あく3人が来るまでまだ時間あるな…お茶でも飲もうか」

クラフトはそう言うアイテムボックスからお茶が入った水筒と紙コップを取り出し取

蔭に渡す。そして訓練中にもかかわらずお茶会が始める

のであった。

取蔭 「ありがと…あっ美味しい！」

——地下モニター室——

瀬呂 「なんかお茶飲み始めたぞ…」

芦戸 「これ訓練中だよね？」

峰田 「あいつなに楽しくお茶なんか飲んでんだよお…」

血涙を流す峰田

耳郎 （手っないでた…）ゴゴゴゴゴ…

拳藤 （後で理由聞かなきゃ…）ゴゴゴゴゴ…

そしてこちらにもまるで噴火前の火山のようになっていた。

——ビル5階——

取蔭と優雅にお茶を楽しむこと約5分。

クラフト「なかなか来ませんね〜（某特命係の警部風）」ズズ…

取蔭「なにその喋り方w」

クラフト「暇ですからね〜」

取蔭「あっはっはっはっw w」

取蔭と楽しく話していると物音が聞こえてくる。

ポオン…死ねえこのカスどもっ!!

タツタツタツタツ…バアンツ!!!

クラフトがいる部屋のドアが乱暴に開けられる。

爆豪「!?…見つけたぞハゲ野郎っ!!」

クラフト「それもしかして俺のこと？」

爆豪「てめえ以外に誰がいるんだっ!!!それに分裂女!!なんで呑

気に茶なんか飲んでんだっ!!!」

爆豪が色々突っ込んでいると轟と八百万も到着する

轟「見つけたぞ機神」

八百万「道中の借り返させてもらいます!!」

クラフト「…取蔭ちゃんお茶のおかわりいる？」

取蔭「いや何か言つて返してあげたら？」

爆豪「《イラアツ!!》…随分と余裕だなあっ!!」ポオン!

爆豪は爆破で加速しクラフトに突っ込み攻撃を仕掛ける。

クラフト「(ノロノロの能力!)…ノロノロビーム!!」フォンフォン

フォン!

爆豪「!?…んだこつれええええはあああ〜(んだこれ動きが

!?)」

クラフトは指で狐の形を作り指先からノロノロビームを

放射する。ノロノロビームを浴

びた爆豪は空中で動きがスローモーションのようになる。

轟「爆豪!?!」

八百万「爆豪さん!?!」

クラフト「では……鳩尾にいつぱーっ!!」ボズンツ!!

爆豪「てええんんめええええくなああにいいいいいい……」

クラフト「取蔭ちゃんこの間にあつちに移動しよう」

取蔭「えっ?…あつうんわかった…ねえこれどうなるの?」

クラフト「ああ30秒経てばいろいろ戻るよ。さっ移動移動!」

取蔭の肩を押しながら部屋の奥に移動するクラフト。

——地下モニター室——

切島「爆豪なんで動き止まってんだ!」

穴田「なにやらピンク色の光を浴びたらあのようになってしま

いましたぞー!」

芦戸「何あれすごーい!!」

峰田「ピンク色の光……Er《ベチンツ!》…」

何かを言い切る前に蛙吹の舌によるピンタで遮られてしま
まう峰田であった。

——ビル5階——

クラフト「そろそろ30秒かな」

爆豪「……やつて《ドムツ!!》…ぐっ!」フオツ…ドシヤツ!
クラフトが爆豪の鳩尾に一撃を入れたため後ろに吹っ飛

んでしまう。

轟「爆豪大丈夫か!」

八百万「爆豪さん!!」

吹っ飛んだ爆豪に駆け寄る轟と八百万

爆豪「ゴホツゴホツ!!…クソツ!なんで俺がつ!」

八百万「……まさか!?!」

クラフト「おっ?…気づいたかな?」

轟「八百万…どうかしたのか?」

八百万「なぜ爆豪が吹っ飛んだのか…それは時間差によものでは
ね機神さん!」

パチパチパチパチパチ!

部屋に拍手の音が響く。

クラフト「いや〜ご名答〜！その通りでございませよ〜（笑）」

轟「時間差つて…どういうことだ？」

八百万「先ほどのビームは動きを遅くするだけでなくあらゆるものを遅くするビーム…それは打

撃によるダメージも…」

轟「そういうことか…お前一体どういう個性だよ？」

クラフト「いや〜それについてはノーコメントでお願いしますわ（笑）」

轟「そうかなら力づくでいくぞ！」パキパキパキツ！！

轟が氷で攻撃を仕掛けてくる。

クラフト「おおっ!？」パキパキパキインツ！

取蔭「あぶなっ!？」

轟「早く溶かさねえと足が壊死しちまうぞ…降参しろ」

クラフト「ハ〜ハハハ〜（笑）この程度どうとでもないわ！（スナスナ!）」シユウウウウ〜

轟「なにつ!？」

クラフトはスナスナの能力で凍らされている下半身の氷に触り、氷の水分を吸い取り氷自体をなくしてしまふ

クラフト「あー冷たかった」

轟「何でもありかよ…」

クラフト「もう終わり?」

八百万「今度は私の番ですわ!はああああ!!」ダダダツ!

八百万は個性の創造で長めの鉄パイプを作りクラフトに攻撃を仕掛ける。

クラフト「取蔭ちゃんここは危ないからあっちの隅にいてくれる?」

取蔭「りよーかーいw」

八百万「はああああ!!」ブオンツ!

八百万は野球のスイングのように鉄パイプを振る。鉄パイプがクラフトに迫るがクラフ

トは防御をする素振りを見せない。そしてその鉄パイプはクラフトの上半身を切り離

す。

八百万 「えっ?……体が……ああっ機神さん!大丈夫ですか!」

クラフト 「大丈夫大丈夫ー夫!心配しなくても大丈夫よ個性だから(笑)」

八百万 「そっそうでしたか……個性!」

クラフト 「遅いわ!!バラバラフェスティバル!!」パカラララ〜ン!!
クラフトは体を分割させ空中に浮遊する。バラバラになったことに取蔭が突っ込む。

取蔭 「おいー!私と個性被ってんじゃねーか!!」

クラフト 「世の中というのは理不尽がいっぱいじゃきい…」

取蔭 「意味わからんわ!!」

クラフト 「文句は後で聞きますので……ご覚悟!バラバラアタック!!」ヒュツヒュツヒュツ!!

クラフトは分割した体を操り八百万に攻撃する。

ドガガガガガッ!!

八百万 「くっーがっ!!ああああっ!!」ガクツ…

八百万は激しい攻撃のあまりその場に膝をついてしまう。

クラフト 「ではテープを……やらせるかっ!」!?っとお!!」

八百万 「轟さん……はあはあ……」

轟 「立てるか八百万?」

八百万に確保テープを巻こうとした瞬間轟が拳で攻撃し巻き損ねるクラフト。

八百万 「すみません……ダメージが思ったよりあって……爆豪さんは

?

轟 「爆豪ならもうすぐ回復する」

クラフト 「あらら……こりやぶぎけてはいられないね……」

轟 「今まで本気じゃなかったのかよ……」

クラフト 「半分は真面目にやってたよ……」

爆豪 「ますますムカつく野郎だなテメエは……」

八百万 「爆豪さん！」

轟 「爆豪立てるか？」

爆豪 「誰に言ってるやがる半分野郎！そいつをぶっ飛ばすのはこの俺だ!!」

爆豪は若干フラつきながらも身体を起こす。

クラフト 「おく流石タフネス！さあどうしたヒーロー共！相手はたった1人だぞ!!」

轟 「この野郎……」

爆豪 「その減らず口すぐに黙らしてやらあ!!」ボオン！

爆豪は再び爆破で加速しクラフトに攻撃を仕掛ける

八百万 「いけません爆豪さん！また先ほどの光を!!」

クラフト 「フハハハハッ!!その通りだノロノロビーム!!」フオンフオンフオン！

爆豪 「2度もくらうかよ!!」ボツボンツッ！

爆豪は爆破で軌道変更しノロノロビームを回避する

クラフト 「Oh……マジかよ……流石才能マンだな！」

爆豪 「うるせえ死んどけええ!!」

ボオオオオンツッ!!

ノロノロビームを回避した爆豪はクラフトに爆破攻撃を容赦なく浴びせる。

轟 「っ！……威力強すぎやしねえか？」

八百万 「確かに強すぎると思いますが……」

爆豪 「はんっ！ハゲ野郎にはこのぐらいでいんだよ!!」

クラフト 「もう少し優しめでもいいんじゃないかな？」

煙が晴れるとそこには体にいくつかの穴が開いたクラフトが立っていた。

八百万 「なっ!？」

轟 「体に穴開いちまってんだけど大丈夫なんだろうな？」

爆豪 「良く似合ってるぜハゲ野郎！」

クラフト 「そのハゲ野郎って言うのやめてくれないかな？」シユウウウ……

クラフトはそう言いながら体の穴をふさいでいく

爆豪 「やっぱノーダメか…」

クラフト「そっちの攻撃は終わりかな？なら今度は…俺のタアアア
ン!!」

轟 「来るぞっ!」

爆豪 「させるかよっ!!テメエのターンはねえんだよ!!」ダツ!

八百万 「爆豪さん迂闊に近づいてはっ!!」

爆豪 「あ×あ×っ!」

クラフト「その通りだ…言っただろうこちらのターンだと…」バチ
バチバチツ…

クラフトの体に雷光のように光り電気が体に走る。

爆豪 「(なんだ体が光って!?) …だが関係ねえ!何かする前に
ぶっ殺しやあいんだっ!!」

クラフト「出力制限…ライガン雷銃!!」バリリリツ!!

爆豪 「あっ?…ガあっ!!」BZZZZZZZZ!!

クラフトはゴロゴロの能力を発動させ爆豪に雷撃を食ら
わせる。

【ライガン雷銃】

ゴロゴロの能力で使う技の1つであり出力を制限し相手
を気絶させる技。ようはスタン

ガンみたいな技である。

轟 「爆豪っ!!?」

八百万 「爆豪さんっ!!?」

ドサツ…

クラフト「ほい確保つと!…あと2人だけど実質1人か」

(オ) マイト『爆豪少年確保ー!!』

八百万 「その言い方は少し心外ですわね…」

クラフト「客観的事実を述べただけ…だっ!!(ヤミヤミの能力)闇水くろうず
!!」ズオオオオッ!!

轟 「なっなんだ体がっ!!?」

八百万 「轟さんっ!」

クラフトはヤミヤミの能力を発動させ轟の体を引き寄せ
て轟の首を掴む。

ガシツ!!

クラフト「ゼハハハハっ!!油断したな轟!」

轟 「それはどっちだ?俺の攻撃見てなかったわけじゃねえだ
ろ……!?(出ねえ!?!どうい……)」

クラフト「なんで個性が出せないか……わかるか轟?」

轟 「……テメエの仕業か……」

クラフト「闇とは引力!全てを引きずり込む力でありそれは光も逃
さない!この闇は個性に対し無効

化の力がある!まあ全てじゃないけどな(笑)」

轟 「そうかよ……わざわざ解説ありがとう……なっ!」フツ!

轟はクラフトの顔にパンチを繰り出すが……

ボフォンツ!

轟 「なっ!?!けむr……ぐふっ!?!」ズドムツ!!

クラフト「モクモク発動しといてよかつた……備えあれば何とや
らくつてね(笑)あと確保」

轟がクラフトの顔が煙の様に霧散したことに驚いた隙を
ついて確保するクラフト。

(オ) マイト『轟少年確保……!!』

クラフト「あとは八百万だけになったね……どうする?」

八百万 「意地の悪い質問ですわね……いまの私を見てそのような事
を聞くなんて」

クラフト「では確保しますか……」

自身の攻撃のダメージで動けなくなった八百万に近づく

…

ガシヤンツ!!

八百万 「油断対敵ですわ機神さん!!」

クラフト「おおっ手錠だどっ!?!」

八百万 「このまま確保させていただきますわ!!」

八百万に確保テープを巻こうと近づくと逆に創造で作っ

た手錠をかけられてしまうクラ

フト。

クラフト「それはお断りするは…(イトイト…)」シユツ!

八百万「《グンツ…》…かつ体が!」

クラフト「いやゝ惜しかったねゝ…はい確保つと!」

イトイトの能力で八百万の体を動けなくし確保テープを巻くと訓練が終了する。

(オ) マイト『ヴァイラン敵 チーム…WIIIIIIIIIIIN』

クラフト「おっしやあー!勝った終わったー!!…取蔭ちゃん終わったよー」

取蔭 「はいお疲れゝ…ねえなんでちゃん付けなの?」

クラフト「あゝ……なんとなくノリ的な?感じかな」

取蔭 「ふーん…(ノリ…ねえ)」

クラフト「もしかして嫌だった?」

取蔭 「いんやゝ今後もそう呼んでくれんのかなゝつて」

クラフト「そつちがいいならそう呼ぶけど?」

取蔭 「じゃあ今後もそれでお願いねw」

クラフト「わかったよ取蔭ちゃん!」

取蔭 「ありがとゝ／＼」

少し顔を赤くしながらお礼を言う取蔭であった。

——グラウンドβ出入口——

地下モニター室で講評をした後グラウンドβの出入り口

でオールマイトが締め言葉を

言う。

(オ)マイト「みんなお疲れ様!!大きな怪我也あったが皆最後まで真摯に取り組んだ初めての訓練に

しちや上出来だぜ!!」

A組B組 「相澤先生の後だから……なんか真つ当すぎて拍子抜けと
いうか…」 「確かに…」

(オ)マイト「真つ当な授業をするのも私たちの自由さ…では私は戻るので君たちも着替えて教室

に…」

「お戻りー!!!」

バビューーン!!!

(オ)マイト(爆豪少年…自尊心の塊…膨れ切った心ほど脆いもの…先生としてしつかりとカウン

セリングしないと!!)

オールマイトが去ったあと生徒たちも着替えるために動き出す。

クラフト「さくって早く着替えるか「クラフト…」…ん?」

耳郎「……」

拳藤「……」

クラフト「おー響香に拳藤!訓練お疲れ様!」

耳郎「おつかれ…ねえ訓練のとき取蔭となんで手つないでたの?」ゴゴゴゴ…

クラフト「……えっ?」

拳藤「手を繋ぐ必要あつたのななくって思ったんだよね」ゴゴゴゴ…

2人とも目が笑っておらず身の危険を感じるクラフト。

クラフト「(なんかやばい…)えっえくと…別に深い意味はなくてですね!取蔭ちゃんの…」

耳郎「取蔭ちゃん?」

クラフト「……(⊗ ⊗ ⊗)」

拳藤「なんでちゃん付けしてるの?」

耳郎と拳藤に問い詰められている所に取蔭がやってくる。

取蔭「機神おつかれ〜!…ありやお取込み中だった?」

拳藤「取蔭ちようどよかった…なんでアンタ名前にちゃん付けで呼ばれているの?」

取蔭「えっ?ああそれは…!…!」

理由を答えようとするが途中で何かを思いつく取蔭。

耳郎「それは?」

取蔭 「そりゃあ…あんなことがあれば呼び方だって／＼…くねつくねっ

クラフト「ぎっ!?!」

体をくねらせながら答える取蔭にフリーズするクラフト。

耳郎 「ちよつとどういう事かな?」

クラフト「取蔭さん何を言つて…(;´ω´)」

拳藤 「機神…おこらないから正直に話してみ…ほら」

クラフト「…三十六計逃げるに如かず…御免!!」ダダダダダツ!!

耳郎 「あつ待てクラフト!!」ダダダダダツ!!

拳藤 「待て機神!!」ダダダダダツ!!

取蔭 (につひつひくガンバレ機神く(笑))

どんなに強い個性を持つていようともこれには対処できないクラフトであった。

(オ)マイト「はっ!?もう時間は気にしなくていいんだった!!私したことが忘れていた!!ハッハッ

ハッハッ!!」

第17話 委員長のイメージはやっぱりメガネ？

初の戦闘訓練を終えたその翌日、クラフトは疲れた様子で学校の机に突っ伏していた。

クラフト「昨日は訓練よりその後のことが一番疲れた…」

葉隠「お疲れだったね機神くん！あつ良かったらキャラメル食べる？」スツ…

クラフト「ありがとう葉隠…机に置いといてくれ…」

瀬呂「いや〜でも中々おもしろかったぜ！あんなに強い機神が自分の彼女にタジタジになって

いた光景はw」

クラフト「まあ…あれは誤解を招くような行動をした俺も悪かったし…でもまさか取蔭ちゃんがあ

んな事するとは予想外だった…」

芦戸「許してもらえてよかったね〜」

クラフト「今日のお昼デザート付きと今度のデートでなにか奢ることで何とか許してもらえまし

た…」

障子「しかしまさか2人が機神の彼女とは少し驚いたがな」

クラフト「うんまあ…そういう事なんでいろいろよろしく…」

峰田「彼女2人とか舐めてんのかこの野郎!!（怒）」

激しく血涙を目から流しながら怒りに満ちている峰田。

クラフト「とりあえず謝つとくわ…スマンな」

峰田「くそつたれえええ!!」

切島「峰田！嫉妬なんて漢らしくないぜっ!!」

峰田「うるせー！これが嫉妬せずにいられるか!!」

瀬呂「まー気持ちは理解できなくもないが…」

芦戸「その機神の彼女の耳郎に聞きたいことがあります！」

耳郎「きゅ…急になに芦戸？」

クラフトがクラスの皆と話している様子を静かに見ていた耳郎に芦戸が問いかける。

芦戸 「ぶつちやけどこまでしたの？キスまで？」

耳郎 「ぶふっ!!?／／」

葉隠 「わあー!!それめっちゃ気になる!!ねえねえどこまでしたの／!?」ワクワク!

耳郎 「いついきなり何を聞くかと思えば!!そんなの答えられるわけないじゃん／／!!」

芦戸 「えー!いいじゃん気になるしキュンキュンしたいよ!!」

葉隠 「じゃあ機神くんに聞こう!!機神くんどこまでしたの!？」

耳郎 「ちよっ!？」

クラフト 「プライベートなのでノーコメントで」

耳郎 (よし!)

葉隠 「えー!…あっほらキャラメルもう1個あげるから!」

クラフト 「……………」

耳郎 「なにキャラメル2個で悩んでんのよ!!」ヒュッ!

ドスツ!!ドツクン!!

クラフト 「ぐフっ!？」

強烈な耳郎のドツクンを貰ってしまうクラフトであった。

そして予鈴が鳴り朝のHホームルームR

が始まる。

相澤 「おはよう…昨日の訓練の映像と成績見させてもらった…

爆豪お前能力あるんだ、あんな

子供みたいなまねもうするなよ?」

爆豪 「分かってるよ……………」

相澤 「緑谷は調整ミスって腕を大怪我…プロになって調整ミスって動けませんじゃ通じないか

らな?」

緑谷 「はい!」

相澤 「それから轟と機神。強い個性なのは結構だがそれに余裕かいていたら足を掬われるから気を付けるように」

轟 「はい…」

クラフト「了解です」

相澤 「じゃあここからがH^{ホームルーム}Rの本題だ…これから君たちには…」

クラス (なんだ?) (まさか小テストか!?) (テストだけは勘弁…)
何がくるのか身構えるクラス全員だが…

相澤 「学級委員を決めてもらう!」

クラス 「〇〇学校ほいのきたー!」

切島 「委員長やりたいです俺!!」

峰田 「オイラのマニフェストは女子全員膝上30cm!!!」

青山 「ボクの為にあるやつ!」

耳郎 「ウチもやりたいっす」

芦戸 「リーダーやるやるー!!」

爆豪 「俺にやらせろっ!!」

ヒーローという観点から見ると多を導くという素地が鍛えられるので人気のある役なのである。

飯田 「静粛にしまえ!!」

クラス 「〇〇ん?」

飯田 「多をけん引する重大な仕事だぞ!『やりたい者』がやれるものではないだろう!!周囲から

の信頼あつてこそその役職!ここは民主主義に則りここは投票で決めるべきではないだろう

うか?!」ビッシイ!!」

クラフト「だったらその模範的ともいえる挙手はどう説明するんだ(笑)ー!」

飯田 「こっこれはその…恥ずかしいが委員長という聖務をやりたいという欲に抗えずに上げて

てしまった!」

クラフト「なるほど…飯田は真面目だしなー手が上がっていしまうのは仕方ことだな!」

飯田 「機神くん理解してくれて感謝する!」

蛙吹 「だけどまだ日が浅いのに信頼もクソもないわよ飯田ちゃん？」

切島 「確かにみんな自分に入れるだろ？」

飯田 「だからこそここでもっとも票を獲得した者がふさわしい人間ということにならない

か？」

クラフト 「はーい！オレ提案あるんだけど？」

委員長決めをクラス投票の多数決案にクラフトが自身の考えを提案する。

瀬呂 「提案ってなんだよ機神？」

クラフト 「投票なんだけど自分に投票するのは無しというのはどう？」

クラス 「「「「「？」「！！」「」」」」」

上鳴 「うええ!?何だよそれ!？」

峰田 「それじゃ自分に票が入らないじゃんかよ!？」

クラフト 「いいか？これはいわゆる選挙みたいなもんだ。選挙で自分に自分で票を入れるそんな

カツコ悪い候補者なんて頼もしいと思うか？」

上鳴 「うっ…それは…」

瀬呂 「確かにカツコ悪いつちやカツコ悪いな」

切島 「うおお！確かにそんなの漢らしくねえ!!機神オレはお前の案に賛成だ!!」

常闇 「確かに…ヒーローを目指す者としてあまり良い行いとは言えないな」

葉隠 「あくそれは言ってるかも!」

クラス全体がクラフトの案に賛成のほうに傾く。

クラフト 「あつちなみに俺は立候補はしないんでそこんどころしく!」

瀬呂 「えっ!?お前ここまで言っというて棄権すんの!？」

耳郎 「クラフトなんで棄権すんの？」

クラフト 「別にそこまで興味ないしこういう役はヤル気があるやつ

がした方がいいだろ？」

飯田 「とういことは機神くんには投票する権利だけが残るとい
うわけか？」

クラフト 「そういう事になるな」

クラス 「!!!」

クラフトがそう肯定するとクラスメイトの目つきが少し
変わる。

バアンツ!!

爆豪 「おいハゲ野郎…俺に投票しろ」

爆豪がクラフトの方に振り返り机を強めに叩きながら要
求する。

クラフト 「お前に入れるなら峰田に入れた方がマシだなw」

爆豪 「あ×あ×っ?!?何だどこのハゲ野郎!!」

峰田 「じゃあオイラはもう1票獲t…」

クラフト 「まあ入れないけど」

峰田 「てめえええええっ!!!」

相澤 「お前ら…委員長決めるのいつまでかかってるんだ…」

クラフト 「相澤先生!今日中には決めますので!!」

相澤 「……今日中だぞ」

クラフト 「ありがとうございまあす!」 シュバツ!!

綺麗なお辞儀をするクラフト。

クラフト「とまあ相澤先生に早く決めるように釘を刺されてしまっ
たので皆だれに投票するか早く

決めるように!!」

上鳴 「かー…マジかよー!」

クラフト 「まあ委員長になりたいなら休憩時間や昼休みとかにア
ピールや根回しとかをするんだ

な…」 ボソツ…

クラス 「(((はっ!?!)))」

クラフトの何気に言った言葉によりA組内の委員長選挙
(なんでも有り)が始まってしま

う。ちなみに何名かは考えを改め棄権表明している。

——授業小休憩時間——

峰田 「オイラにどうか清き一票をー！」

瀬呂 「いや、清き一票と言われてもねえ〜（笑）」

上鳴 「峰田なんかより俺に入れた方がいいと思うぜ！」

峰田 「何だと上鳴！オイラのマニフェストは女子のスカート丈膝上30cmにすることだぞ！お前こ

れに勝る考えがあるのか！」

上鳴 「なっ膝上30cmだと!?……………峰田……」

峰田 「何だよ？」

上鳴 「お前のマニフェスト野望に俺も協力してもいいか？」ドド
ンツ！

峰田 「上鳴：お前分かってくれたのか！サンキューだぜ!!」ド
ドンツ！

ここに峰田と上鳴の協力体制が築かれるのであるが……

耳郎 「峰田と上鳴は選挙から除外に賛成の人ー？」

A組女子 「二はーい!!」

峰田 「何だと……へっただけどそんなことしたって何の意味もな
いぜ！いくら女子全員が賛成しよ

うともオイラが当選すれば……「除外を認めます！」……なっ
機神!」

クラフト「女子全員と男子5人の賛成により峰田と上鳴の除外を認
めます！」

峰田 「なんでお前がそんなこと決めんだよ!」

上鳴 「そーだぜ！何の権限があつて決めてんだよ！それに男子
5人で誰だよ！」

クラフトはそう言われると懐から1つの紙を取り出し2
人に見せる。

クラフト「この委員長選挙の臨時選挙管理委員を俺が務めることに
なったからだ（笑）相澤先生の許

可及びサインも貰っている！」ババーン！

峰田 「なっ何だとおおー!!?」

上鳴 「機神お前いつのまに!!?」

クラフト 「男子の賛成者は俺に尾白、障子、常闇、瀬呂だ。女子6人に男子5人計11人…クラス過

半数の賛成だぞ?」

峰田 「てめえらあぁー!!!」

上鳴 「てか瀬呂お前裏切ったのか!」クワツ!

瀬呂 「いや裏切ったも何もねえだろ?それに俺協力するなんて言ってないし。あつ機神、食券

サンキューな!」

クラフト 「いいってことよ(笑)」

峰田 「おい瀬呂…食券ってなんだよそれ?…まさか!」バツ!
何かに気づいた峰田は尾白、障子、常闇の方を見ると3人は顔を別の方向に向ける。

峰田 「まさか機神てめえ…4人を食券で丸め込んだのかあ…」
ゴゴゴゴ…

クラフト 「はて何のことやら?そう思うんなら4人に聞いてみたらどうだ?」

峰田 「おいどうなんだよお…」

尾白 「詳しいや…何の事かなく…」

障子 「うむ何のことだ?」

常闇 「黙秘する…」

瀬呂 「これは機神のご厚意でもらったもんだからなくw」
峰田の質問にしらを切る4人。

峰田 「機神てめえよくも…!…おい切島お前こんなことして
るやつ見過ごしていいのかよ!」

漢らしくねえんじゃないのか!」

切島 「お…おおっ言われてみればそうだな!機神お前のその行
為は…」

クラフト 「切島ちよつとこつちに…」クイクイ

切島 「えっ…おっおう…」

クラフト「実はな……………」

切島「えっマジで?! いやしかし……………」

瀬呂「なに話してんだ?」

切島を自身の方に呼んで肩に腕を回し小声で何かを話す。

そして話が終わり戻ってくる2人。

上鳴「あっ戻ってきた」

切島「峰田……………」

峰田「なっ何だよ……………」

切島「女子が嫌がるようなことはやっちゃいけないよな?」

峰田「機神てめええええ!!!」

上鳴「ちきしよおおおお!!」

こうして峰田と上鳴の委員長選挙からの除外が決定したのであった。

・
・
・

——お昼休み——

キーンコーンカーンコーン……………」

瀬呂「それじゃ機神さっそく使わせてもらおうぜ!」

クラフト「おー存分に味わってくれ(笑)」

耳郎「クラフト……………」

クラフト「ん?」

耳郎「約束覚えてるよね?」

クラフト「ちゃんと覚えてますよー」

耳郎「ならよし(笑)」

拳藤も一緒にお昼ご飯を食べるので呼びに行こうと教室を出るとタイミングよく入口近く

くに拳藤がいた。

拳藤「あっ機神!」

クラフト「おっ拳藤ナイスタイミング!一緒にお昼ご飯食べに行こうぜ!」

拳藤 「うん！その前に障子っていう男子まだ教室にいる？」

クラフト 「障子？まだいると思うけど？」

耳郎 「何か用でもあるの？」

拳藤 「私じゃなくてレイ子がね……」

クラフト 「レイ子？」

柳 「初めまして……柳レイ子です」

拳藤の後ろから柳が出てきて挨拶をする。

クラフト 「初めまして俺は機神クラフトよろしく！」

耳郎 「ウチは耳郎響香よろしくね」

柳 「よろしく……あのそれで障子いる？」

クラフト 「障子なら……」

障子 「俺がどうかしたのか？」

耳郎 「あつ障子ちようどよかった。あんたに用がある子がいる

んだけど」

障子 「俺に？」

柳 「あつあの……昨日の訓練……おつかれ」

障子 「お前は昨日の訓練のとき同じチームだった……確か柳だったか？」

たか？」

柳 「！……うん合ってる……そのもし良かったら一緒にお昼どう

かなって……」

障子 「俺と一緒にお昼を？」

クラフト （なるほど……いやまだ分からんな）

拳藤 （頑張れレイ子！）

柳 「ダメかな？」

障子 「いや別にダメではないが……」

返答に少し困っている障子にクラフトが助け船を出す。

クラフト 「せっかくお誘いを受けてんだし一緒に食べればいいん

じやないの？」

障子 「うっうむ確かにそうなんだが……」

クラフト 「もしかしてあんまりこういうのには慣れていないとか？」

障子 「!…ああ恥ずかしい話だが今までこの見た目のせいで女子と接する機会は少なかったから、こういうのにどう答えればいいか正直よく分からなくてな」

クラフト 「ならこれを機に今後慣れておく為に柳と一緒にお昼ご飯食べたら?」

障子 「そうだな…柳、俺でよければ…」

柳 「うっうん／＼じゃあ行こっか／＼?」

障子 「あっああ／＼」

拳藤 「機神ナイス!!」 ひそひそ

耳郎 「何とかうまくやったね」 ひそひそ

クラフト 「うまくいってよかった…それじゃあ俺らも行こうぜ」

拳藤 「お昼ゴチになりま〜す♪」

耳郎 「どれにしよっかな〜」

障子と柳と一緒に食事させることに成功し3人も食堂に向かうのであった。

——雄英学生食堂——

クラフト 「いや〜しかし世の中どう動くか分からねえもんだな」 モグモグ

耳郎 「もしかして柳のこと?」

クラフト 「そーそー! 訓練のときの同じチームだっただけでこうなるとは考えにくいから訓練中の

時に何かあったと推測するが…」

拳藤 「レイ子はあるまり詳しくは教えてはくれなかったけど… たぶんそうだろうね」 モグ

3人で色々話しているとそこに緑谷、麗日、飯田の3人組が来る。

飯田 「機神くん!」

クラフト 「ん? おー飯田じゃんどうした?」

飯田 「もしよかったら同席してもいいだろうか?」

クラフト 「俺はいいよ、2人は?」

耳郎 「ウチもいいよ」

拳藤 「私も！」

飯田 「感謝する！」

緑谷 「お邪魔するね」

麗日 「ありがとー！」

飯田 「ところで機神くん君に聞きたいことがあるのだが」

クラフト 「聞きたいこと？」

飯田 「ああ、なぜ俺に投票してくれたんだ？」

クラフト 「そのことか…まあ特に大した理由はないんだけどそういうの得意そうだからかな。あ

とメガネだからかな」

麗日 「メガネツw!!」ブハツ!!

飯田 「メガネだからというのはよく分からないが…僕が委員長の仕事に向いていると思ってる

れたのはとても嬉しい。ありがとう」

クラフト 「大したことはしてないんだけどな（笑）」

ここで飯田とクラフト以外があることに気付く。

麗日 「ぼく…?」

飯田 「…あつ」

麗日 「もしかして飯田くんて…坊ちゃん!？」

飯田 「坊っ!?!…そう言われるのが嫌で一人称を変えていたんだが…そうだ俺の家は代々ヒー

ロー一家で俺は次男なんだ」

麗日 「ええーっ凄いい!!」

緑谷 「すごいじゃないか飯田くん!!」

拳藤 「へー飯田の家ってヒーローやってんだ」

耳郎 「どんなヒーローなの？」

飯田 「ターボヒーロー『インゲニウム』は知ってるかい？」

緑谷 「もちろんだよ!!東京の事務所に65人もの相棒サイドキックを雇っている大人気ヒーローじゃない

か!!」ペラペラ

飯田 「詳しい…」

緑谷 「まさか…」

飯田 「それが俺の兄さ!!」クイツ

飯田は立ち上がりメガネをクイツと上げながら自慢する
ように言う。

麗日 「あからさま!!」

緑谷 「すごいや!!」

飯田 「規律を重んじ人を導く愛すべきヒーロー、俺はそんな兄
の姿に憧れヒーローを志したん

だ。人を導くのはまだ俺には早いと思ったんだが、機神く
んのおかげで自信が少し持て

たため委員長に選ばれたら全力でやるつもりだ!」ビシッ
!

拳藤 「あれ? A組ってまだ委員長決まってるの?」

クラフト「あく実はカクカクシカジカコレコレなわけです(笑)」

拳藤 「ふ〜ん:そんなことになってんだ」

麗日 「誰になるんやろうねー!」

麗日が楽し気にそう言った瞬間、雄英校舎に聞いた者に不
安を与える音が鳴り響く。

ウウー!ウウー!ウウー!

飯田 「なっ何事だっ!」

緑谷 「警報!」

クラフト「むむっ!この揚げ物定食のエビフライなんて美味っ!!」
サクサクプリップリ!

拳藤 「あんたはなに呑気に食べてんだ!」ベシン!

クラフト「ぐっふっ!」

校内放送『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速や
かに屋外に避難してください』

飯田 「セキュリティ3って何ですか!」

雄英生徒「校内に誰かが侵入してきたってことだよ!こんなの3年
間で初めてだよ!君らも早く!!」

飯田 「という事だ！俺たちも早く避難しよう！」

クラフト「俺はこのままここにいた方がいいと思うけどなー」モグモグ

飯田 「機神くん！呑気に食事をしている場合ではないぞ!!」
シュババ！

耳郎 「待って飯田、ねえクラフトなんでここにいた方がいいの？」

クラフト「理由その1、この場にいた生徒が一気に出入り口に向かったから危険なため。理由そ

の2、侵入者は校門前にいたマスコミ連中のため危険はないと判断」

実際食堂の出入り口に大勢の生徒が押し掛けたことにより混乱が起きていた。

雄英生徒「いてえいてえっ！」「ちよっ押すなっ！」「倒れちゃう！」「押すなーっ!!」

「いたたたたっ！」「待って人倒れた！」「あいたっ！」

緑谷 「ほんとだ…」

麗日 「あれじゃ逆に動けん…」

拳藤 「ちよっと待って…いま侵入者はマスコミって言った？」

クラフト「外見てみなよ」

そう言われ拳藤は壁ガラスに近づいて外を見る。

拳藤 「……本当にマスコミだ」

飯田 「なら早く皆に伝えなければ！」

麗日 「でもあの状態じゃ思うようには…」

飯田 「くっどうすれば…」

クラフト「ふうぐちそーさん！…飯田ここはお前に任せてもいいか？」

飯田 「むっ？機神くんそれはどういう…」

クラフト「俺はちよっと外のマスコミ対処してくるわ…（キュブキュブの能力）」

クラフトはそう言うと壁ガラスに手を当て個性を発動さ

せる。するとガラスは正方形の

形に分割され下に落ちる。

ピシピシピシ…バラバララ…

クラフト「それじゃ飯田ここは任せたぞ？」

飯田「…ああ分かった！」

タツタツタツタツタツ…

クラフト(原作じゃこの時にカリキュラムを盗んだという考察だつたはず…職員室にアキレス

ディードを飛ばしておくか…)

通常サイズのLBXを召喚し職員室にアキレスディードを向かわせて、自身は校舎玄関に

向かって走っていく。

——雄英校舎正面玄関——

マスコミ「オールマイト出してくださいよ！いるんでしょ!」「一言でいいので!!」

(プ)マイク『いないっつーの！非番だつて!』

相澤「一言もらったら二言欲しがるのがアンタらだ」

(プ)マイク『不法侵入だこりやもう敵だぜ?ぶっ飛ばしていいか?』
相澤「やめろマイク!あることないこと書かれるぞ!警察の到着を待とう」

マスコミ「あつ雄英の生徒!」「えつどこどこ!」「取材取材!」「カメラ回して!」

「そこの君ちよつとインタビューに答えてくれない!」「一言お願い!」

相澤 (なに生徒だと!?)

マスコミは雄英の生徒を見つけ取材しようと動き出すが

クラフト(召喚!デクーカスタム!)…《シュインシュインシュイン…》…行けデクーカスタム!盾を前面

に出しマスコミを包囲!

デクー(カ) リョウカイ 

全長約170cmのデューカスタム(50体)がマスコミに向かつて動き出す。

ドガシャシャシャッ!!

マスコミ「ちよっ!?なにこのロボット!?」「なんだよこれ!?」「えっ 囲まれた!?!」

雄英の敷地内に侵入したマスコミは盾を持ったデューカスタムに包围される

クラフト「えーマスコミの皆さまー警察が来るまでそこで大人しくしててくださいーい!」

マスコミ「はあっ!?何の権限があつてこんなことしてんだよ!!」「ちよっど早くこのロボットだけ

てよ!!」「我々には報道の自由があつてだなー…」「そーだそーだ!!」

クラフト「不法侵入に退去勧告に従わず退去せずに不退去、その他にも校門前の道に陣取つた

りなど…取材の為なら法を犯していいと?」

マスコミ「うっ…」「そっそれは…」「ガキが生意気言つてんじゃねえ!こっちは仕事なんだよ!!」

「おい何言つてんだあんた!?!」「そーだ!こっちはもう2日も張つてんだぞ!」「ちよっ!?!」

クラフト「ふーん…じゃあこうするわ」
マスコミ「はっ?」「なにを?」

クラフトはそう言うのとズボンのポケットからスマホを取り出し写真を撮り始める。

カシャカシャカシャカシャカシャ!!

マスコミ「おっおい何写真撮つてんだよ!?!」「勝手に撮つてんじゃねえよ!!」「そーよープライバ

シーの侵害よ!」

クラフト「『雄英の敷地内にマスコミが不法侵入して警報作動!マジ迷惑』つと…書き込み終わり」

マスコミ「おっおい…」「まさかネットに書き込んだのか!?!」「ちよっ

！これ見て!!」「なっ!？」

ネット 『マスコミ終わったなww』『迷惑しか作れんのか?』『これマジなの?』

『現雄英生だけどマジだよ』『よかったな特ダネだぞ!』『拡散拡散w』

ネットではマスコミに対する非難のコメントが嵐のようになっっていた。

相澤 「機神…」

クラフト 「相澤先生」

相澤 「いろいろ助かったがこういう事はあまりするな。恨みを買うぞ」

クラフト 「ういつす…」

(プ)マイク 『そうだぜえー俺たちはお前たち生徒を守らなきゃいけないからな!』

クラフト 「以後気を付けます…山田先生!」

(プ)マイク 『NOー!プレゼントマイクって呼んで!山田はダメ!』

注意を受けプレゼントマイクをからかっていると職員室に飛ばしたアキレスデュードが

帰ってきた。

相澤 「?…機神それはどこに飛ばしていた?」

クラフト 「えっ?…ああ、なんとなく嫌な感じがしたんで学校内に飛ばしていたんです」

相澤 「…そのロボットは画像か映像が記録できるのか?」

クラフト 「ええ出来ますよ…(あくやっぱり…)相澤先生これ見てください」スッ…

相澤 「ああ?…これは!？」

アキレスデュードが記録した映像データを端末で確認する。するとそこには職員室に頭

が黒いモヤの男がおり何やら物色している姿が映っていた。

(プ)マイク 『おいおいこれはあ…』

相澤 「機神この映像データ貰うぞ」

クラフト 「あつはい了解つす」

その後通報を受けた警察が到着しマスコミは撤退したが、クラフトがネットに投稿した

内容が瞬く間に全国に広まりマスコミは国民から大バッシングを受けたのであった。

ちなみに食堂の混乱は飯田が原作通りに非常口になって治めていた。

——A組教室——

クラフト 「では昼休憩にあんなことがありました。が委員長選挙の結果を発表したいと思います！」

芦戸 「イエーイ!!」

葉隠 「委員長は誰だー! (笑)」

クラフト 「よーし! じゃあ早速発表するぞ! でも最初は副委員長からな!」

葉隠 「おお! ドキドキだあ!」

クラフト 「では……結果発表ー!!! (某芸人風)」

瀬呂 「その言い方ズルすぎだろw」

切島 「あっはっはっはっはっはっはっw!!」

クラフト 「……八百万やおよろず百ーー!!」

クラス 「!!! おおーー!!!」

八百万 「ちよつと悔しいですわ」

クラフト 「いやゝ票の差は結構僅差だったよ!」

葉隠 「おおー! そうなんだ!」

爆豪 「おいハゲ野郎…俺は何票だ…?」

爆豪が敵ライバル顔負けの形相でクラフトに問いかける。

クラフト 「0票だ…よし委員長を発表するぞー!」

爆豪 「あ×あ×ん!? なんだと!」

クラフト 「栄えあるA組のクラス委員長は…ドゥルルルルルルルルルルルル…」

爆豪 「無視かコラアツ!」

瀬呂 「セルフドラマやめろやw!!」

上鳴 「あっはははははっ!!」

クラフト 「……………」

クラス 「……………」ドキドキ

クラフト 「……………」飯田いいだ天哉てんや……!!!」

飯田 「うおー……!!!」ガタンツ…シユバツ!

クラス 「……………」!!!」

飯田が嬉しさのあまり勢いよく立ち両腕を上げる。

飯田 「投票してくれた人ありがとう……!!!この飯田天哉!選ばれたからには全力でやらせて

もらう!!」

切島 「うおお!漢らしくて良いぜ飯田!」

瀬呂 「ようやく決まったか(笑)」

峰田 「くそおおお…機神さえいなければ今頃オイラが…」

クラフト 「それはないだろw」

障子 「うむ…俺もそう思う」

常闇 「同じく…」

瀬呂 「峰田はないだろw」

峰田 「うるせええええ!!」

緑谷 「あはは…(苦笑)」

こうしてA組の委員長は飯田。副委員長は八百万に決まったのであった。そして途方も

ない悪意は静かに足音を立てずに近づいていた。

第18話 レスキューだ！USJだ！…なに!? 敵だと!?

——マスコミ侵入事件翌日——

——早朝・某市内——

ヒーロー飽和社会であっても犯罪というものは場所と時間を選ばずに発生する。

(僧) ヘッドギア「追いかけてきたらこの裕福そうな家族をぶっ壊すからな！いいか！俺を追うんじや

ねえぞ!!」

(マ) レデイ「くっ…連続強盗殺人犯『僧坊ヘッドギア』!!」

(シ) カムイ「強い上に姑息!」

人質 「助けてえヒーロー!!せめて娘だけでもお!!!」

他ヒーロー「くそっ!凶体デカいくせに素早く動きやがる!!」

(僧) ヘッドギア「このまま逃げさせてもらうぜ!!」へいへいへい

このまま逃げられるかと思つたがヘッドギアの後方から凄まじいスピードで接近する人

影が現れる。

(オ) マイト「もう大丈夫だファミリィ!!」

「MISSOURI SMASH!!!」カンッ!!

(僧) ヘッドギア「カツ…ハ…!?」ドサツ…

(オ) マイト「なぜって?…私が通勤がてら来た!!」

強烈なスマッシュによつて一撃で気絶させ事件を解決するオールマイト。

野次馬 「わああ!オールマイトだ!!」「すげー!秒で解決だ!!」

(マ) レデイ「ありがたいけど…」

(シ) カムイ「我ら廃業してしまふ…」

警察 「助かりました!我々も手が出せずにはいたものですから…」

(オ) マイト「協力できてなにより!では遅刻するとヤバいんでそれ

じゃ！」

通行人 「きやあああ！ひき逃げー!!」

(オ) マイト「《ピク…》…んんん…遅刻するとヤバいん…だけどなー！ー!!」ドヒューーン!!

そう理解しながらも現場に向かうオールマイト。

(オ) マイト「…：機神少年のおかげで私のヒーロー活動に支障はない…むしろ今までより良いくらいだ。しかし緑谷少年に個性を譲渡したため少しずつ力が弱まってきている…それに

言だと爆豪少年は受け取ったよ

うだし緑谷少年には釘を刺しておいたが…考えてみればまだ15歳の少年だ、私がしつ

かりせねば！緑谷少年を立派に見届けるまでは…）頑張らないとな！」ドンツ！

オールマイトは緑谷の事を思案しながら片手でひき逃げ犯の車を止める。

通行人 「隣町で立て籠り事件が起きたってよ！」

(オ) マイト「ムムツ!!」(汗)「

遅刻しそうだが事件が発生したため現場に向かってしまおうオールマイトであった。

——雄英高校・A組教室——

相澤 「今日のヒーロー基礎学は俺とオールマイトともう1人の3人体制で見ることになった。あ

と今回はA組のみだ」

緑谷 (なった？特例なのかな…?)

クラフト(3人体制ということは今日だな…個性をフルに使えば捕まえることはできると思う

が…：AF^{太ボス}Oがそれを察知して登場なんてことも予想できるとは状況に合わせて動くのが

いいのかな)

瀬呂 「はーい何やるんですかー?」

相澤 「災害水難なんでもござれ：人命救助訓練だ」

上鳴 「レスキュー：今回も大変そうだなー」

芦戸 「確かにねー!」

切島 「バツカお前これぞヒーローの本文だぜ!腕が鳴るぜ!」

蛙吹 「水難なら私の独壇場だわケロケロ!」

相澤 「おい：まだ途中……」ギロ……

クラス 「「!!」「」」ビシッ!

睨まれたことにより静かになるクラス。

相澤 「今回コスチュームの着用は各自の判断に任せる。コスチュームによっては活動の際に動きが限定される物があるからな。今回の訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗っ

ていく。以上早くしろよ」

飯田 「先生!準備する前に質問よろしいでしょうか!」

相澤 「なんだ早く言え……」

飯田 「なぜ今回B組とは一緒に訓練しないのでしょうか!」

相澤 「ああ：それはこっちのカリキュラムの調整ミスだ。今年からA組とB組のヒーロー基礎

は初期から合同でやることになったが、今までは別々でしたからカリキュラムを

調整したんだ。だがそれにミスがあったからその帳尻合わせで今回はA組だけだ」

飯田 「なるほど!ありがとうございます!!」

相澤 「いいから早く準備しろよ」

クラス 「「!」「はいい!」「」」

——バス停前——

麗日 「あれデクくん体操服?コスチュームどしたん?」

緑谷 「前回の戦闘訓練でボロボロになっちゃったからサポート会社に出して今は修復待ちなんだ」

麗日 「確かに右袖なんかなくなってたもんね！どんな風に直つてくるんだろうね！カッコよく

なつて返つてくるのかな？」

緑谷 「どつどうなんだろうね／＼!? (ちっ近い／＼)」

飯田 「さあ皆！スムーズに座れるように番号順に並ぼう!!」
ピツピツピツ!

緑谷 「飯田くん…フルスロットル…(汗)」

クラフト 「笛はどこから持ってきたんだ？」

飯田の全力進行でバスに乗り込むA組。しかし飯田の全力進行は…

——バス車内——

飯田 「こういうタイプだった！くそう!!」

芦戸 「意味なかったな」

全力で空振りしたのであった。

蛙吹 「わたし思ったことは何でも言っちゃうの…緑谷ちゃん」

緑谷 「はっはい!?なに蛙吹さん!?!」

蛙吹 「梅雨ちゃんと呼んで?…あなたの個性オールマイトと似てる」

緑谷 「えっ?!?そそそそうかな!?でも僕の個性はそのつえーと…」

自分の秘密の核心を突く指摘に動揺しまくる緑谷。

切島 「待てよ梅雨ちゃん、オールマイトは怪我しないぜ?似て非なるあれだぜ?だけど増強型の

個性は派手で出来る事が多いからいいな!俺の個性は対人じゃ強いけど地味目だから

な」

緑谷 「そんなことないよ、僕はプロでも十分に通用する個性だと思うよ?」

切島 「プロなー！だけどヒーローも人気商売などこもあるぜ
!?!」

青山 「僕のネビルレーザーは派手さも強さもあってプロ並み
☆」

芦戸 「でもお腹壊しちゃうのはヨクナイね！」

青山 「……☆」

痛いところを言われてしまう青山。

切島 「でも派手で強えと言ったらやっぱ轟とか爆豪だよなー！」

上鳴 「だけど断トツなのは機神だよなー！なあなあお前の個性って何なの？」

耳郎 （確かに…付き合っているのにクラフトの個性のこと全然
知らない……気になる…）

クラフト 「……秘密で」

葉隠 「えー気になるー！」

クラフト 「まあいざれ話すよ…いざれね？」

葉隠 「あつ言ったね？絶対だよ!?!」

クラフトが自身の個性について話す日はいつになるのか？それは意外に早く来るのかも
しれない。

蛙吹 「機神ちゃんの個性の事はまた今度として…さっきの話だ
けど爆豪ちゃんは切れてばっか

で人気でなさそうだわ」

爆豪 「ああッ!?何だと蛙女!?出すわコラ!!」

蛙吹 「ほら」

上鳴 「この付き合いの浅さでクソを下水で煮込んだような性格
格って認識されてんなんてすげえ

よ?..おわかり?」

爆豪 「テメエのボキャブラリーなんだ!?!ぶち殺すぞ!!」

クラフト 「爆豪」

爆豪 「ああ、何だよ?」

クラフト 「カルシウム足りてるか?今度ヨーグ○ット買って来てや

ろうか？」

火が燃えている所に油を追加するクラフト。

爆豪 「テメエ喧嘩売ってんのか!!?!んなもん要らんわ!!」

上鳴 「ぶふっw爆豪貰つとけよw」

瀬呂 「あっはっはっはっはっw」

クラフト 「はっ!爆豪お前もしかして…」

爆豪 「っんだよ!?!」

クラフト 「レモン味の方がよかったか?」(真顔)

油を追加するどころか火薬を追加するクラフト。

耳郎 「ぶふっ——w!!」

瀬呂 「あひゃひゃひゃひゃっw!」

上鳴 「あっはっはっはっはっw!機神お前レモン味ってw!」

爆豪 「ぶっつ殺す!!」

蛙吹 「レモン味美味しいわよ?爆豪ちゃん」

爆豪 「そういう問題じゃねえんだよ!!」

緑谷 (かっちゃんがいじられている!?!信じられない光景だ!さすが雄英…)

すが雄英…)

相澤 「もう着くぞ!いい加減にしとけ!!」

クラス 「「「「はいつ!!」「「「「」

緩んでいた雰囲気引き締められバスはUSJに到着す

る。

——USJ出入り口付近——

13号 「皆さんようこそ!水難事故・土砂災害・地震・火事…e

t c. ……ここはあらゆる事故や災

害を想定して僕が作った演習場…その名も嘘の災害や事

故ルーム!USJです!」

クラス ((…(意味は違うけどUSJだった)))

クラス 「だけどやっぱでっけえー!」「ワクワクするー!」

緑谷 「スペースヒーロー13号だ!災害救助で活躍している紳

士のなヒーロー!」

麗日 「わあー!私13号すきなわー!」

某テーマパークのような施設に興奮するA組面々。そして相澤はオールマイトがいない

事を13号に問いかける。

相澤 「う……………おい13号、オールマイトはどうした？ここで待ち合わせのはずだが？」

13号 「いやそれが……………どうやら救助活動や敵が発生しては駆けつけているうちにどうやら埼玉県まで行ってしまつたらしくて……………」

相澤 「……………はっ？……………ということは今は埼玉県にいるのか？」

13号 「現在こちらに向かっているそうです……………30分くらいで着くと先ほど連絡がありました」

相澤 「ヒーローとしては大変立派だが教師としては落第点だな……………(まあ念のための警戒態勢……………)……………仕方ない始めるか」

13号 「えー演習を始める前に小言を1つ2つ……………3つ……………」

クラス ((……………(増える……………)))

13号が個性についての話をする。それは個性の危険性、自身が持っている力、そ

してその個性をどのように人命に使うかを学んでほしいというものだった。

飯田 「ブラーボ——！」

クラス 「さすが13号——」「めっちゃ心にきた——！」

相澤 「それじゃまずは……………(なんだ?)」

授業を始めようとしたら広場に黒い渦のようなものが見える。

ズ……………ズ……………ズ……………ズ……………ズ……………

相澤 「一塊になって動くな!!」

クラス 「えっ?」「なに?」「先生?」

相澤 「13号生徒を守れ——！」

クラフト (来たか……………)

切島 「なんだありや?また入試ん時みたいに始まつてるパターン

ンか?」

相澤 「動くな!あれは敵だ!!」

????? 「イレイザーヘッドに13号ですか…先日頂いたカリキュラムにはオールマイトもいるは

ず…何か変更でもあったのでしょうか?」

????? 「どこだよ…せつかくこんなに連れてきたのに…平和の象徴オールマイト…子供を殺せ

ばくるのかなあ…?」

サイラン 敵の突然の襲撃に驚くA組。

上鳴 「はあっ敵ん?!アホだろ!?!ここヒーローの学校だぞ!?!」

八百万 「先生!侵入者用のセンサーは!?!」

13号 「もちろんありますが…」

轟 「ここだけなのか学校の別の場所もなのか…どっちにしろセンサーが反応しねえってこと

は、敵にそういうことが出来る個性持ちがいるってことだ。しかもここは校舎から離れ

ていて向こうはこっちの行動の情報を手に入れての襲撃。

バカだがアホじゃねえ…少な

くとも何らかの目的があって用意周到に画策された奇襲だ」

相澤 「とにかく13号避難開始しろ!学校にも連絡を試せ!侵入者用のセンサーが反応しないとい

うことは妨害系の個性が相手にいる可能性がある!上鳴

!お前の個性でも試せ!」

上鳴 「っス…」

緑谷 「先生はどうするんですか!?まさか1人であの数を相手にするんですか!?イレイザーヘッ

ドの戦法は個性を消してからの捕縛のはず!正面戦闘は

…!」

相澤 「緑谷…芸だけじゃヒーローは務まらない」

相澤が広場に飛び出そうとしたらそこにクラフトが階段

前に歩いてき立ち止まる。

緑谷 「あれ機神くん…?」

相澤 「機神何してる? お前も早く避難しr…」

クラフト 「氷河…時代…」

パキパキ…バキインツ!!!

相澤 「なっ!?!」

クラフト 「一先ず動きを封じる…えーとこの後はどうすれば…」

切島 「やっぱすげえなアイツ…」

瀬呂 「寒みい〜」

轟 「……………」

ヒエヒエの能力を発動させ一部を除きUSJの地面全体を凍らせ侵入してきた敵の動きを封じるクラフト。

敵 「なんだよこれ!?!」「いつ!?!痛えっ!!」「あつ足が!?!」

死柄木 「おい黒霧! なんだよこれはっ!?!」

黒霧 「死柄木弔! 私にも何が起きたか…!?!」

死柄木 「クソ…メンドくさいな…」パキパキ…

死柄木はそう言いながら自身の個性を使ってうまく氷の拘束から抜ける。

クラフト 「先生、今のうちに避難を…先生?」

相澤 「…:…ああそうだな13号、避難を始めろ!」

13号 「はい! 皆さん早くこちらへ!」

クラス 「「「はっはっはっ!」」」

全員が入り口に向かって小走りで移動を始める。がその途中で黒い霧が現れる。

黒霧 「させませんよ! 初めまして我々は敵連合…せんえつながらこの度雄英高校に入らせて頂

いたのは…オールマイトに息絶えて頂こうかと思いきや…:…まさか侵入した瞬間に氷漬けにされるとは思いもしませんでした…」

緑谷 (はっ!?!)

クラス 「[[「!?」]]」

ザイラン
敵が発した言葉に動揺が走る。だがクラフトがその空気を緩和するように話し出す。

クラフト 「こっちも敵が侵入してくるなんて思わなかったよ」

黒霧 「……もしや先ほどの氷は貴方の仕業ですか？」

クラフト 「そうだと云ったら？」

黒霧 「そうですか……いやはや驚きました最近の子供はこんなにも強いものなんですか？」

クラス 「((（いやコイツは別です…))」

クラフト 「いや〜それほどでは〜／＼」

峰田 「なんでお前は照れてんだよ!!怒ってるんだよ!! (怒)」

クラフト 「そうなのか!それは気付かなかった!!」 すっ呆け

峰田 「テメエこんな状況でよくふざけてられるな!!」

クラフト 「こんな状況だからこそだよ峰田」

峰田 「どういうことだよ!? (怒)」

クラフト 「そのほうが冷静でいられるから」

峰田 「!?…」

黒霧 「お話は終わりましたか?終わりましたのなら…」

クラフト 「終わったけど避難させてもらおうぞ! (ピカピカの能力)」

ピシユン!

ドゴオオオン!!!

ピカピカの能力のビームで出入り口を破壊するクラフト。

黒霧 「強力な攻撃だ…まさか2つの個性を持っているのですか?…しかし一体どこを攻撃しているのですか?」

「…ですか?」

クラフト 「これでいいんだよ…Room! 《ブウウン!》…シヤンブルズ!」 シュンツ!

クラス 「えっここは…?」「バスがあるから…」「バスから降りた場所…?」

相澤 「……全員いるか!?!」

耳郎 「(さっきの青いサークル…前に見たことある…あれ?)…」

クラフトは!？」

クラス 「えっ?」「機神なら…」「機神なら峰田の横に…あれ?」「機神いなくね?」

相澤 「…まさか!?!」ダッ!

クラス 「!?…」「相澤先生!?!」「どこに行くんですか!?!」

相澤 「お前らはそこにいろ!13号は学校に連絡!俺はバカを連れてくるため戻る!!」ダダダッ!

クラフトはバス乗り場にあるバス停ポールと自分以外のクラスメイトと教師2人の場所

を入れ替える。そして相澤はバカを助けるため急いでU SJ内に戻る

黒霧 「なっ!?!…」

クラフト 「そんなにビックリしてどうした?」

黒霧 「……………これも貴方の仕業ですか?氷にレーザーに物体と物体の位置を入れ替える個性です

か?まさか個性を3つ持っているとは……………1つ聞いていいですか?」

クラフト 「なんだよ?」

黒霧 「なぜあなたは残ったのですか?」

クラフト 「誰かが残らなきゃ足止め出来ないだろ?」

黒霧 「あなた1人で事足りると?」

クラフト 「まあ自信はあるね」

黒霧 「だそうですよ?死柄木弔…」ユラ…

クラフト 「おっ?」クルッ

後ろを振り向くと死柄木と他の敵達ヴァイランが氷の拘束から抜け出し広場から階段を上ってきた

ていた。ちなみにいつまにか黒霧は死柄木の隣に移動していた。

死柄木 「いきなり足を凍らせやがって…おいお前ら出番だぞ」

敵ヴァイラン 「クソガキが!ぶっ殺してやる!!」「さっきの借りは100倍に返させてやるぜ!!」

「ちよつと強いからつて舐めやがつて!!」

ヴァイラン
敵達がクラフトを取り囲む。

死柄木 「ハハハ…いくら個性が強いからつてこの数は無理なんじゃないか?」

クラフト 「兵力差でも勝つてるさ(シロシロの能力&LBX)」

ガシャシャン…

ヴァイラン
敵 「なんだ?」「コイツの体なんか変だぞ!」

ポポポポポン!…ヒュウウウウウ…ビュウンツ!!

ヴァイラン
敵 「うえ!」「なっ!」「急にでかく!」

ドゴオオオオン!

ヴァイラン
敵 「二二ぐあああああああああああああ!!」「二二」

クラフトはシロシロの能力を発動させ、次にLBXの個性を使つて内部にデクーを作り出す。

そして取り囲んでいる敵に向かつて大砲を使つて砲

撃をする。囲んでいた敵は全

ヴァイラン
員その砲撃が直撃し倒れてしまう。

死柄木 「チートかよ…イラつくなあ…」

黒霧 「死柄木弔…」

死柄木 「おい黒霧…なんなんだよコイツ…こんな奴がいるなんて聞いてないぞ?しかもコイツ以

外逃げられたからプロもじきに来る…こんなに早くゲムオーバーになるなんてどうい

うことだよ…」イライラ…

黒霧 「落ち着いてください死柄木弔」

死柄木 「クソ…脳無をつかう」

黒霧 「よろしいので?」

死柄木 「いい、あのガキはムカつく!アイツは殺さないと気が収まらない!!」

黒霧 「分かりました」

死柄木 「いけ…脳無」

脳無 「…」ズシン…

体躯がオールマイイト並の黒い体で、鳥の様に鋭く噛まれたら大怪我しそうな口と歯。そ

して何より特徴的なのは脳がむき出しになっている頭。その姿は人の形をしているが

10人中10人が化け物と答えるだろう。そしてその化け物がクラフトに狙いを定め攻撃

を仕掛ける。

脳無 「クアアアアアッ!!!」 ドドドドドドッ!

クラフト「うおっ?!子供にあんなの使ってくるかよ!?(まあ精神的年齢は一応20代だけど(笑)スナ

スナの能力!)」

脳無 「……」ズンッ!ブオオッ!!

ドゴオオオン!

脳無はすさまじい速さでクラフトの目の前まで走ってき、地面に亀裂が入るまで足を踏

み込み右拳を振り下ろす。その拳は地面に直撃し亀裂も先ほどより大きく入る。

死柄木 「ハハハ!……さすがにこれは死んだんじゃないか?」

相澤 「機神ー!!」

死柄木 「おっ?ちよつと遅かったなイレイザー(笑)お前の大事な生徒はたったいま死んだぜ!」

相澤 「てめえ……!?!」ギリッ……

だが脳無の攻撃が当たる前にスナスナの能力を発動していたためクラフトは……

クラフト「オペオペ&ブキブキの能力)相手が悪かったな!R o o m!!」ブウウウウン!

死柄木 「なっ!?!」

当然生きている。

クラフト「ラジオナイフ!!」ズバババババツ!!

オペオペの能力とブキブキの能力で脳無の頭、胴体、腕、脚

を切り離し行動不能にする

クラフト。

相澤 「おい機神！」

クラフト 「相澤先生！」 タツタツタ：

出入り口にクラフトを助ける為に駆け付けた相澤の元に駆け寄るクラフト。

相澤 「ケガはないか!？」

クラフト 「ハッハッハッ！この通り五体満足の無傷でございます！」 ブンブンッ！

腕を振り回しながら無事であることをアピールする。

相澤 「そうか…とりあえず事が終わったら反省文書いてもらうからな」

クラフト 「そっそんな!？」 ガーン！

相澤 「当たり前だ」

クラフト 「いつ…1枚すか？」

相澤 「20枚だ」

クラフト 「おっふ…」ズーン…

中々の枚数に気が滅入ってしまうクラフトであった。

相澤 「ところで機神…あの黒い奴は生きているのか？」

クラフト 「え？…ああはい、生きてますよ俺の個性で切って戦闘不能にしました」

相澤 「なるほど…ならお前は下がってクラスと合流しろ。すぐに他のヒーローも来る」

クラフト 「わかりました…つとその前にアイツを回収つと！」

クラフトはそう言うといといとの能力でバラバラにした脳無を自分の元に引き寄せ、ド

アドアの能力で大気にドアを作りその内部（亜空間）に収納する。

黒霧 「なっ!?!貴様!!」

死柄木 「おいおい何なんだよあのガキは…対オールマイト用に作った脳無が全く歯が立たな

いじやないか……黒霧、連れてきた奴らをここに集める」

黒霧 「死柄木弔……ここは引いた方が……」

死柄木 「はやくしろ……」

黒霧 「分かりました……」ズオオオ……

黒霧がワープゲートを広げるとUSJ内にいた敵サイラン続々と

集結する。

相澤 「ちっ……よくもこんなに集めたもんだな……」

死柄木 「行けお前ら……」

敵サイラン 「この数はしのげねえだろ!!」「おい!外に女がいるぞ!」「お

いおい結構可愛いじゃん!」

「死んどけやヒーロー!」「正義気取り野郎が覚悟しろやあ

!!」「可愛い女は可愛がってや

るぜ!」

大量の敵がサイラン一斉に相澤とクラフトに攻撃しようとしたそ

のとき、後方から爆発音が

徐々に近づき大きくなる。

爆豪 「このクソ敵どもがああああ!!」

ボオオオオオン!!!

敵サイラン 「「ぎやあああああ!!」「「なんだこの爆発は!」」

クラフト 「爆豪!」

相澤 「バカ野郎!なんで来た!」

爆豪 「あ×あ×!?!俺はNo.1ヒーローになる男だ!この程度の敵サイラン

にビビッてちや意味ねえんだよ!そ

れにハゲ野郎に借りは作りたくねえしな!!」

クラフト「ハゲ野郎じゃないぞボムヘッド。あと先生!下がるのは

無理そうです!」

爆豪 「誰がボムヘッドだゴリア!」

相澤 「ちっ……後で絶対反省文だからな!」

敵サイラン 「この程度だとお!?!舐めやがってクソガキがああ!!」ダダダッ

!

「命乞いするなら今のうちだぞ!!」ダダダッ!

爆豪 「複数で仕掛けている時点で弱いと言ってるようなもんだろうがああ!!」ボオオオン!!

敵 「ぐああああああっ!!」

爆豪が加わったことによりUSJ出入り口に付近は乱戦になる。だが乱戦になったことに

より隙が生まれ、相澤・クラフト・爆豪の防衛ラインを敵がすり抜けA組の方へ向かってしまう。

相澤 「しまった!」

敵 「よそ見は禁物だぜえヒーロー!!」

クラフト 「お前がな!!」バキイツ!

敵 「ハボオ!」ズザアア!

相澤 「機神助かった!だが何人か抜けたぞ!」

クラフト 「俺が行きま!」

クラフトが通り抜けた敵を倒しに行こうとしたが…

切島 「心配はないぜ機神!!オラア!!」ドゴオ!!

耳郎 「それより目の前に集中しな!」キイイイイイイン!!

緑谷 「デラウエア…スマツ…シュ!!」ブオオオオ!!

常闇 「黒影!」

(ダ) シャドウ 「アイヨ!」

上鳴 「ウエくくイ!」Bzzzz!!

轟 「……」パキパキパキイン!

峰田 「うあああああ!?!こつち来るんじやねえええ!!」ポポポポーイ!

バス停ポール付近に避難していたA組が自分たちに向かって来ていた敵を迎撃してお

り、敵達は次々と倒されていた。

敵 「ぐおお!」「ぐああああ!?!耳がああ!」「アッ
チイイイ!!」

「何だコイツh…ぐあ!!」「ひい!?!」「アバびびびびびび
!?!」「冷てええ…」

「あつ足が…」「何だこれ!?取れねえ!?」「おいくつ付くなよ!?」「だああ!動けねえ!!」

蛙吹 「こっちは心配ないわ機神ちゃん!あと数分もしないうちに他の先生達が到着するわ!」

クラフト 「了解梅雨ちゃん!…だそうです先生!」

相澤 「分かった!もう少しの辛抱だ…気張れよ」

爆豪 「その前に全員ぶっ飛ばしてやらあ!!」

クラフト 「ハツハツハツ!俺にかかれ!もう大丈夫だみんな!!」
かぶった…」ズーン…

クラフトが言葉を発しているとそれを遮るように大きな声が響く。

クラス 「この声は!」「**「オールマイト!!」**」

ヒユウウウウ…ズウン!!

オールマイトがA組と敵の間に勢いよく飛び降りる。

(オ) マイト 「なぜって?…私が来た!!」

クラス 「**「「オールマイトオオオ!!」**」

(オ) マイト 「みんな怪我はないかい!」

飯田 「我々は大丈夫です!ですがUSJ内部で相澤先生、機神くん、爆豪くんがここより多くの

ライラン敵と戦っています!」

(オ) マイト 「なんと!私が遅れてしまったばかりに!!…」

ライラン敵 「背中がガラ空きだぜ!」「ここにくたばれやあ!!」「死ねやあ

あ!!」

オールマイトの後方にいた敵が攻撃を仕掛けるが…

(オ) マイト 「**TEXAS SMASH!!**」カカカカン!!

ライラン敵 「がっ!」「ぐほっ!」「ぐう!」「へぼっ!」バタバタバタバタ

…

クラス 「すげえ…」「圧倒的だな…」「早すぎてみえねえ…」

轟 (これがプロか…)

オールマイトはそのままUSJ内部に入る。

(オ) マイト 「3人とも!!」

爆豪 「オールマイト!」

相澤 「遅刻ですよオールマイト」

クラフト 「どこで油を売っていたんですか?」

(オ) マイト 「ハッハッハッ! すまない3人とも! だが無事で安心したよ!!」

安堵するオールマイト。

死柄木 「でたなオールマイト…平和の象徴…社会的ゴミがあ…!」

(オ) マイト 「!…君が主犯かな? なぜこのような事をしたんだ?」

死柄木 「うるさいよ社会のゴミが…俺はな怒ってるんだオールマイト…そのチートが…他の奴

を守る為に俺たちに攻撃をしてきた…他が他を守る為に振るう暴力は美談になる。そう

だろヒーロー? 同じ暴力でも今の世の中は、ヒーローと敵ライアンでカテゴライズ

されて善し悪しが決まる…お前は平和の象徴と呼ばれている、だが所詮は抑圧の為の暴

力装置だ。暴力は暴力しか生まない、お前を殺すことで世に知らしめそうとしたんだ」

(オ) マイト 「むちやくちやだな…そういう思想犯の眼は静かに燃ゆるものだ。自分が楽しみたいだ

けなんじゃないか?」

死柄木 「バレるのはや…まあそれもそのガキのせいであらうグチャグチャになったけどな…」

黒霧 「悔しいですが我々はここで引かせてもらいます」

(オ) マイト 「そうはさせない! ここで君らを捕まえる!」 ザツ…
オールマイトが体勢を構えたその時…

死柄木 「あ…これはまずいな黒霧はや 《ズドツ!》…痛つ!」

黒霧 「死柄木吊!」

クラフト 「この攻撃は…」

(オ) マイト 「どうやら到着したみたいだね」

死柄木の肩に銃弾が撃ち込まれる。外には連絡を受けた
雄英教師が到着しており、先ほ

どの攻撃はスナイプによるものだった。

バアン！バアン！バアン！バアン！

死柄木 「ぐっ!？」

黒霧 「死柄木弔！」バツ！

黒霧が黒いモヤを広げ銃弾を防ぎつつワープゲートを広
げる。

死柄木 「今度は殺すぞ！平和の象徴オールマイト!!」ズズズ：

(オ) マイト 「まで…SHIT！」

オールマイトが死柄木を捕まえようとするが、まだ多く
残っていた敵に阻まれ取り逃

がしてしまう。その後、残っていた敵は全員捕まえられ警
察に連行された。襲撃を受

けたA組はクラフトが素早く避難させたため全員大した
怪我もなく無事に終わる。

——とあるBAR——

ズズズズズ：

死柄木 「っ痛え…両腕両足撃たれた…完敗だ…。なんなんだあの
ガキは！あんなガキがいるなん

て聞いてない！…話が違どうぞ先生！」

死柄木が設置してあるモニターに話しかけると声が返っ
てくる。

先生 『違わないよ…と言いたいがどういう事が話してくれるか
い?』

黒霧 「複数の個性を持つ子供がいます…その子供に狂わされ
ました」

先生 『へえ…まあだけど見通しが甘すぎたかもね』
???? 『うむ…舐めすぎたな、^{サイラン}敵連合なんちうチープな名前でもかっ
たわい。ところでワシと

先生の共作脳無は回収してないのか?』

黒霧 「申し訳ありません…回収の方はできず…」

???? 『なにっ!』

黒霧 「その子供に捕らえられてしまいました」

???? 『せっかくオールマイト並のパワーにしたのに…』

先生 『まあ仕方ないか…残念…』

死柄木 「全部あのがきのせいだ!くそ!…くそ!…」

先生 『悔やんでも仕方ない…今回だって決して無駄ではなかつ
たはずだ。精銳を集めよう、

ゆっくり時間をかけて!我々は自由に動けない!だから
君のような人シンボルが必要なん

だ。死柄木弔!次こそ君という恐怖を世に知らしめろ!!』
巨大な悪はさらなる行動を起こさんと力を蓄え始めよう
とする。

——襲撃その後——

塚内警部 「18…19…20…21…全員無事…とりあえず君たち
生徒は教室に戻ってもらうよ、すぐ事

情聴取というわけにもいかないからね」

スナイプ 「全くなんでことだ…」

(ミ) ナイト 「これだけ派手に侵入されて逃げられちゃうなんて」

根津校長 「完全に虚をつかれたね。セキュリティの大幅強化が必要
だね!」

(ミ) ナイト 「ワープなんて個性ただでさえものすごく希少なにより
にもよって敵^{サイラン}側にいるなん

て…」

塚内警部 「校長先生、念のため校内を隅まで見たいのですが」

根津校長 「ああもちろん!一部じゃとやかく言われているが権限は

警察の方が上さ！捜査は君たち

の分野！よろしく頼むよー！」

塚内警部 「ありがとうございます」

塚内警部が校内を捜査しようとして動こうとしているとクラフトが呼び止める。

クラフト 「塚内警部！」

塚内警部 「おや機神くん、何か用かな？」

クラフト 「はい、今回の襲撃の一応証拠でいいのかな？渡しておこうと思ひまして」

塚内警部 「証拠？」

クラフトはそう言うのとドアドアの能力を発動させ脳無を取り出す。ちなみに体はちゃん
とくつつけた状態である。

塚内警部 「これは!？」

クラフト 「襲撃犯の主犯は脳無と言っていました」

塚内警部 「脳無…わかった、ありがとうございます。おい」

警官 「はっ！」

クラフトが捕まえた脳無は警官に引き渡され連行されていった。

クラフト 「じゃあ俺はこれで！」

塚内警部 「ああ、事情聴取のときはよろしくね」

クラフト 「わかりました」

相澤 「よし…じゃあこの後は反省文を書いてもらおうぞ」 シュルツギチツ！

クラフト 「あわわわわわ…相澤先生」

相澤 「安心しろ校舎まで俺が連れてってやる。疲れているだろうから」

クラフト 「先生大丈夫です！全然元気です！なので…」

相澤 「そうか…それだけ元気なら書けそうだな」ズルズル…

塚内警部 「ははは（頑張れよ機神くん）…（苦笑）」

そう言いながら捕縛布を巻き付けたクラフトを引きずり

ながら歩い始める相澤。

クラフト「先生！20枚はさすがに多いです！減刑を！」ジタバタ！

相澤 「そうだな……一応お前のおかげで全員大した怪我もなく済んだしな……」

クラフト「じゃあ……」

相澤 「10枚にしてやろう」

クラフト「……」チーン……

真つ白になったクラフトを見た切島、瀬呂、上鳴は爆笑しており、他の皆は頑張れとしか

か言えなかった。だが少しかわいそうと思っただのか耳郎はクラフトに近づきしやがむ。

耳郎 「クラフト……」スツ……

クラフト「うえい……」

耳郎 「アンタが危ない事したことにウチも怒ってるんだよ……」

クラフト「返す言葉ありません……」

耳郎 「だけどアンタのおかげで皆一応ケガもなくいられた……ありがとね……」

クラフト「おう……」

耳郎 「あと反省文早く書き終わったら頭撫でてあげる……かも……」

クラフト「さあ先生！早く校舎に行きましょう!!」シュバツ!!

相澤 「……いつ……」

その後、凄まじい速さで反省文10枚を書き上げたクラフト。なおこの記録（反省文を書

き上げた時間）はのちに多くの雄英の教師や生徒達に語り継がれる。だが記録が記録だ

けに雄英都市伝説の1つとなってしまうのは少し未来のお話。

クラフト「あれ？ナデナデは？」

第19話 体育祭だ!!①

敵の襲撃があったため翌日は臨時休校になる。だが皆の気が休まったかと言えは五分

五分といった所である。そして…

飯田 「みんなー!!もうすぐHRが始まる!急いで席に着くん
だー!!」

瀬呂 「ついてるよ、ついてねーのおめーだけだ」

飯田 「くっ!俺としたことが!!」ガタツ

麗日 「どんまい!」

ガラ…

相澤 「おはよう…」

クラス 「「「おはようございます!!」」」

相澤 「さて…敵による襲撃があったがまだ戦いは終わっていない」

爆豪 「戦い?」

緑谷 「まさか…」

峰田 「また敵がー!?!」

相澤 「雄英体育祭が迫っている」

クラス 「「「くそ学校っぽいきたああ!!」」」

学校の一大イベントにテンションが上がるA組クラス。

上嶋 「うおお体育祭か!学校っぽいイベントキきたー!」

切島 「待て待て上嶋!先生あんな事あったばつかなのにいいん
すか!?!」

耳郎 「確かに…敵に襲撃されたばつかなのにいいんですか?」

相澤 「逆に開催することで雄英の危機管理体制が盤石だと示す
…って考えらしい。会場の警備

も例年の五倍に強化するそうだ。何より雄英の体育祭は
最大のチャンスの場だ。敵」

ときで中止していい催しじゃねえ」

峰田 「いやそこは安全をとって中止しよう?体育の祭りだよ

？」

緑谷 「峰田くん雄英の体育祭見たことないの!？」

峰田 「見たことあるよ…でもそういう事じゃなくてよー」

相澤 「雄英の体育祭は日本のビッグイベントの1つ!かつてはオリンピックがスポーツの祭典と

呼ばれ全国が熱狂したが、今は人口も規模も縮小し形骸化した。そして今の日本におい

てかつてのオリンピックに代わるのが雄英体育祭だ!!」

八百万 「当然、全国のトップヒーローも自分たちの元にスカウトしようと観ますわ」

上鳴 「資格とつて卒業した後はプロの事務所にサイドキック入りがセオリーだもんな」

耳郎 「でもそつから独立しそびれて万年サイドキックつても多いんだよね。上鳴アンタそう

なりそう、アホだし」

上鳴 「んなつ…!」

クラフト「もし将来そうなっていたら俺が事務所立てたときに雇つてやるから安心しろ」

上鳴 「結局サイドキックじゃねえか!」

相澤 「おしゃべりは後にしろ…当然名のある事務所に入った方が経験値や話題性も高くなる。

時間は有限、プロに見込まれれば将来の道が開けるわけだ。年に1回…計3回のだけの

チャンスだ。ヒーロー志すなら絶対に外せないイベントだ!チャンス逃さないためにも

気抜くんじゃねえぞお前ら!」

クラス 「!!「はいっ!!!」」

チャンスをつかむために気を引き締めるA組。

——昼休み——

切島 「あんなことあつたけどなんだかんだテンション上がるな
オイ!!」

瀬呂 「活躍して目出ちゃプロへのデカイ道が踏み出せるから
なー」

緑谷 「みんなすごいノリノリだ…」

飯田 「君は違うのかい? ヒーローになる為在籍しているため燃
えるのは当然だろう!」グツ!

飯田がとつたポーズはなかなか独特である。そして蛙吹
はそれに突っ込みを入れる。

緑谷 「僕もそりやそうだよ。でも何か…」

麗日 「デクくん、飯田くん…:頑張ろうね体育祭」

緑谷 「顔があれだよ麗日さん!!」

芦戸 「どうしたー全然うららかじゃないよ麗日」

峰田 「…:生rier《スパアン!!》」

峰田が何か言いかけたが蛙吹の舌ビンタによって黙らさ
れてしまう。

麗日 「皆! 私頑張るうー!!」

切島 「おおー:どうしたキャラがフワフワしてんぞ(汗)?」

クラフト 「まあ飯食べに行こうや麗日殿」

麗日 「どの!?!」

そう言い緑谷達3人と食堂に向かう。

緑谷 「機神くん今日は耳郎さんと拳藤さんと一緒に食べないの
?」

クラフト「ああ、今日は女子たちと一緒に食べるって言ったのよ」

緑谷 「そうだったんだ…:ねえ麗日さん」

麗日 「なにデクくん?」

緑谷 「麗日さんはなんでヒーローになろうとしたの?」

麗日 「うえっ!?! そっそれはその…:おっ…:」

緑谷 「おっ?」

飯田 「おっ?」

麗日 「おっ…おか…」

クラフト 「金か!」

麗日 「ぶふっ!?!」

緑谷 「ちよっ機神くん!?!」

麗日 「うんまあそうなんだよね」

緑谷 「お金欲しいからヒーローに?」

麗日 「究極的に言えばね、何かごめんね不純で!飯田くんとか立派な動機なのに私恥ずかしい

よ／＼

飯田 「何を言う!生活のために目標を掲げる事の何が立派じゃないんだ!?!」 シュババツ!

緑谷 「うん、でもなんか意外だね」

意外な理由に少し驚きながらも麗日が自身の動機についての理由を話す。

麗日 「実はうちの実家建設会社してるんだけど…全然仕事なくてスカンピンなんよ。こういう

のあんま人に言わんほうがいいんだけど」

飯田 「建設…」

緑谷 「麗日さんの個性なら許可とればコストかかんないね」

麗日 「でしょー!昔それ父に言ったんだよ!でも…」

麗日は父親に言われたことを話す。そして…

麗日 「だから私は絶対ヒーローになってお金稼いで!父ちゃん母ちゃんに楽しませたげるんだ!!」

緑谷 (憧れだけじゃなくて現実を加味した上で…)

飯田 「ブラーボー!麗日くん!ブラーボー!!」 パチパチパチ!

麗日の話に飯田が感動しているとオールマイルトがやって来た。

(オ)マイルト「おお!緑谷少年!それに丁度よく機神少年があーいたあ!!」

緑谷 「オールマイルト」

クラフト 「どうしたんですか?」

(オ) マイト 「ご飯…一緒に食べよ？」

麗日 「乙女や!!」 ブファ!!

緑谷 「(何だろう?) …ぜび」

クラフト 「わかりました」

緑谷とクラフトは飯田と麗日と別れオールマイトに同行する。

—— 雄英食堂 ——

麗日 「デクくんと機神くん何だろうね？」

飯田 「うーむ…もしかすると緑谷くんと機神くんはオールマイと個人的な関係があるのかも

しれないな。もしそうだとすると凄いことだ! それに緑谷くんの個性はオールマイトと似ているから気に入られているのかもしれない!

麗日 「なるほどー!」

轟 「……」

飯田と麗日の会話を轟は偶然聞き何か思うのであった。

—— 仮眠室 ——

(オ) マイト 「急にすまないね」

緑谷 「いえ…」

クラフト 「それで何か用ですか？」

(オ) マイト 「実は体育祭のことで少し話があってね…機神少年のおかげでOFAの扱いは少しずつ

だがものになってきている。その調子でいけば体育祭でいい成績も残せるだろう…

私が緑谷少年に個性ちからを授けたのは私を継いでほしいからだ! この体育祭は全国が注目

しているビッグイベントだ! 今こうして話しているのは他でもない、次世代のオー

ルマイト…象徴の卵!! 君が来たってことを世の中に知らしめてほしい!!」

緑谷 「僕が来た…」

クラフト「なるほど…だけどただ体育祭をするだけじゃ意味がないんでしょ?」

(オ) マイト「その通りだ機神少年、体育祭のシステムは知っているね?」

緑谷 「はい!もちろん!!サポート科・経営科・普通科・ヒーロー科がごった煮になって、各種競

技予選を行いその予選を勝ち抜いた生徒が本選で競う…
いわゆる学年別総当たり」

(オ) マイト「その通り…つまり全力で自己アピールをするんだ!!」

緑谷 「はあ…」

(オ) マイト「ハアてっ!」

緑谷 「いえ確かに仰ることはわかるんですが、襲撃事件あんなことがあった直後だからあまり乗り切れな

いというか…そもそも現在オールマイトに見て貰えているわけですし…ブツブツブツ」

(オ) マイト「ナンセンス界じゃ他の追随許さないな君は!!」

緑谷 「ナンセンス界…」

(オ) マイト「常にトップを狙う者とそうでない者の気持ちの差…それは社会に出てから大きく響く

ぞ…君の気持ちはわかる、それに私の都合だ強制はしない。ただ…海浜公園でのあの

気持ちをお忘れなくてくれよな」

クラフト「緑谷、上を目指す気持ちは大事だぞ。まあ焦っても仕方ねえからよく考えたらいいと思うぜ」

緑谷 「機神くん…うんそうだねありがとう!!」

クラフト「まあ俺はその時の気分で決めるわ! (笑)」

緑谷 「さっきと言ってることが真逆すぎる!!」

クラフトに少し振り回された緑谷であったが、助言のおかげで気持ちがちよつとだけ楽

になったのであった。

——放課後——

学校の授業が終わり多くの生徒達が下校しようとする中、
A組の教室の前に他クラスの

生徒が集まり大きな人だかりが出来ていた。

ザワザワ……ザワザワ……

麗日 「うおおおお……何事だあ!?!」

峰田 「何だよこれ出れねーじゃん!」

爆豪 「敵情視察だろザコ……敵サイラン襲撃を耐え抜いた連中だもんな。

体育祭の前に見に来たんだ

ろ……まあほとんどが興味本位だろうがな」

峰田 「緑谷あ……アイツ何なんだよお……」プルプル……

緑谷 「かつちゃんはあるがニュートラルなんだ」

爆豪 「見に来てても意味ねえからどけモブ共」

飯田 「知らない人の事モブというのやめないか!!」

???? 「どんなもんかと見に来たが随分と偉そうだなあ……ヒーロー科に

在籍する奴は皆こんなの

かい?」

爆豪 「あ×あ!?!」

生徒の人込みの中から高身長で髪の色が紫色の生徒が爆

豪の前に出てくる。

???? 「こういうの見ちゃうと幻滅しちやなあ……普通科とか他の科の

奴ってヒーロー科落ちたか

ら入ったって奴けっこういるんだよ知ってた?」

爆豪 「?」

???? 「体育祭の成績によっちゃヒーロー科編入も検討もしてくれるん

だ……その逆もまた然

りらしいよ。敵情視察?少なくとも俺は調子乗ってつと

足元ゴツソリ掬っちゃうぞっ

つー宣戦布告しに来たんだよね」

爆豪 「……」グイッ……

大胆不敵な宣言を聞きながらも爆豪は人込みをどけて帰

ろうとする。

切島 「まで爆豪！お前のせいでヘイト集まりまくってんじやねえか!!」

爆豪 「関係ねえよ……」

切島 「はっ!？」

爆豪 「上にあがりや関係ねえ……」

切島 「くっ!……シンプルで漢らしいじゃねえかよ!!」

常闇 「上か……一理ある」

砂藤 「言うなあ」

上鳴 「いやいやいや騙されんな！無駄に敵増やしただけだからな!!」

クラフト 「まあ落ち着けよ上鳴」

上鳴 「機神い……お前状況分かってんのお!?!ヘイト集まくりなんだぜ!？」

クラフト 「こんな状況も跳ねのけるぐらいに強くねえとヒーローになれねえよ」

上鳴 「!……それはそうだけどよお」

クラフト 「まあそれはそれとして……」コツコツコツ……

耳郎 「クラフト……?」

上鳴に偉そうなことを言ったなーっと思いつつ教室の入口に向かう。

クラフト 「いやーうちのクラスメイトがごめんねー、気分を害したなら謝るよ。アイツはちよつと」

我が強すぎるから。今後ちゃんと躰けるから（笑）」

爆豪 「テメエ何ふざけたこと言ってるんだハゲ野郎!!」

帰ろうとしていた爆豪がキレながら振り返る。

クラフト 「まあだけど……」

爆豪 「!……」

クラフト 「たった1つの情報だけで俺たちが調子に乗ってると言うのなら……足元を掬われるのは

そっちだぞ」

???? 「!?!」

クラフト「まあお互い頑張ろうや」

その後、耳郎と拳藤と一緒に下校していると校門のところ
で爆豪がいた。

耳郎 「あれ爆豪じゃん」

クラフト「おう爆豪、トップヒーローになるために多少言葉遣いを
直した方がいいぞ」

爆豪 「余計なお世話だハゲ野郎」

クラフト「…何か用か？」

爆豪 「……テメーのさっきの言葉、普段のテメーにしちやマシ
な言葉だったぜ、用はそれだけ

「だじやあなハゲ野郎」

クラフト「爆豪…熱でもあるのか？」

爆豪 「テメっそれどういう意味だコラア!! (怒)」

そんなあんなことありながらも体育祭までの2週間は
あつという間に過ぎていき雄英体

育祭を迎えるのであつた。

第20話 体育祭だ!!②

—— 雄英体育祭当日 ——

雄英体育祭：今では日本のビッグイベントの1つの為多くの観客・ヒーロー・マスコミが集まる。しかし雄英襲撃という大事件があったため入場の際の検査が例年より時間が掛かっていた。

マスコミ「入場検査長いねえ」「敵の襲撃受けてっからな、厳しくなるのは当然だ」

「それに今年に関しちや開催に批判的な声もあるからな」

「【物議をかもす】すなわち【数字がとれる】！今年の日玉は1年A組ね!!」

「ラストチャンスによる熱と経験値から成る戦略等で毎年メインは3年ステージだが…」

「今年に限っちゃ1年ステージは大注目だな!!」

襲撃を受けたことよって今年の体育祭は例年とは違い1年ステージに注目が多く集まっていた。そしてそれはヒーローからであった。

(シ)カムイ「我らもスカウトをしたいところだが…」

デステゴロ「警備の依頼がきた以上仕方ねえよ」

Mtレディ「なんか全国からプロヒーロー呼んだらしいですね今年は」

そしていよいよ体育祭開催の時間が迫る。

—— 1年A組控え室 ——

芦戸「あーコスチューム着たかったなー！」

尾白「公平にするため着用不可なんだよ」

砂藤「予選の種目って何なんだろうな？」

クラフト「毎年違うからなー」

常闇「何が起きても対応するしかあるまい」

障子「ああ」

切島「おうよ！それにこの2週間は機神や尾白と一緒に鍛えたから

な！」

尾白「僕は教えられることを教えたただけだよ」

クラフト「いや、それでも十分だったぜ？近接格闘は良く知らなかったから助かったぜ」

体育祭開催までの2週間、クラフトは尾白や切島たちと放課後になると訓練を行っていた。その2人の他にも毎日ではなかったが男子は障子や常闇、女子は耳郎、拳藤、葉隠、芦戸達も参加していた。

飯田「みんな!!もうすぐ入場だ!準備は出来ているか!？」

峰田「人人人……」

緑谷「はあああ〜」

緑谷が緊張をほぐそうと深呼吸していると轟が声をかける。

轟「緑谷」

緑谷「轟くん……なに？」

轟「客観的に見ても実力は俺の方が上だと思う」

緑谷「へっ!?うっうん……」ビクッ!

轟「……お前、オールマイトに目えかけられてるよな?別にそこ詮索するつもりはねえけど……お前には勝つぞ。それに機神、お前にもだ」

轟による突然の宣戦布告ともいえる言葉にザワつくクラス。

上鳴「おお!?クラス最強の1人が宣戦布告!？」

クラフト「なんか俺ついでに感なかった？」

切島「急にケンカ腰どうした!?直前にやめろって……」

轟「仲良しごっこじゃねえんだ、なんだっていいだろ」

緑谷「……轟くんが何を思って僕に勝つって言っているのかは分からない……実力も君の方が上だよ、客観的に見ても……」

切島「緑谷もあんまりネガティブなこと言わねえ方が……」

緑谷「でも!!……皆……他の科の人も本気でトップを狙っているんだ!僕だって遅れを取るわけにはいかないんだ!」

「僕も本気で獲りに行く!!!」
爆豪「……っ!」

轟 「…………おお」

クラフト「轟」

轟「なんだ？」

クラフト「そこまで言うんなら両方の力使うんだろな？」

轟「!?—てめえ…」

緑谷「機神くんどういう…」

飯田「3人とも!!それくらいにしたまえ!入場の時間だ!!」

緑谷が両方の力とはどういう意味なのか聞こうとしたが、体育祭開催の時間がきてしまい聞けなかった。そしていよいよ雄英体育祭は始まるのであった。

——1年ステージ会場——

(プ)マイク『群がれマスメディア!今年もお前らが大好きな青春の暴れ馬:雄英体育祭が始まデイエビバディアアユウレディ!!』

観客「ニニワアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

(プ)マイク『雄英体育祭!ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!どうせてめーらあれだろ!?こいつらだろ!!?敵の襲撃を受けたのにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星
!!!』

『ヒーロー科1年A組だろおおおお!!!』

観客「ニニワアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

プレゼントマイクの実況で観客のボルテージは上がり歓声が響き渡る。

緑谷「わあああ…人がすごい……」ガクガクガク…

飯田「多くの人に見られる中で最大のパフォーマンスを発揮できるか…これもまたヒーローとしての素養を身につける一環なんだろう」

切島「なんかすげえ持ち上げられてんな!緊張するな爆豪!!」

爆豪「しねえよ!ただただアがるわ!」

(プ)マイク『話題性では後れを取ってはいるがこちらも実力派ぞろい!ヒーロー科1年B組!!ヒーロー科に続いて普通科C・D・E組!サポート科F・G・H組!そして経営科I・J・K組!!』

多くの生徒が入場する中、普通科の生徒が一言ぼやく。

普通科「俺らって完全に引き立て役だよなあ」「たるいよねー…」

(プ)マイク『さあ主役は揃ったア!!始めていくぜえ雄英体育祭1年ステージ!!』

(ミ)ナイト「選手宣誓!!」ビシッ!

観客「おお!今年の1年主審は18禁ヒーローミッドナイトか!」

「校長は?」「校長は例年3年ステージだよ!」

ミッドナイトが現れたため観客ステージの男は鼻の下を伸ばす。

切島「ミッドナイト先生なんて格好だ!/?」

上鳴「さすが18禁ヒーロー!」

常闇「18禁なのに学校にいていいのか?」

峰田「いい!!!」

(ミ)ナイト「静かにしなさい!!選手代表1-A機神クラフト!!」

緑谷「はっ機神くんだったんだ選手代表」

瀬呂「あいつ入試トップだしな」

普通科「ヒーロー科の入試な」

緑谷「はっはい…」

瀬呂「対抗心剥き出しだな」

上鳴「爆豪、お前のせいだぞ」

爆豪「ふん…いちいちモブの言う事なんか気にするんじゃねえ」

上鳴「でもある意味選手代表は機神でよかったな」

瀬呂「なんで?」

上鳴「爆豪だとヤベえこといいそうだし」

瀬呂「あー納得(笑)」

爆豪「あいアホ面い醤油顔それどういう意味だ!!」

(ミ)ナイト「静かにしなさい!」

ミッドナイトの一言により再び静かになりクラフトは宣誓を始める。

クラフト「宣誓!我々選手一同はスポーツマンシップ並びにヒー

ローシップに則り正々堂々と戦うことをここに誓います!」

葉隠「なんだか普通だね」

尾白「いやこれ宣誓だよ葉隠さん?」

葉隠「えーなにかおもしろいことでも言うかなーって、機神くんって一見まともに見えて結構ぶっ飛んでるとこない？」

尾白「ぶっ飛んでるって…(苦笑)」

蛙吹「わたし…葉隠ちゃんの言ってること何となくわかるわ」

尾白「蛙吹さんまで…」

そんなことを話していると…

クラフト「あと1位は俺が獲る」

A組「「「…えっ?」「」」」

他クラス「「「……………」」」」

普通の宣誓をしたかと思うと彼は爆弾発言ともいえる宣言をした。当然そのような発言をすれば…

他クラス「ふざけんなあー!!」「調子のんじゃねー!!」「なんだこの野郎!!」「このハゲ野郎!!」

Boooooooooooooooooooo!!!

クラフト「フハハハハハッ!!そう思うなら掛かってこい!これは体育祭という名の戦争だ!勝利を欲するなら全力で戦え!!そうでない奴はここで何も言う資格はない!!」

他クラス「上等だこの野郎!!」「吠え面かかせてやる!!」「後で謝っても許さねーからな!!」

クラフトの発言により生徒の士気が爆発する。

(ミ)ナイト「ああついいわ!機神くんあなたやってくれるじゃない♡!!それじゃ早速始めていくわよ!!」

宣誓をし終え自分のクラスの所に戻るクラフト。

飯田「機神くん!なぜあのような事を言ったんだ!!確かに参加している生徒の士気が上がるのはいい事だ!だが他に言い方があっただらう!?!」

切島「機神!おめえ漢だぜ!」

上鳴「ただでさえ爆豪のやつでヘイト集まってるのに更に更に集めるとか馬鹿なの!?!」

峰田「そうだ!どうしてくれんだ!!」

爆豪「アホ面にブドウ頭!覚悟出来てんだらうな(怒)!!」

葉隠「やっぱりぶっ飛んでたね!!」

蛙吹「けろっそうね透ちゃん」

耳郎「なんとか言ったらどうなの?」

クラフト「……………」

耳郎「クラフト?」

クラフト「…………おらワクワクすつぞ!!」

耳郎「真面目にしろ!!」ドツクン!!

クラフト「ぐふっ!?!」

そんなことをしていると最初の種目が発表される。

(ミ) ナイト「さあさあさあ!それじゃあ第一種目始めていくわよお!!」

麗日「雄英っているいろいろやるのが早いよね」

(ミ) ナイト「最初は予選よ!!毎年ここで多くの者が涙を飲む!!さて運命の第一種目!」

ミッドナイトがそう言うのと空中ディスプレイが表示されルーレットが回り始める。

(ミ) ナイト「今年は…これよ!!」バンツ!

緑谷「障害物競争……………」

(ミ) ナイト「計1ークラスでの総当たりレースよ!コースはこのスタジアムの外周約4キロ!我が校は自由さが売り文句!フフフ:コー
スさえ守れば何をしたらって構わないわ!さあさあ位置につきまくりなさい!!」

スタート位置に生徒たちが移動し位置に着く。そしてスタートランプがカウントダウンに入る。

…………●(パツ…)…………●(パツ…)…………●(パツ…)

(ミ) ナイト「スタート!!!!」

ダダダダダツ!!

(プ) マイク『さーて実況してくぜえ!!アユーレディ!?マイフレンド!!』

相澤『無理やり呼びやがって…』

(プ) マイク『早速だがマイフレンド!序盤の見どころは!』

相澤『今だよ…』

他生徒「いたたたッ！」「ちよ押すな押すな！」「入口狭すぎだろ!?」「なんだよこれ!？」

緑谷「……………！（そうか…つまりここが最初の!）」

轟「最初のふるい」ヒュオオオ…パキパキパキイン！

轟が個性を発動させ足元を一気に凍らせていく

轟「悪いな」タツタツタツタツタツ…

他生徒「つてえ!?何だよこれ!」「冷てえ!」「んのヤロオオ!!」

八百万「甘い轟さん!」

爆豪「だああああ!!そう上手く行かせねえ半分野郎おー!!」

ポオンツ!!

芦戸「うわつとつとと!あつぶな!？」

尾白「そいつはもう受けてる!二度目はないぞ!!」

麗日（超必はまだ使われへん!!）

????「使い慣れてんな個性…」

自身の個性を使い凍結を避ける者もいれば使わずに避けていく多くの生徒達。

轟「クラス連中は当然として思ったあより避けられたな（…そういううばあ機神いつはどこに?）」

（プ）マイク『1—A轟！開始早々足もとを凍らせて動きを封じたア—!!』

相澤『相手を減らすと同時に足止めを兼ねた手段…実に合理的な—ん?おいアイツ何やってんだ?』

（プ）マイク『あ?アイツって誰のこと—おおつと!?!選手宣誓で大胆な宣言をした1—A機神!なんでまだそんなところにいるんだあ!?!』

スタートの合図が鳴ったにもかかわらずクラフトはまだスタート入り口前に1人突っ立っていた。プレゼントマイクの実況の声により会場の視線が集まる。

観客「ほんとにいるぜ」「なんでまだスタートしてないんだ?」「ザワザワ…

クラフト「そろそろいいかな…いくぜ変身!」シユインシユイン!

観客「おいなんか光ってるぞ!」「おいカメラ回せ回せ!」「あの生徒の個性か!」

(プ)マイク『おおーつと!ここで機神に動きがあ!なんか光の粒子みたいなもの体が纏い始めたぞっ!!』

相澤『あいつの何考えてんだ?』

クラフトは個性LBXを発動させ変身していく。そして変身が終わりその姿を現す。

クラフト「完了!アキレスデイド!!」ババーン!!

(プ)マイク『なななつなんと!?!機神が黒いロボットに変身したあー!!』

観客「!!!わあああああああ!!!」

マスコミ「こりやあ画になるな!」「お茶の間も興奮してるだろーな!!」バシャバシャバシャ!

マスコミのカメラのフラッシュが多く光る。

クラフト「では……クラフトいつきまああああす!!!」ドウツ!!

(プ)マイク『なんとロボットに変身しただけではなく空を飛んだああああ!!つーかあれ有りなの!?!』

(ミ)ナイト「有りよ!!機神くんアナタ盛り上げてくれるじゃない!最高よ♡!!」

相澤『コース守つてりや何でもありだしな』

(プ)マイク『オーケーオーケー!!おつとその間に先頭は最初の障害物だ!!まずは手始め:第一関門ロボ・インフェルノ!!!』

緑谷「入試の時の仮想敵!?!」

仮想敵 ライラン ☒ターゲット:大量オ!!☒

上鳴「いつ?!入試んときの0ポイント敵!?!」

他生徒「マジか!?!ヒーロー科あんなのと戦ったの!?!」多すぎて通れねえ!!」

轟「一般入試用の仮想敵 ライラン ってやつか…」

八百万「どこからお金出てくるのかしら?」

轟「どうせならもつとすげえの用意してー!」

轟が個性で攻撃しようとしたその時、上空に何かが現れる。

ゴウツ!!

クラフト「(グラグラの能力)ぶっ飛ベデカブツううう!!」ドドウン!!

耳郎「クラフト!？」

緑谷「機神くん!？」

八百万「?…空間に亀裂…?」

クラフトが飛んだ勢いのままグラグラの能力を発動し巨大仮想敵^{サイラン}を殴りつける。そして空間に亀裂が入りワンテンポ遅れて凄まじい衝撃波が発生する。そして巨大仮想敵^{サイラン}は頭部がひしゃげながらそのまま後ろに倒れる。

ピキピキピキ…バゴオオオンツ!!

(プ)マイク『なんと1—A機神!パンチ一発で巨大ロボットを粉砕いい!!そしてそのまま空を飛びながら第一関門を通過あー!!』

相澤『あの威力からしてただ力任せのパンチじゃなくて衝撃が発生させたものだろうな』

(プ)マイク『流石特選入学者あー!!』

八百万「なんてデタラメな力ですの…」

他生徒「凄すぎだろ…」「パンチ一発って…」

轟「チツ…」パキパキパキイン!!

轟は少しイラつきながらも個性を発動させ巨大仮想敵^{サイラン}を凍結させ第一関門を通過する。

他生徒「あいつが止めたぞ!」「今なら通れるぞ!!」

轟「やめとけ、不安定な時に凍らせたから倒れるぞ」

轟が言ったように巨大仮想敵^{サイラン}は前屈みになっていたためそのまま崩れ落ちた。

ギギギイイイ…ドゴオオオン!!

(プ)マイク『機神に続いて1—A轟!攻略と妨害を一度に!!こいつはシヴィー!!すげえな!機神もスゲーーけど!なんかあれだな!ずりいな!!』

相澤『合理的かつ戦略的な行動だ』

(プ)マイク『こちら流石推薦入学者というべきかあー!!1位通過

の機神と2位通過の轟！初めて戦ったロボ・インフェルノを全く寄せ付けないエリートツプりだあ!!」

他生徒「おい！誰か下敷きにならなかつたか!?」「死んだんじゃねえのか!?」「死ぬのこの体育祭!?!」

塩崎「……!」

バキン……ベゴン……バゴオオン!!

切島「死ぬかあー!!」

鉄哲「死ぬかあー!!」

(プ)マイク『ああー!! A組切島とB組鉄哲が潰されていたあー!! ウケるう!!』

切島「轟のヤロー！ワザと倒れるタイミングで！俺じゃなかつたら死んでたぞ!!……ん?」

鉄哲「轟のヤロー！ワザと倒れるタイミングで！俺じゃなかつたら死んでたぞ!!……ん?」

切島「おお鉄哲!!」

鉄哲「おお切島!!」

(プ)マイク『つーかハモリすぎだろ!!』

爆豪（先行かれてたまるか!!）ボツボツボオン!!

爆豪は仮想敵は直接相手せずサイランに爆破で上空に飛んで通過していく。

(プ)マイク『I—A爆豪！下がだめなら上ってか!?クレバー!!』

瀬呂「おめーこういうの正面突破しそうなのに避けんのね!」

常闇「便乗させてもらうぞ!」

瀬呂と常闇も自身の個性を使い巨大仮想敵の頭上サイランを通過していく。

——教師用観客席——

スナイプ「やはり一足早く通過していくのはA組が多いな」

(オ)マイト「他の科やB組も決して悪くないただ…」

——実況放送室——

相澤「立ち止まる時間が短い…機神がほぼ倒したとはいえそれでも、上の世界を肌で感じた者・恐怖を感じた者・対処し凌いだ者…各々が経験を経とし迷いを打ち消している」

緑谷「(ワンフォーオール…)…デトロイトスマッシュ!! 《ドゴオツ!!》…(よしこのまま…)」

ドゴオツ! ドゴオツ! ドゴオオン!!

緑谷「!?!: 八百万さん!」

八百万「ちよろいですわ!」

他生徒「道が開けた!」 「あの0ポイント サイラン 敵がこんなに容易く!」

——教師用観客席——

スナイプ「入試では避けるべきものとしてだったが、倒すべきものとしてみれば鈍くさい鉄の塊…」

つけ入るスキも見えてくらあな」

(オ)マイト「…:(無茶を承知で発破をかけた…ギリギリでも良い通過してくれ!)」

(プ)マイク『おいおい第一関門ちよろいつてか!?! それなら第二関門はどうだ!?! 落ちればアウト! それ

が嫌なら這いずりな! ザ・フォーール!!! ……ん? おいなんかおかしいぞ?』

相澤『谷を渡る際の綱が減ってるな……なるほどアイツの仕業か』

(プ)マイク『あ? アイツって誰のこと……つてお前かよ!!』

ロボ・インフェルノを通過し第二関門に來た生徒達は目の前の光景を見て動揺する。谷の間を渡るために設置されたスタート地点の綱が5本中3本切られていた。そしてその犯人は…

(プ)マイク『I—A 機神クラフトー!!!!』

クラフト「あつ轟來たな、じゃあ次行くか」ファイイイン!!

クラフトは個性で綱を切るとLBXをアキレスデイドからクイーンに変えホバー移動で第3関門へ向かった。そのまま飛んでいけばいいのと思うが本人は色々妨害したいと楽しみたいためこのように行動していた。

麗日「いつの間になつたんや」

芦戸「てゆーか綱が減つてんじゃん!!これやったの絶対機神だよね!?!」

蛙吹「でも見て三奈ちゃん、残された綱は切られた綱より最短コースだわ」

芦戸「それでも切るのはやり過ぎー!」

芦戸が足をジタバタさせながら怒っていると…

????「フフフフ…来ました来ましたアピールチャンス!!しかもより目立つ状況なので助かります!!見よ!全国のサポート会社!ザ・ワイヤーアロウ&ホバーソウル!!」キラン!

麗日「サポート科!」

芦戸「えー!アイテムの持ち込みいいのお!?!」

????「ヒーロー科は普段から実践的な訓練を受けているでしょう?公平を期すため私たちサポート科は自身が開発したアイテムコスチュームに限り装備オツケー!…っていうか寧ろサポ^わた^した^ち科にとつては己の発想・開発技術を企業にアピールする場なのです!!さあ見て出来るだけデカイ企業ー!!私のドツ可愛いベイビーを!!」

発目は装備していたワイヤーアロウを射出して谷の間にある足場に撃ち込む。そしてホバーソウルを起動させ谷に向かって飛び込み射出したワイヤーを巻き上げ足場に着地する。

麗日「すごい…でも負けない!」

芦戸「くやしい!悪平等だあ!!てか梅雨ちゃんいつの間に!?!」

????「いいなあ…あれ」

(プ)マイク『実に色々な方がチャンスを掴もうと励んでいますねイザーヘツドさん?』

相澤『何足止めてんだあのバカ共』

爆豪「クソがつ!」ボボオン!!

轟(…調子上げてきたな、スロースターターか)

飯田「恐らく兄も見ているのだカツコ悪い様はみせられん」ドウルルルルッ!!

(プ)マイク『カツコ悪い!!!』

脚を重ねるように揃えて腕でバランスを取り、個性のエンジンで推進力を生み滑るように綱を渡っていく飯田。やっている本人は大真面目、だがその渡っている姿は正直カッコイイと思うには無理があった。

——スタジアム観客席——

観客「1位のやつ圧倒的だな」「しかしどういう個性だ？」

「ロボットの個性かと思ったがああの大ロボを吹っ飛ばした力はなんだ？」

「複合型か？」「とりあえず強個性ということはわかるな」

「それもかなりの強個性だぞ？第二関門のとき綱切ってたけど明らかにロボットの個性でなく別の個性で綱を切ってたぞ？」「まあいずれ分かるだろ」

「だけどその1位のやつに続いている子もスゴいな」

「1位の奴と同様に個性も強いが素の身体能力と判断力がいいな」

「そりやそうだろ！あの子…フレイムヒーロー「エンデヴァー」の息子さんだよ!!」

「ああー道理で！」「オールマイトに次ぐトップ2の血か!!」

「早くもサイドキック^{相棒}争奪戦だなー！」

(プ)マイク『さあ先頭が一足先に抜けて下はその先頭のせいでダンゴ状態！だが上位何名が通過するかは公表してねえから安心せずに突き進め!!そして早くも最終関門！かくしてその実態は…一面地雷原怒りのアフガンだあ!!地雷の位置はよく見りやわかる仕様になっているから目と脚を酷使しろ!!ちなみに地雷の威力は大したことはないが音と見た目は派手だから失禁必至だぜ!!』

相棒『人によるだろ』

緑谷「先頭はもうそんな所に！急がないと！」

(プ)マイク『そして現在トップを走り続けている——A機神！なんと障害物の地雷原をもともせず突き進む!!どうなってんだあ!!』

相棒『土煙が立っているからボバーみたいに若干浮いて移動してる

んだらうな』

(プ)マイク『なんかズリいー!!…ん?走るのをやめて後ろを向いたぞあいつ?』

相棒『どうせ何かする気だろ…』

相澤の言う通りクラフトは何かするつもりだった。

クラフト「避けてみな!必殺ファンクション!!」

!!!アタックファンクション!!!

☒グレイスマサイル☒

ドシユシユシユシユシユ!!!

L B Xクイーンのスカート型ホバーの後方に備え付けられているミサイルが火を吹く。そして容赦なく地雷原を慎重に攻略している生徒達にミサイルの雨が降り注ぎ、足元の地雷原を誘爆させていく。

他生徒「どわああ!!」「ちよおおお!!」「なんでミサイルがぎやああああ!!」

轟「くそ…余計なことしやがる!」

ボオン…ボボオン…ボオンボオンボオン!!

爆豪「はっはあ!俺には関係ねえー!!」ボオンツ!!

轟「!!…」

爆豪が爆破で空中移動しながら先頭に迫る。

爆豪「おいてめえ!!宣戦布告する相手間違えてんじやねえよ!!それとハゲ野郎!1位を取るのはこの俺だ!!調子に乗ってんじやねえぞ!!」

(プ)マイク『ここで爆豪が轟に追いつくー!!喜ベマスメディアお前から好みの展開だああ!!このまま轟を追い抜いてトップを走る機神を追い抜くかあ!?!そして後続もスパートをかけてきたあ!!』

クラフト「ふははははっ!ならば俺は先にゴールさせてもらー!」

ボオオオオオオオオン!!!

(プ)マイク『なっ?後方で大爆発!!何だあの力は!?!偶然か故意か!?!A組緑谷!爆風で猛追いい!!』

クラフト「おっとうこうしては……ん?」

クラフトは変身しているL B Xの機体を変更しアキレスデイドに

変身し空を再び飛ぶ。そして変身する前に緑谷の行動で疑問に思ったことを現在飛落んでいる緑谷の腕を掴んで質問する。

クラフト「よつと」ガシッ!

緑谷「うわっ!?!はっ機神くん!?!」

クラフト「なあ緑谷1つ聞いていい?」

緑谷「えっこんな時にどうしたの?」

クラフト「なんで炎使わねえの?」

緑谷「……………わっ…」

クラフト「わっ?」

緑谷「忘れてたあああああ!!」

クラフト「何やってんだ…まあ思い出したならいいか、はなすぞ!」

緑谷「えっいきなりはあああああ!!」

クラフト「頑張れ!…では最後はカツコよくゴールを決め…つる!」ゴウツ!!

速度を加速させ一気にゴールのスタジアムに向かうクラフト。緑谷も地面に落ち切る前に足を炎にし、それを推進力にしてスタジアムに向かう。その後ろを轟や爆豪などの他の生徒達があとに続く。

(プ)マイク『さあさあさあ! 大胆な選手宣誓をしたかと思えば、予選の障害物競走ではコース上で妨害しまくった男がいますスタジアムに……飛んで還ってきたあああああ!!!』

クラフト「ハツハツハツ……(笑)!!!」

観客「!!!ワアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

(プ)マイク『そして華麗なヒーロー着地をし観客とマスコミを沸かせるうう!!その後続も続々とゴールしていくぜえ!!順位などは後でまとめるからとりあえずお疲れだぜ!!』

爆豪「ハアッ!…ハアッ!…クソッ!!」

轟「……………」

クラフト「ふいー楽しかったー!」

緑谷「はあ…はあ…はっ機神くん1位おめでどう…」グツタリ…
クラフト「おう緑谷サンキュー!あとお疲れだな?」

緑谷「機神くんに落とされたときにどつと疲れたよ…」

クラフト「あくそれはすまんかった」

麗日「デクくんすごいねえ…!」はあ…はあ…

飯田「この個性で遅れを取るとは…やはりぼく…俺もまだまだ…」

緑谷「飯田くん、麗日さん…」

麗日「2位スゴイねー!悔しいよ!」

緑谷「いいいやあ(近い／＼)」

顔を近づけられ赤くなった顔を隠す緑谷。

八百万「くっ…こんなはずじゃあ…」

峰田「一石二鳥よ!おいら天才!!」ウヒョー!!

八百万「サイツテーですわ!!」

峰田は八百万の臀部にモギモギボールをくつつけ、それを利用して八百万の背中にくっ付いてゴールしていた。

クラフト「とりあえず引き剥がす」

八百万「ありがとうございます、機神さん」

峰田「邪魔すんじやねえよ機神!!おいらの夢の時間をよおお!!」

クラフト「そんなしてるからモテないんじやね?」

峰田「うるせえええ!!」

そうこうしていると順位の集計が終わり予選通過の順位が発表される。1位クラフト2位緑谷3位轟4位爆豪となっておりそれ以下は原作通りとなっていた。

(ミ)ナイト「予選通過は上位43名!残念ながら落ちちゃった人も安心なさい!まだ見せ場は用意されているわ!そして次からいよいよ本選!ここから先は取材陣も白熱するからキバリなさい!!さーて第二種目よ!私はもう知ってるけど何かしらく何かしらく!…言ってるそばからこれよ!」

空中ディスプレイには騎馬戦と表示された。

上鳴「騎馬戦!…俺ダメなやつ」

蛙吹「個人競技じゃないけど、どういうふうになるのかしら」

(ミ)ナイト「参加者は2人く4人のチームを自由に組んで騎馬を組んでもらいうわ!基本は普通も騎馬戦と同じルールだけど一だけ違う

のは、先ほどの結果に伴って各自にポイントが振り当てられること
!!」

障子「なるほど」

砂藤「入試みてえなポイント稼ぎ方式か！分かりやすいぜー」

麗日「つまり組み合わせによって騎馬のポイントがわか変わってく
ると」

芦戸「あぁー！」

(ミ)ナイト「あんたら私が喋ってんのにすぐ話すね!!」

自身がこれから話すことを先に言われてしまうため若干怒るミッド
ナイト。

(ミ)ナイト「ええそうよ、そして与えられるポイントは下から43位
が5P：42位が10P：といった具合よ！そして1位に与えられ
るポイントが…」

「！！！1億！！！」

クラフト「……………はい？」

(1億…ね)

???????? (つまり1位の騎馬を落とせば！)

(((((どんな順位からでもトップに立てる!!!)))

クラフトが思考停止に近い状態にも拘わらず周囲の視線がクラフト
に集中する。

(ミ)ナイト「そお…上位の奴ほど狙われる下剋上サバイバルよ!!!」

君は生きのびることが出来るか？

第21話 体育祭だ!!③

障害物競走で様々な妨害をしながら見事1位通過をしたクラフト。そして次に行われる本戦の騎馬戦では通過順にポイントが振り当てられ、1位通過のクラフトにはなんと1億ポイントが与えられる。そんな桁違いなポイントを与えられたクラフトは格好の標的になってしまふのは誰もが予想できよう……果たしてクラフトはどのようなにして騎馬戦を切り抜けるのか。それか今回も予選と同じように何かを企てているのだろうか……

——スタジアム——

(ミ) ナイト「上に行く者にはさらなる受難を！雄英に在籍する以上何度でも聞かされるわ！これぞPlus Ultra!! 予選通過1位の機神クラフトくん!! 持ちポイント1億!!」

クラフト「……多すぎだろ」

予選通過者全員の視線がクラフトにこれでもかと集まる。そしてその視線は獲物を狙うハンターの如く鋭い。

(ミ) ナイト「それじゃルールを説明するわよ！制限時間は15分！振り当てられたポイントの合計が騎馬のポイントになり、機種はそのポイント数が表示されたハチマキを装着！制限時間が終了するまでにハチマキを奪い合い保持ポイントを競い合うのよ！奪ったハチマキは首から上に巻くこと！獲れば獲るほど管理が大変になるわよ!! そして重要なのはハチマキを獲られても、または騎馬が崩れてもアウトにはならないってところ!!」

八百万「ということとは……」

砂藤「43人からなる10〜12組がずっとフィールドにいるわけか……?」

青山「シンド☆!」

芦戸「いったんポイント獲られて身軽になっちゃうのもありだね」

蛙吹「それは全体のポイントの分かれ方見ないと判断しかねるわ三奈ちゃん」

(ミ) ナイト「個性発動ありの残虐ファイト!でもあくまで騎馬戦!悪

質な崩し目的の攻撃などはレッドカード！一発退場とします!!」

爆豪「チツ!!…」

緑谷「……………(汗)」

クラフト（誰と組もうかな…いやまてよ…）

(ミ)ナイト「それじゃあれより15分!チーム決めの交渉タイムよスタートよ!」

通過者「「15分!」」

最終種目通過をかけた運命のチーム決めが始まる。

——警備スタッフ控室——

デステゴロ「この雄英体育祭ってヒーロー気構え云々より…ヒーロー社会に出てからの生存競争をシミュレーションしてるよな」

M t. レデイ「どういことですか?」

デステゴロ「ヒーロー事務所がひしめく中でおまんま食っていくにゃあ時に他を蹴落としてでも活躍見せなきゃなんねえのが障害物競走^選だろ?」

M t. レデイ「あれ心苦しいですよー」

(シ)カムイ「貴様っ!嬉々としてやっていたではないか!」

シンリンカムイはM t. レデイがデビューした時のことを思い出す。

デステゴロ「その一方で商売敵と言えど協力してなきゃなんねー事案も腐るほどある」

M t. レデイ「あつ…騎馬戦がまさにそうですね、そっか自分の勝利がチームの勝利になっちゃう。相性やら他人の個性やら把握やら持ちつ持たれつ…サイドキックとの連携…」

(シ)カムイ「他事務所との個性合同訓練」

デステゴロ「プロになれば当たり前前の生きる術を子供が今からやってんだな…」

M t. レデイ「大変ですなー…」

どこか気持ちいが棒読みのような感じで関心するプロヒーロー達であった。

——スタジアム——

15分しかないとためチーム決めの交渉は熱くなっていた。

砂藤「俺と組め爆豪！」

芦戸「えー爆豪！私と組もう！」

青山「僕でしょねえ☆!?」

爆豪「……………てめえらの個性知らねえ！なんだ!？」

砂藤「B組ならまだ分かるが！」

葉隠「爆豪くんほんと周り見てないんだね!!」

衝撃の事実には驚く面々。

(オ)マイト(性格はああでも4位200ポイント…個性の汎用性を考えれば爆豪少年の人気は領ける)

切島「轟のやろーソツコーでチーム決めやがった！爆豪！俺と組もう!!」

爆豪「クソ髪」

切島「切島だよ！覚えろ！おめーの髪とそんなに変わんねーぞ！おめえどうせ騎手やるだろ!?そんならおめえの爆破に耐えられる前騎馬は誰だ!？」

爆豪「……………根性ある奴」

切島「違うけどそう！硬化の俺だ！ぜってーブレねえ馬だ！獲るんだろ!?!¹機神…!!」

爆豪「!?!……………」《ニツ…!》

切島の言葉を聞いて不敵に笑う爆豪。そして15分という交渉の間は終了し騎馬戦が始まろうとする。

物間「ここに居るほとんどの観客やマスコミがA組に注目している…何でだ?…そして鉄哲が言った通り調子づいてる…おかしいよね?彼らとの違いは? ^{サイラン}敵と会敵しただけだぜ?僕らB組がなぜ予選で中下位に甘んじたか…調子づいたA組に知らしめてやろう皆」

(ミ)ナイト「15分経ったわ!それじゃいよいよ始めていくわよ!!」

(プ)マイク『おい起きろイレイザー!15分のチーム決め兼作戦タイムを経てフィールドに13組の騎馬が並び立ったぜ!』

相澤『……………なかなか面白い組が揃ったな』

(プ)マイク『さあさあさあ!さっそく始めていきてえところだが!その前に1つ聞け!お前の騎馬はどうした!?!機神い!!』

相澤『またなんか企んでんのか?』

皆が2人く4人で騎馬を組んでいるのに対しクラフトは1人突っ立っていた。

(ミ) ナイト「機神くん、騎馬は最低2人で組むのだけどあなた組む相手はどうしたの?」

クラフト「大丈夫ですミッドナイト!今から出すんで!」

(ミ) ナイト「出す?」

クラフトはそう言う个性和LBXを発動させ3体のクイーンを召喚する。そして3体のクイーンに騎馬を組ませ騎手として騎乗する。

クラフト「お待たせしました!」

(プ) マイク『なんと機神!個性を使って騎馬を作り出したあー!!』

観客「「「わああああああああ!!」「」「」」

(プ) マイク『それじゃあ行くぜえ!上げてけ闘ときの声!!血で血を洗う雄英の合戦が今!狼煙を上げる!!準備はいいかなんて聞かねえぜ!いくぜ残虐バトルロワイヤル!!カウントダウン!』

物間「鉄哲、恨みつこなしだぞ?」

鉄哲「おう!」

(プ) マイク『3…!!』

爆豪「狙いは…」

(プ) マイク『2…!!』

轟「ただ一つ…」

(プ) マイク『1…!!』

































『スタアアトオオオ!!!』

スタートの合図と共に一斉に他の騎馬がクラフトに襲い掛かる。

鉄哲「実質1億それの争奪戦だ!!」

葉隠「はっはっは!頂くよ機神くん!!」

クラフト「そうはいかないね!クイーン回避行動開始!」

クイーン                                

クイーン!!!

命令を確認したクイーン…下半身のホバーをジェット機のエンジン音のような音を発しながら起動させ動き始める。

鉄哲「浮いた!?くそ!これじゃ骨抜の個性が通じねえ!!」

葉隠「耳郎ちゃん!彼氏だけど容赦なくね!」

耳郎「ここでそれ言われるのは恥ずいから言わないで／＼!!」
ヒュッ!

クラフト(バリバリの能力)キンッ!

耳郎はイヤホンジャックを伸ばすが防がれる。

葉隠「くそー!追ってリベンジするよ耳郎ちゃん!」

砂藤「つーか葉隠お前!ハチマキねえぞ!!」

葉隠「ハツ!?いつの間にー!?」

物間「漁夫の利」

物間の手には葉隠が頭に付けていたハチマキがあった。

(プ)マイク『さくく!まだ始まって2分も経ってねえが早くも混戦混戦!!各所でハチマキ奪い合い!!1億を狙わず2位く4位狙いつても悪くねえ!!』

クラフト「このままエリア内を上手く逃げて…」

峰田「ハくハツハツハ!!奪い合い!?違うね!これは一方的な略奪よお!!」

クラフト「おっ…とおっ!」

声のした方を向くと薄ピンク色をした紐のようなものが飛んできたが間一髪のところを避ける。

蛙吹「流石ね機神ちゃん」

クラフト「その声は梅雨ちゃんか!その前の声は峰田だな!」

峰田「その通りだぜ機神い〜!」

(プ)マイク『峰田チーム!圧倒的体格差を利用してまるで戦車だぜ!!』

峰田「お前だけは許さねえ!彼女がいるだけでも羨ましいのにそれが2人もいるだど!?ふざけてんのかあ!!」

蛙吹「動機が思いつきり個人的理由ね」

クラフト「そんなこと言われてもな……とりあえず謝っとくわ、ごめんな!!」

峰田「てめええええ!!」

峰田の魂の叫びの如くの攻撃を避けながら逃げていると…
ポオンツ！ポオンツ！

爆豪「調子乗ってんじやねえぞハゲ野郎!!」

クラフト「来たな爆豪!! (バリバリの能力!)」

爆豪「死ねやあ!!」ポオンツ!!

クラフト「そうはいかない!」キーン!

爆豪「んだこれっ!」

(プ) マイク『おおおおおお!? 騎馬から離れたぞ!? 良いのかアレ
!?!』

(ミ) ナイト「テクニカルなのでオツケー! 地面に着いたらアウト
だったけど!」

——警備スタッツフ控室——

デステゴロ「やるじゃねえのA組の連中…!」

——スタジアム観客席——

観客「派手な動きで見てるこっちも楽しいな!」

ヴィラン
「敵と戦っただけでこうも差がでるかね?」

「個性も粒ぞろいだな—!」「今年は豊作だね!」

(プ) マイク『やはり狙われまくる1位と猛追を仕掛けるA組の面々共
に実力者揃い!! 現在の保持ポイントはどうなっているのか…! 7分
経過した現在のランキングを見てみるぜえ!!』

観客「あれ…」「なんかさつきまでとは…」「んん…!」

(プ) マイク『あら…!?!』

相澤『……』

(プ) マイク『ちよつと待てよコレ! A組 機神以外パツとしねえ…轟
や緑谷が一応あれだが…つてか爆豪! お前いつの間にな!?!』

1? 機神チーム 1億P 8? 爆豪チーム 0P 2? 物間

チーム 1360P 9? 小大チーム 0P 3? 鉄哲チーム

1125P 10? 角取チーム 0P 4? 拳藤チーム 685

P 11? 峰田チーム 0P 5? 轟チーム 615P 12

? 心操チーム 0P 6? 緑谷チーム 535P 13? 葉隠
チーム 0P 7? 鱗チーム 195P

物間「単純なんだよA組」シウルツ:

背後から鮮やかにハチマキを獲られてしまう爆豪。

芦戸「やられた!!」

爆豪「このモノマネ野郎ゴラア!!返せ殺すぞ!!!」

物間「ミッドナイトが第一種目と言った時点で予選段階から大幅に
人数を減らすとは考えにくいと思わないかい?」

爆豪「あ☒?」

物間「おおよその目安を仮定して予選を走り、改めて後方から君た
ちの個性や性格を観察したんだ。その場限りの順位に執着しても仕
方ないだろ?」

切島「組クラスぐるみか!」

物間「まあ全員の総意つてわけじゃないけどね、いい案だろ?人参
ぶら下げた馬みたいに仮初の頂点を狙うよりさ」

爆豪「!...」ピクツ!

物間の発言が爆豪の何かに触れる。

物間「ああそう言えば爆豪くん、君へドロ事件の被害者だよね?今
度参考に聞かせてよ。年に1回ヴァイラン敵に襲われる気持ちってのをさ」
ブチツ!!

爆豪「切島あ...予定変更だ...」ズオオオオオオ...

切島「お?...いつ?」

切島が顔を振り向けると爆豪が恐ろしいオーラを放ってた。

爆豪「デクとハゲ野郎の前に...こいつら全員殺そう...!!」

緑谷「(予選を捨てた長期スパンの策ってことか!確かにそれなら
体育祭前からA組が食っていた空気を覆せるしより強い印象を与え
られる...!でもその考えから察するに必ずしも1億Pを狙っている
というわけではない)...みんな!このまま油断せず他のポイントを獲
りに行こう!」

常闇「わかっ...緑谷」

緑谷「なに常闇く...機神くん...」

クラフト「おう緑谷、奇遇だな！（笑）」

緑谷「……僕らのハチマキ獲りに来たの？」ドキドキ…

緑谷がクラフトに問いかける。

クラフト「別に、逃げてたらお前とバツタリしただけだ」

緑谷「ほんとに…？」

クラフト「俺はこのハチマキ守ればいいしな、無理して獲りに行ってもメリツトは少な……」

緑谷「？…機神くん？」

途中で言葉が止まったため問いかける緑谷。

クラフト「……あくやっぱやくめた！どうせなら面白くしよ！」

緑谷「ーっ!？」

クラフト「とゆーわけで緑谷！お前のハチマキを頂く!!（イトイトの能力!）」

緑谷「3人とも構えて!!」

緑谷の騎馬はクラフトの攻撃に備えるが…

ヒョイツ…

緑谷「えっ…？」

麗日「デクくん！ハチマキ獲られてるよ!？」

クラフト「直接手で獲ると誰が言った（笑）？ではさらば！
フイイン！」

緑谷「やられた！皆、追いかかるよ!!」

常闇「ああ！」

麗日「くやしー！」

兎目「なんですあの人の騎馬は!?!どっ可愛いいじやないですか!!」
大人しくしているかと思えば暴れだしたクラフトであった。

拳藤「あんま煽んなよ物間！同じ土俵だぞ」

物間「ああそうだね…ヒーローらしくないしー」

クラフト「バラバラ砲！」

物間「ん?…なっ手が飛んでー!？」

拳藤「機神!？」

クラフト「ハチマキゲットオオ!!」

2つの手が飛んできたかと思えば次の瞬間には頭に付けていたハチマキがなくなっていた。

拳藤「なっ機神アンタっ!」

物間「A組のっ!」

クラフト「なんか爆豪に話してたみたいだけど……ねえ今どんな気持ち(笑)?」

物間「―っ!?…やってくれるじゃないか…」ピクピクッ

クラフトの挑発に苛立ちを覚える物間。

クラフト「(そういえば…物間の個性はコピー、もし万が一に触れられたりしたら面倒だな…個性に対して干渉してくる個性を防ぐ個性を作っておいた方がいいな…空想…個性防壁…個性として定着…定着完了…これでよし!)」

拳藤「機神!あんたハチマキ獲る必要ないだろ!」

クラフト「理由はある!」

拳藤「どんな理由だ!」

クラフト「全部獲ったほうがおもしろそうだから!」

拳藤「確かに…って納得するか!」

クラフト「そういうことだから…」機神い〜「…うん?なに取蔭ちゃん?」

クラフトが次のハチマキを獲りに行くこうとしたら取蔭が話しかけた。

取蔭「ハチマキ何本かくれたらあく膝枕してあげるけど、どう(笑)?」

クラフト「えっマジで?………」

拳藤「彼女がいる前で悩むんじゃない!!」ブオン!

拳藤が手を大きくくしクラフトに向かって振るう。

クラフト「おつとと!…こうはしてられない全てのハチマキを獲るために離脱!!」

拳藤「あつ待て機神!!みんな追うよ!」

物間「僕らも追うぞ!!」

(プ)マイク『ここまで大人しくしていた予選1位通過の機神が動き出したああ!!喜ベマスメディア!お前ら好みの展開だあ!!』

観客「「「ワアアアアアアアア!!」」」

クラフト「オラオラオラアー!!ハチマキよこしなああ!!」

穴田「むっ!?あれは機神氏か!」

鱗「なにっ!」

クラフト「ROOM!」ブウウウン!

鱗「なんだこれ!」

クラフト「シャンブルズ!」シュンツ!

バサツ:

鱗「むおっ!?なんだ!」

鱗の頭に突然何かが覆いかぶさる。

鱗「:体操服の:上着?」

クラフト「それじゃあハチマキは貰うよ!」

穴田「鱗殿!ハチマキがありませんぞ!」

鱗「はっ!?なっいつの間に:そうかさっきの青いドームか!」

クラフト「正解!一応体操服それ持っててくれる?それではさらば!!」

鱗「なっ待てこの野郎!!」

クラフト「あとは轟だけか:どうやって取ろうかな」

轟を除くすべての騎馬から追われながらも余裕のクラフトであった。

八百万「轟さん、こちらに機神さんが向かってきてますが:」

飯田「だがそれと同時に他の騎馬:というか全ての騎馬が来ている

な」

上鳴「うええ!?何してんのあいつ!」

轟「関係ねえ:向かってこようが対処するまでだ」

上鳴「うえーい:イケメンかよ」

上鳴が感心していると:

クラフト「轟いいいい!!」

八百万「来ましたわ!」

クラフト「ハチマキ置いてけええ!!」

轟「悪いがそれはできねえ、飯田 回避だ」

飯田「ああ!」ドルルン!

クラフト「バラバラ砲!」ドウツ!

逃げる轟に向かってバラバラの能力で手を飛ばすが…

轟「!…:そう簡単に獲らせねえよ」バシツ!

クラフト「あ痛っ!ふっ…:ならこれならどうだ! (ドルドルの能力)、キャンドルロック!!」

クラフトはドルドルの能力で轟たちの足場に大量の蠟を流し込み動きを封じる。

どろろろろ…:ガチンツ!!

飯田「なっ何だこれは!?!」

上鳴「動けねえ!」

八百万「あつ足が何かで固まって…:!」

轟「なっ!?!」

クラフト「いただきいい!!」シュバツ!

轟「なつてめえ!?!」

(プ)マイク『あぁつーと!轟の騎馬の動きが封じられその隙に機神がハチマキを奪っていくー!!もはや何でもありだなアイツは!!』

クラフト「あとハチマキ持つてるのは…:」

上鳴「おい機神!」

クラフト「お?なんだ上鳴?」

上鳴「この足のやつどうやって出るんだよ!?!」

クラフト「ああ…:それなら火を使えば簡単に出れるよ?」

上鳴「火っ!?!」

轟 (こいつ…:…:)

八百万「…:なるほど、この白いものは蠟ですね!」

クラフト「正解!さすが八百万まあそういうことだから!」

クラフトはそう言うと鉄哲の騎馬へ向かう。

八百万「早くハチマキを獲り返さないと…:轟さん早く火でこの蠟を

!…:轟さん?」

轟「…:…:」

飯田「轟くん!!」

轟「っ!!…:なんだ飯田?」

飯田「早くこの蠟を溶かしてくれ!」

轟「あつ…ああ分かった…」

轟はそう言われて左の個性を使って蠟を溶かしていくのであった。

骨抜「鉄哲、こっちに向かってきてるぞ」

鉄哲「はっ！上等だそのハチマキ全部かつさらってやらあ!!」ガキ
ンツ！

鉄哲は両拳をぶつけながら意気込む。

クラフト「獲れるものならやってみろおお!!」

鉄哲「こいやあああ!!」

クラフト「つと見せかけて！（ノロノロの能力！）…ノロノロビーム!!」ポアンポアンポアン！

鉄哲「なっ!?…：…てえめえええ…だああまああしい…：…」

クラフト「すまんな！」

（プ）マイク『なんと鉄哲たちの動きが止まってしまったああ!!そして機神がついにすべてのハチマキを獲得うう!!』

観客「「「わああああああああ!!」「」」

普通ならあまりありえない展開に観客も盛り上がる。

（プ）マイク『だがしかあし！残り時間はまだあと約5分あるぜえ！このまま機神はすべてのハチマキを持ったまま逃げ切るのかー!!』

相澤（たぶんというか…絶対何か企んでるだろうな…）

すべてのハチマキを獲ったクラフトは現在、自分以外の騎馬に囲まれていた。

葉隠「機神くん！君は包囲されている！無事でいたいならそのハチマキを全部を私に渡すんだ！」

クラフト「さらつと全部って言ってるの自覚ある!？」

峰田「機神いい!!てめえは許さねえ！」

クラフト「根に持ちすぎじゃね!？」

物間「まったく君はやって「機神！ハチマキは返してもらおうよ！…ちよつと拳藤まだ僕が話して—」

爆豪「おいハゲ野郎!!てめえいい度胸してるじゃねえか!!どうなるか覚悟出来てんだろうな!？」

物間「ちよつとおおお!!？」

緑谷「機神くん！ハチマキ獲り返させてもらおうよ！」

轟「……」

鉄哲「さつきはよくも騙してくれたな！この借りは返させてもらおうぜ！！」

各騎馬からいろいろと言われるクラフト。だがそれを軽く受け流す。

クラフト「いや〜どうしようかねこれ……欲しい？」

爆豪「余裕ぶっこいてんじゃねえぞハゲ野郎！」ポオン！

痺れを切らした爆豪が爆破を利用した移動でクラフトに迫る。

クラフト「(バリバリの能力！) ……ちゃんと名前と呼べないのか！」
キーン！

爆豪「チツ！またこれか……」

クラフト「……(そういやこのままハチマキ全部持って終わったらどうなるんだ?) ……ミッドナイト！」

(ミ) ナイト「?…何かしら機神くん？」

クラフト「このまま全部のハチマキ持って終わったらどうなるんですか？」

(ミ) ナイト「ん〜そうね〜…そうなっちゃうと本戦出場者があなただけになっちゃうから、もう一回騎馬戦をするか別の方法で決めることになるわね。それがどうかしたの？」

クラフト「なるほど、ありがとうございます…うーんオモシロいと思っただけだけど、それとは別に色々な事が面倒になっちゃうな……」

爆豪「なにごちゃごちゃ言っただけだ!!」ポオンツ！

クラフト「おっと！」キーン！

拳藤「隙ありっ！」グアツ！

クラフト「(バラバラの能力!) バラバラ緊急脱出！」パカン！

拳藤「くそっ！」

クラフト「このまま持っていたら色々あれだから返すわ」

爆豪「あ？」

拳藤「返す？」

鉄哲「何言っただけ？」

葉隠「何言ってるんの機神くん!?」

クラフト「それは…こういうことだ!!」フワアアア…

クラフトはそう言うのとフワフワの能力で獲ったハチマキを上空高くに浮かす。

(プ)マイク『ああーつと!なんと機神ここで自身のハチマキ以外のハチマキを手放したあー!!』

相澤『まあアイツは自分のハチマキ持つとけば問題ないからな…』

(プ)マイク『そしてその手放したハチマキは上空で滞空している!これはある意味チャンスなのかー!?!』

鉄哲「なっ?!急いで回れ!塩崎!個性でハチマキ取ってくれ!!」

塩崎「お任せを!!」

峰田「障子急げ急げ!お前ら2人の個性なら取れるぞ!!」

葉隠「わああああ?!早く取らないと!耳郎ちゃんお願いね!」

耳郎「分つーてる!!」

緑谷「常闇くん!」

常闇「分かつてる!黒影!!」ダークシャドウ

黒影『アイヨツ!!』

轟「飯田!」

飯田「くっ!してやられた!」

爆豪「はっ!俺には関係ねえー!!」ボオン!!

クラフトがハチマキを突然手放したことで他の騎馬は混乱する。そして上空という場所にある為激しい争奪戦が残り時間1分にして始まる。爆豪は爆破で上空に上がりハチマキを獲り、鉄哲は塩崎の個性でハチマキを獲り、緑谷は常闇のダークシャドウでハチマキを獲る:各騎馬は個性を使って上空に滞空していたハチマキを取り、それを他の騎馬が隙を見て獲る。激しい攻防戦が1分と短い時間という中で繰り広げられる。しかしその攻防戦にもいよいよ終わりが訪れる。

(プ)マイク『そろそろ時間だ!カウントダウンいくぜえ!!エビバディセイヘイ!!10!…9!…8!…7!…6!…5!…4!…3!…2!…1!…』

『タイムアップ!!』

(プ)マイク『予選に続き本戦の騎馬戦も予想を超える展開で盛り上がりを見せた!!そんな激しい騎馬戦を勝ち抜いた上位4チームを見ていくぜえ!!1位機神チーム!!つか圧倒的すぎだろ!!続いて2位轟チーム!3位爆豪チーム!4位鉄t...あら心操チーム!?おいおい!いつの間に逆転してたんだ!?!』

緑谷「くっ!...ごめん皆...」

常闇「気にするな緑谷、お前はよくやってくれた」

麗日「そうだよデクくん!」

発目「最終種目にいけないのは残念ですが少なからずアピールできたので私は別にいいです!」

緑谷「でも...「へい緑谷お疲れ!」...機神くん!」

クラフト「緑谷、惜しくも5位だったか」

緑谷「うん、それより通過おめでとう機神くん」

麗日「機神くん!きみ色々やり過ぎだよ!!」

クラフト「サンキュー緑谷&ごめんよ麗日、まあでももしかしたらどんでん返しあるかもよ?(最終種目は16人によるトーナメント形式だったはず:俺の騎馬は含まれない、だとすればあと3人足りないから:)」

緑谷「それってどういう...」

最終種目出場者上位4チームが決まりこれで騎馬戦が終わると思っただが:

(ミ)ナイト「なお最終種目は16人の選手が必要となるわ!なので5位の緑谷くんのチームから3名出場してもらおうわ!!誰が出るかは4人で話し合って決めてちょうだい!」

緑谷「えっ?」

麗日「それじゃ...?」

(プ)マイク『5位の緑谷チームから3名が最終種目に出場決定だああああ!!』

観客「「「わああああああああああ」」」

緑谷「わああー!!」涙ブシャー!!

麗日「やったねデクくん!!」

クラフト「おめでと〜」

発目「でっ誰が出るんですか？あつもちろん私は出たいです！」

常闇「それはこの4人ともそうだろう」

誰が出るか話し合いで決めようとするが…

相澤『話し合いなんかしてたら一生決まらねえからジャンケンで決めろ』

相澤の鶴の一声でジャンケンで決めることになった。

緑・麗・常・発「「じゃーんけーんっぽんっ!!!」」

常闇「くっ…俺の負けか…」

ジャンケンに負けたのは常闇。これによって緑谷・麗日・発目が最終種目へ出場することになった。

(プ)マイク『さあ最終種目へ出場する選手が決まった!!これより1時間ほど昼休憩挟んだら午後の部だぜ!じゃあな!!おいイレイザー飯行こうぜ』

相澤『寝る…』

(プ)マイク『ヒュウ〜…』

昼休憩になり皆が食堂へ足を進め始めるなか鉄哲たちは暗い雰囲気
に包まれており…

鉄哲「どういうことだ…いつの間にかポイントが0になっていたぞ…」

塩崎「あの小人の方のポイントを穢らわしい取り方をしてしまった
罰でしょうか…?」

いつのまにかハチマキを失っていたことに打ちひしがっていた。

第22話 体育祭だ!!④

騎馬戦が終わり1時間の昼休憩となり生徒達は食堂で空いたお腹を満たす中、緑谷とクラフトは轟に呼び止められスタジアムの通路にいる。

緑谷「話って…何かな轟くん…?」

クラフト「早くしねーと昼飯食えなくなるよ?」

轟「…：…なあ緑谷、お前オールマイルトの隠し子か何かか?」

緑谷「!?!…なっ何を急に…：…つてもし本当にそうだったとしても違うって言うにきまつているから納得しないと思うけどとにかくそんなんじゃないよ…：…そもそもその…：…逆に聞くけど何で僕なんか…：…」

轟『『そんなんじゃないよ?』って言い方…：…少なくとも何かしら言えない関係がある、つてことだな?それに機神も…：…』

緑谷「…：…」

クラフト「さあ…：…どうだろうね?」

轟「…：…俺の親父はエンデヴァー、知ってるだろ?万年N02のヒーローだ。お前が^{緑谷}N01ヒーローの何かを持っているなら…：…尚更俺はお前に勝たなきゃならねえ」

クラフト「何をそこまでこだわってんだ?（一応知ってるけどそれっぽく聞いとこ）」

轟「…：…俺の親父は極めて上昇志向の強い奴だ、ヒーローとして破竹の勢いで名を馳せた。がそれだけに生ける伝説オールマイルトが目障りで仕方なかったらしい。自分ではオールマイルトを超えられねえと思っただのか、親父は次の策に出た。」

緑谷「とっ轟くん、何の話…：…?、僕に何が言いたい—」

轟「個性婚…：…知ってるよな?」

緑谷「!…：…」

轟「—超常—が起きてから第二く第三世代間で問題になったやつ。自身の個性をより強化して継がせるために配偶者を選び結婚を強いる…：…倫理観の抜けた前時代の発想。実績と金だけはある男だ…：…親父は母の親族を丸め込み…：…母の個性を手に入れた。俺をオールマイルト

以上のヒーローに育て上げることで自身の欲求を満たそうってこつた：本当にうつとうしい、そんな層の道具にはならねえ：。俺の記憶の中の母はいつも泣いている：『お前の左が醜い』と：そんな母は俺に煮え湯を浴びせた。」

緑谷「!?：」ゾッ：

クラフト「：：：」

轟「ざつと話したが俺がお前に突つかかんのは見返すためだ。クソ親父の個性なんざなくなつて：いや：使わず一番になることで奴を完全否定する」

あまりにも違う世界のため慄然りっせんとする緑谷。目指すところは同じでもこうも違うのかと：

緑谷「：：：」

轟「：言わねえなら別に別にいい、お前らがオールマとの何であろうと俺は右だけでお前らの上をいく。：時間とらせたな」

緑谷「(コミックだったら主人公だ、それほどの背景：それに対して僕が言えることなんて：)僕は：ずうつと助けられてきた、さつきだつてそうだ：僕は誰かに救けられてここにいる。(笑つて人を救けるヒーロー：)オールマイト、あの人のようになりたい：その為には1番になるくらい強くならなきゃいけない。君に比べたら些細な動機かもしれない。でも僕だつて負けられない！僕を救けてくれた人たちに応えるためにも！さつき受けた宣戦布告、改めて僕からも：」

「僕も君に勝つ!!」

轟「：」

クラフト「あー俺はあんまりうまいこと言えないが：俺は宣誓で言った通り1位を狙う。まあ人様の家庭にあれこれ言うのもあれだけど：やるなら全部使つてこいや轟」

轟「つ！：」ギロツ：

クラフト「まあ頑張ろうぜお互い、それじゃ」

互いに話が終わり解散する。そして昼休憩が終わりレクリエーションが始まろうとする。

(プ)マイク『最終種目発表前に予選落ちの皆へ朗報だ！あくまで体育

祭！ちやんと全員参加のレクリエーション種目も用意してんのさ！
本場アメリカからチアリーダーも呼んで一層盛り上げ…ん？ありや
？』

相澤『なにやってんだアイツら？』

プレセントマイクと相澤の視線の先には…

(プ) マイク『どーしたA組B組!!?』

チアリーダーの格好をしたA組B組の女子の姿があった。

八百万「峰田さん上鳴さん騙しましたわね!!?」

上・峰「ひよー!」サムズアップ!

八百万「はあ…何故こうも峰田さんの策略にハマってしまおうの私
…ズウーン…

拳藤「ちよつと考えればわかったはずなのに…なぜあの時分からな
かった私…」

取蔭「どんまい…」

耳郎「アホだろアイツら!」ブンツ

耳郎がチアが持っているポンポンを地面に投げつけたそのとき。

カシャ…

耳郎「ん?」

カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャ…!

耳郎「ちよつクラフト!あんた何撮ってんの／／!?!」

クラフト「永久保存!」

耳郎「話聞いている!」

クラフト「大丈夫!ちやんと2人のベストショット収めてるから

!!そしてプリントして部屋に飾る!」

拳藤「そういうことじゃない／／!」

耳郎「恥ずいからやめろって言ってるの／／!」

クラフト「ヤダツ!!」

拳藤「子供かつ!!」

クラフト「まだ子供だ!年齢的には!」

取蔭「屁理屈すぎんだろw!」ケタケタケタ

葉隠「まあ本戦まで時間空くし張りつめててもシンドいしさ…いい

じゃんやったる!!」

耳郎「うえええー!?」

蛙吹「透ちちゃん、好きね」

角取「とってモ楽しそうデース!」

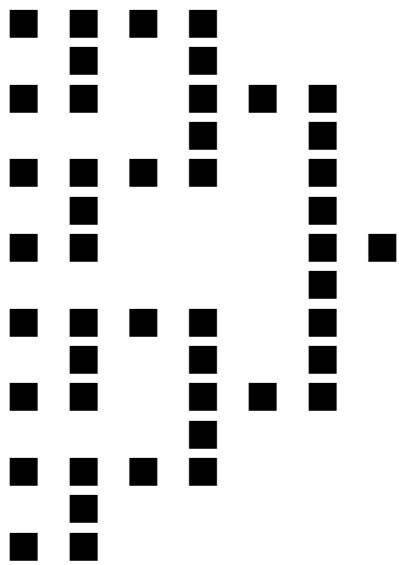
拳藤「角取まで…!?!」

レクリエーションが始まる前に最終種目、16名からなるトーナメント形式の1対1のバトル。その組み合わせをクジによって決めようとしたそのとき尾白と庄田が原作と同じように棄権した。そして空いた枠で新たに進出したのは拳藤と鉄哲であり、人数が揃ったことでクジによってトーナメントの組み合わせが決定した。

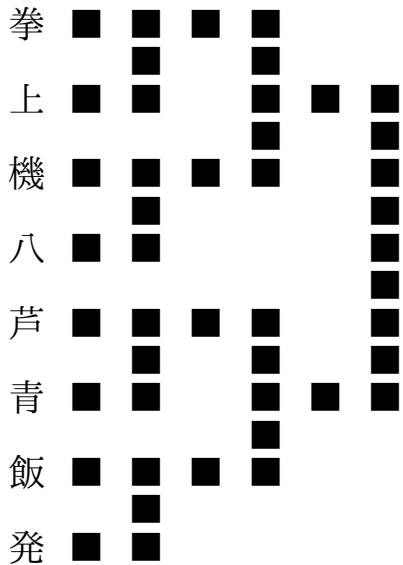
(ミ) ナイト「というわけで抽選の結果!組はこうなりました!!」

観客「[[[[ワアアアアアアアッ!![[[[[[[[

?ブロツク



?ブロツク



藤 鳴 神 百 戸 山 田 目

万

緑谷「心操って確か…」

心操「あんただよな？緑谷って？」

緑谷「《ビクッ！》…（この人が…）よろしモツ」

尾白「緑谷！」

緑谷が言葉を返そうとしたとき尾白が尻尾で口を塞ぐ。

尾白「奴に答えるな！」

緑谷「!?…」

轟（緑谷：意外と早かったな。来いよ、この手で倒してやる）
切・哲「お前とか！負けねーぜ!!」

青山「メルシィー！僕が相手で残念だったね☆！」

芦戸「ラツキーの間違いでしょ!!」

クラフト「初戦は八百万とか、よろしく」

八百万「望むところですよ！」

爆豪「ああ？…麗日？」

麗日（ヒィー!!）

発目「飯田ってあなたですか？」

飯田「むっ！いかにも俺は飯田だ！」

発目「ひょー！よかった！実はですね…」

（プ）マイク『よーしそれじゃあとーナメントはひとまず置いて
イツツ束の間！楽しく遊ぶぞレクリエーション!!』

束の間のレクリエーション…その時間はあつという間に過ぎてゆく、
そして…

セメントス「オツケーもうほぼ完成」

（プ）マイク『サンキューー！セメントス！ヘイガイズ！アアユウレディ
!!色々やってきまが結局これだぜガチンコ勝負!!頼れるのは己のみ
!!ヒーローでなくてもそんな場面ばかりだ！わかるよな!!心・技・
体に知恵知識！総動員して駆け上げ!!』

観客「「「「ワアアアアアアッ!!」」」」

（プ）マイク『?ブロック第1回戦！成績のわりに何だその顔！ヒー

ロー科緑谷出久!! 対^{バーサス}ゴメンまだ目立つ活躍なし! 普通科心操人使!! ルールは簡単! 相手を場外に落とすか行動不能にする! あとは「まいった」とか言わせても勝ちだ! ケガ上等! こちとら我らがリカバリーガールが待機してつから道徳倫理は一旦捨ておけ!! だがしかし! もちろん命に関わるようなのはクソだからアウト! ヒーローは敵^{ライオン}を捕まえる為に拳を振るうのだ!!」

心操「まいった…か、わかるかい緑谷出久。これは心の強さが問われる戦いだ」

緑谷「…」

心操「強く思う将来が^{ビジョン}あるならなり振り構ってちゃいけないんだ」

(プ) マイク『それじゃあ早速始めていくぜえ!!』

心操「あの猿はプライドがどうか言ってたが…」

(プ) マイク『レディイイイイイイ…スタアートツ!!』

心操「チャンスをドブに捨てるなんてバカだと思わないか?」

緑谷「!!…何てこと言うんだ!?!」ピキイン…

心操「…俺の勝ちだ」

(プ) マイク『オイオイどうした!?! 大事な初戦だ! 盛り上げてくれよ! だが緑谷! 開始早々完全停止!?! アホ面でビクともしねえ! 心操の個性か!?!』

尾白「あああ! 折角忠告したのに!」

麗日「デクくん…」

飯田「緑谷くん…」

(プ) マイク『全つつつつ然目立ってなかったけど彼ひよつとしてヤベえ奴なのか!?!』

相澤『だからあの入試は合理的じゃねえって言ってんだ』

(プ) マイク『ん? それは?』

相澤『2人の簡単なデータだ、個人戦になるからまとめてもらった。心操のやつ、ヒーロー科の実技で落ちている。普通科も受けていたのを見ると想定済みだったんだろう…あいつの個性はかなり強力なものだが…あの入試内容じゃポイントは稼げねえよ…』

心操「お前は…恵まれてていいよな緑谷出久…そのまま振り向いて
場外まで歩いていけ」

緑谷「……」クルツ…

(プ) マイク『ああー!? 緑谷ジュージュン!!』

心操人使 個性【洗脳】

彼の問いかけに答えると洗脳スイッチが入ってしまい彼の言いなり
になってしまうぞ! 本人にその気がなければ洗脳スイッチは入らな
い。また衝撃を与えることでも解ける。

相澤(体力テストの結果は、緑谷はヒーロー科でもなかなかの成績。
対して心操は個性は強力だが…それ以外は緑谷に劣っている。これ
なら普通にやり合って勝つのは緑谷だが…洗脳さえ攻略できていれ
ばだが、まあなんにせよ決着は早い……)

相澤が状況を冷静に分析するなか緑谷が入場してきた通路の入口に
いたオールマイトが焦った顔でオロオロとしていた。

(オ) マイト (緑谷少年…来ちゃダメー!!) あわわわわわ…

緑谷(ダメだ…体が勝手に…頭にモヤが…かかったみたい…! ち
くしよう! 生まれ! 生まれ! 折角尾白くんが忠告してくれたのに!
ちくしよう! こんなあっけなく! 皆! 託してくれたのに! こんなと
ころで——)

洗脳によつて体の自由が利かず、フィールドの場外ラインに差し迫つ
たそのとき緑谷に異変が起きる。

ザツ…ザザツ…ザザツ…

緑谷(……何だこれ!?)

幻覚のようなものが見えたかと思うと体に力が走り左の指先に集中
する。

ピクツ…

緑谷(動い——!?)

心操「分かんないだろうけど…こんな個性でも夢見ちゃうんだ」

緑谷（……）グツ…ヒュバツ！

ブワアアツ!!

心操「っ!？」

（オ）マイト「おおっ!？」

緑谷がラインを超えそうになった瞬間突如激しい風圧が発生する。

緑谷「…ハアツーハアツハアツ…」

（プ）マイク『これは!?!…何と緑谷ギリギリとどまったああー!?!』

観客「「「ワアアアアアアアツ!!」「」」

相澤（指が…暴発させて洗脳を解いたのか）

尾白「すげえ無茶を…!」

クラフト（めっちゃドキドキした…）

心操「なんで!?!体の自由は効かないはずだ!何をした!?!」

緑谷（指は僕だ!…でも指を動かさせたのは!?!…なんだ!?!…知らない人達が浮かんで一瞬間がはれた!…人…この力を繋いできた人たちの…気配!?!救ってくれた!?!あるのかそんなこと!?!…いや今は目の前のことに集中だ…考えるのはあとだ!）

心操「答えない!?!…ネタ割れたか!?!いやはじめからあの猿の奴に聞いてたはず…ならまた口開かせるしか…）何とか言えよ…」

緑「…!?!」ジリッ…

心操「くくく…!、指動かすだけでその威力か!羨ましいよ!」

緑谷（僕もそれ昔思ってた…!）

心操「俺はこんな個性だからスタートから遅れちゃった!恵まれた人間には分からないだろ!」

緑谷（分かるよ…でも…僕は恵まれた）

心操「あつち逃え向きの個性に生まれて望む場所に行ける奴らにはよ!!」

緑谷（人に恵まれた!!だからこそ僕だって…O F Aフルカウル!）
シユダツ!

心操「なっ早っ!?!」

緑谷「スマアアアアアツシユ!!」ドムツ!!

心操「ぐほっ!?!」

緑谷の攻撃をモロに腹に受けそのまま後ろに勢いよく飛ぶ心操。

ドサツ…

(ミ) ナイト「心操くん場外！緑谷くん2回戦進出!!」

観客「ニニワアアアアアアアツ!!」「ニニ」

上鳴「爆豪も一発殴られてたよな？」

爆豪「黙れアホ面」

上鳴「……」ズーン…

(プ) マイク『IYAHHA!!初戦にしちや地味な戦いだっただが両者の健闘を称えてクラツプユアハンズ!!』

パチパチパチパチパチ…

緑谷「…心操くんは何でヒーローに？」

心操「…憧れちまったもんは仕方ないだろ…」

緑谷「………!!」(その気持ちはOFAを継ぐ前の僕と同じだ…でも今の僕が何を言っても…)

緑谷がそう思いながらも心操が入場ゲートに差し掛かると…

普通科「かつこよかったぞ心操ー!!」

心操「…!?!」

普通科「おつー!」「俺ら普通科の星だな!」「障害物競走2位の奴」といい勝負だったじゃねえか!!」「それによ…」

普通科の生徒の1人が観客席にいるヒーローに指を向ける。

ヒーロー「あの個性、対敵ツインに関しちやかなり有用だぜ?ほしいな…」「雄英もバカだなー、あれ普通科か?」「まあ受験人数ハンパないから仕方ないっていう部分もあるけどな」「戦闘経験の差はなー」「どうしても出ちまうもんなー」

普通科「聞こえるか心操、お前すげえぞ!!」

心操「……結果によっちゃヒーロー科編入も検討してくれるらしい…覚えとけよ!今回はダメだったとしても絶対諦めない!ヒーロー科入って資格習得してお前らより立派にヒーローやってやる!」

緑谷「——うん!!」(あつやられー試合終わったのになんで…?)

心操「普通かまえるんだけどな、俺と話す人は…そんなんじやすぐ足を掬われるぞ。せめてみっともない負け方はしないでくれよ?」

緑谷「(心操くん…)——うん!あつ…」

心操「……」

こうして？ブロック第1試合、緑谷VS心操の試合は緑谷の勝利で終わるのであった。次の第2試合の轟VS瀬呂の試合なのだがこれはもう気の毒としか言えない。轟の最大威力の凍結によって秒殺されてしまいスタジアムからはドンマイコールが響いたのであった。第3試合、切島VS鉄哲、両者引き分けにより2人が回復したあと簡単な勝負でによって決められるそうだ。？ブロック第一回戦第4試合麗日VS爆豪。原作と同じように爆豪の容赦ない攻撃に対してブーイングが起こるが、相澤の一括によって収まり結果は爆豪の勝利で終わる。そして？ブロック第一回戦の試合がすべて終わるといよいよ？ブロックの試合が始まる。

第23話 体育祭だ!!⑤

?ブロック第一回戦の試合が全て終わり続いて?ブロック第一試合が始まるうとしていた。

——スタジアム——

(プ)マイク『さあ?ブロックの試合が終わったら次は?ブロックの試合だオーディエンス!!アーユウレディ!』

観客「〇〇ワアアアアアアアアッ!!」

(プ)マイク『それじゃー早速始めていくぜえっ!?ブロックの初戦はこいつらだあ!!スパークキングキリングボーイ!ヒーロー科上鳴電気!!』

上鳴「へへっ悪いけど勝たせてもらうぜ?」

瀬呂「あいつ大丈夫か?」

蛙吹「そうね、上鳴ちゃんの個性は強力だけど…」

耳郎「あいつアホだからなー」

(プ)マイク『^{ヴァーサス}V S! B組の姐御的存在!ヒーロー科拳藤一佳!!』

拳藤「悪いけどそうはいかないよ」

小森「一佳やっちゃえノコー!」

取蔭「そんなやつ簡単にやっつけちゃいな!」

物間「ハ—ハッハッハッ!!拳藤! A組の奴なんか捻りつぶへっ!?」
バキッ!

泡瀬「物間うるさいぞ」

(プ)マイク『それじゃレディイ…スタアアトツ!!』

上鳴「あんた、機神の彼女さんなんだろう?」

拳藤「?…それがどうしたのよ?」

上鳴「あいつの彼女の1人らしいけど、彼女2人もいたら色々疲れてるんじゃない?今度よかったらお茶でもしない(笑)?」ヘラヘラ

拳藤「…はっ?」

上鳴「あっこれを機に俺の彼女に—」

拳藤「おい…」

上鳴「んっ…?」

拳藤「覚悟は出来てんだろうな…?」

！ヒーロー科八百万百！ヴァーサスVS!!こちらは万能個性か!?特選入学者の名は伊達じゃねえ!ここまでトツプの成績!ヒーロー科機神クラフト!!』

尾白「緑谷はこの試合どう見る?」

緑谷「正直…八百万さんが勝てる可能性は限りなく低いと思う。だけれど何か大きな隙を付ければ可能性は…」

尾白「隙か…」

八百万(プレゼントマイク先生の言った通り:相手は万能それを思わせるかのような個性の持ち主の機神さん。しかも機神さんは個性に關しての情報は隠しており、いったいどのような個性なのか分からない状態:下手をすれば何もできないまま場外に出される可能性もある。ここは素早く創造できる武器を作って接近し——)

(プ)マイク「それでは試合:スタアアトツ!!」

八百万「はっ—!?!」

クラフト「……」

八百万「?:(攻撃してこない?:(なら!)」シユアアア……

八百万は右手に鉄パイプ、左腕に盾を創造して構える。

クラフト「:準備できた?」

八百万「!?:まさか待っていてくれたのですか!?!」

クラフト「そうだよ?いけなかった?」

八百万「いえ:ですが随分と余裕ですね?私は簡単に倒せると?」

クラフト「まさか、相手が準備出来てから戦う。これは一応俺なりの礼儀だよ?」

八百万「そうでしたか:なら私もあなたが準備を待ちましょう」

クラフト「おっ悪いね、では:変身!」シユインシユインシユイン!

クラフトの体が光の粒子が纏いLBXジョーカー Mk. 2へ変身する。

(プ)マイク『あつーと機神!予選で見せたロボットへ変身したあ!!しかしその姿は予選で見た姿とは違い今度はまるで道化師のようなロボットだああ!!』

観客 「「「ワアアアアアアアッ!」」」

八百万 「(予選で見たタイプとは明らかに違う…)準備できましたか…?」

クラフト 「悪いね〜それじゃ始めよか?」

八百万 「望むところですよ!!」ダダッ!

(プ)マイク 『八百万!機神の変身を見届けるとソッコー仕掛けたあつ!!』

クラフト 「(接近して近接戦っていうのもいいけど創造を警戒して一撃離脱がいいかな?)…近接戦がお望みか?」ガシャシャシャシャッ!!

(プ)マイク 『機神も動き出したっ!ロボットだからか速ええ!!』

八百万 「(速い!…ですが対応できない速さでは—)」

クラフト 「まずは…」グアッ!

持っている武器(サイズ)を振り上げて八百万に向かって勢いよく振り降ろす。それに反応して盾を構えて防御する八百万。

ガアアン!!

八百万 「くっ!!見た目に反してパワーが…」

クラフト 「……」バツ…

八百万 「(?…後ろに下がった?)」

クラフト 「……(意外とゴリ押しでいけるか?)」

八百万 「(…もしかして警戒している?)…機神さんどうしたのですか?」

クラフト 「!…なにがだい?」

八百万 「いえ…あなたの個性なら私の位置を変えるなりして勝つことが出来るはずですが…なぜそれをやらないのかと……」

クラフト 「流石にその類の力を使うのはダメかなって思ってたね」

八百万 「なるほど…後悔しても知りませんよ!!」ダダダッ!

クラフト 「そんな予定はない!!」

八百万 「ハアアアアッ!!」ブオンツ!

キインツカアンツ!

八百万の鉄パイプによる攻撃が繰り出される。

(プ)マイク『八百万！機神を押ししているー!!このまま勝利へ持っていきけるかっ!!』

クラフト「こんな攻撃じゃ俺は倒せないぞ?」

八百万「ええっ!わかってますわそんなこと…だから次の手を打つまでですわ!!」シユアアア…ババツ!

クラフト「これは!?!うおっ!」バサツ!

八百万が何かを創り出したかと思えば次の瞬間クラフトに大きな網が覆いかぶさり絡まる。

(プ)マイク『ああーっ!ここで機神が網に掴まってしまおうー!!これは絶対絶命かあっ!!!』

相澤『並の相手ならこれでもいいが…相手は機神だからな。そう簡単にはいかねえだろ』

八百万「機神さん…詰みです」ガチャ…

八百万がそう言いながらサブマシンガンをクラフトの顔に近づけて構える。

クラフト「いやーちよつと油断しすぎたかな…でもこの程度じゃ降参はしないね(スナスナの能力)」サアアア…

八百万「ー!?!」

(プ)マイク『なっなんと機神!体が霧状に変化して網から抜け出したあー!!』

観客「ニニワアアアアアアツ!」ニニ

クラフト「今度はこっちの番だ!」ガシヤシヤシヤシヤシヤツ

!!

(プ)マイク『機神!網から抜け出したかと思えば今度は八百万の周りを円を描くように高速移動を始めたあっ!!』

八百万「くっ!速すぎて狙いが…!」

八百万が困惑していると…

ヒュウン…ヒュウン…

観客「おい、なんか機神ってやつ増えてね?」「はあ?何を言って…」

「いや俺もそう思うー!」「やっぱそう見える!?!」

ステージで起きている異変に観客が気づきはじめざわつく。そして

：

(プ)マイク『なつなんと高速移動して止まったかと思えば機神が…増えたあー!?!』

八百万「なつ!?!これはどういうことなのっ!?!」

クラフト「分身の術ってね!」

八百万「分身の術なんて…! (もしそうなら影を見れば…3体とも影が!?)」

クラフト「どうした驚いた顔なんかして?もしかして影を見ればわかるなんて思った?」

八百万「くっ!」ドタタタッ!!

思っていることを当てられたため焦ってサブマシンガンを撃つ八百万。

クラフト「おつと危ないな!」シュバツ!

八百万「ということはあなたが本体で—《ドガッ!》—っっ!?! (後ろ…から!?)」

クラフト「影があるということとは実体があるということ…: 戦闘訓練で俺がロボットを操っていること忘れた?」

八百万「(そう…:でしたわ、私としたことが…:) それでも私は—!」

クラフト「いや終わりだ」シュツ…:ドゴツ!

八百万「—かつ!?!…:は」

八百万がダメージを負った際にクラフトが接近し石突の部分で鳩尾に重い一撃が入りダウンする八百万。

クラフト「…卑怯くさいけど卑怯なんて言わないでね」

(ミ) ナイト「八百万さん戦闘不能!機神くん二回戦進出!!」

観客「ニニワアアアアアアアアアッ!」ニニニ

無事二回戦へ進出したクラフト。A組の観客席に戻ると称賛とお疲れの言葉をかけられる。が「女子に対してやり過ぎ!」とクラスの子から言われてしまう。主に芦戸と葉隠。

クラフト「そう言われてもなー、手を抜くわけにもいかないし…」

葉隠「君ならもつと優しく出来たはずだ!」クワツ!

芦戸「そうだ!」

クラフト「ええー…てか芦戸行かなくていいのか？次試合だろ？」
芦戸「はっそうだった！じゃ行ってくるね皆！」

蛙吹「頑張って三奈ちゃん！」

葉隠「頑張ってね！」

芦戸「ありがとー！」ドダダダッ！

そう言いながら走ってステージに向かう芦戸だった。

クラフト「ふいゝ危機は去ったってか？」

瀬呂「お疲れだったな機神いゝ（笑）！」

クラフト「サンキュー瀬呂」

耳郎「お疲れクラフト」

クラフト「サンキュー響香」

耳郎「でも確かに葉隠の言う通りもうちよつと優しく出来たんじゃないの？」

クラフト「うーん…さつきも言った通り手を抜いたら失礼だし…」

峰田「おい機神い…」

クラフト「…なんだ峰田？」

峰田「お前には失望したぜえ…てめえの鎌見て期待したのによお…！」

クラフト「何をだよ…」

峰田「決まってるだろ！あの鎌で八百万の服が淫らになることによお!!なのにてめえは!!」血涙ダバー!!

瀬呂「お前なあ…」

切島「お前ダメだぞ？」

葉・耳「サイテー」

蛙吹「最低よ、峰田ちゃん」

クラフト「第一あの鎌に刃はついていないし、そんなことできる分けねえだろ。てかまずそんなことやっちゃいけないーだろ？」

峰田「あゝあん?!いい子ぶってんじやねえ!間近であるヤオヨロツパイを堪能したんだろ!!」

クラフト「!…!…!峰田そのへんにしとけ、それ以上は身の安全を保

障できないぞ」

峰田「うるせー！オイラがもしトーナメントに出ればあのヤオヨロツパイを」

八百万「ヤオヨロツパイを…なんですか？峰田さん？」

峰田「——ひよつ!？」ギギギギギ…

油の切れたブリキ人形のような音を立てながら顔を後ろに向ける峰田。そこには俺に受けたダメージから回復した八百万が仁王立ちしていた。

八百万「ヤオヨロツパイをどうするんですの？峰田さん？」ニコツ

：

峰田「あわわわわわ…おっおい瀬呂お…」（ガタガタガタガタ

…）

瀬呂「次の試合どっちが勝つかなく（汗）」

峰田「かつ上鳴い…」

上鳴「さっさあどっちが勝つだろうなく（汗）」

峰田「きつ切島あ…」

切島「おっおおそうだな…芦戸なんじゃねえのか（汗）」

助けを求めるように周りを見るが皆顔をそむける。そして最後にクラフトの方へ顔を向けるが…

峰田「はっ機神い…何とか…（涙目）」

クラフト「俺は忠告したぞ…安心しろ、命は保障されるはずだ…たぶん…」

峰田「おっおい！最後なんて言った!?!たぶんって言ったか!?!お—」
八百万「さっ峰田さん、少しあちらでお話しましょうか？」ゴゴゴゴゴゴ…ニコリ

峰田「いつ嫌だ…いやだああああああああああああああ!!」

峰田の断末魔と言える叫びはスタジアムの観客の声にかき消され、数分後に戻ってきた峰田は抜け殻となって帰ってきたのであった。ああ、一応試合の結果は言っておこう。まず芦戸VS青山は芦戸が青山のベルトを溶かし、青山が混乱してる間に接近しアゴに一発入れて勝利した。そして飯田VS発目は発目のサポートアイテムの実演説明

会の鬼ごっこであった。最終的に満足した発目が自ら場外に出て飯田の勝利となった。そのことに飯田は色々と呼んでいた。

飯田「騙したなあー！！？」

発目「すいません、あなたを利用させてもらいました」フッフフ…

飯田「嫌いだきみー！！」

こんなことがありながらも二回戦出場者は決まるのであった。

第24話 体育祭だ!!⑥

?ブロック及び?ブロックの第一回戦が終わり続いて第二回戦がもうすぐ始まるうとしていた。

——スタジアム——

クラフト「次は緑谷対轟か…」

瀬呂「轟か…緑谷はあの氷結をどう攻略するかにかかってるな」

飯田「緑谷くんはの個性は超パワーと炎だからそれを上手く使えば問題はないと思うが？」

常闇「だがあの最大威力のやつがきたら流石に厳しいんじゃないか？」

クラフト「炎で溶かせば問題はないとは思うが、それでもどうなるかはわからない」

色々と予測していると試合が始まる。

・
・
・
・

緑谷「君の!!…力じゃないか!!」

凍結しか使ってこない攻撃に対してOFAと炎を使って無力化しながら、原作と同じように血に囚われている轟を救おうと緑谷は行動していた。そして…

轟「勝ちてえくせに…敵に塩送るなんて…ふざけた野郎だ…俺だつてヒーローに…!!」ボオオオオオ…

忘れていた記憶を思い出し左の炎を開放する轟。そしてお互い決着の為動く。その途中セメントスがやばいと思ったのか個性を発動させるが一足遅かった。緑谷と轟の攻撃はぶつかり合いスタジアムに嵐を連想させる程の突風を発生させる。そして煙が晴れステージに

立っていたのは……

(ミ) ナイト「……轟くん場外!!緑谷くん3回戦進出!!」

観客「ニニワアアアアアツ!!」

クラフト「……(さて行きますか!)」

クラフトは座席を静かに立ち上がり控室に向かう。その途中、試合を終えた緑谷と会う。

クラフト「おう緑谷、お疲れさま」

緑谷「機神くん、ありがとう……」

クラフト「まあ何はともあれお疲れヒーロー!」スツ……

緑谷「!……うっうん!」スツ……

パアンツ!

クラフトと緑谷は互いにハイタッチをしその場を離れる。クラフトが控え室に到着すると爆豪VS切島の2回戦が始まり序盤は切島の優勢だったが、硬化の綻びをつかれ爆豪の連続爆破攻撃を受け最後に強烈な爆破をお見舞いされダウンし爆豪が3回戦へ進出した。そしていよいよBブロックの2回戦クラフトVS拳藤の試合が始まる。

(プ)マイク『さあお次はBブロック2回戦コイツラだあ!!立ちほだかる相手を巨大な拳で打ち倒す女闘士拳藤一佳!!^{ヴァーサス}VS何だコイツの個性は!もはや何でもありなんじゃねーの!?!機神クラフト!!』

拳藤「女闘士って……」

クラフト「なんでもはいすぎじゃない?」

拳藤「機神……」

クラフト「ん?……なに拳藤?」

拳藤「私が彼女だからって手え抜くんじゃないよ……?」

クラフト「……手は抜いてるつもりはないんだけどね……さっきの試合は拳藤的にそう見えた?」

拳藤「八百万んは悪いけど私にはまだ優しく見えたね……アンタが本気になればあの程度じゃすまないでしょ……」

クラフト「……いいんだな拳藤?」

拳藤「そうでなきや私は納得しないよ」

クラフト「わかった……」

拳藤「サンキュー機神。それでこそ私の彼氏だよ」
クラフト「まあな」

(プ) マイク『話は終わったか!? それじゃあ第2回戦…スタートオ!!』
クラフト(変身! LBX Gレックス!) シュインシュイン…

拳藤「!…」

(プ) マイク『機神! 一回戦と同様にロボットに変身したあつ!! 今回の姿はかつて地上を支配していた古代の生物のなかでも最強と呼ばれる存在!! Tレックスを彷彿とさせる姿だあつ!! カッコいいいい!!』

観客「〇〇オオオオオオオツ!!」

拳藤「(大きいな…見た感じパワータイプかな…?)…もしかして私と同じ土俵で戦うつもり?」

クラフト「手は抜いてねえぞ。それに相手が格闘で来て銃で戦うつてのはちよつとな…まあ俺はあんまり偉そうに言えないけど…」

拳藤「なるほどね…後悔するんじゃないよ!」 ダダダツ!

そう言つて拳藤は走り出しクラフトに攻撃を仕掛ける。

拳藤「喰らいなつ!!」 グアツ! ドガツ!

クラフト「ぐおつ!!」(思ったよりパワーあるな…!) ヨロリ…

拳藤「ほらほらっ! 次いくよ!!」 グアツ!

クラフト「ふんっ!」 ガギンツ!

拳藤「なつ…!?! (今度はよろけなかった!?!)」

クラフト(確かにこのパワーは脅威だがこのGレックスなら踏ん張れば余裕で耐えられるな…)

拳藤「ならこれはどうだ!」 ドガガガガツ!

拳藤は大拳による連続攻撃をする。

クラフト「これは…なかなか…だが!」 ヒュツ…ドゴツ!

拳藤「だつ…!?!」

クラフト「この程度の攻撃じゃこの装甲にキズ一つ付けられないぞ」

拳藤「いたたつ今のは効いたよ機神…その程度の攻撃か…ならそれを上回る攻撃をするまでだ!」

クラフト「やってみな!」

拳藤はそう言いながら個性の大拳を解除しながらクラフトに接近する。

クラフト(?!:なんで大拳を?)

拳藤(殴る瞬間に:) タタタ:

クラフト「なにをする気だ:」

拳藤「歯あ食いしほりな機神!」 ヒュツ!!

双大拳!!

ドゴオツ!!

クラフト「ぐふっ!? (この技は:!)」

(プ)マイク「ここで拳藤の技が炸裂うー!!そして機神は思った以上にダメージを受けているようだー!!」

防御をしていたが思った以上の威力に驚くクラフト。そして防御をしていた腕の装甲に:

ピキツ:

クラフト「!?:(マジか:まさか素手で装甲にヒビが入るとは:)」

拳藤「油断対敵ってね:その装甲を過信しすぎたようだね:あと攻撃しないの:~?」

クラフト「いや今までの様子見だ:」

拳藤「!::へえ随分余裕じゃん」

クラフト「まあ:なっ!」 ダダダダツ!!

拳藤(速っ!?あの大ききでこんな速き出んの!?)

クラフト「オラツ!!」 ボツ!

拳藤「っ!!(だけどまだ反応できる速さ!それに速いけど動きは素人!)」

クラフト「!!:(この速さを避けた:やっぱ格闘経験者だからか?):
:なら数で圧倒するまで!!」 ボボボボツ!!!

拳藤「くっ:!!」

(プ)マイク『機神!ここで攻勢に出て怒涛のラッシュウウー!!しかしそれを拳藤は避け続けるー!!』

観客「!!!ワアアアアアアアッ!!!」

クラフト「くそっ:~!」

拳藤「いくら速くてもその動きじゃ私には一生当たらないよ」

クラフト「そりやどーも！」グアツ！ドゴン!!

拳藤「よつと！（いま！）」シュバツ！タタン！

拳藤はクラフトの強烈な右の一撃を避けその右腕を利用して後ろに回り込む。

クラフト「なっ!?俺の腕を利用して…!?」

拳藤「アンタが大きいおかげだよ！」

拳藤は大拳を発動して背中を攻撃しようとした次の瞬間。

ヒュツ…ドゴオツ!!

拳藤「かはっ!?」

突如わき腹に強烈な一撃が襲いそのまま軽く飛ばされ地面に倒れる。

拳藤「ゴホゴホツ…はーはー…（なつなにが…?機神は確かに前を向いていたのに…）」

(プ)マイク『華麗に後ろに回り込んだと思えば吹き飛んだのは拳藤う!?どういうことだあっ!?』

—— A組B組観客席 ——

蛙吹「彼女さんなのに容赦ないわね機神ちゃん」

上鳴「うへー機神すげえな。俺なんてつい手加減を…」

蛙吹「ぶっ飛ばされてたわ上鳴ちゃん」

上鳴「あつあのな梅雨ちゃん…」

瀬呂「だけど機神の攻撃をすげえ避けてたぜ拳藤のやつ」

切島「ああそれに後ろに周りこみもしたもんなすげえぜ！」

常闇「だがそれもここまで…」

葉隠「なんで後ろに回り込んだ拳藤ちゃんが逆に倒れてんの!?」

A組が色々と話し込んでいると隣のB組からある男が壁越しに現れる。

物間「おやおやく〜!A組の彼は彼女でもある拳藤に容赦なく暴力を振るのかい!?まさか本当は—」

ヒュツ!…

物間「っ!?」

耳郎「それ以上何を言う気…?」

物間「えっいや…」

耳郎「なに？」ゴゴゴゴゴ…

物間「ひっ!? なっ何でもありません!!」

物間は気圧されたのかそのまま客席に戻った。

耳郎「ふんっ…」

葉隠「耳郎ちゃん…」

耳郎「あいつがそんなヤツなわけあるか。彼女だからって手え抜いたらウチが許さん」

八百万「耳郎さんは機神さんのことをとても大事に思っているしやるのですね！」

耳郎「!!／／《ボッ!》…なっ何言って—!?／／／」

葉隠「耳郎ちゃん乙女く〜!!」

耳郎「だあああやめろお!!／／／」

観客席で色々ありながらも試合は終盤に進む。

拳藤「はあ…はあ…(あの一撃もらって体に力がうまく入らない)クラフト「次で終わりだ…」ザッ…

拳藤「結構いけたと思っただけだな…そうだね…いくよ機神！」

クラフト「来いやあ！」

拳藤「うおおおおおっ!!」ダッダッダッダッダッ!!

拳藤は最後の力をふり絞り大拳を発動させクラフトに向かっていく。

クラフト「個性がなかったらお前が勝ってたよ…必殺ファンクション!!」

アタックファンクション そうけんらんげき 蒼拳乱撃!!!

クラフトが変身しているグレックスが装着しているナツクルダスター系の武器にエネルギーが集中すし、そのエネルギーが溜まった拳を拳藤に向かって4発打ち込む。

ボッ!ボッ!ボッ!ボッ!

打ち込まれた4発のエネルギー弾は曲がることなく拳藤に向かって

いき…

ドオオオオオオンッ!!!

(プ) マイク『ステージで爆発う!! 決着はどうなったあ!!?』

爆発で発生した煙は徐々に晴れていきステージが見えてくる。そこには…

拳藤「……」

(ミ) ナイト「拳藤さん行動不能!! 機神くん3回戦進出!!」

観客「「「ワアアアアアアアッ!!」「」」

クラフト「さて…」

変身を解き倒れている拳藤へ近づく。

クラフト「よっこらせ! ヒョイ! …ミッドナイト、このまま自分が医務室まで運びますのでロボットはいいですよ」

(ミ) ナイト「分かったわ! んはあー! 機神くんあなた青春してるわー♡!!」

クラフト「興奮しすぎですよ」

クラフトは拳藤を抱きかかえてそのままステージを降りて医務室に向かった。なおこの様子はもちろん全国放送されていたためネットでは嫉妬の声や黄色い声などが多く上がったのであった。

——医務室——

拳藤「……ん…」

(リ) ガール「おや目が覚めたかい?」

拳藤「ここは…」

(リ) ガール「ここは医務室だよ」

拳藤「医務室…:…そっか私負けたんだった…」

(リ) ガール「落ち込むことはないさね。あんたはあの子に対してよく戦ったよ」

拳藤「機神を知ってるんですか…」

(リ) ガール「ちよいとね、ああ一応言伝を預かってるよ」

拳藤「言伝?」

(リ) ガール『今の個性があるからこそ俺は勝てた』だつてさ」

拳藤「！(それってつまり)……う……う……」ポロポロ……

(リ)ガール「全くこういうのは自分で言うもんだよ……」

涙を流しながらもこの試合とクラブトの言葉によって少し成長できた拳藤であった。

第25話 体育祭だ!!⑦

?ブロック2回戦最後の試合。芦戸VS飯田の試合は飯田が開始直後にレシプロバーストを使い芦戸の後ろに回り込む。そしてそのまま両肩を掴み場外へ向けて押し出したことよって飯田が3回戦へ進出した。

(プ)マイク『飯田秒殺! さあこれで準決勝へ駒を進めた4人が出揃ったあつ!? ブロック準決勝は緑谷VS爆豪!!? ブロック準決勝は機神VS飯田となったぜ!! さあここからさらに盛り上がるぜアーユーレディ!!?』

観客 「「「ワアアアアアアアアアアッ!!」」」

決勝に近づくにつれてスタジアムのボルテージがどんどん上がっていく。

(プ)マイク『それじゃあ? ブロックの準決勝を始めていくぜっ!! その身に宿すパワーと炎で立ちはだかる相手を打ち破ってここまでやって来た! ヒーロー科緑谷出久!!』

緑谷 「……………」

(プ)『VS! 顔は凶悪だが圧倒的戦闘力!! その力を持って相手をねじ伏せる男!! ヒーロー科爆豪勝己!!』

爆豪 「……………」

幼い頃からの幼馴染同士だが、その2人の間に流れている空気はピリピリとしていた。

(プ)マイク『両雄ステージに立つ! さあこれ以上何かを言うのは野暮ってもんだ! 始めていくぜえ! レディイイ: START!!』
そしてプレゼントマイクによって試合が開始されたのであった。

.....

緑谷のOFAと炎の個性で爆豪は爆破の個性、どちらも強力な個性である。試合の中盤までは両者接戦だった。しかし緑谷の炎の個性の隙をついた爆豪が流れを掴み勝利した。

(プ)マイク『白熱した接戦だったが勝利を掴み取ったのはヒーロー科A組の爆豪ー!!?ブロックを制し決勝へ進出うー!!さあ?ブロックが終わったから?ブロック最後の試合を始めるぜええ!!』

観客「ニワアアアアア!!ニ」

(プ)マイク『その足はどこまで加速する!?圧倒的スピードで相手を圧倒!!ヒーロー科飯田天哉!!』

飯田「勝たせてもらうぞ!機神くん!!」

(プ)マイク『V S!お前の個性は一体何なんだ!まだ何か隠してるんじゃないだろうな!?ヒーロー科機神クラフトー!!』

クラフト「もはや紹介分が質問になってる:つとそうはいかないね委員長!」

飯田「(相手はあの機神くん:油断などできない!)」

(プ)マイク「準備はいいか2人とも!?それじゃあいくぜえ!レディイイ:START!!」

プレゼントマイクが試合開始の合図と同時に飯田はクラフトに仕掛ける。

(プ)マイク『飯田速攻ー!!相手に何かさせる前に終わらせる気だああ!!』

相澤『確かに相手が機神あいつならこの手は合理的だ:だが:』

クラフト「つと変身してる暇はないな:(オペオペの能力):RO OM!!」ブウウン:

飯田「ーっ!あれは確か:ー!」

クラフトが右手を前に出すとそこを中心に薄い青色のドームが形成される。

クラフト「シャンブルズ!!」

飯田「むっ!」

クラフトがそう言うのとクラフトと飯田の場所が入れ替わる。

飯田「おっ!とと!!やはり場所を入れ替えるやつだったか!!」

(プ)マイク『飯田！突然場所が入れ替わるも冷静に対処するー!!こんなやられたら俺は普通にテンパるぜー!!』つと飯田との場所を入れ替えたすきに機神は姿を変えるうう!!』

クラフト「(変身、LBXナイトメア!)…やっぱ場所を入れ替えたくらいじゃダメか」

飯田「(八百万くんとこの試合で使用したロボットの雰囲気似ているが見た目が違う…)もしやと思うが…スピード勝負をするつもりか、機神くん？」

クラフト「ダメかな？委員長」

飯田「…いや、望むところだ！機神くん!!」

飯田はそう言うのと再びエンジンをふかしクラフトに勢いよく向かう。

クラフト「ありがとう委員長!!」ガシヤシヤシヤシヤ!!

飯田「(速い…!!)だが!」

飯田が得意の蹴りの間合いに入るとすかさずクラフトに向かって蹴りを繰り出す。しかし、LBXナイトメアの反応速度をもってクラフトは飯田の蹴りを容易く躲す。一発目を交された飯田は隙を与えず蹴りを繰り出すがことごとく躲される。

飯田「俺の蹴りをこうも躲すとは…流石だ機神くん!」

クラフト「いやいや、その蹴りなかなか怖いよー?」

飯田「もやは出し惜しみはしてられんな…」

クラフト「ー! (レシピプロか…いけるか…?)」

飯田「レシピプロ…バースト!!!」DRR!!!

レシピロボースト…トルクの回転数を操作して爆発的な加速を生み出す技。その速度は脅威的である。

クラフト「っ!はやー!」

クラフトがそう思った次の瞬間には、飯田の右足の蹴りがクラフトの頭に直撃した。

飯田「ふっ!!」

ゴッ!!

クラフト「つつつ〜!」

——観客席(A組)——

瀬呂「もろに入ったぞ！」

尾白「あの機神に一発入れるなんて…！」

上鳴「こりや番狂わせあるか!？」

クラフトに一撃を食らわせたことによりざわつく観客席。しかし、飯田が二発目の蹴りを繰り出しクラフトに当たろうとしたそのとき…

飯田「このまま決め——!？」
ガシっ!!

クラフト「痛つてくく!、避けれると思つて余裕かきすぎた…まさ
に油断大敵」

飯田「くっ！」

クラフトに止められた片方の足をクラフトの手から引き剥がし、一旦後ろに下がり再びクラフトに攻撃をしようとして超加速で接近するが…

クラフト「今度はこちらのターン!!」

飯田「なにつ!？」

飯田が驚くとクラフトは飯田と同じように加速を始める。その速度はどんどん上がっていき、やがて八百万のときと同じように分身が現れる。しかし、その分身は1つ違うことがあった。それは分身が加速によつて生まれた本物の分身であるということ。

(プ)マイク『機神!八百万との戦いで見せた分身をここで発動——!!
しかもその数は3体ではなく5体だとおおお!!?』

飯田「あと5秒…!」ヌウウウ!!」

クラフト「捌ききれるかな—」

クラフトは飯田のレシプロバーストを超える速度で分身を形成しながら接近する。それを飯田はレシプロバーストを用いた蹴りで対処しようとするが、焼け石に水と言うように自身に近づいたクラフトを蹴るもそれは分身。そしてクラフトの本体に攻撃を当てられぬままレシプロバーストの使用時間が経過してしまふ。

プスン…

飯田「しまつ…!!」

クラフト「どうする委員長?いや、飯田」

クラフトはナイトメアの標準装備武器であるロッドを飯田に突きつ

ける。

飯田「くっ…降参だ…！」

(ミ) ナイト「飯田くん降参！機神くん決勝戦進出!!」

(プ) マイク『機神！圧倒的速度で飯田を翻弄し勝利を掴み取ったアアア!!! さあこれで決勝の役者は揃ったア!! 決勝戦は爆豪VS機神!! 果たして栄光の優勝はどっちが取るのか!?! 15分の休憩ととつたら始めるぜ!! 気合い入れてけえー!!』

観客「「「ワアアアアアアアア!!!」」」

決勝戦へ駒を進めたクラフト。相手は才能マンの爆豪。果たして勝利の女神はどちらに傾くのであろうか。

体育祭だ!! (終)

? ブロック? ブロックの準決勝が終わったり残すは決勝戦のみになり会場のボルテージは最高潮に達していた。

(プ) マイク『待たせたなりスナー!!! さあいよいよラスト!! 雄英1年の頂点がここで決まる!! 決勝戦爆豪VS機神!!!』

観客 「!!! ワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

(プ) マイク『オーケーオーケー!! それじゃあ始めるぜ!! 爆豪VS機神! いま: START!!』

爆豪 「死ねえええー!!!」

クラフト 「(ボムボムの能力...) 言葉使い直そうか!」

BOOM!!!

爆豪が爆破でクラフトに接近し右手の大振りでも爆破攻撃をする。それに対しクラフトも右手でパンチを繰り出す。しかしそのパンチは普通のパンチとは違った。

爆豪 「つ!... てめえ...」

クラフト 「俺がどういう個性を使おうとも俺の勝手だ。それにこの個性は強いんだろ?」

爆豪 「このハゲ野郎がつ!!... まあいい、てめえをブツ殺しやあいだけだ。それに戦闘訓練での借りを返させてもらうぜ!!」

クラフト 「悪いが負ける気はない!! (LBXジ・エンペラー!)」

クラフトはLBXジ・エンペラーに変身し、専用武器であるエンペラー・ランチャー(ミサイルを内蔵したハンマー)を構える。

(プ) マイク『機神! ここでもロボットに姿を変える! しかしその姿からにじみ出る雰囲気はまるで王者の風格!!』

爆豪 「ハッ! 勝者は自分ってか!? 勝つのは俺だ!!!」 タタタタッ!!

クラフト 「だったら避けてみな!!」

クラフトはエンペラー・ランチャーのミサイルが搭載されている面を、向かってくる爆豪の方へ向けるとミサイルを発射した。

ドドドドドッ!!!

(プ) マイク『機神! 爆豪にミサイルの波状攻撃!! 爆豪ピンチかー!』

爆豪「こんなもので俺がやられると思ってんのか!!」

(プ) マイク『しかし爆豪! そんなミスイルともせぜ爆破を使つてミスイルを迎撃いー!! その戦闘センスはもうプロだぜ!!』

観客「「「「ワアアアアアアア!!」」」」

クラフト「この程度じゃダメか。だったらこれを直接お見舞いさせるだけだ!!」

(プ) マイク『機神が動いたあー! 遠距離がダメなら近接つてか!?!』

相澤『だが爆豪相手にどこまで通用するかだな…あいつは個性は強力だが、体の動き…近接となると爆豪の方に分があるだろうな』

(プ) マイク『ほうほう、なるほど…そりゃ見物だぜー!!』

変わる試合展開、実況も観客もなお一層盛り上がり続ける。

爆豪「いいぜえ…戦闘訓練での借りを返してやらああ!!」

クラフト「ケガする前に降伏することをおすすめるぜ!」

爆豪「言ってるカスが!!」

クラフト「後悔すんなよ! オラア!!」

ドゴオっ!!

爆豪「つと! んな遅い攻撃当たるか!! オラあ!!」

クラフト「おっと! そっちもそっちで大振りじゃん!!」

爆豪「うっせえ!! くらばれっ!!」

両者一步も引かぬ攻防が続く。クラフトのエンペラーランチャーを用いた攻撃力の高い攻撃と、爆豪の爆破を用いた動きの攻撃。それに呼応して会場の観客もさらに盛り上がる。

観客「すげえ!! ホントにあれ1年かよ!?!」 「もう動きプロじゃん!!」

観客「サイドキックの指名数ヤバくなるそうだな!」 「これどっちが勝つだろうな!!」

(プ) マイク『レベルの高い試合に観客も盛り上がってるぜえー!!』

クラフト「オラオラオラあ!! そんな爆破じゃ俺にかすり傷すらつかねえぜ!!」

爆豪「クソがっ!! だったらこうするまでだ!!」

スタングレネード!!

カッ!!

爆豪が手の平を丸みを作る様に合わせるとそこから強烈な光が発せられる。その光は相手の視界と聴覚を奪い行動不能にする程であった。

クラフト「がっ!? (やられた…早く防御用の個性を…)」

爆豪「背中がガラ空きだぜっ!!!」

クラフト「マズっ—!!?」

爆豪「喰らえやっ!!!」

BOOOOOOM!!!

授業の戦闘訓練、今体育祭の麗日戦でも使った特大火力をクラフトの背後から撃ち込む爆豪。

(プ)マイク『爆豪!機神に容赦なしの爆撃いー!!機神ダイジョーブかあーっ!』

爆豪「ハアツ…ハアツ…」

クラフト「痛つつく…君ってホントに容赦ないよね…」

爆豪「フン…これでテメエがくたばるわけねえだろーが…」

クラフト「これ生身の人間に撃つちやダメだからね?そこ分かってる?」

爆豪「安心しろ、撃つ奴は選んでやっている…そしてテメエはその1人だ」

クラフト「マジかよ(パムパムの能力)…いや〜嬉しすぎて感激だね」

爆豪「…(何する気だ…?)」

クラフト「今度はこつちの番ね。くらいな!!」ヒュッ!!

クラフトは爆豪の爆破で出来たステージの破片を数個拾うとそれを爆豪に向けて投げる。

(プ)マイク『あーつと機神!自棄になったか!?爆豪に向けて石をなげたああー!!』

爆豪「んなもん爆破で…」

クラフト「…」ニヤ…

爆豪「—っ!!」

クラフト「パンクピエトラ破裂石!!」

バンっ!!!!

耳を裂くような炸裂音。しかし爆豪はそれだけではなかった。全身にくる凄まじい衝撃波が彼を襲う。その衝撃波で爆豪は危うく場外になりそうになるがすんでの所で何とか耐える。

爆豪「つ——…やってくれんじやねえかハゲ野郎…!」

クラフト「その言葉そのままお返しするよ」

爆豪「ケツ…!だが勝つのは俺だ!!」ボボンッ!!

クラフト「いや俺だね!LBXトリトーン!!」

爆豪は爆破で上空に飛び、クラフトはLBXでトリトーンに変身する。

クラフト「必殺ファンクション!!」

クラフトを中心に包むように水の球が出現する。クラフトは錨をモチーフにした武器《シーホースアンカー》を用いて水の球の中で回転し始める。そして爆豪は爆破で推進力をどんどん高めていく。

そして…

!!!榴弾砲着弾!!!

!!オーシャンブラスト!!

ドゴオオオオオオオオオオオン…!!!

両者高威力の技の激突。コンクリートのステージは抉れ、破片が飛び交い審判をしていたミッドナイトやセメントスは爆風で飛ばされてしまう。高威力の水の渦による攻撃《オーシャンブラスト》、爆破のエネルギーを溜めてその溜めたエネルギーを一気に解き放ち、相手に桁外れの爆破を食らわせる《榴弾砲着弾》。決着はどうなったのかとスタジアムにいる全員が思っていると煙が晴れていく。

(プ)マイク『互いにチョーっパネエ攻撃を行使した両者!!結果はどうなったあ!?!ミッドナイト!!』

(ミ)ナイト『ゴホッゴホッ…!!少し待ちなさい!…:…:爆豪くん場外!!よって機神くんの勝ち!!』

観客「!!!ワアアアアアア!!!」

(プ)マイク『以上で全ての競技が終了!!今年度雄英体育祭1年優勝は

…機神クラフトおおお!!!」

クラフト「痛つてえ…(やっぱバリバリか自然使えばよかつたかも…)」

大歓声に包まれる1年スタジアム。そして、気を失っていた爆豪が目を見ますと表彰式が行われた。

——表彰式——

(ミ) ナイト「それではこれより表彰式に移ります!」

地面がせり上がり1位2位3位の高さに止まる。1位機神クラフト、2位爆豪勝己、3位緑谷出久、飯田天哉。だが…

爆豪「んー!!!んんー!!!」

耳郎「なにあれ…」

瀬呂「たぶん結果に納得してねえんじやね?」

(ミ) ナイト「3位には緑谷くんともう1人飯田くんがいるんだけど、ちよつとお家の事情で早退になっちゃったのでご了承くださいいな!」

クラフト「メディアサービス…」

蛙吹「飯田ちゃん、張り切っていたのに残念ね…」

飯田の兄、ターボヒーローインゲニウムが敵にやられてしまった。緑谷はそのことを飯田から聞かされたことを思い出し、どうか無事दैてくれと願うのであった。

(ミ) ナイト「さあメダル授与よ!!今年メダルを贈呈するのはもちろんこの人!!」

(オ) マイト「私が!!メダルを…!!」

(ミ) (オ)「我がヒーロー!オールマイト!!「持ってきたあ!!」

(オ) マイト「……」

(ミ) ナイト「かぶった…!」

観客「今年の1年はいいなあ!」「オールマイトに見てもらえるなんてな—!」

(オ) マイト「うおっほん!それでは…緑谷少年!おめでどう!!」

緑谷「ありがとうございます…!」

(オ) マイト「本戦では色々大変な試合だったね。だが君らしくくてよかつたぜ！しかし無理は良くない！そこら辺を意識できるように頑張ろう！改めておめでとう！」

緑谷「はい！ありがとうございます!!」

(オ) マイト「さて次は…おつとこれはあんまりだ…(汗)」

オールマイトは暴れる爆豪を拘束している高速具の一部を外す。

(オ) マイト「爆豪少年！2位おめでとう！」

爆豪「オールマイト!!こんな順位！俺には意味ねえんだよ!!俺が獲りてえのは完膚なきまでの1位なんだよ!!」

(オ) マイト「うむ！相对評価に晒され続けるこの世界で、不変の絶対評価を持ち続けられる人間はそうはいない！受け取ってよ、傷として忘れぬよう！」

爆豪「要らねつつつてんだろ!!」

(オ) マイト「まあまあ…!!」

拒否する爆豪に無理やりメダルを掛けるオールマイト。結果的に爆豪の口にメダルの紐がかかるのであった。

(オ) マイト「機神少年！1位おめでとう!!」

クラフト「ありがとうございます!!」

(オ) マイト「見事な伏線回収だ！様々な個性を駆使しながら見事この結果を勝ち取った！しかし個性に頼りすぎるのはいざという時何かあつてはいけない！もつと地力を鍛えるといいだろう！」

クラフト「御意…!!」

(オ) マイト「さて…!!今回は彼らだった!!しかし皆さん!!この場の誰にもここに立つ可能性はあつた!!ご覧いただいた通りだ!!競い！高め合いさらに先へと昇っていくその姿!!時代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている!!好敵手と書いて《とも》と読む!!それでは皆さんご唱和ください！セーの…!!」

「プル」プルス「プルス「おつかれさまでした!!」ウル…」ウ…えっ?」ウルト…えっ!?!」

観客「えっ?」「そこはプルスウルトラでしょ！オールマイト!!」

(オ) マイト「ああいや…疲れだろうとなと思つて…(汗)」

こうして怒涛の雄英体育祭は終了した。これから彼や彼の友人たちには様々なことが身の回りで起きる：それに立ち向かうためにも個性だけに頼らず自分自身の素の力も鍛えて立ち向かっていこうと彼、機神クラフトは心に強く誓うのであった。

打ち切りという名の終わり
完